

第一 債權ニ付キ他ノ者ヨリ請求ノ有無及ヒ其種類  
 第三 債權カ既ニ他ノ債權者ヨリ差押ヘラレタルコトノ  
 有無及ヒ其請求ノ種類  
 右ノ陳述ヲ求ムル催告ハ之ヲ送達證書ニ記載ス可シ第三債  
 務者陳述ヲ怠リタルトキハ此ニ因リテ生ズル損害ニ付キ其  
 責ニ任ス  
 第六百十條 債權者カ命令ノ旨趣ニ基キ第三債務者ニ對シ訴  
 ヲ起スニ至リタルトキハ一般ノ規定ニ從ヒテ管轄ヲ有スル  
 裁判所ニ其訴ヲ起シ且債務者内國ニ在リテ住所ノ知レタル  
 トキハ其訴訟ヲ之ニ告知ス可シ  
 第六百十一條 債權者カ取立ヲ爲ス可キ債權ノ行用ヲ怠リタ  
 ルトキハ此カ爲メ債務者ニ生ズル損害ノ責ニ任ス  
 第六百十二條 債權者ハ命令ニ因リ取立ノ爲メ取得シタル債  
 利ヲ拋棄スルコトヲ得但此カ爲メ其請求ヲ害セザルルコト  
 無シ  
 此拋棄ハ裁判所ニ届書ヲ差出シテ之ヲ爲ス但其廢本ハ第三  
 債務者及ヒ債務者ニ之ヲ送達スヘシ  
 第六百十三條 差押ヘタル債權カ條件附若クハ有期ナルトキ  
 又ハ反對給付ニ繫リ若クハ他ノ理由アリテ其取立ノ困難ナ  
 ルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ取立ニ換ヘ他ノ換價方法ヲ命  
 スルコトヲ得  
 債務者内國ニ在リテ住所ノ知レタルトキハ其申立ヲ許ス決  
 定前ニ之ヲ審訊スヘシ  
 第六百十四條 有体物ノ引渡又ハ給付ノ請求ニ對スル強制執  
 行ハ以下數條ノ規定ヲ斟酌シテ第五百九十八條乃至第六百  
 九十二條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス

第六百十五條 有体物ノ請求差押ニ付テハ其動産ヲ債權者  
 ノ委任シタル執達吏ニ引渡スヘキコトヲ命スヘシ  
 右動産ノ換價ニ付テハ差押物ノ換價ニ關スル規定ヲ適用ス  
 第六百十六條 不動産ノ請求ノ差押ニ付テハ債權者ノ申立ニ  
 因リ其不動産ヲ不動産所在地ノ區裁判所ヨリ命シタル保管  
 人ニ引渡ス可キコトヲ命スヘシ  
 引渡シタル不動産ニ付テハ強制執行ハ不動産ニ對スル強制  
 執行ニ付テノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス  
 第六百十七條 有体物ノ引渡又ハ給付ノ請求ニ付テハ支拂ニ  
 換ヘ轉付スル命令ヲ爲スコトヲ得ス  
 第六百十八條 左ニ掲クル債權ハ之ヲ差押フルコトヲ得ス  
 第一 法律上ノ養料  
 第二 債務者カ義捐建設所ヨリ又ハ第三者ノ慈善ニ因リ  
 受クル繼續ノ收入但債務者及ヒ其家族ノ生活ノ爲メ必  
 要ナルモノニ限ル  
 第三 下士、兵卒ノ給料並ニ恩給及ヒ其遺族ノ扶助料  
 第四 出陣ノ軍隊又ハ役務ニ服シタル軍艦ノ乘組員ニ屬  
 スル軍人軍屬ノ職務上ノ收入  
 第五 文武ノ官吏、神職、僧侶及ヒ公立私立ノ教育場教師  
 ノ職務上ノ收入、恩給及ヒ其遺族ノ扶助料  
 第六 職工、勞役者ハ雇人カ其勞力又ハ役務ノ爲ニ受クル  
 報酬  
 第一號、第五號、第六號ノ場合ニ於テ職務上ノ收入、恩給其他  
 ノ收入カ一箇年間に三百圓ヲ超過スルトキハ其超過額ノ半  
 額ヲ差押フルコトヲ得  
 第六百十九條 數名ノ差押債權者ノ爲メ同時ニ爲スヘキ債權

ノ差押ニ於テハ前數條ノ規定ヲ準用ス  
 第六百二十條 執行力アル正本ヲ有スル債權者及ヒ民法ニ從  
 ヒ配當ノ要求ヲ爲シ得ヘキ債權者ハ差押債權者カ取立ヲ爲  
 シ其旨ヲ執行裁判所ニ届出ツルマテ又ハ執達吏カ賣得金ヲ  
 領收スルマテ配當ヲ要求スルコトヲ得但執行力アル正本ニ  
 因ラスシテ配當ヲ要求スル債權者ニ付テハ第五百九十條及  
 ヒ第五百九十一條第二項第三項ノ規定ヲ適用ス  
 支拂ニ換ヘラレ轉付ノ命令アリタル後ハ配當ノ要求ヲ爲ス  
 コトヲ得ス  
 右配當要求ハ職權ヲ以テ之ヲ第三債務者、債務者及ヒ差押債  
 權者ニ送達シ又既ニ爲シタル差押ヲ取消ト爲リタルトキハ  
 執行力アル正本ニ因リ要求シタル債權者ノ爲メ要求ノ順序  
 ニ因リ差押ノ効力ヲ生ズ  
 第六百二十一條 金錢ノ債權ニ付キ配當要求ノ送達ヲ受クマ  
 ル第三債務者ハ債務額ヲ供託スル權利アリ  
 第三債務者ハ配當ニ與カル或ル債務者ノ求ニ因リ債務額ヲ  
 供託スル義務アリ  
 第三債務者ハ債務額ヲ供託シタルトキハ其事情ヲ裁判所ニ  
 届出ツ可シ  
 第六百二十二條 請求カ不動産ニ關スルトキハ第三債務者ハ  
 其不動産所在地ノ區裁判所カ差押債權者又ハ第三債務者ノ  
 申立ニ因リ命シタル保管人ニ事情ヲ開示シ且送達セラレタ  
 ル命令ヲ添ヘ其不動産ヲ引渡ス權利ヲ有シ又ハ差押債權者  
 ノ求ニ因リ之ヲ引渡ス義務アリ  
 第六百二十三條 第三債務者カ取立手續ニ對シテ義務ヲ履行  
 セザルトキハ差押債權者ハ訴ヲ以テ之ヲ履行セシムルコト

ヲ得  
 執行力アル正本ヲ有スル各債權者ハ共同訴訟人トシテ原告  
 ニ加ハル權利アリ  
 訴ヲ受ケタル第三債務者ハ原告ニ加ハラサル債權者ヲ共同  
 訴訟人トシテ呼出アラフコトヲ口頭辯論ノ第一期日マテニ  
 申立ツルコトヲ得  
 右ノ場合ニ於ケル裁判ハ呼出ヲ受ケタル債權者ニ利害ヲ及  
 ホス効力アリ  
 第六百二十四條 差押債權者取立手續ヲ怠リタルトキハ執行  
 力アル正本ニ因リ要求シタル各債權者ハ一定ノ期間内ニ取  
 立ヲ爲ス可キコトヲ催告シ其催告ノ効アラサルトキハ執行  
 裁判所ノ許可ヲ得テ自ら取立ヲ爲スコトヲ得  
 第六百二十五條 不動産ヲ目的トセス又前數條ニ掲ケタル以  
 外ノ財産權ニ對スル強制執行ニ付テハ本款ノ規定ヲ準用ス  
 若シ第三債務者ナキトキハ差押ハ債務者ノ權利ノ處分ヲ禁  
 スル命令ヲ送達シタル日時ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做  
 ス  
 右ノ場合ニ於テハ裁判所ハ特別ノ處分殊ニ其權利ノ管理若  
 クハ引渡ヲ命スルコトヲ得  
 第四款 配當手續  
 第六百二十六條 配當手續ハ動産ニ對スル強制執行ニ際シ競  
 賣期日又ハ金錢差押ノ日ヨリ十四日ノ期間内ニ債權者ノ協  
 議調ハサル爲メ金額ヲ供託シタルトキ之ヲ爲ス  
 第六百二十七條 裁判所ハ事情屆書ニ基キ七日ノ期間内ニ元  
 金、利息、費用其他附帶ノ債權ノ計算書ヲ差出ス可キ旨ヲ各  
 債權者ニ催告ス可シ

現行日本法令大全

第六百二十八條 前條ノ期間満了後裁判所ハ配當表ヲ作ル可  
右期間ヲ遵守セサル債權者ノ債權ハ配當表ヲ作ルニ際シ配  
當要求并ニ届書ノ旨趣及ヒ其憑據書類ニ依リ之ヲ計算ス但  
後ニ債權額ヲ補充スルコトヲ許サス

第六百二十九條 裁判所ハ配當表ニ關スル陳述及ヒ配當實施  
ノ爲メ期日ヲ指定シ其期日ニハ各債權者及ヒ債務者ヲ呼出  
ス可シ但債務者ノ所在明カナラサルトキ又ハ外國ニ在ルト  
キハ呼出ヲ爲スコトヲ要セス

配當表ハ各債權者及ヒ債務者ニ閱覽セシムル爲メ遅クモ  
期日ノ三日前ニ裁判所書記課ニ之ヲ備置ク可シ

第六百三十條 期日ニ於テ異議ノ申立ヲキトキハ配當表ニ  
從ヒテ其配當ヲ實施ス可シ

停止條件附ノ債權ノ配當額ハ仍ホ之ヲ供託シ民法ニ從ヒテ  
條件ノ成否ニ依リ後ニ之ヲ支拂ヒ又ハ更ニ配當ス可シ

第五百九十一條 第三項ノ場合又ハ假差押ノ場合ニ於テ未  
確定セサル債權其他異議アル債權ノ配當額ハ仍ホ之ヲ供託  
ス可シ

配當實施ニ付テハ調書ヲ作ル可シ

第六百三十一條 異議ノ申立アルトキハ他ノ債權者ハ直チニ  
陳述ヲ爲ス可シ若シ關係人異議ヲ正當ナリト認ムルトキ又  
ハ他ノ方法ニ於テ合意スルトキハ之ニ從ヒ配當表ヲ更正シ  
配當ヲ實施ス可シ

異議ノ完結セサルトキハ異議ナキ部分ニ限り配當ヲ實施ス  
可シ

第六百三十二條 期日ニ出頭セサル債權者ハ配當表ノ實施ニ

同意シタルモノト看做ス

若シ期日ニ出頭セサル債權者カ他ノ債權者ヨリ申立タル  
異議ニ關係ヲ有スルトキハ其債權者ハ異議ヲ正當ナリト認  
メサルモノト看做ス

第六百三十三條 期日ニ於テ異議ノ完結セサルトキハ異議ヲ  
申立タル債權者ハ他ノ債權者ニ對シ訴ヲ起シタルコトヲ  
期日ヨリ七日ノ期間内ニ裁判所ニ證明ス可シ若シ其期間ヲ  
徒過シタル後ハ裁判所ハ異議ニ拘ハラズ配當ノ實施ヲ命ス  
可シ

第六百三十四條 異議ヲ申立タル債權者前條ノ期間ヲ怠リ  
タルトキト雖モ配當表ニ從ヒ配當ヲ受ケタル債權者ニ對シ  
訴ヲ以テ優先權ヲ主張スル權利ハ配當實施ノ爲メ妨ケラ  
ルコト無シ

第六百三十五條 異議ヲ申立タル債權者ノ訴ニ付テハ配當  
裁判所之ヲ管轄ス然レトモ訴訟物カ區裁判所ノ管轄ニ屬セ  
サルトキハ其配當裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所之  
ヲ管轄ス若シ數箇ノ訴ノ提起アリタル場合ニ於テ一ノ訴ヲ  
地方裁判所カ管轄スルトキハ其他ノ訴ヲモ亦之ヲ管轄ス但  
各債權者總テノ異議ニ付キ配當裁判所ノ裁判ヲ受ク可キコ  
トヲ合意シタルトキハ此限ニ在ラス

第六百三十六條 異議ニ付キ裁判ヲ爲ス判決ニハ配當額ノ係  
爭部分ヲ如何ナル債權者ニ如何ナル數額ヲ以テ支拂フ可キ  
ヤヲ定ム可シ之ヲ定ムルコトヲ適當トセサルトキハ判決ニ  
於テ新ナル配當表ノ調製及ヒ他ノ配當手續ヲ命ス可シ

第六百三十七條 異議ヲ申立タル債權者カ口頭辯論ノ期日  
ニ出頭セサルトキハ異議ヲ取下ケタルモノト看做ス旨ノ闕

現行日本法令大全

府判決ヲ爲ス可シ

第六百三十八條 前二條ノ判決確定ノ證明アルトキハ配當裁  
判所ハ判決ニ付キ支拂又ハ他ノ配當手續ヲ命ス

第六百三十九條 裁判所ハ當配表ニ依リテ他ノ手續ヲ爲シ配  
當ヲ實施ス可シ

債權全部ノ配當ヲ受クヘキ債權者ニハ配當額支拂證書ヲ交付  
スルト同時ニ其所持スル執行力アル正本又ハ債權ノ證書ヲ  
差出サシメ之ヲ債務者ニ交付スヘシ

債權一分ノミノ配當ヲ受クヘキ債權者ニハ執行力アル正本  
又ハ債權ノ證書ヲ差出サシメ之ニ配當額ヲ記入シテ返還シ  
且配當額支拂證書ヲ交付スルト同時ニ右債權者ヨリ金額ヲ證  
記シタル受取書ヲ差出サシメ之ヲ債務者ニ交付ス可シ

期日ニ出頭セサル債權者ノ配當額ハ仍ホ之ヲ供託スヘシ  
右ノ手續ヲ爲シタルトキハ調書ニ記載シテ之ヲ明確ニス可  
シ

第二節 不動産ニ對スル強制執行

第一款 通則

第六百四十條 不動産ニ對スル強制執行ハ左ノ方法ヲ以テ  
之ヲ爲ス

第一 強制競賣

第二 強制管理

債權者ハ自己ノ選擇ニ依リ一箇ノ方法ヲ以テ又ハ二箇ノ方  
法ヲ併セテ執行セシムルコトヲ得

強制管理ハ假差押ノ執行ノ爲メ亦之ヲ爲ス

第六百四十一條 不動産ニ對スル強制執行ニ付テハ其不動産  
所在地ノ區裁判所執行裁判所トシテ之ヲ管轄ス若シ其不動

產數箇ノ區裁判所ノ管轄區内ニ散在スルトキハ第二十六條  
ノ規定ヲ適用ス

強制執行ハ申立ニ因リテ裁判所之ヲ爲ス

第二款 強制競賣

第六百四十二條 強制競賣ノ申立ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコ  
トヲ要ス

第一 債權者、債務者及ヒ裁判所ノ表示

第二 不動産ノ表示

第三 競賣ノ原因タル一定ノ債權及ヒ其執行ヲ得ヘキ一  
定ノ債務名義

第六百四十三條 申立ニハ執行力アル正本ノ外左ノ證書ヲ添  
附ス可シ

第一 登記簿ニ債務者ノ所有トシテ登記シタル不動産ニ  
付テハ登記判事ノ認證書

第二 登記簿ニ登記アラサル不動産ニ付テハ債務者ノ所  
有タルコトヲ證ス可キ證書

第三 地所ニ付テハ國郡市町村、字、番地、地目、反別若ク  
ハ坪數、土地臺帳ニ登錄シタル地價及ヒ其地所ニ付キ納  
ム可キ一箇年ノ租稅其他ノ公課ヲ證ス可キ證書

第四 建物ニ付テハ國郡市町村、字、番地、構造ノ種類、建  
坪及ヒ其建物ニ付キ納ム可キ一箇年ノ公課ヲ證ス可キ  
證書

第五 地所、建物ニ付キ賃貸借アル場合ニ於テハ其期限并  
ニ借賃ヲ證ス可キ證書

第二號、第三號及ヒ第四號ノ要件ニ付テハ債權者公簿ヲ主管  
スル官廳ニ其證明書ヲ求ムルコトヲ得

第四號及第五號ノ要件ヲ證明スル能ハサルトキハ債權者ハ競賣申立ノ際其取調ヲ執行裁判所ニ申請スルコトヲ得但此場合ニ於テハ裁判所ハ執達吏ヲシテ其取調ヲ爲サシム可シ

強制管理ノ爲メ既ニ不動産ヲ差押ヘタル場合ニ於テ其執行記録ニ第一號乃至第五號ノ要件ヲ記録シタルモノ有ルトキハ其證書ヲ添附スルコトヲ要セス

第六百四十四條 競賣手續ノ開始決定ニハ同時ニ債權者ノ爲メ不動産ヲ押差フルコトヲ宣言ス可シ

差押ハ債權者カ不動産ノ利用及ヒ管理ヲ爲スコトヲ妨ケス

差押ハ其決定ヲ債務者ニ送達スルニ因リ其効力ヲ生ス此送達ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第六百四十五條 裁判所ハ競賣手續開始ノ決定ヲ爲シタル不動産ニ付キ強制競賣ノ申立アルモ更ニ開始決定ヲ爲スコトヲ得ス

右申立ハ執行記録ニ添附スルニ因リ配當要求ノ効力ヲ生シ又既ニ開始シタル競賣手續取消ト爲リタルトキハ第六百四十九條第一項ノ規定ヲ害セサル限リハ開始決定ヲ受ケタル効力ヲ生ス

假差押ノ命令アリタル不動産ニ付テハ本條ノ規定ヲ適用セス

第六百四十六條 配當要求ハ其原因ヲ開始シ且裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサル者ハ假住居ヲ選定シテ執行裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

右要求ハ競落期日ノ終ニ至ルマテ之ヲ爲スコトヲ得

第六百四十七條 執行裁判所ハ前二條ノ申立及ヒ要求アリタル

ルコトヲ利害關係人ニ通知ス可シ

執行力アル正本ニ因ラスシテ配當ヲ要求スル債權者アルトキハ債權者ハ右通知アリタルヨリ三日ノ期間内ニ其債權ヲ認諾スルヤ否ヤテ裁判所ニ申出ツ可シ

債權者カ認諾セサルコトヲ裁判所ヨリ通知アリタルトキハ債權者ハ其通知アリタルヨリ三日ノ期間内ニ債務者ニ對シテ訴ヲ起シ其債權ヲ確定ス可シ

第六百四十八條 左ニ掲クル者ヲ競賣手續ニ於テノ利害關係人ト爲ス

第一 差押債權者及ヒ執行力アル正本ニ因リ配當ヲ要求スル債權者

第二 債務者

第三 登記簿ニ記入スル不動産上權利者

第四 不動産上權利者トシテ其債權ヲ證明シ執行記録ニ備フ可キ届出ヲ爲シタル者

第六百四十九條 差押債權者ノ債權ニ先ツツ債權ニ關スル不動産ノ負擔ヲ競落人ニ引受ケシムルカ又ハ賣却代金ヲ以テ其負擔ヲ辨濟スルニ足ル見込アルニ非サレハ賣却ヲ爲スコトヲ得ス

不動産ハ賣却ニ因リ登記簿ニ記入ヲ要スル總テノ不動産上ノ負擔ヲ免カルルモノトス但競落人其負擔ヲ引受ケタルトキハ此限ニ在ラス

登記簿ニ記入ヲ要セサル不動産ノ負擔ハ競落人ノ引受ケルモノトス

第六百五十條 權利ヲ取得スル第三者其取得ノ際差押又ハ競賣ノ申立アリタルコトヲ知リタルトキハ差押ノ効力ニ對

シ其善意ナリシコトヲ主張スルコトヲ得ス

若シ不動産カ差押ノ原因タル債權ノ爲メ義務ヲ負擔スルトキハ差押後所有ノ移轉シタル場合ニ限リ新所有者其取得ノ際差押又ハ競賣ノ申立アリタルコトヲ知ラサルトキト雖モ競賣手續ヲ續行ス可シ

競賣申立ノ取テニ因リテ差押ハ消滅ス

第六百五十一條 裁判所ハ競賣手續開始ノ決定ヲ爲ス際職權ヲ以テ競賣ノ申立アリタルコトヲ登記簿ニ記入ス可キ旨ヲ登記判事ニ囑託ス可シ

登記判事ハ前項ノ囑託ニ從ヒテ記入ヲ爲スコトヲ得

第六百五十二條 登記判事ハ前條ニ掲ケタル記入ヲ爲シタル後登記簿ノ謄本ヲ裁判所ニ送付シ不動産上權利者ヨリ差出シタル證書アルトキハ其抄本ヲモ送付ス可シ

第六百五十三條 豫メ知ルニ於テハ手續ノ開始ヲ妨ケ可キ事實ヲ登記判事ノ通知ニ依リ顯ハルルトキハ裁判所ハ其事情ニ因リ直チニ手續ヲ取消シ又ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル期間内ニ其障礙ノ消滅シタルコトヲ證明ス可キコトヲ債權者ニ命ス可シ其期間内ニ此證明ヲ爲ササルトキハ期間ノ満了後職權ヲ以テ手續ヲ取消ス可シ

第六百五十四條 裁判所ハ競賣開始ノ決定ヲ爲シタルトキハ租稅其他ノ公課ヲ主管スル官廳ニ通知シ其不動産ニ對スル債權ノ有無及ヒ限度ヲ申出ツ可キコトヲ期間ヲ定メテ催告ス可シ

第六百五十五條 裁判所ハ登記判事及ヒ租稅其他ノ公課ヲ主管スル官廳ヨリ通知ヲ受ケタル後鑑定人ヲシテ不動産ノ評價ヲ爲サシメ其評價額ヲ以テ最低競賣價額ト爲ス

第六百五十六條 裁判所ハ最低競賣價額ヲ以テ差押債權者ノ債權ニ先ツツ不動産上ノ總テノ負擔及ヒ手續ノ費用ヲ辨濟シテ剩餘アル見込ナシトスルトキハ差押債權者ニ其旨ヲ通知ス可シ

右通知ヨリ七日ノ期間内ニ差押債權者カ前項ノ負擔及ヒ費用ヲ辨濟シテ剩餘アル可キ價額ヲ定メ且其價額ニ應ズル競買人ナキ場合ニ於テハ自ら其價額ヲ以テ買受可キ旨ヲ申立テ十分ナル保證ヲ立テサルトキハ競賣手續ヲ取消ス可シ

第六百五十七條 裁判所ハ前條第一項ノ債權及ヒ費用ヲ辨濟シ剩餘ヲ得ル見込アルトキ又ハ差押債權者前條第二項ノ申立ヲ爲シ十分ナル保證ヲ立テサルトキハ職權ヲ以テ競賣期日及ヒ競落期日ヲ定メテ之ヲ公告ス

第六百五十八條 競賣期日ノ公告ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 不動産ノ表示

第二 租稅其他ノ公課

第三 貸借アル場合ニ於テハ其期間并ニ借賃

第四 強制執行ニ因リ競賣ヲ爲ス旨

第五 競賣期日ノ場所、日時及ヒ競賣ヲ爲スコキ執達吏ノ氏名并ニ住所

第六 最低競賣價額

第七 競落期日ノ場所及ヒ日時

第八 執行記録ヲ閱覽シ得ヘキ場所

第九 登記簿ニ記入ヲ要セサル不動産上權利ヲ有スル者其債權ヲ申出ツ可キ旨

第十 利害關係人競賣期日ニ出頭ス可キ旨

現行日本法令大全

第六百五十九條 競賣期日ハ公告ノ日ヨリ少ナクトモ十四日ノ後ナルヘシ  
此期日ハ裁判所ノ意見ヲ以テ裁判所内又ハ其他ノ場所ニ於テ執達吏ヲシテ之ヲ開カシム  
第六百六十條 競落期日ハ競賣期日ヨリ七日ヲ過クルコトヲ得ス  
此期日ハ裁判所ニ於テ之ヲ開ク  
第六百六十一條 競賣期日ノ公告ハ左ノ箇所ニ揭示シテ之ヲ爲ス  
第一 裁判所ノ揭示板  
第二 不動産所在地ノ市町村ノ揭示板  
此公告ハ裁判所ノ意見ニ從ヒ一個又ハ數個ノ新聞紙ニ掲載スルコトヲ得  
第六百六十二條 最低競賣價額ヲ除ク外本款ニ掲ケタル賣却條件ノ變更ハ利害關係人ノ合意アルトキニ限り之ヲ許ス但此合意ハ競賣期日ニ至ルマテ之ヲ爲スコトヲ得  
第六百六十三條 競賣期日ヲ開キタル後執達吏ハ執行記録ヲ各人ノ閱覽ニ供シ又特別ノ賣却條件アルトキハ之ヲ告知シ且競賣價額申出ヲ催告ス可シ  
第六百六十四條 利害關係人カ或ル競買人ヨリ保證ヲ立テシメントコトヲ申立ツルトキハ其競買人カ保證トシテ競買價額十分ノ一ニ當ル金額ヲ現金又ハ有價證券ヲ以テ直チニ執達吏ニ預クルトキニ非サレハ其競買ヲ許サス  
右申立ハ競買價額ノ申立アリタル後直チニ之ヲ述フルコトヲ要ス其申立ハ同一ナル競買人ノ其後ノ競買ニ付テモ亦効カアリ

第六百六十五條 競買ヲ許サレタル各競買人ハ更ニ高價ノ競買ノ許アルマテ其申出タル價額ニ付キ拘束ヲ受クルモノトス  
競買ハ競買價額ヲ申出ツ可キ催告後滿一時間ヲ過クルニ非サレハ之ヲ終局スルコトヲ得ス  
第六百六十六條 執達吏ハ最高價競買人ノ氏名及ヒ其價額ヲ呼上ケタル後競賣ノ終局ヲ告知ス可シ  
他ノ各競買人ハ右ノ告知ニ因リ其競買ノ義務ヲ免カレ且預ケタル保證アルトキハ即時ニ其返還ヲ求ムル權利アリ  
第六百六十七條 競賣ニ付キ作ル可キ調査ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス  
第一 不動産ノ表示  
第二 差押債權者ノ表示  
第三 執行記録ヲ各人ノ閱覽ニ供シタルコト又特別賣却條件アルトキハ之ヲ告知シタルコト  
第四 競買價格ノ申出ヲ催告シタル日時  
第五 總テノ競買價格並ニ其中出人ノ氏名、住所又ハ許ス可キ競買ノ申出ナキコト  
第六 競賣ノ終局ヲ告知シタル日時  
第七 申立ニ因リ競買ノ爲メ保證ヲ立テタルコト又ハ申立アルモ保證ヲ立テサル爲メ其競買ヲ許ササルコト  
第八 最高價競買人ノ氏名及ヒ其價額ヲ呼上ケタルコト  
最高價競買人及ヒ出頭シタル利害關係人ハ調査ニ署名捺印ス可シ若シ此等ノ者調査ノ作成前ニ退席シタルトキハ其旨ヲ附記ス可シ  
競買ノ保證ノ爲メ預リタル金錢又ハ有價證券ヲ返還シタル

現行日本法令大全

トキハ執達吏ハ受取證ヲ取り之ヲ調査ニ添附ス可シ  
第六百六十八條 執達吏ハ調査及ヒ總テ競買ノ保證ノ爲メ預リタル金錢又ハ有價證券ニシテ返還セサルモノハ三日内ニ裁判所書記ニ之ヲ渡スコシ  
第六百六十九條 最高價競買人執行裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セザルトキハ其所在地ニ假住所ヲ撰定シ其旨ヲ裁判所ニ申出ツ可シ若シ之ヲ怠リタルトキハ第四百四十三條第三項ノ規定ヲ準用ス  
住所ノ撰定ハ執達吏ニ口述シ其調査ヲ作ラシメテ之ヲ爲スコトヲ得  
第六百七十條 競賣期日ニ於テ許ス可キ競買價額ノ申出ナキトキハ第六百四十九條第一項ノ規定ヲ害セザル限リハ裁判所ハ其意見ヲ以テ最低競買價額ヲ相當ニ低減シ新競賣期日ヲ定ム可シ若シ其期日ニ於テ仍ホ許ス可キ競買價額ノ申出ナキトキモ亦同シ  
新競賣期日ハ少ナクトモ十四日ノ後ナル可シ  
第六百七十一條 裁判所ハ競落期日ニ出頭シタル利害關係人ニ競落ノ許可ニ付キ陳述ヲ爲サシム可シ  
競落ノ許可ニ付テハ異議ハ期日ノ終ニ至ルマテニ之ヲ申立ツ可シ既ニ申立タル異議ニ對スル陳述ニ付テモ亦同シ  
第六百七十二條 競落ノ許可ニ付テハ異議ハ左ノ理由ニ基クコトヲ要ス  
第一 強制執行ヲ許ス可カラサルコト又ハ執行ヲ續行ス可カラサルコト  
第二 最高價競買人賣買契約ヲ取結ヒ若クハ其不動産ヲ取得スル能力ナキコト

第三 法律上ノ賣却條件ニ抵觸シテ競買ヲ爲シタルコト又ハ總テノ利害關係人ノ合意ヲ得スシテ法律上ノ賣却條件ヲ變更シタルコト  
第四 競賣期日ノ公告ニ第六百五十八條ニ掲ケタル要件ノ記載ナキコト  
第五 競賣期日ノ公告ハ法律上規定シタル方法ニ依リテ之ヲ爲ササルコト  
第六 第六百五十九條ニ規定シタル期間ヲ存セザリシコト  
第七 第六百六十五條第二項及ヒ第六百六十六條第一項ノ規定ニ違背シタルコト  
第八 第六百六十四條ノ規定ニ違背シ最高價競買人ナリト呼上ケタルコト  
第六百七十三條 異議ハ他ノ利害關係人ノ權利ニ關スル理由ニ基テハ之ヲ許サス  
第六百七十四條 裁判所ハ異議ノ申立ヲ正當トスルトキハ競落ヲ許サス  
第六百七十二條 第一號乃至第八號ニ掲ケタル事項ノ一アルトキハ職權ヲ以テモ競落ヲ許サス但第一號ノ場合ニ於テハ競賣シタル不動産ヲ讓渡スコトヲ得サルモノナルトキ又ハ競賣手續ノ停止ヲ爲シタルトキニ限リ第二號ノ場合ニ於テハ能力若クハ資格ノ欠缺カ除去セラレザルトキニ限リ第三號ノ場合ニ於テハ利害關係人手續ノ續行ニ付キ承認セザルトキニ限ル  
第六百七十五條 數個ノ不動産ヲ競賣ニ付シタル場合ニ於テ或ル不動産ノ賣得金ヲ以テ各債權者ニ辨濟ヲ爲シ及ヒ強制

現行日本法令大全

執行ノ費用ヲ償フニ足ル可キトモハ他ノ不動産ニ付テハ競落ヲ許サス  
 此場合ニ於テ債務者ハ其不動産中賣却ス可キモノヲ指定スルコトヲ得  
 第六百七十六條 第六百七十二條及ヒ第六百七十四條ノ規定ニ從ヒ全ク競落ヲ許ササル場合ニ於テ更ニ競賣ヲ許ス可キトモハ職權ヲ以テ新競賣期日ヲ定ム可シ  
 新競賣期日ハ少ナクトモ十四日ノ後タル可シ  
 第六百七十七條 前條ノ規定ニ從ヒテ新競賣期日ヲ定ムル場合ノ外競落ヲ許シ又ハ許ササル決定ノ旨渡シ爲ス可シ  
 競落期日ノ調査ニ付テハ第三百二十九條乃至第三百三十二條及ヒ第三百三十四條ノ規定ヲ準用ス  
 第六百七十八條 競賣期日ト競落期日トノ間ニ天災其他ノ變事ニ因リ不動産カ著ルシク毀損シタルトモハ最高價競買人タル呼上ヲ受タル者ハ其競賣ヲ取消ス權利アリ其毀損ノ著ルシキヤ否ヤハ裁判所事情ヲ斟酌シテ之ヲ定ム  
 第六百七十九條 競賣ヲ許ス決定ニハ競賣ヲ爲シタル不動産、競落人及ヒ競落ヲ許シタル競買價格ヲ掲ク又特別ノ賣却條件ヲ以テ競落ヲ爲シタルトモハ其條件ヲ掲ク可シ  
 右決定ハ之ヲ言渡ス外尙ホ裁判所ノ揭示板ニ揭示シテ公告ス可シ  
 第六百八十條 利害關係人ハ競落ノ許否ニ付テノ決定ニ因リ損失ヲ被ルル可キ場合ニ於テハ其決定ニ對シ即時抗告ヲ爲スコトヲ得  
 競落ヲ許ス可キ理由ヲキコト又ハ決定ニ掲ケタル以外ノ條件ヲ以テ許ス可キコトヲ主張スル競落人又ハ競落ヲ求メ之

ヲ許ス可キコトヲ主張スル競買人モ亦即時抗告ヲ爲スコトヲ得  
 右抗告ハ執行停止ノ効力ヲ有ス  
 第二項ノ場合ニ於テ競落ヲ求メタル競買人ハ其申出テタル價格ニ付キ拘束ヲ受クルモノトス  
 第六百八十一條 競落ヲ許ササル決定ニ對スル抗告ハ此法律ニ據ル總テノ不許ノ原因ナキコトヲ理由トスルニ限り之ヲ爲スコトヲ得  
 競落ヲ許シタル決定ニ對スル抗告ハ此法律ニ據ル競落ノ許可ニ對スル異議ノ原因ノ一ヲ理由トスルトモハ競落決定カ競落期日ノ調査ノ旨趣ニ抵觸シタルコトヲ理由トスルトモハ限り之ヲ爲スコトヲ得  
 取消ノ訴若クハ原狀回復ノ訴ノ要原ヲ理由トスル抗告ハ前二項ノ規定ニ依リ妨ケラルルコト無シ  
 第六百八十二條 抗告裁判所ハ必要ナル場合ニ於テハ反對陳述ヲ爲サシムル爲メ抗告人ノ相手方ヲ定ム可シ  
 第六百七十三條及ヒ第六百七十四條ノ規定ハ抗告審ニモ亦之ヲ準用ス  
 第六百八十三條 執行裁判所ノ決定ヲ變更シ又ハ廢棄シタル抗告裁判所ノ裁判ハ執行裁判所之ヲ裁判所ノ揭示板ニ揭示シテ公告ス可シ  
 第六百八十四條 競落ヲ許ササル決定確定シタルトモハ競落人及ヒ競落ヲ求メタル競買人ハ其競買ノ責務ヲ免カレ  
 第六百八十五條 第六百七十八條ノ場合ニ於テ競買取消ノ爲メ競落ヲ許ササルトモハ第六百五十五條乃至第六百五十七

現行日本法令大全

條ノ規定ヲ準用ス  
 第六百八十六條 競落人ハ競落ヲ許ス決定ニ因リテ不動産ノ所有權ヲ取得スルモノトス  
 第六百八十七條 競落人ハ代金ノ全額ヲ支拂ヒタル後ニ非シテハ不動産ノ引渡ヲ求ムルコトヲ得ス  
 競落人若クハ債權者競落ヲ許ス決定アリタル後引渡アルマテ管理入ヲシテ不動産ヲ管理セシメノコトヲ申立テタルトモハ裁判所ハ之ヲ命ス可シ  
 債務者カ引渡ヲ拒ミタルトモハ競落人若クハ債權者ノ申立ニ因リ裁判所ハ執達吏ヲシテ債務者ノ占有ヲ解キ其不動産ヲ管理入ニ引渡シシム可シ  
 第六百八十八條 競落人カ代金支拂期日ニ其義務ヲ完全ニ履行セザルトモハ裁判所ハ職權ヲ以テ不動産ノ再競賣ヲ命ス可シ  
 最初ノ競賣ノ爲ニ定メタル最低競賣價額其他賣却條件ハ再競賣ノ手續ニモ亦之ヲ適用ス  
 再競賣期日ハ少ナクトモ十四日ノ後タル可シ  
 競落人カ再競賣期日ノ三日前途ニ買入代金及ヒ手續ノ費用ヲ支拂ヒタルトモハ再競賣手續ヲ取消ス可シ  
 再競賣ヲ爲ストモハ前ノ競落人ハ競買ニ加ハルコトヲ許サス且再度ノ競落代價カ最初ノ競落代價ヨリ低キトモハ不足ノ額及ヒ手續ノ費用ヲ負擔シ其高キトモハ剩餘ノ額ヲ請求スルコトヲ得ス  
 第六百八十九條 共有物持分ノ強制競賣ニ付テハ債權者ノ債權ノ爲メ債務者ノ持分ニ付キ強制競賣ノ申立アリタルコトヲ登記簿ニ記入ス但他ノ共有者ニハ其強制競賣ノ申立ヲ通

知ス可シ  
 最低競賣價額ハ共有物全部ノ評價額ニ基キ債務者ノ持分ニ付キ之ヲ定ム可シ  
 第六百九十條 競賣申立カ競落ヲ許スコト無クシテ完結シタルトモハ裁判所ハ第六百五十一條ノ規定ニ從ヒテ爲シタル差押記入ノ抹消ヲ登記判事ニ囑託ス可シ  
 第六百九十一條 競落ヲ許ス決定確定スルトモハ賣却代金カ配當ニ與カル各債權者ヲ満足セシムルニ足ラサル場合ニ於テハ民法、商法及ヒ特別法ニ從ヒテ之ヲ配當ス可シ  
 第六百九十二條 各債權者ハ競落期日マテニ其債權ノ元金、利息、費用其他附帶ノ債權ノ計算書ヲ差出ス可シ  
 前項ノ規定ニ從ハサル債權者ニ付テハ第六百二十八條第二項ノ規定ヲ準用ス  
 第六百九十三條 代金ノ支拂及ヒ配當ハ競落ヲ許ス決定ノ確定後ニ裁判所カ職權ヲ以テ定ムル期日ニ於テ之ヲ爲ス  
 此期日ニハ利害關係人、執行力アル正本ニ因ラスシテ配當ヲ要求スル債權者及ヒ競落人ヲ呼出ス可シ  
 第六百九十四條 期日ニ於テハ先ツ配當ス可キ不動産ノ賣却代金ノ幾許ナルヤヲ定ム可シ  
 左ノモノヲ賣却代金トス  
 第一 代金  
 第二 不動産カ果實其他金錢ニ見積ルコトヲ得ヘキ利益ヲ生スル場合ニ於テハ競落決定言渡ヨリ代金支拂マテノ利息  
 代金支拂ハ裁判所ニ之ヲ爲ス可シ  
 最高競賣價額ノ保證ノ爲メ預リタル金額ハ代金ニ之ヲ算入

第六百九十五條 裁判所ハ出頭シタル利害關係人及ヒ執行力アル正本ニ由ラスシテ配當ヲ要求スル債權者ヲ訊問シテ配當表ヲ確定ス可シ

第六百九十六條 配當表ニハ賣却代金各債權者ノ債權ノ元金、利息費用及ヒ配當ノ順位並ニ配當ノ割合ヲ記載ス可シ

若シ出頭シタル總テノ利害關係人及ヒ執行力アル正本ニ因ラスシテ配當ヲ要求スル債權者一致シタルトキハ其一致ニ基キ配當表ヲ作ル可シ

第六百九十七條 配當表ニ對スル異議ノ完結及ヒ配當表ノ實施ニ付テハ第六百三十條以下ノ規定ヲ準用ス但以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケタルモノハ此限ニ在ラス

第六百九十八條 期日ニ出頭シタル債權者ハ各債權者ノ債權ニ對シ又ハ其債權ノ爲メ主張スル順位ニ對シ異議ヲ申立ツル權利アリ

出頭シタル各債權者ハ自己ノ利害ニ關シテハ他ノ債權者ニ對シ前項ト同一ノ權利アリ

執行スルヲ得ヘキ債權ニ對スル債權者ノ異議ハ第五百四十五條、第五百四十七條及ヒ第五百四十八條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ完結ス

第六百九十九條 競落人ハ賣却條件ニ因リ不動産ノ負擔ヲ引受クル外配當表ノ實施ニ際シ買入代金ノ額ニ滿ツルヲ限リシ關係債權者ノ承諾ヲ得テ買入代金ノ支拂ニ換ヘ債務ヲ引受クルコトヲ得若シ債權者カ競落人ナルトキハ其債權ノ配當額ヲ買入代金ノ額ニ滿ツル限リハ買入代金トシテ之ヲ計算スルニ由リテ消滅ス然レトモ引受ク可キ債務又ハ計算ス

ヘキ競落人ノ債權ニ對シ適當ナル異議アルトキハ之ニ相當スル代金ヲ支拂ヒ又ハ保證ヲ立ツ可シ

第七百條 配當表ヲ實施シタル後裁判所ハ配當調書及ヒ競落決定ノ正本ヲ登記判事ニ送付シテ左ノ諸件ヲ囑託ス可シ

第一 競落人ノ所有權ノ登記

第二 競落人ノ引受ケタル不動産上負擔記入ノ抹消

第三 第六百五十一條ノ規定ニ從ヒ爲シタル記入ノ抹消

右登記及ヒ抹消ニ關スル總テノ費用ハ競落人之ヲ負擔ス可シ

第七百一條 數多ノ差押債權者ノ爲メ同時ニ爲ス可キ不動産ノ競賣手續ニ付テハ前數條ノ規定ヲ準用ス

第七百二條 裁判所ハ競賣期日ノ公告前利害關係人ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ競賣ニ換ヘテ入札拂テ命スルコトヲ得但入札拂ニ付テハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲキモノハ前數條ノ規定ヲ準用ス

第七百三條 入札ハ入札期日ニ於テ執達吏ニ之ヲ差出ス可シ

入札ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 入札人ノ氏名及ヒ其住所

第二 不動産ノ表示

第三 入札價額

第七百四條 執達吏ハ入札人ノ而前ニ於テ入札ヲ開封シ之ヲ朗讀ス可シ

二人以上同價額ノ入札アルトキハ執達吏ハ其者ヲシテ追加ノ入札ヲ爲サシメ最高價入札人ヲ定ム

一定ノ金額ヲ以テ入札價額ヲ表ヒスシテ他ノ入札價額ニ對スル比例ヲ以テ價額ヲ表シタル入札ハ之ヲ許サス

第七百五條 最高價入札人タル呼上ヲ受ケタル者第六百六十四條ノ規定ニ從ヒ保證ヲ立ツ可キ求テ受クルモ之ヲ立テサルトキハ其次位ノ入札人ヲ以テ最高價入札人ト定ム但此場合ニ於テハ最初呼上ヲ受ケタル者ハ其入札價額ト次位ノ入札價額トノ差金ヲ負擔スル義務アリ

第三款 強制管理

第七百六條 強制管理ニ付テハ第六百四十二條、第六百四十三條、第六百四十四條第一項第三項及ヒ第六百五十一條乃至第六百五十四條ノ規定ヲ準用ス

不動産カ債權者ノ債權ニ付キ不動産上ノ義務ヲ負フタル場合ニ於テハ第六百四十三條第一號第二號ニ依リ提出ス可キ證書ハ不動産ヲ債務者カ占有スルコトヲ證明スル證書ヲ以テ足ル

第七百七條 裁判所ハ強制管理開始ノ決定ニ於テ債務者カ管理入ノ事務ニ干渉スルコト及ヒ不動産ノ收益ニ付キ處分スルコトヲ禁シ又不動産ノ收益ノ給付ヲ爲ス可キ第三者アルトキハ其第三者ニ其後ノ給付ヲ管理入ニ爲ス可キコトヲ命ス可シ

既ニ收穫シ若クハ收穫ス可シ又ハ期限ノ到來シ若クハ到來ス可キ果實ハ收益ニ屬ス

開始決定ハ第三者ニ對シテハ之ヲ送達スルニ因リ其効力ヲ生ス此送達ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第七百八條 裁判所ハ強制管理開始ノ決定ヲ爲シタル不動産ニ付キ強制管理ノ申立アルモ更ニ開始決定ヲ爲スコトヲ得

右申立ハ執行記録ニ添附スルニ依リ配當要求ノ効力ヲ生シ

又既ニ開始シタル強制管理ノ取消ト爲リタルトキハ開始決定ヲ受ケタル効力ヲ生ス

假差押ノ命令アリタル不動産ニ付テハ本條ノ規定ヲ適用セ

第七百九條 配當要求ハ執行力アル正本ニ因リ且裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサル者ハ假住居ヲ撰定シテ執行裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

第七百十條 執行裁判所ハ前二條ノ申立及ヒ要求アリタルコトヲ債權者、債務者及ヒ管理入ニ通知ス可シ

第七百十一條 管理入ハ裁判所之ヲ任命ス但債權者ハ適當ノ人ヲ推薦スルコトヲ得

管理入ハ管理及ヒ收益ノ爲メ自ラ不動産ヲ所有スル權利有

ス此場合ニ於テ抵抗ヲ受クルトキハ執達吏ヲ立會ハシムルコトヲ得

管理入ノ任命ハ債務者ニ代リ第三者ニ給付ス可キ收益ヲ取立ツル權利ヲ授與スルモノトス

第七百十二條 裁判所ハ債權者及ヒ債務者ヲ審訊シタル後又適當トスル場合ニ於テハ鑑定人ヲ立會ハシメタル上管理入ニ管理ニ關シ必要ナル指揮ヲ爲シ又管理入ニ與フ可キ報酬ヲ定メ且管理入ノ業務執行ヲ監督スヘシ

裁判所ハ管理入ニ保證ヲ立テシメ又ハ二十四以下ノ過料ヲ言渡シ又ハ其職ヲ免スルコトヲ得

第七百十三條 第三者不動産ニ付キ強制管理ヲ許スコトヲ妨クル權利ヲ主張スルトキハ第五百四十九條ノ規定ヲ準用ス

第七百十四條 管理入ハ直チニ不動産ニ付キ得タル收益ヨリ其不動産ノ負擔ニ係ル租稅其他ノ公課ヲ控除シタル後別段

ノ手續ヲ要セスシテ管理ノ費用ヲ辨濟シ其殘額ノ配當ニ付  
 \*債權者間ニ協議調ハサルトキハ其旨ヲ裁判所ニ届出ツ可  
 前項ノ届出アリタルトキハ裁判所ハ第六百九十一條第六百  
 九十六條乃至第六百九十八條ノ規定ヲ準用シテ配當表ヲ作  
 リ其配當表ニ基キ管理人ヲシテ債權者ニ支拂ヲ爲サシム可  
 シ

第七百十五條 管理人ハ毎年及ヒ其業務執行ノ終了後各債權  
 者、債務者及ヒ裁判所ニ計算書ヲ差出ス可シ  
 各債權者及ヒ債務者ハ計算ノ送達アリタルヨリ七日ノ期間  
 内ニ執行裁判所ニ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得  
 右期間内ニ異議ノ申立ナキトキハ計算ニ付キ全ク異議ナク  
 且管理人ノ卸任ヲ承諾シタルモノト看做ス  
 異議ノ申立アルトキハ裁判所ハ管理人ヲ審訊シタル後之ヲ  
 裁判ス可シ若シ異議ノ申立ナク又ハ申立タル異議ヲ完結  
 シタルトキハ裁判所ハ管理人ヲシテ卸任セシム得シ

第七百十六條 強制管理ノ取消ハ裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ爲  
 ス  
 此取消ハ各債權者不動産ノ收益ヲ以テ辨濟ヲ受ケタルトキ  
 ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス  
 若シ管理續行ノ爲メ特別ノ費用ヲ要スルトキ債權者カ必要  
 ナル金額ヲ豫納セザルニ於テハ裁判所ハ強制管理ノ取消ヲ  
 命スルコトヲ得  
 裁判所ハ右ノ取消ヲ決定スル際登記判事ニ強制管理ニ關ス  
 ル記入ノ抹消ヲ囑託ス可シ

第三節 船舶ニ對スル強制執行

第七百十七條 商船其他ノ海船ニ對スル強制執行ハ不動産ノ  
 強制競賣ニ關スル規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス但事物ノ性質ニ因  
 リテ差異ノ顯ハルルトキ又ハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ  
 設ケタルトキハ此限ニ在ラス  
 端舟其他櫓權ノミヲ以テ運轉シ又ハ主トシテ櫓權ヲ以テ運  
 轉スル舟ニハ本節ノ規定ヲ適用セズ

第七百十八條 船舶ノ強制競賣ニ付テハ船舶カ差押ノ當時碇  
 泊スル港ノ區裁判所ヲ以テ管轄執行裁判所トス

第七百十九條 船舶ハ執行手續中差押ノ港ニ之ヲ碇泊セシム  
 可シ然レトモ商業上利益ノ爲メ適當トスル場合ニ於テハ裁  
 判所ハ總テノ利害關係人ノ申立ニ因リ航行ヲ許スコトヲ得  
 第七百二十條 強制競賣ニ付テハ申立ニハ左ノ證書ヲ添附ス  
 可シ

第一 債務者カ所有者ナル場合ニ於テハ其所有者トシテ  
 船舶ヲ占有スルコト又船長ナル場合ニ於テハ船長  
 トシテ船舶ヲ指揮スルコトヲ疏明スルニ足ル可キ  
 證書

第二 船舶カ船舶登記簿ニ登記アル場合ニ於テハ其船舶  
 ニ關スル有效ナル各登記事項ヲ包含シタル登記簿  
 ノ抄本

債權者ハ公簿ヲ主管スル官廳カ遠隔ノ地ニ在ルトキハ第二  
 號ノ抄本ノ求アランコトヲ執行裁判所ニ申立ルコトヲ得  
 第七百二十一條 裁判所ハ債權者ノ申立ニ因リ船舶ノ監守及  
 ヒ保存ノ爲メ必要ナル處分ヲ爲サシム可シ  
 此處分ヲ爲シタルトキハ開始決定ノ送達前ト雖モ差押ノ効  
 力ヲ生ス

若シ此處分ヲ續行スル爲メ債權者カ必要ナル金額ヲ豫納セ  
 サルトキハ裁判所ハ之ヲ取消スコトヲ得

第七百二十二條 船長ニ對シテ爲シタル判決ニ基キ船舶債權者  
 ノ爲メ船舶ノ差押ヲ爲ストキハ其差押ハ所有者ニ對シテモ  
 効力アリ此場合ニ於テハ所有者モ亦利害關係人トス  
 差押後所有者若シハ船長ノ變更アルモ手續ノ續行ヲ妨ケス  
 差押後新ニ船長ト爲リタル者ハ之ヲ利害關係人トス此場合  
 ニ於テハ前船長ハ其關係人タル責務ヲ免カル

第七百二十三條 船舶カ差押ノ當時其裁判所管轄内ニ存セザ  
 ルコトノ顯ハルルトキハ其手續ヲ取消ス可シ

第七百二十四條 競賣期日ノ公告ニハ第六百五十八條第一號  
 ニ掲ケタル旨趣ニ換ヘテ船舶ノ表示及ヒ其碇泊ノ場所ヲ掲  
 ク可シ

第七百二十五條 定繫港ノ區裁判所管轄外ニ於テ差押ヲ爲シ  
 タルトキハ執行裁判所ハ競賣期日ノ公告ヲ定繫港ノ區裁判  
 所ニ送付シ其裁判所ノ掲示板ニ揭示ス可キコトヲ囑託ス可  
 シ

第七百二十六條 船舶ノ股分ニ對スル強制執行ハ第六百二十  
 五條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス其執行ニ付テハ定繫港ノ區裁  
 判所之ヲ管轄ス

第七百二十七條 債權者ハ差押命令ノ申請ニ債務者カ船舶ノ  
 股分ニ付キ所有權ヲ有スルコトヲ爲スコキ船舶登記簿ノ抄  
 本又ハ信用ス可キ證明書ヲ添附ス可シ  
 差押命令ハ債務者ノ外船舶管理人ニモ之ヲ送達ス可シ  
 差押ハ此命令ヲ船舶管理人ニ送達スルニ因リ債務者ニ送達  
 スルト同一ノ効力ヲ生ス

第七百二十八條 船舶股分ノ競賣代金ノ配當ニ付テハ第六百  
 二十六條以下ノ規定ヲ準用ス

第七百二十九條 外國ノ船舶ヲ差押ヘタルトキ又ハ登記簿ニ  
 登記セザル船舶ヲ差押ヘタルトキハ登記簿ニ記入ス可キ手  
 續ニ關スル規定ヲ適用セズ

第三章 金錢ノ支拂ヲ目的トセザル債權ニ付テハ強  
 制執行

第七百三十條 債務者カ特定ノ動産又ハ代替物ノ一定ノ數  
 量ヲ引渡ス可キトキハ執達吏ハ之ヲ債務者ヨリ取上ケテ債  
 權者ニ引渡ス可シ

第七百三十一條 債務者カ不動産又ハ人ノ住居スル船舶ヲ引  
 渡シ又ハ明渡ス可キトキハ執達吏ハ債務者ノ占有ヲ解キ債  
 權者ニ其占有ヲ得セシム可シ

此強制執行ハ債權者又ハ其代理人カ受取ノ爲メ出頭シタル  
 トキニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

強制執行ノ目的物ニ非サル動産ハ執達吏之ヲ取除キテ債務  
 者ニ引渡ス可シ

若シ債務者不在ナルトキハ其代理人又ハ債務者ノ成長シタ  
 ル家族若シハ雇人ニ之ヲ引渡ス可シ

債務者及ヒ前項ニ掲ケタル者不在ナルトキハ執達吏ハ右ノ  
 動産ヲ債務者ノ費用ニテ保管ニ付ス可シ

債務者カ其動産ノ受取リヲ怠ルトキハ執達吏ハ執行裁判所  
 ノ許可ヲ得テ差押物ノ競賣ニ關スル規定ニ從ヒテ之ヲ賣却  
 シ其費用ヲ控除シタル後其代金ヲ供託ス可シ

第七百三十二條 引渡ス可キ物カ第三者ノ手中ニ存スルトキ  
 ハ債務者ノ引渡ノ請求ハ申立ニ因リ金錢債權ノ差押ニ關ス

ル規定ニ從ヒテ之ヲ債權者ニ轉付ス可シ  
 第七百三十三條 債務者カ爲ス可キ行爲ヲ爲ササル場合ニ於テ第三者之ヲ爲シ得ヘキ者ナルトキハ第一審ノ受訴裁判所ハ申立ニ因リ民法(財産編)第三百八十二條第三項第四項ノ規定ニ從ヒテ決定ヲ爲ス  
 債權者ハ同時ニ其行爲ヲ爲スニ因リ生ス可キ費用ヲ豫メ債務者ニ支拂ヲ爲シムル決定ノ宣言アラフコトヲ申立ツルコトヲ得但し其行爲ヲ爲スニ因リ此ヨリ多額ノ費用ヲ生スルトキ後日其請求ヲ爲ス權利ヲ妨ケス  
 第七百三十四條 債務者カ其意思ノミニ因リ爲シ得ヘキ所爲ニシテ第三者之ヲ爲シ得ヘカラサルモノナルトキハ第一審ノ受訴裁判所ハ申立ニ因リ(民法財産編)第三百八十六條第三項ノ規定ニ從ヒテ決定ヲ爲ス  
 第七百三十五條 前二條ノ決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得但し決定前債務者ヲ審訊ス可シ  
 第七百三十六條 債務者カ權利關係ノ成立ヲ認諾ス可キコト又ハ其他ノ意思ノ陳述ヲ爲ス可キコトノ判決ヲ受ケタルトキハ其判決ノ確定ヲ以テ認諾又ハ意思ノ陳述ヲ爲シタルモノト看做ス反對給付ノ有リタル後認諾又ハ意思ノ陳述ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ第五百十八條及ヒ第五百二十條ノ規定ニ從ヒ執行力アル正本ヲ付與シタルトキ其効力ヲ生ス  
 第四章 假差押及ヒ假處分  
 第七百三十七條 假差押ハ金錢ノ債權又ハ金錢ノ債權ニ換フルコトヲ得ヘキ請求ニ付キ動産又ハ不動産ニ對スル強制執行ヲ保全スル爲メ之ヲ爲スコトヲ得  
 假差押ハ未タ期間ニ至ラサル請求ニ付テモ亦之ヲ爲スコト

ヲ得  
 第七百三十八條 假差押ハ之ヲ爲サレハ判決ノ執行ヲ爲スコト能ハス又ハ判決ノ執行ヲ爲スニ著ルシキ困難ヲ生スル恐アルトキ殊ニ外國ニ於テ判決ノ執行ヲ爲スニ至ル可キトキハ之ヲ爲スコトヲ得  
 第七百三十九條 假差押ノ命令ハ假ニ差押ヲ可キ物ノ又所在地方管轄スル區裁判所又ハ本案ノ管轄裁判所之ヲ管轄ス  
 第七百四十條 假差押ノ申請ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ  
 第一 請求ノ表示若シ其請求カ一定ノ金額ニ係ラサルトキハ其價額  
 第二 假差押ノ理由タル事實ノ表價  
 請求及ヒ假差押ノ理由ハ之ヲ疏明ス可シ  
 申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得  
 第七百四十一條 假差押ノ申請ニ付テハ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得  
 請求又ハ假差押ノ理由ヲ疏明セサルトキト雖モ假差押ニ因リ債務者ニ生ス可キ損害ノ爲メ債權者カ裁判所ノ自由ナル意見ヲ以テ定ムル保證ヲ立ラタルトキハ裁判所ハ假差押ヲ命スルコトヲ得  
 又請求及ヒ假差押ノ理由ヲ疏明シタルトキト雖モ裁判所ハ保證ヲ立ラシメ假差押ヲ命スルコトヲ得  
 保證ヲ立ラタルトキハ其保證ヲ立ラタルコト及ヒ如何ナル方法ヲ以テ之ヲ立ラタルコトヲ假差押ノ命令ニ記載ス可シ  
 第七百四十二條 假差押ノ申請ニ付テハ裁判ハ口頭辯論ヲ爲ス場合ニ於テハ終局判決ヲ以テ之ヲ爲シ其他ノ場合ニ於テハ決定ヲ以テ之ヲ爲ス

假差押ノ申請ヲ却下シ又ハ保證ヲ立ラシムル裁判ハ債務者ニ之ヲ通知スルコトヲ要セス  
 第七百四十三條 假差押ノ命令ニハ假差押ノ執行ヲ停止スルコトヲ得ル爲メ又ハ執行シタル假差押ヲ取消スコトヲ得ル爲メ債務者ヨリ供託ス可キ金額ヲ記載ス可シ  
 第七百四十四條 債務者ハ假差押決定ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得  
 此異議ニ付テハ假差押ノ取消又ハ變更ヲ申立ツル理由ヲ開示ス可シ  
 異議ノ申立ハ假差押ノ執行ヲ停止セス  
 第七百四十五條 異議ノ申立アリタルトキハ裁判所ハ口頭辯論ノ爲メ當事者ヲ呼出ス可シ  
 裁判所ハ終局判決ヲ以テ假差押ノ全部若クハ一分ノ認可、變更又ハ取消ヲ言渡シ又自由ナル意見ヲ以テ定ムル保證ヲ立ツ可キコトノ條件ヲ附シテ之ヲ言渡スコトヲ得  
 第七百四十六條 本案ノ未タ繫屬セサルトキハ假差押裁判所ハ債務者ノ申立ニ因リ口頭辯論ヲ經スシテ相當ニ定ムル期間内ニ訴ヲ起スコトヲ債權者ニ命ス可シ  
 此期間ヲ徒過シタル後ハ債務者ノ申立ニ因リ終局判決ヲ以テ假差押ヲ取消ス可シ  
 第七百四十七條 債務者ハ假差押ノ理由消滅シ其他事情ノ變更シタルトキ又ハ裁判所ノ自由ナル意見ヲ以テ定ム可キ保證ヲ立テントノ提供ヲ爲シタルトキハ假差押ノ認可後ト雖モ假差押ノ取消ヲ申立ツルコトヲ得  
 此申立ニ付テハ終局判決ヲ以テ之ヲ裁判ス其裁判ハ假差押ヲ命シタル裁判所又本案カ既ニ繫屬シタルトキハ本案ノ裁

判所之ヲ爲ス  
 第七百四十八條 假差押ノ執行ニ付テハ強制執行ニ關スル規定ヲ準用ス但以下數條ニ於テ差押ノ生スルトキハ此限ニ在ラス  
 第七百四十九條 假差押ノ命令ニハ其命令ヲ發シタル後債權者又ハ債務者ニ於テ承繼アル場合ニ限り執行文ヲ附記スルコトヲ要ス  
 假差押命令ノ執行ハ命令ヲ言渡シ又ハ申立人ニ命令ヲ送達シタルヨリ十四日ノ期間ヲ徒過スルトキハ之ヲ爲スコトヲ許サス  
 右執行ハ債務者ニ差押命令ヲ送達スル前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得  
 第七百五十條 動産ニ對スル假差押ノ執行ハ各差押ト同一ノ原則ニ從ヒテ之ヲ爲ス  
 債權ノ假差押ニ付テハ其命令ヲ發シタル裁判所ヲ以テ管轄執行裁判所トス  
 債權ノ假差押ニ付テハ第三債務者ニ對シ債務者ニ支拂ヲ爲スコトヲ禁スル命令ノミヲ爲スコトヲ得  
 假差押ノ金錢ハ之ヲ供託ス可シ其他假差押物ノ競賣及ヒ假差押有價證券ノ換價ハ一時之ヲ爲サス然レトモ假差押物ニ著シキ價額ノ減少ヲ生スル恐アルトキ又ハ其貯藏ニ付キ不相應ナル費用ヲ生ス可キトキハ執行裁判所ハ申立ニ因リ其物ヲ競賣シ賣得金ヲ供託ス可キ旨ヲ執達スル命令スルコトヲ得  
 第七百五十一條 不動産ニ對スル假差押ノ執行ハ假差押ノ命令ヲ登記簿ニ記入スルニ因リテ之ヲ爲ス



現行日本法令大全

第七百五十二條 假差押執行ノ爲メ強制管理ヲ爲ス場合ニ於テハ保全ス可キ債權ニ相當スル金額ヲ取立テ之ヲ供託ス可シ

第七百五十三條 船舶ニ對スル假差押ノ執行ハ假差押ノ當時碇泊スル港ニ碇泊セシムルコトニ因リテ之ヲ爲ス裁判所ハ債權者ノ申立ニ因リ船舶ノ監守及ヒ保存ノ爲メ必要ナル處分ヲ爲ス

第七百五十四條 假差押命令ニ於テ定メタル金額ヲ供託シタルトキハ執行裁判所ハ執行シタル假差押ヲ取消ス可シ

假差押ノ執行ニ付キ特別ノ費用ヲ要シ且之カ爲メ必要ナル金額ヲ債權者カ豫納セサルトキモ亦執行裁判所ハ假差押ノ取消ヲ命スルコトヲ得

右裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

假差押ヲ取消ス決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第七百五十五條 係争物ニ關スル假處分ハ現狀ノ變更ニ因リ當事者一方ノ權利ノ實行ヲ爲スコト能ハス又ハ之ヲ爲スニ著シキ困難ヲ生スル恐アルトキ之ヲ許ス

第七百五十六條 假處分ノ命令其他ノ手續ニ付テハ假差押ノ命令及ヒ手續ニ關スル規定ヲ準用ス但以下數條ニ於テ差異ノ生スルトキハ此限ニ在ラス

第七百五十七條 假處分ノ命令ハ本案ノ管轄裁判所之ヲ管轄ス

右裁判ハ急迫ナル場合ニ於テハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第七百五十八條 裁判所ハ其意見ヲ以テ申立ノ目的ヲ達スルニ必要ナル處分ヲ定ム

假處分ハ保管人ヲ置キ又ハ相手方ニ行爲ヲ命シ若クハ之ヲ禁止シ又ハ給付ヲ命スルコトヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

假處分ヲ以テ不動産ヲ讓渡シ又ハ抵當ト爲スコトヲ禁シタルトキハ裁判所ハ第七百五十一條ノ規定ヲ準用シテ登記簿ニ其禁止ヲ記入セシム可シ

第七百五十九條 特別ノ事情アルトキニ限り保證ヲ立テシメテ假處分ノ取消ヲ許スコトヲ得

第七百六十條 假處分ハ争アル權利關係ニ付キ假ノ地位ヲ定ムル爲メモ亦之ヲ爲スコトヲ得但其處分ハ殊ニ繼續スル權利關係ニ付キ著シキ損害ヲ避ク若クハ急迫ナル強暴ヲ防ク爲メ又ハ其他ノ理由ニ因リ之ヲ必要トスルトキニ限ル

第七百六十一條 急迫ナル場合ニ於テハ係争物ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ハ假處分ノ當否ニ付テハ口頭辯論ヲ爲メ本案ノ管轄裁判所ニ相手方ヲ呼出ス可キ申立ノ期間ヲ定メ假處分ヲ命スルコトヲ得

此期間ヲ徒過シタル後區裁判所ハ申立ニ因リ其命シタル假處分ヲ取消ス可シ

右裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第七百六十二條 本章ノ規定ニ於ケル本案ノ管轄裁判所ハ第一審裁判所トス但本案カ控訴審ニ屬スルトキニ限り控訴裁判所トス

第七百六十三條 急迫ナル場合ニ於テ口頭辯論ヲ要セサルモノニ限り裁判長ハ本章ノ申立ニ付キ裁判ヲ爲スコトヲ得

第七篇 公示催告手續

第七百六十四條 請求又ハ權利ノ届出ヲ爲サシムル爲メノ裁判上ノ公示催告ハ其届出ヲ爲ササルトキハ失權ヲ生スル効

現行日本法令大全

カヲ以テ法律ニ定メタル場合ニ限り之ヲ爲スコトヲ得

公示催告手續ハ區裁判所之ヲ管轄ス

第七百六十五條 公示催告ノ申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

此申立ニ付テハ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

申立ヲ許ス可キトキハ裁判所ハ公示催告ヲ爲スコク其公示催告ニハ殊ニ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 申立人ノ表示

第二 請求又ハ權利ヲ公示催告期日マテニ届出ツ可キコトノ催告

第三 届出ヲ爲ササルニ因リ生ス可キ失權ノ表示

第四 公示催告期日ノ指定

第七百六十六條 公示催告ニ付テハ公告ハ裁判所ノ掲示板ニ掲示シ及ヒ官報又ハ公報ニ掲載シテ之ヲ爲シ其他法律ニ別段ノ規定ヲ設ケサルトキハ第五百五十七條第三項ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス

第七百六十七條 公示催告ヲ官報又ハ公報ニ掲載シタル日ト公示催告期日トノ間ニハ法律ニ別段ノ規定ヲ設ケサルトキハ少ナクトモ二ヶ月ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス

第七百六十八條 公示催告期日ノ終リタル後ト雖モ除權判決前ニ届出ヲ爲ストキハ適當ナル時間ニ之ヲ爲シタルモノト看做ス

第七百六十九條 除權判決ハ申立ニ因リテ之ヲ爲ス

右判決前ニ詳細ナル探知ヲ爲スコキ旨ヲ命スルコトヲ得

除權判決ノ申立ヲ却下スル決定及ヒ除權判決ニ付シタル制

限又ハ留保ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第七百七十條 申立人ノ申立ノ理由トシテ主張シタル權利ヲ争フコトノ届出アリタルトキハ其事情ニ從ヒ届出テタル權利ニ付テハ裁判確定スルマテ公示催告手續ヲ中止シ又ハ除權判決ニ於テ届出テタル權利ヲ留保ス可シ

第七百七十一條 申立人カ公示催告期日ニ出頭セサルトキハ其申立ニ因リ新期日ヲ定ム可シ此申立ハ公示催告期日ヨリ六ヶ月ノ期間内ニ因リ之ヲ爲スコトヲ許ス

第七百七十二條 公示催告手續ヲ完結スル爲メ新期日ヲ定メタルトキハ其期日ノ公告ヲ爲スコトヲ要セス

第七百七十三條 裁判所ハ除權判決ノ重要ナル旨趣ヲ官報又ハ公報ニ掲載シテ公告ヲ爲スコトヲ得

第七百七十四條 除權判決ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

除權判決ニ對シテハ左ノ場合ニ於テ申立人ニ對スル訴ヲ以テ催告裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所ニ不服ヲ申立ルコトヲ得

第一 法律ニ於テ公示催告手續ヲ許ス場合ニ非サルトキ

第二 公示催告ニ付テハ公告ヲ爲サス又ハ法律ニ定メタル方法ヲ以テ公告ヲ爲ササルトキ

第三 公示催告ノ期間ヲ遵守セサルトキ

第四 判決ヲ爲ス判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタルトキ

第五 請求又ハ權利ノ届出アリタルニ拘ハラス判決ニ於テ其届出ヲ法律ニ從ヒ顧ミサルトキ

第六 第四百六十九條第一號乃至第五號ノ場合ニ於テ原狀回復ノ訴ヲ許ス條件ノ存スルトキ

現行日本法令大全

第七百七十五條 不服申立ノ訴ハ一箇月ノ不變期限内ニ之ヲ起ス可シ此期間ハ原告カ除權判決ヲ知リタル日ヲ以テ始マル然レトモ前條第四號及ヒ第六號ニ掲ケタル不服申立ノ理由ノ一ニ基キ訴ヲ起シ且原告カ右ノ日ニ其理由ヲ知ラザリシ場合ニ於テハ其期間ハ不服ノ理由ノ原告ニ知ラザル日ヲ以テ始マル

除權判決ノ言渡ノ日ヨリ起算シテ五箇年ノ満了後ハ此訴ヲ起スコトヲ得ス

第七百七十六條 裁判所ハ第二百十條ノ條件ノ存セザルトキト雖モ數箇ノ公示催告ノ併合ヲ命スルコトヲ得

第七百七十七條 盜取セラレ又ハ紛失若クハ滅失シタル手形其他商法ニ無効ト爲シ得ヘキコトヲ定メタル證書ノ無効宣言ノ爲ニ爲ス公示催告手續ニ付テハ以下數條ノ特別規定ヲ適用ス

此規定ハ法律上公示催告手續ヲ許ス他ノ證書ニ付キ其法律中ニ特別規定ヲ設ケザル限リハ之ヲ適用ス

第七百七十八條 無記名證券又ハ裏書ヲ以テ移轉シ得ヘク且裏書式裏書ヲ付シタル證書ニ付テハ最終ノ所持人公示催告手續ヲ申立ツル權アリ

其他ノ證書ニ付テハ證書ニ因リ權利ヲ主張シ得ヘキ者此中立テ爲ス權アリ

第七百七十九條 公示催告手續ハ證書ニ表示シタル履行地ノ裁判所之ヲ管轄ス若シ證書ニ其履行地ヲ表示セザルトキハ發行人カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ裁判所之ヲ管轄シ其裁判所ヲキトキハ發行人カ發行ノ當時普通裁判籍ヲ有セシ地ノ裁判所之ヲ管轄ス

證書ヲ發行スル原因タル請求ヲ登記簿ニ記入シタルトキハ其物ノ所在地ノ裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第七百八十條 申立人ハ申立ノ憑據トシテ左ノ手續ヲ爲ス可シ

第一 證書ノ原本ヲ差出シ又ハ證書ノ重要ナル旨趣及ヒ證書十分ニ認知スルニ必要ナル諸件ヲ開示スルコト

第二 證書ノ盜難、紛失、滅失及ヒ公示催告手續ヲ申立ツルコトヲ得ルノ理由タル事實ヲ説明スルコト

第七百八十一條 公示催告中ニ公示催告期日マテニ權利ヲ裁判所ニ届出テ且其證書ヲ提出ス可キ旨ヲ證書ノ所持人ニ催告ス可ク又失權トシテ證書ノ無効宣言ヲ爲ス可キ旨ヲ戒示ス可シ

第七百八十二條 公示催告ノ公告ハ裁判所ノ揭示板ニ揭示シ且官報又ハ公報ニ掲載シ及ヒ新聞紙ニ三回掲載シテ之ヲ爲ス

公示催告裁判所ノ所在地ニ取引所アルトキハ取引所ニモ亦此公告ヲ揭示ス可シ

第七百八十三條 公示催告ヲ官報又ハ公報ニ掲載シタル日ト公示催告期日トノ間ニハ少ナクトモ六ヶ月ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス

第七百八十四條 除權判決ニ於テハ證書ヲ無効ナリト宣言ス可シ

除權判決ノ重要ナル旨趣ハ官報又ハ公報ヲ以テ之ヲ公告ス可シ

不服申立ノ訴ニ因リ判決ヲ以テ無効宣言ヲ取消シタルトキハ其判決ノ確定後官報又ハ公報ヲ以テ之ヲ公告ス可シ

現行日本法令大全

第七百八十五條 除權判決アリタルトキハ其申立人ハ證書ニ因リ義務ヲ負擔スル者ニ對シテ證書ニ因ル權利ヲ主張スルコトヲ得

第八節 仲裁手續

第七百八十六條 一名又ハ數名ノ仲裁人ヲシテ爭ノ判斷ヲ爲サシムル合意ハ當事者カ係争物ニ付キ和解ヲ爲ス權利アル場合ニ限リ其効力ヲ有ス

第七百八十七條 將來ノ争ニ關スル仲裁契約ハ一定ノ權利關係及ヒ其關係ヨリ生スル争ニ關セザルトキハ其効力ヲ有セス

第七百八十八條 仲裁契約ニ仲裁人ノ選定ニ關スル定ナキトキハ當事者ハ各一名ノ仲裁人ヲ選定ス

第七百八十九條 當事者ノ雙方カ仲裁人ヲ選定スル權利ヲ有スルトキハ先ニ手續ヲ爲ス一方ハ書面ヲ以テ相手方ニ其選定シタル仲裁人ヲ指示シ且七日ノ期間内ニ同一ノ手續ヲ爲ス可キ旨ヲ催告ス可シ

右期間ヲ徒過シタルトキハ管轄裁判所ハ先ニ手續ヲ爲ス一方ノ申立ニ因リ仲裁人ヲ選定ス

第七百九十條 當事者ノ一方ハ相手方ニ仲裁人選定ノ通知ヲ爲シタル後ハ相手方ニ對シテ其選定ニ異議セザル

第七百九十一條 仲裁契約ヲ以テ選定シタルニ非サル仲裁人カ死亡シ又ハ其他ノ理由ニ因リ欠缺シ又ハ其職務ノ引受若クハ履行ヲ拒ミタルトキハ其仲裁人ヲ選定シタル當事者ハ相手方ノ催告ニ因リ七日ノ期間内ニ他ノ仲裁人ヲ選定ス可シ此期間ヲ徒過シタルトキハ管轄裁判所ハ其催告ヲ爲シタル者ノ申立ニ因リ仲裁人ヲ選定ス可シ

第七百九十二條 當事者ハ判事ヲ忌避スル權利アルト同一ノ理由及ヒ條件ヲ以テ仲裁人ヲ忌避スルコトヲ得

其他仲裁契約ヲ以テ選定シタルニ非サル仲裁人カ其義務ノ履行ヲ不當ニ遲延スルトキハ亦之ヲ忌避スルコトヲ得

無能力者、噤者、啞者及ヒ公權ノ剝奪又ハ停止中ノ者ハ之ヲ忌避スルコトヲ得

第七百九十三條 仲裁契約ハ當事者ノ合意ヲ以テ左ノ場合ノ爲メ豫定ヲ爲サ、リシトキハ其効力ヲ失フ

第一 契約ニ於テ一定ノ人ヲ仲裁人ニ選定シ其仲裁人中ノ或ル人カ死亡シ又ハ其他ノ理由ニ因リ欠缺シ又ハ其職務ノ引受ヲ拒ミ又ハ仲裁人ノ取替ヒタル契約ヲ解キ又ハ義務ノ履行ヲ不當ニ遲延シタルトキ

第二 仲裁人カ其意見可否同數ナル旨ヲ當事者ニ通知シタルトキ

第七百九十四條 仲裁人ハ仲裁判斷前ニ當事者ヲ審訊シ且必要トスル限リハ争ノ原因タル事件關係ヲ探知ス可シ

仲裁手續ニ付キ當事者ノ合意アラサル場合ニ於テハ其手續ハ仲裁人ノ意見ヲ以テ之ヲ定ム

第七百九十五條 仲裁人ハ其而前ニ任意ニ出頭スル證人及ヒ鑑定人ヲ訊問スルコトヲ得

仲裁人ハ證人又ハ鑑定人ヲシテ宣誓ヲ爲サシムル權ナシ

第七百九十六條 仲裁人ノ必要ト認ムル判斷上ノ行爲ニシテ仲裁人ノ爲スコトヲ得サルモノハ當事者ノ申立ニ因リ管轄裁判所之ヲ爲ス可シ但其申立ヲ相當ト認メタルトキニ限ル

證人又ハ鑑定人ニ供述ヲ命シタル裁判所ハ證據ヲ述フルコト又ハ鑑定ヲ爲スコトヲ拒ミタル場合ニ於テ必要ナル裁判

ヲモ亦爲ス權アリ

第七百九十七條 仲裁人ハ當事者カ仲裁手續ヲ許ス可カラザルコトヲ主張スルトキ殊ニ法律上有効ナル仲裁契約ノ成立セサルコト、仲裁契約カ判斷ス可キ事ニ關係セサルコト又ハ仲裁人カ其職務ヲ履行スル權ナキコトヲ主張スルトキト雖モ仲裁手續ヲ履行シ且仲裁判斷ヲ爲スコトヲ得

狀回復ノ訴ヲ許ス條件ノ存スルトキ  
仲裁判斷ノ取消ハ當事者カ別段ノ行爲ヲ爲シタルトキハ本條第四號及ヒ第五號ニ掲ケタル理由ニ因リ之ヲ爲スコトヲ得ス  
第八百二條 仲裁判斷ニ因リ爲ス強制執行ハ執行判決ヲ以テ其許ス可キコトヲ言渡シタルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得  
右執行判決ハ仲裁判斷ノ取消ヲ申立ツルコトヲ得ヘキ理由ノ存スルトキハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第七百九十八條 數名ノ仲裁人カ仲裁判斷ヲ爲スコトキハ過半數ヲ以テ其判斷ヲ爲スコシ但仲裁契約ニ別段ノ定アルトキハ此限ニ在ラス  
第七百九十九條 仲裁判斷ニハ其作リタル年月日ヲ記載シテ仲裁人之ニ署名捺印ス可シ  
仲裁人ノ署名捺印シタル判斷ノ正本ハ之ヲ當事者ニ送達シ其原本ハ送達ノ證書ヲ添ヘテ管轄裁判所ノ書記課ニ之ヲ預ケ置ク可シ

第八百三條 執行判決ヲ爲シタル後ハ仲裁判斷ノ取消ハ第八百一條第六號ニ掲ケタル理由ニ因リ之ヲ申立ツルコトヲ得但當事者カ自己ノ過失ニ非スシテ前手續ニ於テ取消ノ理由ヲ主張スル能ハザリシコトヲ証明シタルトキニ限り第八百四條 仲裁判斷取消ノ訴ハ前條ノ場合ニ於テハ一箇月ノ不變期間内ニ之ヲ起ス可シ  
右期間ハ當事者カ取消ノ理由ヲ知リタル日ヲ以テ始マル然レトモ執行判決ノ確定前ニハ始マラサルモノトス但執行判決ノ確定ト爲リタル日ヨリ起算シテ五箇年ノ滿了後ハ此訴ヲ起スコトヲ許サス仲裁判斷ヲ取消ストキハ執行判決ノ取消ヲモ亦言渡ス可シ

第八百條 仲裁判斷ハ當事者間ニ於テ確定シタル裁判所ノ判決ト同一ノ効力ヲ有ス  
第八百一條 仲裁判斷ノ取消ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ申立ツルコトヲ得

第八百五條 仲裁人ヲ撰定シ若クハ忌避スルコト、仲裁契約ノ消滅スルコト、仲裁手續ヲ爲スコカラザルコト、仲裁判斷ヲ取消スコト又ハ執行判決ヲ爲スコトヲ目的トスル訴ニ付テハ仲裁契約ニ指定シタル區域裁判所ハ地方裁判所之ヲ管轄シ其指定ナキトキハ請求ヲ裁判所主張スル場合ニ於テ管轄ヲ有スコキ區域裁判所又ハ地方裁判所之ヲ管轄ス  
前項ニ依リ管轄ヲ有スル裁判所數個アルトキハ當事者又ハ

- 第一 仲裁手續ヲ許ス可カラザリシトキ
- 第二 仲裁判斷カ法律上禁止ノ行爲ヲ爲スコキ言テ當事者ニ言渡シタルトキ
- 第三 當事者カ仲裁手續ニ於テ法律ノ規定ニ從ヒ代理セザリシトキ
- 第四 仲裁手續ニ於テ當事者ヲ審訊セザリシトキ
- 第五 仲裁判斷ノ理由ヲ付セザリシトキ
- 第六 第四百六十九條第一號乃至第五號ノ場合ニ於テ原

前項ニ依リ管轄ヲ有スル裁判所數個アルトキハ當事者又ハ

仲裁人カ最初ニ關係セシメタル裁判所之ヲ管轄ス

○婚嫁養子縁組禁止治産事件ノ訴訟規則

明治二十三年十月 法律第四號

民事訴訟法ノ補則トシテ婚嫁事件養子縁組事件及ヒ禁止治産事件ニ關スル訴訟規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

婚姻事件養子縁組事件及ヒ禁止治産事件ニ關スル訴訟規則

- 第一章 婚姻事件及ヒ養子縁組事件ノ訴訟手續
- 第一條 婚姻ノ無効、離婚又ハ同居ヲ目的トスル訴訟ハ夫カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ地方裁判所ノ管轄ニ專屬ス  
縁組ノ無効又ハ縁組ヲ目的トスル訴訟ハ養子ヲ爲シタル者カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ地方裁判所ニ專屬ス  
婚姻又ハ縁組ノ不成立ニ關スル訴訟ハ被告カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ地方裁判所ニ專屬ス
- 第二條 婚姻事件及ヒ縁組事件ニ付テハ檢事ハ口頭辯論ニ立會フノ外受命判事若クハ受託判事ノ前ニ於テ爲ス審問ニモ亦立會フコトヲ得檢事ニハ職權ヲ以テ總テノ期日ヲ通知ス可シ  
檢事ハ婚姻又ハ縁組ヲ維持スル爲メ新ナル事實及ヒ證據方ヲ提出スルコトヲ得  
調査ニハ檢事ノ氏名及ヒ其中立ヲ記載ス可シ
- 第三條 婚姻ノ不成立、無効、離婚及ヒ同居ノ訴ハ之ヲ併合スルコトヲ得縁組ノ不成立、無効及ヒ縁組ノ訴モ亦同シ

婚嫁養子縁組ノ場合ニ於テハ婚姻ノ不成立、無効、離婚又ハ同居ノ訴ニ縁組ノ不成立、無効又ハ離婚ノ訴ヲ併合スルコトヲ得  
本條ノ訴ニ他ノ訴ヲ併合シ及ヒ他ノ種類ノ反訴ヲ提起スルコトヲ得ス但本條ノ訴ノ原因タル事實ヨリ生スル損害賠償及ヒ養料ノ請求ニ付テハ此限ニ在ラス  
第四條 判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ訴ニ於テ提出シタル以外ノ理由ヲ主張スルコトヲ得  
第五條 婚姻ノ無効若クハ離婚ノ訴又ハ縁組ノ無効若クハ離婚ノ訴ニ付キ棄却ノ言渡ヲ受ケタル原告ハ前訴訟ニ於テ又ハ訴ノ併合ニ因リ主張スルコトヲ得ヘカリシ事實ヲ獨立ナル訴ノ理由トシテ主張スルコトヲ得ス被告ニ在テハ反訴ノ理由ト爲スヲ得ヘカリシ事實ニ付テモ亦同シ  
第六條 民事訴訟法第一百一條第二項第三項、第二百十條及ヒ第三百二十五條乃至第三百四十一條ノ規定ハ之ヲ適用セズ  
第七條 口頭辯論ノ期日ニ被告カ出頭セザルトキハ原告ノ申立ニ因リ新期日ヲ定ム可シ  
被告ノ在廷セザル場合ニ於テ期日ヲ定メタルトキハ其都度被告ヲ呼出ス可シ  
闕席判決ハ本條ノ手續ノ効アラザルトキニ限り被告ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得  
第八條 裁判所ハ原告若クハ被告ノ自身出頭ヲ命シテ其原告若クハ被告又ハ其相手方若クハ檢事ノ主張シタル事實ニ付キ原告若クハ被告ヲ審訊スルコトヲ得  
審訊ヲ受ク可キ原告若クハ被告カ受訴裁判所ニ出頭スル能

ハサルトキ又ハ受訴裁判所ノ所在地ヨリ遠隔ノ地ニ在ルト  
 キハ受命判事若クハ受託判事ニ依リ審訊ヲ爲スコトヲ得  
 出頭セサル原告若クハ被告ニ對シテハ審訊期日ニ出頭セザ  
 ル證人ニ對スル規定ヲ適用ス  
 第九條 和譜ノ調ヲ可キ見込アルキハ裁判所ハ職權ヲ以テ  
 離婚又ハ離縁ノ訴ニ關スル手續ヲ長クトモ一箇年間中止ス  
 ルコトヲ得  
 第十條 裁判所ハ婚姻又ハ縁組ヲ維持スル爲メ當事者ノ提出  
 セサル事實ヲ斟酌シ且職權ヲ以テ證據調ヲ爲スコトヲ得  
 但裁判前ニ當事者ヲ審訊ス可シ  
 第十一條 婚姻及ヒ縁組ノ不成立若クハ無効又ハ離婚若クハ  
 離縁ヲ言渡ス判決ハ職權ヲ以テ之ヲ當事者ニ送達ス可シ  
 第十二條 婚姻事件及ヒ縁組事件ノ判決ニ付テハ假執行ノ宣  
 言ヲ付スルコトヲ得ス  
 第十三條 假處分ニ關シ殊ニ配偶者ノ一方又ハ養子カ住家ヲ  
 去ルノ許可及ヒ養料ノ供給ヲ申立テタル場合ニ於テハ民事  
 訴訟法第七百五十六條乃至第七百六十三條ノ規定ヲ準用ス  
 第十四條 婚姻及ヒ縁組ノ不成立若クハ無効又ハ離婚若クハ  
 離縁ヲ言渡シタル判決確定シタルトキハ裁判所ノ揭示板ニ  
 揭示シテ之ヲ公告ス可シ  
 第十五條 民法ノ規定ニ從ヒ檢事ノ職權ヲ以テ起スコトヲ得  
 ヘキ無効ノ訴ニ付テハ以下數條ニ定メタル特別ノ規定ニ從  
 フ  
 第十六條 檢事又ハ第三者ヨリ訴ヲ起ストキハ夫婦又ハ養親  
 子ヲ以テ相手方ト爲ス  
 夫婦又ハ養親子ノ一方ヨリ訴ヲ起ストキハ他ノ一方ヲ以テ

相手方ト爲ス  
 第十七條 檢事ハ自ら訴ヲ起ササルトキト雖モ訴訟ヲ進行シ  
 殊ニ獨立シテ申立ヲ爲シ及ヒ上訴ヲ爲スコトヲ得  
 第十八條 檢事上訴ヲ爲シタルトキハ上訴手續ニ於テ前審ノ  
 當事者雙方ヲ相手方ト看做ス  
 檢事カ訴訟人タル場合ニ於テ當事者ノ一方カ上訴ヲ爲シタ  
 ルトキハ上訴手續ニ於テ他ノ一方ト檢事トヲ相手方ト看做  
 ス  
 第十九條 訴訟人タル檢事カ敗訴スル場合ニ於テハ民事訴訟  
 法第一編第二章第五節ノ規定ニ從ヒ勝訴者タル相手方ニ生  
 シタル費用ハ國庫ノ負擔トス  
 第二十章 禁治産事件ノ訴訟手續  
 第二十條 禁治産ノ申立ハ治産ヲ禁セラル可キ者カ普通裁判  
 籍ヲ有スル地ノ區裁判所ノ管轄ニ專屬ス  
 第二十一條 申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其  
 申立ニハ申立ノ理由タル事實及ヒ證據方法ヲ表示ヲ包含ス  
 可シ  
 第二十二條 裁判所ハ申立ニ表示シタル事實及ヒ證據方法ニ  
 依リ職權ヲ以テ心神喪失ノ常況ニ在ルヤ否ヲ定ムル爲メニ  
 必要ナル探知ヲ爲シ且適當トスル證據方法ヲ調フ可シ  
 裁判所ハ訴訟手續ヲ開始スルノ前診斷書ノ提出ヲ命スルコ  
 トヲ得  
 檢事ハ總テノ場合ニ於テ申立ヲ爲シテ訴訟手續ヲ進行スル  
 コトヲ得  
 證人及ヒ鑑定人ノ訊問及ヒ宣誓ニ付テハ民事訴訟法第一編  
 第一章第六節及ヒ第七節ノ規定ヲ適用ス

第二十三條 裁判所ハ公開セサル法廷ニ於テ一人又ハ數人ノ  
 鑑定人ノ立會ヲ以テ治産ヲ禁セラル可キ者ヲ訊問ス可シ此  
 訊問ハ受託判事ヲシテ之ヲ爲シタルコトヲ得  
 右訊問ハ裁判所ノ意見ニ從ヒ實施シ難ク又ハ裁判ノ爲メニ  
 必要ヲナス又ハ治産ヲ禁セラル可キ者ノ健康ニ害アリトス  
 ルトキハ之ヲ爲ササルコトヲ得  
 第二十四條 禁治産ノ宣言ハ決定ヲ以テ之ヲ爲ス  
 右宣言ハ豫メ治産ヲ禁ヒラル可キ者ノ心神喪失ノ常況ニ付  
 キ一人又ハ數人ノ鑑定人ヲ訊問シタル後ニ非サレハ之ヲ爲  
 スコトヲ得ス  
 第二十五條 裁判所ハ治産ヲ禁セラル可キ者ノ身體ノ監護又  
 ハ財産ノ保存ニ付キ必要ナル處分ヲ命スルコトヲ得  
 第二十六條 訴訟手續ノ費用ハ治産ヲ禁シタル場合ニ於テハ  
 禁治産者之ヲ負擔シ其他ノ場合ニ於テハ禁治産ノ申立ヲ爲  
 シタル者之ヲ負擔ス可シ但檢事カ申立ヲ爲シタルトキハ國  
 庫之ヲ負擔ス  
 第二十七條 禁治産ニ付キ爲シタル決定ハ職權ヲ以テ申立人  
 及ヒ檢事ニ之ヲ送達ス可シ  
 第二十八條 禁治産ヲ宣言スル決定ハ法律上ノ後見人アルト  
 キハ其後見人ニ職權ヲ以テ之ヲ通知ス可シ  
 第二十九條 申立人及ヒ檢事ハ禁治産ノ申立ヲ却下スル決定  
 ニ對シ即時抗告ヲ爲スコトヲ得  
 抗告裁判所ノ訴訟手續ニハ第二十二條ノ規定ヲ準用ス  
 第三十條 禁治産ヲ宣言スル決定ニ對シテハ一箇月ノ期間  
 内ニ訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得  
 訴ヲ起スノ權利ハ禁治産者、其後見人及ヒ民法ノ規定ニ從ヒ

禁治産ノ申立ヲ爲スノ權ヲ有スル者ニ屬ス  
 右期間ハ禁治産者ニ對シテハ禁治産ヲ知リタル日ヲ以テ始  
 マリ其他ノ者ニ對シテハ後見人ノ選定ヲ以テ始マリ又法律  
 上ノ後見ノ場合ニ於テハ其決定ヲ法律上ノ後見人ニ通知ス  
 ルヲ以テ始マル  
 第三十一條 訴ハ區裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所ノ  
 管轄ニ專屬ス  
 第三十二條 禁治産ニ對シテ不服ヲ申立ル訴ニハ他ノ訴ヲ併  
 合スルコトヲ得ス  
 反訴ハ之ヲ爲スコトヲ許サス  
 第三十三條 禁治産者カ訴ヲ起サントスルトキハ其申立ニ因  
 リ受訴裁判所ノ裁判長ハ訴訟代理人トシテ辯護士ヲ之ニ附  
 添ハシム可シ  
 第三十四條 第六條及ヒ第七條ノ規定ハ本章ニモ之ヲ準用ス  
 第三十五條 第二十三條及ヒ第二十四條第二項ノ規定ハ不服  
 申立ノ訴ニ付テハ訴訟手續ニ之ヲ準用ス  
 裁判所ハ區裁判所ニ於テ爲シタル鑑定ヲ十分ナリト認ムル  
 トキハ鑑定人ノ訊問ヲ爲ササルコトヲ得  
 第三十六條 不服申立ノ訴ヲ理由アリトスルトキハ禁治産ヲ  
 宣言シタル決定ヲ取消ス可シ  
 然レトモ此取消ノ判決ハ後見人ノ既ニ爲シタル行爲ノ効力  
 ニ影響ヲ及ボサス  
 第三十七條 不服申立ノ訴ニ關スル訴訟費用ニ付テハ第二十  
 六條ノ規定ヲ準用ス  
 第三十八條 受訴裁判所ハ禁治産事件ニ付キ爲シタル總テノ  
 終局判決ヲ區裁判所ニ通知ス可シ

現行日本法令大全

第三十九條 禁治産ノ解除ニ付テハ第二十五條ヲ除クノ外本章ノ規定ヲ準用ス

第四十條 準禁治産事件ニ付テハ左ノ特別ナル規則ヲ除クノ外本章ノ規定ヲ準用ス

第二十二條第二項ハ混費者ニ之ヲ適用セス

又同條第三項、第二十五條、第三十三條及ヒ檢事ニ關スル規定ハ總テノ準禁治産者ニ之ヲ適用セス

準禁治産ヲ解除スル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

○政府ノ債務ニ對シ差押命令ヲ受クル場合ニ於ケル會計上ノ規程

明治二十四年六月  
勅令第五十五號

朕政府ノ債務ニ對シ差押命令ヲ受クル場合ニ於ケル會計上ノ規程ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 第三債務者トシテ政府ノ仕拂フヘキ金額ニ對スル差押命令ハ仕拂命令官ニ宛テ之ヲ發スルモノトス

第二條 仕拂命令官ハ一應ノ負債金額ニ對シ差押命令ヲ受クル場合ニハ仕拂命令又ハ仕拂請求書ニ差押債權者ノ氏名ヲ加記シ國庫ヲシテ差押債權者ニ對シ仕拂ヲ爲サシムルノ手續ヲナスヘシ

第三條 仕拂命令官ハ負債額ノ一部分ニ對シ差押命令ヲ受クル場合ニハ仕拂命令又ハ仕拂請求書ヲ分割シ差押ヲ受タル金額ノ仕拂命令又ハ仕拂請求書ニ差押債權者ノ氏名ヲ加記シ國庫ヲシテ差押債權者ニ對シ仕拂ヲ爲サシムルノ手續ヲナスヘシ

第四條 繼續收入ノ差押命令ヲ受ル前仕拂命令官ニ於テ仕拂命令又ハ仕拂請求書ヲ發シタルトキハ其命令ハ次期以後ノ仕拂ニ對シテ其効ヲ失ハス

第五條 仕拂命令官既ニ通常仕拂命令又ハ仕拂請求書及集合仕拂命令又ハ集合仕拂請求書ヲ發シタル場合ニ於テハ會計主務官ニ向テ差押命令ヲ發スヘシ

仕拂命令官既ニ現金前渡ノ仕拂命令又ハ仕拂請求書ヲ發シタル場合ニ於テハ現金前渡ヲ受ケタル官吏ニ向テ差押命令ヲ發スヘシ但記名公債元利ニ對スル差押命令ハ公債元利ノ仕拂ヲ取扱フ銀行ニ向テ之ヲ發スヘシ

第六條 會計主務官ハ差押命令ヲ受ルトキハ差押金額ヲ差押債權者ニ仕拂フヘキ旨ヲ仕拂命令又ハ仕拂請求書ニ記入シ之ヲ差押債權者ニ交付スヘシ但債權ニ付配當要求ノ送達ヲ受タルトキハ仕拂命令又ハ仕拂請求書ノ金額ニ送付スヘシ

其差押金額仕拂命令又ハ仕拂請求書ノ金額ニ及ハサルトキハ差押ニ係ル金額ハ別ニ差押債權者ニ仕拂フヘキ旨ヲ仕拂命令又ハ仕拂請求書ニ記入シ之ヲ記名者ニ交付シ又ハ金庫ニ送付シ尙金庫ニ於テ差押金額ヲ受取ルヘキ證據ヲ差押債權者ニ交付スヘシ但債權ニ付配當要求ノ送達ヲ受ケタルトキハ本文ノ證據ヲ交付セス

第七條 會計主務官仕拂命令又ハ仕拂請求書ヲ記名者ニ交付シ又ハ金庫ニ送付シタル後差押命令ヲ受タルトキ未ダ金庫ニ於テ仕拂了セサル場合ニ於テハ金庫ノ仕拂ヲ停止シ其仕拂命令又ハ仕拂請求書ノ提出ヲ待テ更ニ前條ノ手續ヲナスヘシ

現行日本法令大全

第八條 差押債權者差押命令送達ノ通知ヲ受ルトキ緊急ノ場合ニ於テハ仕拂ヲ執行スヘキ金庫ニ向ヒ假リニ仕拂ノ停止ヲ求ムルコトヲ得

第九條 繼續收入ノ債權差押ノ場合ニ於テ關係官廳ヲ變更スルトキハ甲仕拂命令官ノ受タル差押命令ハ乙仕拂命令官ニ於テ之ヲ繼續スルモノトス

第十條 債權ニ付キ配當要求ノ送達ヲ受タル場合ニハ會計主務官ノ指定ニ依リ金庫ニ於テ債權額ヲ供託スヘシ但現金前渡ヲナシタル金額ノ債權ニ關スルトキハ現金前渡ヲ受タル官吏又ハ銀行ニ於テ債務額ヲ供託スヘシ

第十一條 民事訴訟法第六百七條ノ命令ニ依リ債務額ノ供託ヲ要スルトキハ前條ノ手續ニ準據スヘシ

第十二條 假差押命令ノ場合ニ於テハ本規則ヲ準用ス

○政府ノ債務ニ對シ差押命令ヲ受クル場合ニ於ケル會計上ノ規程

明治二十四年六月  
勅令第五十五號

第三條 仕拂命令官ニ於テ仕拂命令又ハ仕拂請求書ヲ發シタル後差押命令ヲ受タルトキハ其發行濟ノ旨ヲ當該執行裁判所ニ通知スヘシ

第四條 明治二十四年勅令第五十五號第五條第二項ニ依リ現金前渡ヲ受タル官吏又ハ記名公債元利ノ仕拂ヲ取扱フ銀行ニ於テ差押命令ヲ受タルトキハ差押債權者ヨリ適宜ノ領收證書(公債元利ノ場合ニ於テハ公債證書又ハ利札トモ)ヲ徵シ其差押金額ヲ仕拂フヘシ但債權ニ付配當要求ノ送達ヲ受タルトキハ其差押金額ヲ供託シ其旨ヲ當該執行裁判所ニ通知スヘシ

前項ノ場合ニ於テ民事訴訟法第六百二條ノ通知ヲ受タルトキハ差押債權者ノ要求額ヲ差押債權者ニ仕拂ヒ又ハ供託シ其超過額ハ政府ノ債權者ヨリ民事訴訟法第六百二條ノ通知書ヲ示シ請求シタルトキ適宜ノ領收證書ヲ徵シ之ヲ仕拂フヘシ

第五條 明治二十四年勅令第五十五號第六條ニ依リ差押金額ヲ差押債權者ニ仕拂フヘキ旨ヲ仕拂命令又ハ仕拂請求書ニ記入セントスルトキハ其裏面ニ「表面ノ金額(又ハ内何程)差押債權者何之誰ニ仕拂フヘシ」ト記入スヘシ但集合仕拂命令又ハ集合仕拂請求書ニ係ルトキハ右ノ外債主ノ金額氏名表ニ當該債主氏名ノ上ニ其旨ヲ記入スヘシ

第六條 明治二十四年勅令第五十五號第六條ニ依リ差押債權者ニ交付スヘキ證據ハ書式第一號ニ依ルヘシ

第七條 前條ノ證據ヲ持參シ仕拂ヲ請求スルモノアルトキハ金庫ハ仕拂命令又ハ仕拂請求書ニ對照シ差押債權者ヲシテ該證據ニ書式第一號ノ如ク領收ノ旨ヲ記入セシメタル上之

現行日本法令大全

ト引換ニ仕拂サナスヘシ

第八條 明治二十四年勅令第五十五號第六條一項及二項但書ノ場合ニ於テ會計主務官ハ書式第二號ノ供託通知書ヲ金庫ニ送付スヘシ

第九條 金庫ニ於テ前條ノ通知書ヲ受タルトキハ仕拂命令又ハ仕拂請求書ニ對照シ其金額ヲ拂出シ供託ノ手續ヲナシ其旨ヲ會計主務官ニ通知スヘシ

會計主務官ハ前項ノ通知ニ依リ其旨ヲ當該執行裁判所ニ通知スヘシ

第十條 明治二十四年勅令第五十五號第七條ニ依リ會計主務官ニ於テ金庫ノ仕拂停止セントスルトキハ書式第三號ノ仕拂停止通知書ヲ金庫ニ送付スヘシ

金庫ニ於テ前項ノ通知書ヲ受タルトキ其既ニ仕拂済ナルトキハ通知書ヲ返付シ又仕拂未済ナルトキハ書式第四號ノ承諾書ヲ會計主務官ニ送付スヘシ

金庫ハ本條ニ依リ仕拂停止ノ承諾書ヲ會計主務官ニ送付シタルトキハ會計主務官ヨリ仕拂停止解除ノ通知ヲ受ルニアラザンハ仕拂サナスヘカラス

第十一條 明治二十四年勅令第五十五號第八條ニ依リ差押債權者ニ於テ仕拂ノ停止ヲ金庫ニ請求セントスルトキハ差押命令送達通知書ヲ添ヘ書式第五號ノ仕拂停止請求書ヲ金庫ニ送付スヘシ

金庫ニ於テ前項ノ請求書ヲ受タルトキ其既ニ仕拂済ナルトキハ請求書ヲ返付シ又仕拂未済ナルトキハ書式第六號ノ承諾書ヲ差押債權者ニ交付スヘシ但差押命令送達通知書ハ同時ニ之ヲ返付スルモノトス

金庫ハ本條ニ依リ仕拂停止ノ承諾書ヲ差押債權者ニ交付シタルトキハ會計主務官又ハ差押債權者ヨリ仕拂停止解除ノ通知ヲ受ルニアラザンハ仕拂サナスヘカラス

第十二條 明治二十四年勅令第五十五號第七條ノ場合ニ於テ政府ノ債權者ハ速ニ仕拂命令又ハ仕拂請求書ヲ會計主務官ニ提出シ該勅令第六條ノ手續ヲ受クヘシ

第十三條 明治二十四年勅令第五十五號第九條ノ場合ニ於テハ甲仕拂命令ヨリ即時ニ其旨ヲ乙仕拂命令官ニ通知シ差押命令ノ引繼ヲナスヘシ

(書式第六號)

○民事訴訟法第十四條ニ因リ國ヲ代表スルニ付規定改正 明治二十五年一月勅令第六號

朕民事訴訟法第十四條ニ依リ國ヲ代表スルニ付テノ規定ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 各省北海道廳及府縣廳ハ其所管又ハ監督スル事務ニ係ル民事訴訟ニ付國ヲ代表ス

第二條 各省大臣ハ省令ヲ以テ所屬特別地方機關中其司掌事務ニ係ル民事訴訟ニ付國ヲ代表スルモノヲ定ムルコトヲ得

第三條 前二條ノ場合ニ於テ國ヲ代表シ訴訟ヲ爲スモノハ各官廳ノ長官又ハ長官ノ指定シタル所屬官吏トス

○各師團監督部屯田兵監督部ハ民事訴訟ニ付國ヲ代表ス 明治二十五年三月陸軍省令第二號

明治二十五年一月勅令第六號第二條ニ據リ各師團監督部屯田兵監督部ハ左ノ區別ニ從ヒ總テノ民事訴訟ニ付國ヲ代表ス

現行日本法令大全

近衛軍隊並近衛師團司令部參謀本部及其管轄ノ官衛監軍部及其管轄ノ官衛砲兵會議工兵會議憲兵司令部陸軍學舍經理學校軍醫學校中央軍馬育成所ニ關スル事項

近衛師團監督部

第一師管內軍隊及陸軍各官衛 近衛師團監督部ニ屬スル陸軍各官衛及陸軍各官衛中央司令部計部被服廠被服工廠等會社ニ關スル事項

第一師團監督部

第二師管內軍隊及陸軍各官衛ニ關スル事項

第二師團監督部

第三師管內軍隊及陸軍各官衛ニ關スル事項

第三師團監督部

第四師管內軍隊及陸軍各官衛ニ關スル事項

第四師團監督部

第五師管內軍隊及陸軍各官衛ニ關スル事項

第五師團監督部

第六師管內軍隊及陸軍各官衛ニ關スル事項

第六師團監督部

屯田兵隊及北海道ニ在ル陸軍各官衛ニ關スル事項

屯田兵監督部

○民事訴訟ニ付國ヲ代表スル廳名

明治二十五年一月 選任省令第三號

明治二十五年一月勅令第六號第二條ニ據リ各一等郵便電信局一等郵便局及電信建築署電話交換局ハ其司掌事務ニ係ル民事訴訟ニ付國ヲ代表ス

○造幣局各稅關ハ司法事務民事訴訟ニ付國ヲ代表ス 明治二十五年二月大藏省令第二號

造幣局及各稅關ハ其司掌事務ニ係ル民事訴訟ニ付國ヲ代表ス

○大林區署司掌官林ニ關スル民事訴訟ニ付國ヲ代表ス 明治二十五年二月農商務省令第二號

大林區署ハ官林ニ關スル事件ニシテ其司掌事務ニ係ル民事訴訟ニ付國ヲ代表ス

○民事訴訟ニ付國ヲ代表スル權利委任方 明治二十五年三月海軍省令第一號

各鎮守府造船部兵器部主計部建築部及新原探炭所ハ其司掌事務ニ係ル民事訴訟ニ付國ヲ代表ス

○鐵道廳土木監督署衛生試驗所民事訴訟ニ付國ヲ代表ス 明治二十五年四月內務省令第四號

鐵道廳土木監督署衛生試驗所ハ各其司掌事務ニ係ル民事訴訟ニ付國ヲ代表ス

但明治二十四年七月內務省令第九號同年十一月內務省令第二十二號ハ廢止ス

○檢事局民事訴訟ニ付國ヲ代表ス 明治二十五年四月司法省令第五號

司法官廳ヨリ起スヘキ民事ノ訴訟ニ於テハ明治二十五年勅令第六號第二條ニ依リ訴訟ヲ受クヘキ裁判所ノ檢事局ヲシテ國

ヲ代表セシム

○鑛山監督署民事訴訟ニ付國ヲ代表ス

明治二十五年四月  
農商務省令第八號

鑛山監督署ハ其司掌事務ニ係ル民事訴訟ニ付國ヲ代表ス

○臨時橫濱築港局民事訴訟ニ付國ヲ代表ス

明治二十五年十月  
內務省令第六號

臨時橫濱築港局ハ其司掌事務ニ係ル民事訴訟ニ付國ヲ代表ス  
本令ハ明治二十五年十月二十五日ヨリ施行ス

○負債者失踪後ノ訴訟成例

明治八年一月  
第六號布告

民法裁判上負債者失踪後ノ訴訟ハ失踪後三十六ヶ月ノ時間ハ探上ケサル成例ニ有之候處本年三月一日ヨリ以後ハ左ノ通相改メ候條此旨布告候事

第一條 債主定期期限未滿内ニ負債者ノ失踪ヲ知ル時ハ定約滿期ニ至リ直ニ裁判所ヘ訴出ツヘキ事

第二條 債主未ダ負債者ノ失踪ヲ知ラス定約滿期又ハ出訴期限將ニ盡ストスルヲ以テ裁判所ヘ出訴シ裁判所ノ與書ヲ以テ負債者ニ掛合始テ其失踪ノ事ヲ知ル時ハ右與書訴狀ヲ再呈シ其旨届出ツ可キ事

第三條 前條々ノ場合裁判所ニ於テハ一應訴狀探上ケ直ニ失踪者所管ノ戶長ヘ申付失踪ノ年月日ヲ訓明シタル上債主差出シタル證書ニ負債者何年何月何日家出ノ末行衛相分ラナルニ付追テ本人見當ルカ又ハ三十六ヶ月ノ滿月後跡相續ヲ爲ス可キ者ニ掛リ此基證書ヲ以テ再訴致ス可キ旨ヲ記載

シ訴狀下戻ス可キ事

第四條 債主ニ於テ前條ノ基證書ヲ受取置キタル上ハ本人見當リ又ハ搜索三十六ヶ月ノ時限ハ明治六年十一月第三百六十二號布告出訴期限ノ限内ニハ加算致ササル事

○家資分散法

明治二十三年八月  
法律第六十九號

家資分散法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

家資分散法

第一條 民事訴訟法ノ強制執行處分ニ因リ義務ヲ辨濟スル資力ナキ債務者ニ對シテハ管轄裁判所ハ職權ニ因リ又ハ申立ニ因リ決定ヲ以テ家資分散者タルノ宣告ヲ爲スヘシ右ノ決定ハ口頭辯論ヲ要セスシテ之ヲ爲スコトヲ得

第二條 前條ノ申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第三條 第一條ノ宣告ハ裁判所及市町村ノ揭示場ニ揭示シテ之ヲ公告ス可シ

第四條 家資分散者ハ其宣告ヲ受ケタル日ヨリ選舉權及被選舉權ヲ失フ

第五條 商法及本法施行以後ニ於テ從前ノ法律中身代限處分ヲ受ケタル者ニ對シ公權ノ喪失ヲ定メタル條項ハ破産又ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケタル者ニ對シ効力ヲ有ス

○財產委乘法

明治二十三年十月  
法律第九十四號

財產委乘法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

財產委乘法

第一條 無資力ナル債務者ニシテ惡意ノ證ナキ者ハ動産又ハ不動産ノ差押ヲ受ケタルモ競賣ニ至ルマテハ無資力ノ原因タル不幸ノ事情又ハ管理ノ過失ヲ陳述シテ債權者ニ對シ自己ノ財產ノ委乘ヲ其住所所ノ裁判所ニ請求スルコトヲ得

債務者ハ總債權者ノ氏名及分限ト各債權者ノ債權ノ元本及ヒ利息トヲ右請求ニ附記スルコトヲ要ス

第二條 財產ノ委乘ハ協議約ニ關シ商法ニ規定シタル方式及ヒ條件ニ從ヒテ債權者ノ承諾ヲ受ケルコトヲ要ス

第三條 債權者ノ承諾シタル財產ノ委乘ハ裁判所ノ認可ヲ受ケルコトヲ要ス

此他財產ノ委乘ニ付テハ家資分散ニ關スル法律ノ適用ヲ妨ケス

○陸海軍軍法會議私訴裁判強制執行法

明治二十三年八月  
法律第六十七號

陸海軍軍法會議私訴裁判強制執行法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

陸海軍軍法會議私訴裁判強制執行法

第一條 軍法會議私訴裁判ノ強制執行ハ兵營艦船若クハ軍事用廳舎ニ於テ行フ場合ヲ除ク外軍法會議ノ囑託ニ因リ通常

裁判所ニ行フ

第二條 軍法會議ハ軍法會議私訴裁判ノ強制執行ニ關シテハ職權ニ因リ若クハ原告人又ハ被告人ノ申立ニ因リ補充及取消ノ命令ヲ爲スコトヲ得

第三條 軍法會議私訴裁判ノ強制執行ハ判決言渡書ノ正本ニ基キ之ヲ爲ス

第四條 軍法會議ハ必要ト認ムル場合ニ於テ假執行假差押假處分ノ命令ヲ爲ス

假執行ヲ命シタルトキハ其旨ヲ言渡書ノ正本ニ附記ス

本條ノ場合ニ於テハ保證又ハ供託ヲ命スルコトアルヘシ

第五條 第一條ニ依リ通常裁判所ニ於テ強制執行ヲ爲ストキハ民事訴訟法ノ規定ニ從フ

○非訟事件手續法

明治二十三年十月  
法律第九十五號

非訟事件手續法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

非訟事件手續法

第一章 認可及ヒ許可ノ申請手續

第一條 民法ノ規定ニ從ヒ區裁判所ノ認可又ハ許可ヲ求ムル申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第二條 前條ノ申請ニ付テハ裁判所ハ事情ニ從ヒ利害關係人ノ出頭又ハ當事者ノ自身出頭ヲ命シ公開セサル法廷ニ於テ審訊スルコトヲ得

現行日本法令大全

第三條 申請ニ付テノ決定ニ對シテハ民事訴訟法ノ規定ニ從  
ヒ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二章 失踪事件ニ關スル請求手續

第四條 失踪ノ推定、宣言又ハ財產占有其他ノ請求ハ書面又ハ  
口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

請求ニハ其理由トスル事實ヲ表示シ且證據書類アルトキハ  
之ヲ添付ス可シ

第五條 前條各種ノ請求ハ之ヲ併合スルコトヲ得

第六條 失踪ノ推定又ハ宣言ノ請求ニ付テハ前二條ノ外尙ホ  
左ノ手續ニ從フ

裁判所ハ請求ニ表示シタル事實ヲ調査シ職權ヲ以テ失踪ノ  
推定又ハ宣言ヲ爲スヘキヤ否ヤ決定スル爲メ證人訊問ヲ命  
ス可シ

證人ノ訊問及ヒ宣誓ニ付テハ忌避ノ規則ヲ除ク外民事訴訟  
法第二編第一章第六節ノ規定ヲ適用ス

第七條 檢事ハ證人訊問ニ立會ヒ決定前ニ其意見ヲ陳述ス可  
シ

第八條 失踪ノ推定又ハ宣言ヲ言渡ス決定ハ裁判所ノ揭示板  
ニ揭示シ且官報又ハ公報ニ掲載シテ之ヲ公示ス可シ

此決定ニ對シテハ請求者又ハ檢事ヨリ民事訴訟法ノ規定ニ  
從ヒ即時抗告ヲ爲スコトヲ得失踪者ノ定置キタル總理代理  
人モ亦同シ

第九條 失踪事件ノ請求ニ關スル費用ハ其推定又ハ宣言ヲ言  
渡シタルトキハ本人ノ財產ヲ以テ之ヲ支辨シ若シ之ヲ言渡  
ササルトキハ請求者之ヲ負擔ス但檢事請求ヲ爲シタルトキ  
ハ本人ノ負擔トス

第三章 相続ノ限定受諾ニ關スル手續

第十條 限定受諾者ハ適法ノ期間内ニ相続財產拂盡ノ計算ヲ  
完了シ其計算書ヲ相続地ノ區裁判所ニ差出ス可シ

第十一條 利害關係人ハ自己ノ費用ヲ以テ區裁判所ニ計算書  
ノ閲覧及ヒ其原本ノ下付ヲ求ムルコトヲ得

第十二條 法律上又ハ裁判上相続財產ヲ管理スル者ハ限定受  
諾者ト同シク計算完了ノ責ニ任ス

第四章 國ニ屬スル相続財產領收ノ手續

第十三條 相続人アラサル財產アルトキハ相続地ノ地方行政  
官廳ハ財產所在地ノ區裁判所ニ其引渡ヲ請求ス可シ

第十四條 財產引渡ノ請求ヲ受ケタル裁判所ハ事實ヲ調査シ  
其請求ヲ公示ス可シ

第十五條 公示ハ左ノ諸件ヲ具備シ請求ヲ受ケタル區裁判所  
ノ揭示板ニ揭示シ且官報又ハ公報ニ掲載シテ之ヲ爲スコシ

第一 被相続人ノ氏名、職業、住所、居所及ヒ死亡ノ年月日

第二 財產引渡ノ請求ノ要領

第十六條 民法ノ規定ニ從ヒ相続權ヲ有スル者ハ公示ノ日ヨ  
リ六箇月内ニ行政官廳ノ請求ニ對シ其請求ヲ受ケタル裁判  
所ニ異議ヲ申立ツルコトヲ得

第十七條 前條ノ期間内ニ異議ノ申立アラズ又ハ其申立ヲ不  
當ト爲ス裁判確定シタルトキハ裁判所ハ民法財產取得編第  
三百四十六條ノ規定ニ從ヒ之ヲ保存スル供託所ノ金額領收證  
ヲ請求者タル行政官廳ニ交付ス可シ

第五章 財產ノ封印及ヒ目錄調製ノ手續

第十八條 財產ノ封印ハ利害關係人又ハ檢事ノ請求ニ因リ其  
財產所在地ノ區裁判所判事之ヲ爲ス

現行日本法令大全

封印ニハ官印ヲ用ユ可シ

第十九條 封印ヲ爲スコキ財產カ邊隔ノ地ニ在ルトキハ區裁  
判所判事ハ市町村長ニ囑託シテ封印ヲ爲サシムルコトヲ得

封印ノ除去及ヒ財產目錄ノ調製ニ付テモ亦同シ

囑託ヲ受ケタル市町村長ニ付テモ下數條ノ規定ヲ準用ス

第二十條 封印ハ證人二人立會ノ上之ヲ爲スコシ

封印ヲ請求シタル者ハ其封印ニ立會フコトヲ得

第二十一條 封印ヲ爲シタルトキハ直チニ調査ヲ作リ立會人  
之ニ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ  
區裁判所判事其事由ヲ附記ス可シ

第二十二條 調査ニハ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 封印ヲ請求シタル者ノ氏名、職業及ヒ住所

第二 封印ノ理由

第三 封印ヲ爲シタル場所及ヒ物

第二十三條 日用品其他封印ヲ附セサル物アルトキハ之ヲ調  
書ニ略記ス可シ

第二十四條 封印ヲ附シタル物ニ鎖鑰アルトキハ之ヲ附鎖シ  
テ封印除去ニ至ルマテ區裁判所書記課其鑰ヲ預ル可シ

第二十五條 封印ヲ終リタルトキハ其財產ノ保管人ヲ命ス可  
シ但保管人ハ成年者タルコトヲ要ス

第二十六條 區裁判所判事封印ノ請求ヲ受ケタルトキハ速ニ  
之ヲ爲スコシ若シ後ノタルトキハ其理由ヲ調査ニ記載スル  
コトヲ要ス

第二十七條 封印ノ調査ハ判事ト同伴シタル書記之ヲ一通ニ  
作リ其一通ハ區裁判所ノ書記課ニ保存シ他ノ一通ハ封印請  
求者又ハ保管人ニ交付シ受領證ヲ取置ク可シ

第二十八條 何人ニ限ラズ區裁判所判事ヨリ封印ノ立會ヲ求  
メラントル者正當ノ理由ナクシテ之ヲ拒ムトキハ刑法第百  
七十九條ニ掲ケタル刑ニ處ス

第二十九條 封印ノ除去ヲ請求スル權利ヲ有スル者左ノ如シ

第一 封印ヲ請求スル權利ヲ有スル者

第二 財產ノ管理人

第三十條 封印ノ除去ハ豫メ其日時ヲ定メ既ニ知ラタル利  
害關係人及ヒ財產ノ管理人ニ之ヲ通知スヘシ

通知ヲ受ケテ封印除去ノ異議ヲ申立ラス且除去ニ立會ハサ  
ル者ハ其除去ヲ承諾シタルモノト看做ス

第三十一條 封印ハ一箇ノ物ニ付キ之ヲ除去シ其目錄ヲ作リ  
了リタル後ニ非サレハ次ノ物ニ付キ之ヲ除去スルコトヲ得  
ス

第三十二條 封印ノ除去ハ封印ヲ爲ス時ト同シク證人立會ノ  
上之ヲ爲スコシ

第三十三條 左ニ記載シタル者ハ封印ノ除去ニ付キ異議ヲ申  
立ルコトヲ得

第一 利害關係人

第二 財產ノ管理人

第三 檢事

第三十四條 封印ヲ除去シタルトキハ第二十一條ノ規定ニ從  
ヒ直チニ其調査ヲ作ルヘシ

第三十五條 調査ニハ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 封印除去ノ異議アラサリシコト又異議アリタルトキ  
ハ其異議申立ノ却下セラレ又ハ之ヲ取下ケタルコト

第二 封印ヲ爲シタルヨリ之ヲ除去スルニ至ルマテ其封印



ニ何等ノ變更ヲ來サザリシコト若シ變更ヲ來セシト  
 \*ハ其事情  
 第三十六條 封印ヲ爲シ及ヒ之ヲ除去スル費用ハ其財産ノ負  
 擔トス  
 第三十七條 封印除去ノ異議ハ其封印ヲ爲シタル區裁判所ニ  
 之ヲ申立ツ可シ  
 異議申立ニハ申立人ノ關係及ヒ申立ノ理由ヲ包含ス可シ  
 第三十八條 異議ヲ申立タルトキハ其申立ノ却下セラレ又  
 ハ之ヲ取下クタル後ニ非ザルハ封印ノ除去ヲ爲スコトヲ得  
 ス  
 第三十九條 封印除去ノ異議ハ其除去ニ著手シタル後ハ之ヲ  
 爲スコトヲ得ス  
 第四十條 異議申立ノ裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコト  
 ヲ得ス  
 第四十一條 財産目録ハ財産ニ封印アルトキハ其除去ノ際公  
 證人ヲシテ之ヲ作ラシム可シ  
 第四十二條 財産目録ハ左ノ各人ヲ適法ニ呼出シ區裁判所判  
 事ノ前ニ於テ之ヲ作ル可シ  
 第一 知レタル利害關係人  
 第三 財産ノ管理人  
 第三 檢事  
 第四十三條 目録ニハ左ノ諸件ヲ具備スヘシ  
 第一 適法ニ呼出サレタル人  
 第二 出席シタル者及出席シタル者  
 第三 各不動産ノ形狀  
 第四 不動産ノ種類及ヒ數量

第五 證書類  
 第四十四條 財産目録ニハ立會ヒタル各人署名捺印ス可シ  
 第四十五條 目録ノ調製ニ關スル費用ハ其財産ノ負擔トス  
 ○裁判上代位法 明治二十三年十月  
 法律第九十三號  
 朕裁判上代位法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二  
 十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス  
 裁判上代位法  
 第一條 民法財産編第三百三十九條ノ規定ニ從ヒテ債務者ニ  
 屬スル訴權ヲ行ハントスル債權者ハ先ツ債務者ニ其行使ヲ  
 合式ニ催告スルコトヲ要ス  
 債務者右催告ヲ受ケタル後ハ權利ヲ讓渡スコトヲ得ス  
 第二條 債務者前條ノ催告ヨリ七日内ニ被告ト爲ル可キ第三  
 者ニ對シテ訴ヲ提起セザルトキハ債權者ハ債務者ノ住所地  
 ノ裁判所ニ代位ノ申請ヲ爲スコトヲ得但催告書ノ謄本ヲ差出  
 ス可シ  
 第三條 代位ノ申請ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス  
 第一 債權者、債務者、被告ト爲ル可キ第三者及ヒ裁判所ノ  
 表示  
 第二 代位申請ノ原因タル債權ノ表示  
 第三 訴訟物ノ表示  
 第四條 裁判所ハ申請ニ付キ債務者ヲ審訊セスシテ決定ヲ爲  
 スコトヲ得  
 右申請ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

○辨濟提供規則 明治二十三年十月  
 勅令第二百十七號  
 朕辨濟提供規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム本規則ハ明治二  
 十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

辨濟提供規則  
 第一條 民法財産編第四百七十四條ニ依ル辨濟ノ提供ハ執  
 達吏ヲシテ之ヲ爲シシム可シ  
 第二條 提供ヲ爲スノ委任ヲ受ケタル執達吏ハ調書ヲ作リ其  
 調書ニハ提供物金銀ナルトキハ其種類員數ヲ記シ特定物ナ  
 ルトキハ他物ニ換ユルコト能ハザラシムル爲メ其詳細ヲ記  
 シ定量物ナルトキハ其種類品質數量ヲ記ス可シ  
 第三條 右ノ調書ニ付テハ民事訴訟法第五百四十條ノ規定ヲ  
 準用ス  
 第四條 執達吏提供ノ委任ヲ受ケテ之ヲ爲シタルトキハ手數  
 料金二十錢其他執達吏手數料規則ニ從ヒ立替金ヲ受クルモ  
 ノトス  
 ○增價競賣法 明治二十三年十月  
 法律第九十二號  
 朕增價競賣法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十  
 六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス  
 增價競賣法  
 第一條 民法債權擔保編第二百六十五條ニ從ヒテ抵當財産ノ  
 增價競賣ヲ要求スル債權者ハ第三所持者及ヒ前所有者ニ競  
 賣ノ要求書ヲ送達シタルヨリ三日内ニ抵當財産所在地ノ區  
 裁判所ニ競賣ノ申立ヲ爲シ且保證人又ハ擔保ノ認許ヲ求ム

可シ  
 前項ノ手續ヲ爲サ、ルトキハ競賣ノ要求ハ當然無効ナリトス  
 第二條 競賣ノ申立ニハ民事訴訟法第六百四十二條第一號及  
 ヒ第二號ニ掲ケル諸件ノ外第三所持者及ヒ前所有者ノ表示、  
 擔保ノ表示、第三所持者ノ提供シタル金額及ヒ要求者ノ定メ  
 タル増額ヲ具備シ且民事訴訟法第六百四十三條第二號乃至  
 第五號ノ證書ヲ添付スルコトヲ要ス  
 第三條 裁判所ハ期日ヲ定メテ要求者第三所持者及ヒ前所有  
 者ヲ呼出シ擔保ノ許否ニ付テノ決定ヲ爲ス可シ  
 否認ノ決定アリタルトキハ競賣ノ要求ハ當然無効ナリトス  
 但競賣ノ要求ヲ爲ス權利アル他ノ債權者カ要求ニ參加スル  
 ノ申立ヲ爲シ又ハ期間ニ自ラ要求ヲ爲シタルトキハ右決定  
 ヲ知リタルヨリ三日内ニ更ニ第一條ノ手續ヲ爲スコトヲ妨  
 ケス  
 第四條 左ニ掲ケル者ヲ增價競賣手續ニ於テノ利害關係人ト  
 ス  
 第一 競賣要求者  
 第二 債權者  
 第三 第三所持者  
 第四 抵當債權者  
 第五 抵當財産ノ前所有者カ債務者ニ非ラザルトキハ其前  
 所有者  
 第五條 裁判所ハ要求者ノ供シタル擔保十分ナリトスルト  
 キハ競賣手續ノ開始決定ヲ爲シ同時ニ競賣期日及ヒ競賣期  
 日ヲ定メテ公告ス可シ  
 第六條 競賣期日ノ公告ニハ民事訴訟法第六百五十八條第一

號乃至第三號第五號第七號乃至第十號ニ掲ケル諸件ノ外増價競賣ノ要求ニヨリ競賣ヲ爲ス旨及ヒ最底競賣價額トシテ提供價額ニ附シタル増額ヲ具備スルコトヲ要ス

此他競賣及ヒ競落ノ手續ニ付テハ民事訴訟法第六百五十九條乃至第六百六十一條第六百六十三條乃至第六百六十九條第六百七十一條第六百七十二條第二號及ヒ第四號乃至第八號第六百七十三條第六百七十四條第六百七十六條乃至第六百八十七條ノ規定ヲ準用ス

第七條 競賣期日ニ於テ許ス可キ競買價額ノ申出ナキトキニハ裁判所ハ要求者ヲ競落人ナリト言渡ス可シ

第八條 競落人ナリト言渡サレタル者カ要求者ナルト否トテ問ハス競落代價ノ全額支拂ニ至ルマテハ要求者ノ供シタル擔保ノ負擔ヲ免カル、コト無シ

第九條 裁判所ハ要求者ノ申立アルトキハ競賣ニ換ヘテ入札辦ヲ命ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ民事訴訟法第七百二條但書及ヒ第七百三條乃至第七百五條ノ規定ヲ適用ス

第十條 増價競賣ニ依ル競落ニ對シテハ更ニ増價競賣ノ要求ヲ爲スコトヲ許サズ

第二款 訴訟費用

○民事訴訟費用法

明治二十三年八月 法律第六十四號

朕民事訴訟費用法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

**民事訴訟費用法**

第一條 民事訴訟法ノ規定ニ於ケル訴訟費用ハ以下數條ノ規定ニ從ヒ之ヲ算定ス

第二條 訴訟其他總テ書類ノ書記料ハ半枚十二行二十字詰ニ付キ金二錢五厘トス但半枚ニ滿タサルモノモ亦同シ

圖面ハ一葉ニ付金十錢トス但別ニ測量ヲ要シタルトキハ其測量費ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第三條 翻譯料ハ半枚十二行二十字詰ニ付キ金五十錢トス但半枚ニ滿タサルモノモ亦同シ

第四條 民事訴訟用印紙法ニ從ヒ貼用シタル印紙ノ費額ハ其代價ニ依ル

第五條 執達吏ノ手数料及ヒ立替金ハ執達吏手数料規則ノ規定ニ從フ

第六條 郵便料、電信料及ヒ運送料ハ其實費ニ依ル

第七條 官報、公報及ヒ新聞紙ヲ以テ公告シタル公告料ハ各其定價ニ依ル

第八條 民事訴訟法第二百二十七條ノ規定ニ從ヒ辯護士ノ附添ヲ命シタルトキハ其報酬ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第九條 當事者ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢トス但滞在費ヲ給スル場合ニ於テハ此日當ヲ二十五錢トス

第十條 證人ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢トス但滞在費ヲ給スル場合ニ於テハ此日當ヲ給セス

第十一條 鑑定人及ヒ通事ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢乃至五圓ノ範圍内ニ於テ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

鑑定ヲ爲スニ付キ別ニ支出シタル費用ハ其實費ニ依ル

第十二條 當事者ノ滞在費ハ滿八里以外ノ地ヨリ來リ滞在スルトキハ一日金二十五錢トシ證人、鑑定人及ヒ通事ノ滞在費ハ一日金五十錢トス

第十三條 當事者、證人、鑑定人及ヒ通事ノ旅費ハ海陸滿一里毎ニ付キ金十錢トス

通路兩線以上アルトキハ最近ノ通路ヲ以テ旅費ヲ算定ス

外國ニ在ル當事者ノ旅費ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第十四條 判事及ヒ裁判所書記檢證ノ爲メ實地臨檢ヲ爲スニ付テノ旅費及ヒ滞在費ハ證人ニ準ス

第十五條 本法ニ定メサル必要ノ費用ハ其實費ニ依ル

第十六條 強制執行及ヒ非訟事件ニ關ル費用ハ執達吏手数料規則ニ定メタルモノヲ除ク外前數條ノ規定ヲ準用シテ之ヲ算定ス

強制執行又ハ非訟事件ニ關シテ保管人若シハ管理人ヲ任命シタルトキハ其費用ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

○民事訴訟用印紙法

明治二十三年八月 法律第六十五號

朕民事訴訟用印紙法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

民事訴訟用印紙法

第一條 民事訴訟ノ書類ニハ以下數條ノ規定ニ從ヒ其正本ニ印紙ヲ貼用ス可シ但裁判所書記ニ口述シテ調書ヲ作ラシメタルトキハ其調書ニ印紙ヲ貼用ス可シ

第二條 財產權上ノ請求ニ係ル第一審ノ訴狀ニハ訴訟物ノ價額ニ應ジ左ノ區別ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ

訴訟物ノ價額金五圓マテ	二十錢
同 十圓マテ	三十錢
同 二十圓マテ	六十錢
同 五十圓マテ	一圓五十錢
同 七十五圓マテ	二圓二十錢
同 百圓マテ	三圓
同 二百五十圓マテ	六圓五十錢
同 五百圓マテ	十圓
同 七百五十圓マテ	十三圓
同 千圓マテ	十五圓
同 二千五百圓マテ	二十四圓
同 五千圓マテ	二十五圓
同 五千圓以上ハ千圓ニ達スル毎ニ二圓ヲ加フ	

訴訟物ノ價額ヲ算定スルニハ民事訴訟法第三條乃至第六條ノ規定ニ從フ

第三條 財產權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ付テハ其訴訟物ノ價額百圓ト看做シ印紙ヲ貼用ス可シ

財產權上ノ請求ニ非サル訴訟ト其訴訟ニ由テ生スル財產權上ノ訴訟ト併合スルトキハ其多額ナル一方ノ訴訟物ノ價額ニ依リ印紙ヲ貼用ス可シ

第四條 本訴ト反訴ト其目的カ同一ノ訴訟物ナルトキハ反訴ノ訴狀ニ印紙ヲ貼用スルヲ要セス

第五條 控訴狀ニハ第二條ノ規定ニ從ヒ其半額上告狀ニハ其全額ノ印紙ヲ加貼ス可シ

第六條 左ニ掲クル書類ニハ五十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第一 抗告

第二 故障

第三 證據調ノ申立

第四 假差押及ヒ假處分ノ申請

第五 判決ノ送達ヲシテコトヲ求ムル申立

第六 執行力アル正本ヲ求ムル申立但此正本ノ數通ヲ求ムルトキハ其一通毎ニ五十錢ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用ス可シ

第七條 和解及ヒ督促手續ニ付キ民事訴訟法第三百八十一條第三項及ヒ第三百九十條ノ規定ニ依リ訴カ區裁判所ニ繫屬スルトキハ第二條第三條ノ規定ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ

第八條 再審ヲ求ムルノ訴訟ニハ其訴ヲ爲ス可キ裁判所ノ審級ニ依リ相當ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第九條 原狀回復ノ申立ニハ其書面ヲ差出ス可キ裁判所ノ審級ニ依リ相當ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第十條 答辯書其他前數條ニ掲ケサル申立及ヒ申請ニハ二十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第十一條 民事訴訟法第九十七條第一號ノ場合ノ外此法律ニ從ヒ印紙ヲ貼用セサル民事訴訟ノ書類ハ其効ナキモノトス但印紙ヲ貼用セス又ハ貼用スルモ不足アルトキハ裁判所ハ相當印紙ヲ貼用セシメ之ヲ有効ナラシムルヲ得

第十二條 印紙ノ種類及ヒ貼用方ハ明治十七年第四號布達ニ依ル

第十三條 印紙ハ管轄廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣セシム其他ニ於テ賣買スルコトヲ許サズ

第十四條 官許賣捌所外ニ於テ印紙ヲ販賣シタル者ハ二十四以上二百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス其情ヲ知テ之ヲ買取シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス

第十五條 前條ノ規定ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ減輕、再犯加重及ヒ數罪俱發ノ例ヲ用非ス

第十六條 第六條第十條乃至第十二條ノ規定ハ非訟事件ニ之ヲ準用ス

○訴訟書類郵便送達手数料  
明治二十四年六月  
勅令第五十四號

民事訴訟法第三十六條ニ依リ郵便ヲ以テ訴訟書類ノ送達ヲ爲ストキハ郵便稅留手續料ノ外送達手数料トシテ一通ニ付五錢ヲ納ムヘシ但其手数料ハ郵便切手ヲ以テ前納スルモノトス

○控訴上告手續  
明治十年二月  
布告第十九號

明治八年五月第九十一號布告大審院諸裁判所職制章程同年同第九十三號布告控訴上告手續別冊ノ通り改正候條此旨布告候事  
(大審院諸裁判所職制章程ハ略ス)  
(但巡回裁判規則判事職制通則ハ刪除候事)

控訴上告手續(二十三年七月十六日法律第五十號民事訴訟法施行條例ヲ以テ本條中大審院上告裁判所ト改メ該條ハ當分ノ内其効力ヲ存セリ)  
第十六條 上告者ハ其上告狀ニ添テ金拾圓ヲ上告裁判所ニ預

クヘシ若シ其金高ヲ預ケサルトキハ上告ヲ爲スコトヲ得ス

第一 若シ上告ヲ取上ケサルトキハ其預リ金ヲ沒入ス

第二 若シ上告ヲ取上ケ原裁判ヲ破毀シタル時ハ預リ金ヲ還付ス

第三 若シ上告ヲ取上ケ被告人ト對審シタルノ後之ヲ斥ケテ原裁判ヲ破毀セサル時ハ預リ金ヲ沒入シ又訴訟入費規則ニ照シテ被告人ノ費用ヲ償ハシム者ノ相手方ヲ云

○商事非訟事件印紙法  
明治二十三年八月  
法律第六十六號

商事非訟事件印紙法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

商事非訟事件印紙法

第一條 商法中登記ニ關ル場合ヲ除ク外非訟事件ニ付裁判所ノ命令其他ノ處分ヲ求ムル者ハ以下數條ノ手續ニ從ヒ其差出ス書類ニ民事訴訟用印紙ヲ貼用ス可シ但口述ヲ以テスル場合ニ於テハ其調書ニ印紙ヲ貼用ス可シ

第五條 第六條第七條ノ場合ニ於テハ管財人ヨリ差出ス計算書ニ印紙ヲ貼用ス可シ

第二條 左ニ掲クルモノニ付テハ五十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

一 抗告又ハ假差押ノ申立

二 債權者ヨリ爲ス破産宣告ノ申立

三 支拂猶豫ノ申立

第三條 左ニ掲クルモノニ付テハ二十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

一 抗告ニ對スル答辯

二 裁判所ノ命令其他ノ處分ノ申立ニシテ本法ニ於テ特

ニ規定セサル非訟事件ニ係ルモノ

第四條 破産手續ニ付テハ破産財團中ノ貸方金額ニ應ジ左ノ區別ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ但財團管理費用其他破産手續上ノ費用及ヒ財團ノ爲メニ負擔シタル債務並ニ別除ノ辨濟ニ供スル金額ハ貸方金額ヨリ之ヲ控除ス可キモノトス

財團ノ價額五圓マテ 四十錢

同 十圓マテ 六十錢

同 二十圓マテ 一圓二十錢

同 五十圓マテ 三圓

同 七十五圓マテ 四圓四十錢

同 百圓マテ 六圓

同 二百五十圓マテ 十三圓

同 五百圓マテ 二十圓

同 七百五十圓マテ 二十六圓

同 千圓マテ 三十圓

同 二千五百圓マテ 四十圓

同 五千圓マテ 五十圓

同 五千圓以上ハ千圓ニ達スル毎ニ四圓ヲ加フ

第五條 破産手續ニ付テハ財團ノ配當アル毎ニ其配當金額ノ割合ヲ以テ印紙價額ニ相當スル金額ヲ引去リ置キ終局計算ニ至リ配當金額高ノ割合ニ從ヒ相當印紙ヲ貼用ス可シ

第六條 協議契約ニ依リ手續ヲ止メタルトキハ第四條ニ掲ケタル印紙ノ半額ヲ貼用ス可シ

第七條 破産手續再施ノ場合ニ於テハ破産手續開始ニ於ケル場合ト同一ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第八條 本法ニ定ムル印紙代價ノ負擔ニ付テハ民事訴訟法第

一編第二章第五節ノ規定ヲ準用ス  
民事訴訟用印紙法ハ本法ノ規定ニ抵觸セサルモノニ限リ之ヲ準用ス

第四章 代官人規則

○代官人規則 明治十三年五月 司法省布達第一號

明治九年當省甲第壹號代官人規則左之通改正候條此旨布達候事  
但該規則ニ抵觸スル從前ノ布達ハ總テ廢止タル可シ

代官人規則

第一款 總則

- 第一條 代官人ハ法令ニ於テ代官ヲ許サレタル詞訟ニ付テ原告又ハ被告ノ委任ヲ受ケ其代官ヲ爲ス者トス
- 第二條 代官ノ業ヲ爲サント欲スル者ハ第四款ニ掲ケル所ノ手續ニ依リ定式ノ試驗ヲ經テ司法卿ノ免許ヲ受ケ可シ
- 第三條 免許ヲ受ケシ代官人ハ大審院及ヒ諸裁判所ニ於テ代官ヲ爲スヲ得
- 第四條 代官人ノ免許ヲ得ル能ハサル者左ノ如シ
  - 一 未丁年者
  - 二 身代限リノ處分ヲ受ケ未ダ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者
  - 三 盜罪詐僞罪ニ付刑ヲ受ケタル者
  - 四 懲役禁獄一年以上ノ刑ニ處セラレタル者(十四年同省甲第本項改正)
  - 五 官吏准官吏及ヒ公私ノ雇人

第五條 免許ヲ受ケシ者ハ必ス第二款ニ掲ケル所ノ代官人ノ組合ニ入りテ其規則ヲ守ル可シ若シ一時他管ニ出テ言代ヲ爲ストキハ其地組合ノ規則ヲ遵守ス可シ

第六條 代官人新ニ免許ヲ受ケシ時及ヒ他ノ地ニ轉住セント欲スル時ハ其業ヲ爲ス所ノ裁判所及ヒ檢事職務ヲ執行スル者以下之ニ並ニ議會長ニ其旨ヲ届ケ廢業ノ時ハ免許狀ヲ檢事ニ返納ス可シ

第七條 代官免許ハ滿一年ヲ以テ限トシ免許料ハ金十圓トス其業ヲ繼續セント欲スル者ハ毎年免許料ヲ納ム可シ既ニ納メタル免許料ハ廢業停業除名ノ時ト雖モ之ヲ還付セズ

第八條 新規出願ノ者ハ免許狀ヲ受ル時免許料ヲ直チニ檢事ニ納ム可シ  
引續出願ノ者ハ必ス免許期限ノ盡ル前願書ニ免許料ヲ添ヘ檢事ニ差出ス可シ但右手續ヲ爲シタルトキハ期限後ニ係リ未ダ免狀ノ下附有ラサルモ其儘代官ヲ爲スヲ得可シ

第九條 免許料ヲ納メサルヲ以テ免許ヲ得ス又ハ期限前ニ於テ引續願ヲ爲サスシテ免許ノ効ヲ失ヒシ者再ヒ代官ヲ爲サント欲スル時ハ新規出願ノ手續ニ循フ可シ

第十條 免許狀ヲ紛失シ又氏名ヲ改メシ者ハ更ニ免許狀下付ノ願ヲ檢事ニ出ス可シ但願書ノ副本ニ檢事ノ檢印ヲ受ケ置キ引替免許狀下付迄ハ之ヲ以テ免許代官人タルノ證ト爲ス可シ

第十一條 代官ヲ爲スニハ必ス詞訟本人ノ委任狀ヲ受ケ可シ  
第十二條 代官人ノ懲罰ハ第三款ニ依テ處分ス可シ  
第十三條 代官人ノ所業ニ因リ生シタル詞訟本人並ニ相手方

關係人ノ損害ハ其代官人ニ於テ之ヲ償フ可シ

第二款 議會

- 第十四條 代官人ハ各地方裁判所本支廳所轄每一ノ組合ヲ立テ議會ヲ設ケ左ノ目的ヲ以テ規則ヲ定メ契約ヲ固クス可シ但組合ハ各裁判區ノ廣狹遠近ニ依リ檢事ノ見計ヲ以テ之ヲ分合スルコトアル可シ
  - 一 互ニ風儀ヲ矯正スル事
  - 二 名譽ヲ保存スル事
  - 三 法律ヲ研究スル事
  - 四 誠實ヲ以テ本人ノ依頼ニ應スル事
  - 五 強テ本人ノ權利ヲ捏造セザル事
  - 六 妄リニ言詞ヲ變改セザル事
  - 七 故ナク時日ヲ遷延セザル事
  - 八 相當謝金ノ額ヲ定ムル事
- 但該規則ハ必ス檢事ノ照閱ヲ經過シ其改正増補モ亦之ニ同シ
- 第十五條 組合毎ニ會長一名副會長一名又ハ二名ヲ毎年第一次會ニ於テ投票ノ多數ヲ以テ定ム可シ若シ投票ノ數相均シキ時ハ先キニ免許ヲ得タル者ヲ以テシ其時日相同シキ時ハ年長ノ者ヲ以テ之ニ充ツ可シ
- 第十六條 會長ハ議會ノ管理ヲ爲シ副會長ハ會長ヲ補助シ會長差支アル時ハ之カ代理ヲ爲ス可シ其任期ハ各滿一年トス但每期投票多數ヲ得ル者ト雖トモ其職務ヲ繼續スルハ三期ヲ以テ限リトス
- 第十七條 第二十二條ニ記載シタル條件ヲ犯ス者アル時ハ各代官人ハ之レヲ會長ニ報告シ會長ハ之レヲ檢事ニ告發ス可シ

若シ會長告發ヲ遷延シ又ハ其所犯會長ニ係ル時ハ各代官人ヨリ直チニ檢事ニ告發ス可シ

第十八條 議會ヲ開クハ毎年二次ヲ以テ定例ト爲シ其日數一次十五日ヲ過クルヲ得ス若シ己ムヲ得サル場合ニ於テ期日ヲ延サントスルカ又ハ臨時會ヲ開カントスル時ハ必ス檢事ノ認可ヲ受ケ可シ但其會費ハ各代官人ニ於テ之ヲ擔當スル者ト爲ス

第十九條 會長ハ組合總員ノ名簿ヲ作リ其本貫族籍住所年齡及ヒ代官免許ノ年月日ヲ記シ轉住廢業懲罰ノ事アル毎ニ其旨ヲ記ス可シ

第二十條 議會中詞訟事件ニ付參會スルヲ得サル場合ニ於テハ其旨ヲ會長ニ届出ツ可シ

第二十一條 會長及ヒ副會長ト雖モ代官ノ職業ニ付テハ一般ノ代官人ト異ナルナシ

第三款 懲罰

- 第二十二條 代官人左ノ條件ヲ犯ス時ハ輕重ヲ量リ第二十三條及ヒ第二十四條ニ依テ懲罰ス可シ
  - 一 認廷ニ於テ現行ノ法律ヲ誹議スル者
  - 二 認廷ニ於テ官吏ニ對シ不敬ノ所業ヲ爲ス者
  - 三 認廷ニ於テ相手方ヲ陵辱罵詈シタル者
  - 四 詞訟ヲ教唆シタル者
  - 五 證據ト爲ル可キ者ヲ捏造シタル者
  - 六 他人ノ詞訟ヲ買取リ自己ノ利ヲ圖ル者
  - 七 強テ謝金ヲ前取シ又ハ適當ノ謝金ヲ食リタル者
  - 八 故ラニ時日ヲ遷延シ詞訟本人並ニ相手方關係人ノ妨害

現行日本法令大全

ヲ爲シタル者  
九 議會組合ノ外私ニ社ヲ結ビ號ヲ設ケ營業ヲ爲シタル者  
十 議會ニ於テ定メタル取締規則ヲ犯シタル者  
第二十三條 懲戒ノ目次左ノ如シ  
一 罷責 二 停業  
三 除名  
第二十四條 所犯法律ニ該ル者ハ法律ニ依テ處斷シ仍ホ第二十三條ノ罰目ヲ併科スルコトアル可シ  
第二十五條 罷責ハ止マ阿責シテ業ヲ停メス停業ハ一月以上一年以下其業ヲ停メ除名ハ代官人名簿ノ名ヲ除キ三年ヲ經ルノ後ニ非ツレハ復タ代官人タルヲ得ス若シ其所犯ノ情狀重キ者ハ終身之ヲ許サス  
第二十二條ノ懲罰ヲ受ケタル者アルトキハ其旨ヲ裁判所ノ控所ニ揭示ス可シ  
第四款 出願  
第二十六條 代官免許ヲ願フ者ハ第二十九條ノ書式ニ依リ願書ヲ作り現住戸長(又ハ區長)ノ與印ヲ受ケ履歷書ヲ添ヘ其所轄ノ檢事ニ差出シ定式ノ試験ヲ受ケ可シ  
第二十七條 出願定月  
二月 八月 各上半月ヲ以テ限リト爲ス  
第二十八條 試験ノ課目左ノ如シ  
一 民事ニ關スル法律  
二 刑事ニ關スル法律  
三 訴訟ノ手續  
四 裁判ニ關スル諸規則  
第二十九條 願書及ヒ履歷書々式略

○大學法學部ニ於テ法律學卒業ノ者  
代官人免許方 明治十三年十一月 司法省第四第十六號  
明治十二年五月司法省丙第七號達左之通告正候條此旨可相心得事  
文部省所轄東京大學法學部ニ於テ法律學卒業ノ者代官人營業出願セシ時ハ明治十三年五月司法省甲第壹號布達改正代官人規則第二十七條(即ち第二十八條)ニ關セテ免許狀授與候條右出願ノ節ハ卒業免狀ヲ檢査シ願書ニ其寫ヲ添ヘ進達可致此旨相達候事  
但本文試験ニ關スルモノ、外代官人規則ニ準據スルハ一般代官人ト異ナルコトナシ  
○代官人取扱手續 明治十三年五月 司法省第四第八號  
司法省明治九年二月第二十五號達代官人取扱手續左ノ通告改正候條此旨相達候事  
代官人取扱手續  
第一條 代官ノ免許ヲ願フ者アル時ハ檢事(檢事ナキ地ハ檢事ノ願書及ヒ履歷書ヲ査閱シ若シ寄留ニテ履歷ノ顛末分明ナラサル時ハ本管ニ照會シテ取調ヘタル上之ヲ試験シ一切ノ書類ヲ綴メ司法卿ニ進達スヘシ  
第二條 試験問題ハ出願定月前司法卿ヨリ各地方ノ檢事ニ送付ス  
第三條 檢事ハ司法卿ヨリ受ケタル所ノ問題ヲ以テ出願定月ノ下半月間ニ試験ヲ行フヘシ  
但試験ニ法律書籍ヲ携帶スルモ妨ナシ其問題ニ之ヲ許サ

現行日本法令大全

サル旨ヲ記セシ時ハ携帶ヲ禁スヘシ  
第四條 免許狀ハ司法卿ヨリ檢事ニ送付シ檢事之ヲ其本人ニ授與スヘシ  
第五條 大審院裁判所并檢事ニ於テハ代官人名簿ヲ製シ年月日ヲ詳ニシテ左ノ件々ヲ登錄スヘシ  
一 氏名身分住所年齢  
二 新規及ヒ引續免許  
三 住所移轉姓名改換及ヒ廢業免許狀紛失等  
四 懲罰  
第六條 代官人ハ總テ其地ノ檢事ニテ監視シ代官人規則ニ照シテ之ヲ取扱フヘシ若シ犯則ノ者アル時ハ其處分ヲ裁判官ニ求ムヘシ訟庭ニ於テノ犯則ハ裁判官直チニ之ヲ處分シ後テ檢事ニ通知スヘシ  
第七條 議會ノ規則ハ檢事之ヲ認許シ其副本ヲ司法卿ニ進達スヘシ(十九年六月司法省令丙第七號ヲ以テ(副本)ノ下ニ及ス) (七會長副會長組合人ノ氏名簿) (十四字ヲ別除ス)  
第八條 代官人他ノ裁判所管内ニ轉任シ又ハ廢業スルトキハ檢事ヨリ司法卿ヘ上申スヘシ尤モ廢業ノトキハ其免許狀返納スヘシ  
第九條 免許狀紛失或ハ改名ニ係リ書換等ニテ更ニ下付テ願出ル者アル時ハ檢事ヨリ司法卿ヘ上申シ其免許狀下付ヲ得テ之ヲ本人ニ授與スヘシ但右出願ノ時其願書ノ寫ヘ檢印ヲナシテ本人ヘ與ヘ置クヘシ  
第十條 檢事ハ免許料ヲ收領シタル上ニテ免許狀ヲ本人ニ授與スヘシ  
第十一條 免許料ハ一月毎ニ司法省ヘ納ムヘシ(十三年丙第十四條改正)

但シ檢事所在ノ裁判所ハ該會計課ヘ交付スル義ト心得ヘシ  
第十二條 代官人ノ處刑懲罰ハ其都度檢事ヨリ之ヲ司法卿ヘ上申スヘシ除名ノ時ハ其免許狀ヲ褫奪シテ返納スヘシ  
第十三條 檢事ハ停業ノ罰ヲ受ケタル者ノ免許狀ニ某年月日ヨリ某年月日マテ停業シタル旨ヲ裏書シ檢事ヲシテ之ヲ本人ニ下付スヘシ  
〔括弧内朱書〕  
免許狀形  
[何 某]  
[代官ヲ免許シ 此證ヲ授ク]  
司法 明治年月日  
[番號]  
[免許期限]  
[從何年何月]  
二千二十一



第八章 官ノ封印ヲ破棄スル罪	自第百七十四條
第九章 公務ヲ行フヲ拒ム罪	自第百七十六條
第四章 信用ヲ害スル罪	自第百八十一條
第一節 貨幣ヲ偽造スル罪	自第百八十二條
第二節 官印ヲ偽造スル罪	自第百八十三條
第三節 官ノ文書ヲ偽造スル罪	自第百八十四條
第四節 私印私書ヲ偽造スル罪	自第百八十五條
第五節 免狀鑑札及ヒ疾病證書ヲ偽造スル罪	自第百八十六條
第六節 偽證ノ罪	自第百八十七條
第七節 度量衡ヲ偽造スル罪	自第百八十八條
第八節 身分ヲ詐稱スル罪	自第百八十九條
第九節 公撰ノ投票ヲ偽造スル罪	自第百九十條
第五章 健康ヲ害スル罪	自第百九十一條
第一節 阿片煙ニ關スル罪	自第百九十二條
第二節 飲料ノ淨水ヲ汚穢スル罪	自第百九十三條
第三節 傳染病豫防規則ニ關スル罪	自第百九十四條
第四節 危害品及ヒ健康ヲ害スヘキ物品製造ノ規則ニ關スル罪	自第百九十五條
第五節 健康ヲ害スヘキ飲食物及ヒ藥劑ヲ販賣スル罪	自第百九十六條
第六節 私ニ醫藥ヲ爲スル罪	自第百九十七條
第六章 風俗ヲ害スル罪	自第百九十八條
第七章 死屍ヲ毀棄シ及ヒ墳墓ヲ發掘スル罪	自第百九十九條

第八章 商業及ヒ農工ノ業ヲ妨害スル罪	自第百七十四條
第九章 官吏濫職ノ罪	自第百七十六條
第一節 官吏公益ヲ害スル罪	自第百八十二條
第二節 官吏人民ニ對スル罪	自第百八十三條
第三節 官吏財産ニ對スル罪	自第百八十四條
第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪	自第百八十五條
第一章 身體ニ對スル罪	自第百八十六條
第一節 謀殺殺殺ノ罪	自第百八十七條
第二節 毆打創傷ノ罪	自第百八十八條
第三節 殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不論罪	自第百八十九條
第四節 過失殺傷ノ罪	自第百九十條
第五節 自殺ニ關スル罪	自第百九十一條
第六節 擅ニ人ヲ逮捕監禁スル罪	自第百九十二條
第七節 脅迫ノ罪	自第百九十三條
第八節 墮胎ノ罪	自第百九十四條
第九節 幼者又ハ老疾者ヲ遺棄スル罪	自第百九十五條
第十節 幼者ヲ略取誘拐スル罪	自第百九十六條
第十一節 猥褻姦淫重婚ノ罪	自第百九十七條
第十二節 誣告及ヒ誹毀ノ罪	自第百九十八條
第十三節 祖父母父母ニ對スル罪	自第百九十九條
第二章 財産ニ對スル罪	自第百九十九條
第一節 竊盜ノ罪	自第百九十九條
第二節 強盜ノ罪	自第百九十九條
第三節 遺失物埋藏物ニ關スル罪	自第百九十九條
第四節 家資分散ニ關スル罪	自第百九十九條

刑法

第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪	自第三百九十九條
第六節 贓物ニ關スル罪	自第三百九十八條
第七節 放火失火ノ罪	自第三百九十七條
第八節 決水ノ罪	自第三百九十六條
第九節 船舶ヲ覆没スル罪	自第三百九十五條
第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪	自第三百九十四條
第四編 違警罪	自第四百零一條
第一編 總則	自第四百零一條
第一章 法例	自第四百零一條
第一條 凡法律ニ於テ罰ス可キ罪別テ三種ト爲ス	自第四百零一條
一 重罪	自第四百零一條
二 輕罪	自第四百零一條
三 違警罪	自第四百零一條
第二條 法律ニ正條ナキ者ハ何等ノ所爲ト雖モ之ヲ罰スルコトヲ得ス	自第四百零一條
第三條 法律ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニ及ホスコトヲ得ス	自第四百零一條
若シ所犯頒布以前ニ在テ未タ判決ヲ經サル者ハ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從テ處斷ス	自第四百零一條
第四條 此刑法ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ論ス可キ者ニ適用スルコトヲ得ス	自第四百零一條
第五條 此刑法ニ正條ナクシテ他ノ法律規則ニ刑名アル者ハ各其法律規則ニ從フ	自第四百零一條

若シ他ノ法律規則ニ於テ別ニ總則ヲ掲ケサル者ハ此刑法ノ總則ニ從フ	
第二章 刑例	
第一節 刑名	
第六條 刑ハ主刑及ヒ附加刑ト爲ス	
附加刑ハ法律ニ於テ其宣告スル者ト宣告セサル者トヲ定ム	
第七條 左ニ記載シタル者ヲ以テ重罪ノ主刑ト爲ス	
一 死刑	
二 無期徒刑	
三 有期徒刑	
四 無期流刑	
五 有期流刑	
六 重懲役	
七 輕懲役	
八 重禁獄	
九 輕禁獄	
第八條 左ニ記載シタル者ヲ以テ輕罪ノ主刑ト爲ス	
一 重禁錮	
二 輕禁錮	
三 罰金	
第九條 左ニ記載シタル者ヲ以テ違警罪ノ主刑ト爲ス	
一 拘留	
二 科料	
第十條 左ニ記載シタル者ヲ以テ附加刑ト爲ス	
一 剝奪公權	

二 停止公權  
 三 禁治產  
 四 監視  
 五 罰金  
 六 沒收

第十一條 刑ヲ執行シ及ヒ犯人ヲ檢束スル方法細目ハ刑ニ規  
 則ヲ以テ之ヲ定ム

第二節 主刑處分

第十二條 死刑ハ絞首ス但規則ニ定ムル所ノ官吏臨檢シ獄内  
 ニ於テ之ヲ行フ

第十三條 死刑ハ司法卿ノ命令アルニ非サレハ之ヲ行フコト  
 ヲ得ス

第十四條 大祀令節國祭ノ日ハ死刑ヲ行フコトヲ禁ス

第十五條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懷胎ナル時ハ其執行ヲ  
 停メ分娩後一百日ヲ經ルニ非サレハ刑ヲ行ハス

第十六條 死刑ノ遺骸ハ親屬故舊請フ者アレハ之ヲ下付ス但  
 式ヲ用ヒテ葬ルコトヲ許サス

第十七條 徒刑ハ無期有期ヲ分テ島地ニ發遣シ定役ニ服ス  
 有期徒刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス

第十八條 徒刑ノ婦女ハ島地ニ發遣セス内地ノ懲役場ニ於テ  
 定役ニ服ス

第十九條 徒刑ノ囚六十歳ニ滿ル者ハ通常ノ定役ヲ免シ其體  
 力相當ノ定役ニ服ス

第二十條 流刑ハ無期有期ヲ分テ島地ノ獄ニ幽閉シ定役ニ  
 服セス  
 有期流刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス

第二十一條 無期流刑ノ囚五年ヲ經過スレハ行政ノ處分ヲ以  
 テ幽閉ヲ免シ島地ニ於テ地ヲ限リ居住セシムルコトヲ得

第二十二條 懲役ハ内地ノ懲役場ニ入レ定役ニ服ス但六十歳  
 ニ滿ル者ハ第十九條ノ例ニ從フ

重懲役ハ九年以上十一年以下輕懲役ハ六年以上八年以下ト  
 爲ス

第二十三條 禁獄ハ内地ノ獄ニ入レ定役ニ服セス  
 重禁獄ハ九年以上十一年以下輕禁獄ハ六年以上八年以下ト  
 爲ス

第二十四條 禁錮ハ禁錮場ニ留置シ重禁錮ハ定役ニ服シ輕禁  
 錮ハ定役ニ服セス

禁錮ハ重輕ヲ分テ十一月以上五年以下ト爲シ仍ホ各本條  
 ニ於テ其長短ヲ區別ス

第二十五條 定役ニ服スル囚人ノ工錢ハ監獄ノ規則ニ從ヒ其  
 幾分ヲ積舍ノ費用ニ供シ其幾分ヲ囚人ニ給與ス但現役百日  
 以内ハ給與ノ限ニ在ラス

第二十六條 罰金ハ二圓以上ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其多寡  
 ヲ區別ス

第二十七條 罰金ハ裁判確定ノ日ヨリ一月内ニ納完セシム若  
 シ限内納完セサル者ハ一圓ヲ一日ニ折算シ之ヲ輕禁錮ニ換  
 フ其一圓ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

罰金ヲ禁錮ニ換フル者ハ更ニ裁判ヲ用ヒス檢察官ノ求ニ因  
 リ裁判官之ヲ命ス但禁錮ノ期限ハ二年ニ過クルコトヲ得ス

若シ禁錮限内罰金ヲ納メタル時ハ其經過シタル日數ヲ扣除  
 シ禁錮ヲ免ス親屬其他ノ者代テ罰金ヲ納メタル時亦同シ

第二十八條 拘留ハ拘留所ニ留置シ定役ニ服セス其刑期ハ一  
 日以上十日以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其長短ヲ區別ス

第二十九條 科料ハ五錢以上一圓九十五錢以下ト爲シ仍ホ各  
 本條ニ於テ其多寡ヲ區別ス

第三十條 科料ハ裁判確定ノ日ヨリ十日内ニ納完セシム若  
 シ限内納完セサル者ハ第二十七條ノ例ニ照シ之ヲ拘留ニ換  
 フ

第三節 附加刑處分

第三十一條 剝奪公權ハ左ノ權ヲ剝奪ス

一 國民ノ特權  
 二 官吏ト爲ルノ權  
 三 勳章年金位記賞號恩給ヲ有スルノ權  
 四 外國ノ勳章ヲ佩用スルノ權  
 五 兵籍ニ入ルノ權  
 六 裁判所ニ於テ證人ト爲ルノ權但單ニ事實ヲ陳述スルハ  
 此限ニ在ラス  
 七 後見人ト爲ルノ權但親屬ノ許可ヲ得テ子孫ノ爲メニ  
 ルハ此限ニ在ラス  
 八 分散者ノ管財人ト爲リ又ハ會社及ヒ共有財産ヲ管理ス  
 ルノ權  
 九 學校校長及ヒ教師監監ト爲ルノ權

第三十二條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ刑ニ宣告ヲ用ヒス  
 終身公權ヲ剝奪ス

第三十三條 禁錮ニ處セラレタル者ハ刑ニ宣告ヲ用ヒス現任  
 ノ官職ヲ失ヒ及ヒ其刑期間公權ヲ行フコトヲ停止ス

第三十四條 輕罪ノ刑ニ於テ監視ニ付シタル者ハ刑ニ宣告ヲ

用ヒス監視ノ期限間公權ヲ行フコトヲ停止ス

主刑ヲ免シテ止テ監視ニ付シタル者亦同シ

第三十五條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ刑ニ宣告ヲ用ヒス  
 其主刑ノ終ルマテ自ラ財産ヲ治ムルコトヲ禁ス

第三十六條 流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル時ハ行政ノ處分ヲ  
 以テ治産ノ禁ノ幾分ヲ免スルコトヲ得

第三十七條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ刑ニ宣告ヲ用ヒス  
 各本刑ノ短期三分ノ一ニ等シキ時間監視ニ付ス

第三十八條 輕罪ノ刑ニ附加スル監視ハ之ヲ宣告ス但各本條  
 ニ記載スルノ外監視ニ付スルコトヲ得ス

第三十九條 死刑及ヒ無期刑ノ期滿免除ヲ得タル者ハ刑ニ宣  
 告ヲ用ヒス五年間監視ニ付ス

第四十條 監視ノ期限ハ主刑ノ終リタル日ヨリ起算ス主刑  
 ノ期滿免除ヲ得タル時ハ其捕ニ就キタル日ヨリ起算ス  
 若シ主刑ヲ免シテ止テ監視ニ付シタル時ハ其裁判確定ノ日  
 ヨリ起算ス

第四十一條 監視ニ付セラレタル者其情狀ニ因リ行政ノ處分  
 ヲ以テ假ニ監視ヲ免スルコトヲ得

第四十二條 附加ノ罰金ハ之ヲ宣告ス若シ一月内ニ納完セサ  
 ルトキハ第二十七條ノ例ニ照シ輕禁錮ニ換ヘ主刑滿限ノ後  
 之ヲ執行ス

第四十三條 左ニ記載シタル物件ハ宣告シテ官ニ沒收ス但法  
 律規則ニ於テ別ニ沒收ノ例ヲ定メタル者ハ各其法律規則ニ  
 從フ

一 法律ニ於テ禁制シタル物件  
 二 犯罪ノ用ニ供シタル物件



三 犯罪ニ因テ得タル物件

第四十四條 法律ニ於テ禁制シタル物件ハ何人ノ所有ヲ問ハス之ヲ沒收ス犯罪ノ用ニ供シ及ヒ犯罪ニ因テ得タル物件ハ犯人ノ所有ニ係リ又ハ所有主ナキ時ノ外之ヲ沒收スルコトヲ得ス

第四節 微償處分

第四十五條 刑事ノ裁判費用ハ其全部又ハ幾分ヲ犯人ニ科ス但其費用ノ額ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四十六條 犯人刑ニ處セラレ又ハ放免セラルト雖モ被害者ノ請求ニ對シ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ免カルコトヲ得ス

第四十七條 數人共犯ニ係ル裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ共犯人ヲシテ之ヲ連帶セシム

第四十八條 裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ被害者ノ請求ニ因リ刑事裁判所ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得若シ贓物犯人ノ手ニアル時ハ請求ナシト雖モ直チニ之ヲ被害者ニ還付ス

第五節 刑期計算

第四十九條 刑期ヲ計算スルニ一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

受刑ノ初日ハ時間ヲ論セス一日ニ算入シ放免ノ日ハ刑期ニ算入セス

第五十條 刑ハ裁判確定シタル後ニ非サレハ之ヲ執行スルコトヲ得ス

第五十一條 刑期ハ刑名宣告ノ日ヨリ起算ス若シ上訴ヲ爲シ

タル者ハ左ノ例ニ從フ

一 犯人自ラ上訴シテ其上訴正當ナル時ハ前判宣告ノ日ヨリ起算ス若シ其上訴不當ナル時ハ後判宣告ノ日ヨリ起算ス

二 檢察官ノ上訴ニ係ル者ハ其上訴正當ナルト否トヲ分カス前判宣告ノ日ヨリ起算ス

三 上訴中保釋ヲ得又ハ責付セラレタル者ハ其日數ヲ刑期ニ算入スルコトヲ得ス

第六節 假出獄

第五十二條 刑期限内逃走シ再ヒ捕ニ就キタル者ハ其逃走ノ日數ヲ除キ前後受刑ノ日ヲ計算ス

第五十三條 重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者獄則ヲ遵守シ後改ノ狀アル時ハ其刑期四分ノ三ヲ經過スルノ後行政ノ處分ヲ以テ假ニ出獄ヲ許スコトヲ得

無期徒刑ノ囚ハ十五年ヲ經過スルノ後亦同シ

流刑ノ囚ハ第二十一條ニ照シ幽閉ヲ免スルノ外假出獄ノ例ヲ用ヒス

第五十四條 徒刑ノ囚ハ假出獄ヲ許サ、ルト雖モ仍ホ島地ニ居住セシム

第五十五條 假出獄ヲ許サレタル者ハ行政ノ處分ヲ以テ治産ノ禁ノ幾分ヲ免スルコトヲ得但本刑期限内特別ニ定メタル監視ニ付ス

第五十六條 假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ直チニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ハ刑期ニ算入スルコトヲ得ス

第五十七條 刑期限内更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ假出獄ヲ許サス

第七節 期滿免除

第五十八條 刑ノ執行ヲ通ラタル者法律ニ定メタル期限ヲ經過スルニ因テ期滿免除ヲ得

第五十九條 主刑ハ左ノ年限ニ從テ期滿免除ヲ得

- 一 死刑ハ三十年
- 二 無期徒刑ハ二十五年
- 三 有期徒刑ハ二十年
- 四 重懲役重禁獄ハ十五年
- 五 輕懲役輕禁獄ハ十年
- 六 禁錮罰金ハ七年
- 七 拘留料料ハ一年

第六十條 剝奪公權停止公權及ヒ監視ハ期滿免除ヲ得ス附加ノ罰金ハ主刑ト共ニ期滿免除ヲ得

沒收ハ五年ヲ經テ期滿免除ヲ得但禁制物ハ期滿免除ノ限ニ在ラス

第六十一條 期滿免除ハ刑ノ執行ヲ通ラタル日ヨリ起算ス若シ捕ニ就キ再ヒ逃走シタル時ハ其逃走ノ日ヨリ起算シ闕席裁判ニ係ル時ハ其宣告ノ日ヨリ起算ス

第六十二條 刑ノ執行ヲ通ラタル者ニ對シ逮捕ヲ命ジタル時ハ最終ノ令狀ヲ出シタル日ヨリ期滿免除ヲ起算ス

第八節 復權

第六十三條 公權ヲ剝奪セラレタル者ハ主刑ノ終リタル日ヨリ五年ヲ經過スルノ後其情狀ニ因リ將來ノ公權ヲ復スルコトヲ得

主刑ノ期滿免除ヲ得タル者ハ監視ニ付シタル日ヨリ五年ヲ經過スルノ後亦同シ

第六十四條 大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ直チニ復權ヲ得特赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ赦狀中記載スルニ非サレハ復權ヲ得ス

赦ニ因テ復權ヲ得タル者ハ自ラ監視ヲ免シタル者トス

第六十五條 復權ハ勅裁ニ非サレハ之ヲ得可カラズ

第三章 加減例

第六十六條 法律ニ於テ刑ヲ加重減輕ス可キ時ハ後ノ數條ニ記載シタル例ニ照シテ加減ス但加ヘテ死刑ニ入ルコトヲ得ス

第六十七條 重罪ノ刑ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

- 一 死刑
- 二 無期徒刑
- 三 有期徒刑
- 四 重懲役
- 五 輕懲役

第六十八條 國事ニ關スル重罪ノ刑ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

- 一 死刑
- 二 無期徒刑
- 三 有期徒刑
- 四 重禁獄
- 五 輕禁獄

第六十九條 輕懲役ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處スルヲ以テ一等ト爲ス

輕禁獄ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處スルヲ以テ一等ト爲ス

現行日本法令大全

第七十條 禁錮罰金ニ該ル者減輕ス可キ時ハ各本條ニ記載シタル刑罰金額ノ四分ノ一ヲ減スルヲ以テ一等ト爲シ其加重ス可キ時ハ亦四分ノ一ヲ加フルヲ以テ一等ト爲ス  
 輕罪ノ刑ハ加ヘテ重罪ニ入ルコトヲ得ス但禁錮ハ加ヘテ七年ニ至ルコトヲ得  
 第七十一條 禁錮ヲ減盡シタル時ハ拘留ニ處シ罰金ヲ減盡シタル時ハ科料ニ處ス禁錮罰金ヲ減シテ其短期十日以下寡數一圓九十五錢以下ニ及ブ時ハ亦拘留科料ニ處スルコトヲ得  
 第七十二條 拘留科料ニ該ル者加減ス可キ時ハ禁錮罰金ノ例ニ照シ其四分ノ一ヲ加減スルヲ以テ一等ト爲ス  
 違警罪ノ刑ハ加ヘテ輕罪ニ入ルコトヲ得ス但拘留ハ加ヘテ十二日ニ至ルコトヲ得減シテ一日以下ニ降スコトヲ得スコ料ハ加ヘテ二圓四十錢ニ至ルコトヲ得減シテ五錢以下ニ降スコトヲ得ス  
 第七十三條 禁錮拘留ヲ加減スルニ因テ其期限ニ零數ヲ生シ一日ニ滿サル時ハ之ヲ除棄ス  
 第七十四條 附加ノ罰金ハ主刑ニ從テ加減シ其金額ノ四分ノ一ヲ加減スルヲ以テ一等ト爲ス若シ減盡シタル時ハ止メ主刑ヲ科ス  
 第四章 不論罪及ヒ減輕  
 第一節 不論罪及ヒ若恕減輕  
 第七十五條 抗拒ス可カラサル強制ニ遇ヒ其意ニ非サルノ所爲ハ其罪ヲ論セス  
 天災又ハ意外ノ變ニ因リ避シ可カラサル危難ニ遇ヒ自己若クハ親屬ノ身體ヲ防衛スルニ出タル所爲亦同シ  
 第七十六條 本局長官ノ命令ニ從ヒ其職務ヲ以テ爲シタル者

ハ其罪ヲ論セス  
 第七十七條 罪ヲ犯ス意ナキノ所爲ハ其罪ヲ論セス但法律規則ニ於テ別ニ罪ヲ定メタル者ハ此限ニ在ラス  
 罪ト爲ル可キ事實ヲ知ラズシテ犯シタル者ハ其罪ヲ論セス  
 罪本重カル可クシテ犯ス時知ラサル者ハ其重キニ從テ論スルコトヲ得ス  
 法律規則ヲ知ラサルヲ以テ犯スノ意ナシト爲スコトヲ得ス  
 第七十八條 罪ヲ犯ス時知覺精神ノ喪失ニ因テ是非ヲ辨別セサル者ハ其罪ヲ論セス  
 第七十九條 罪ヲ犯ス時十二歳ニ滿サル者ハ其罪ヲ論セス但滿八歳以上ノ者ハ情狀ニ因リ滿十六歳ニ過キサル時間之ヲ懲治場ニ留置スルコトヲ得  
 第八十條 罪ヲ犯ス時滿十二歳以上十六歳ニ滿サル者ハ其所爲是非ヲ辨別シタルト否トヲ審案シ辨別ナクシテ犯シタル時ハ其罪ヲ論セス但情狀ニ因リ滿二十歳ニ過キサル時間之ヲ懲治場ニ留置スルコトヲ得  
 若シ辨別アリテ犯シタル時ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ二等ヲ減ス  
 第八十一條 罪ヲ犯ス時滿十六歳以上二十歳ニ滿サル者ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ一等ヲ減ス  
 第八十二條 瘡腫者罪ヲ犯シタル時ハ其罪ヲ論セス其情狀ニ因リ五年ニ過キサル時間之ヲ懲治場ニ留置スルコトヲ得  
 第八十三條 違警罪ハ滿十六歳以上二十歳ニ滿サル者ト雖モ其罪ヲ宥恕スルコトヲ得ス  
 滿十二歳以上十六歳ニ滿サル者ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ一等ヲ減ス十二歳ニ滿サル者及ヒ瘡腫者ハ其罪ヲ論セス

現行日本法令大全

第八十四條 此節ニ記載スルノ外特別ノ不論罪若恕減輕ハ各本條ニ於テ之ヲ記載ス  
 第二節 自首減輕  
 第八十五條 罪ヲ犯シ事未タ發覺セサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ本刑ニ一等ヲ減ス但謀殺故殺ニ係ル者ハ自首減輕ノ限ニ在ラス  
 第八十六條 財産ニ對スル罪ヲ犯シタル者自首シテ其贓物ヲ還給シ損害ヲ賠償シタル時ハ自首減輕ノ外仍ホ本刑ニ二等ヲ減ス其全部ヲ還償セスト雖モ半數以上ヲ還償シタル時ハ一等ヲ減ス  
 第八十七條 財産ニ對スル罪ヲ犯シ被害者ニ首服シタル者ハ官ニ自首スルト同ク前二條ノ例ニ照シテ處斷ス  
 第八十八條 此節ニ記載スルノ外本條例ニ自首ノ例ヲ掲ケタル者ハ各其本條ニ從フ  
 第三節 酌量減輕  
 第八十九條 重罪輕罪違警罪ヲ分クテ所犯情狀原諒ス可キ者ハ酌量シテ本刑ヲ減輕スルコトヲ得  
 法律ニ於テ本刑ヲ加重シ又ハ減輕ス可キ者ト雖モ其酌量ス可キ時ハ仍ホ之ヲ減輕スルコトヲ得  
 第九十條 酌量減輕ス可キ者ハ本刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス  
 第五章 再犯加重  
 第九十一條 先ニ重罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯重罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ  
 第九十二條 先ニ重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯輕罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ  
 第九十三條 先ニ違警罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯違警罪ニ

該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ但一年内再ヒ其違警罪裁判所ノ管轄地内ニ於テ犯シタル時ニ非サルハ再犯ヲ以テ論スルコトヲ得ス  
 第九十四條 再犯加重ハ初犯ノ裁判確定ノ後ニ非サルハ之ヲ論スルコトヲ得ス  
 第九十五條 刑期限内再ヒ罪ヲ犯スニ因リ刑ヲ宣告シタル時ハ先ツ其定役ニ服ス可キ者ヲ執行シ定役ニ服セサル者ヲ後ニス若シ初犯再犯共ニ定役ニ服スル刑ニ該ル時又ハ共ニ定役ニ服セサル刑ニ該ル時ハ先ツ其重キ者ヲ執行ス  
 罰金科料ニ該ル者ハ順序ニ拘ハラス各之ヲ徵收ス  
 第九十六條 陸海軍裁判所ニ於テ判決ヲ經タル者再ヒ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ初犯ノ罪常律ニ從ヒ處斷シタル者ニ非サルハ再犯ヲ以テ論スルコトヲ得ス  
 第九十七條 大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ再ヒ罪ヲ犯スト雖モ再犯ヲ以テ論スルコトヲ得ス  
 第九十八條 三犯以上ノ者ト雖モ其加重ノ法ハ再犯ノ例ニ同シ  
 第六章 加減順序  
 第九十九條 犯罪ノ情狀ニ因リ總則ニ照シ同時ニ本刑ヲ加重減輕ス可キ時ハ左ノ順序ニ從テ其刑名ヲ定ム但從犯及ヒ未遂犯罪ノ減等其他各本條ニ記載スル特別ノ加重減輕ハ其加減シタル者ヲ以テ本刑ト爲ス  
 一 再犯加重  
 二 宥恕減輕  
 三 自首減輕  
 四 酌量減輕

現行日本法令大全

第七章 數罪俱發  
 第一百條 重罪輕罪ヲ犯シ未ダ判決ヲ經スニ罪以上俱ニ發シタル時ハ一ノ重キニ從テ處斷ス  
 重罪ノ刑ハ刑期ノ長キ者ヲ以テ重ト爲シ刑期ノ等シキ者ハ定役アル者ヲ以テ重ト爲ス  
 輕罪ノ刑ハ其所犯情狀最重キ者ニ從テ處斷ス  
 第一百一條 違警罪ニ罪以上俱ニ發シタル時ハ各其刑ヲ科ス若シ重罪又ハ輕罪ト俱ニ發シタル時ハ一ノ重キニ從フ  
 第一百二條 一罪前ニ發シ已ニ判決ヲ經テ餘罪後ニ發シ其輕ク若クハ等シキ者ハ之ヲ論ヒス其重キ者ハ更ニ之ヲ論シ前發ノ刑ヲ以テ後發ノ刑ニ通算ス但前發ノ刑罰金科料ニ該リ已ニ納完シタル者ハ第二十七條ノ例ニ照シ折算シテ後發ノ刑期ニ通算ス  
 若シ前發ノ罪ヲ判決スル時未ダ發セサル罪再犯ノ罪ト俱ニ發シタル者ハ其再犯ト比較シ一ノ重キニ從ヒ前發ノ刑ヲ通算セス  
 第一百三條 數罪俱ニ發シ一ノ重キニ從フ時ト雖モ其沒收及ヒ徵價ノ處分ハ各本法ニ從フ  
 第八章 數人共犯  
 第一節 正犯  
 第一百四條 二人以上現ニ罪ヲ犯シタル者ハ皆正犯ト爲シ各自ニ其刑ヲ科ス  
 第一百五條 人ヲ教唆シテ重罪輕罪ヲ犯シメタル者ハ亦正犯ト爲ス  
 第一百六條 正犯ノ身分ニ因リ刑ニ刑ヲ加重ス可キ時ハ他ノ正犯從犯及ヒ救唆者ニ及ハスコトヲ得ス

第一百七條 犯人ノ多數ニ因リ刑ヲ加重ス可キ時ハ救唆者ヲ算入シテ多數ト爲スコトヲ得ス  
 第一百八條 事ヲ指定シテ犯罪ヲ教唆スルニ當リ犯人救唆ニ乘シ其指定シタル以外ノ罪ヲ犯シ又ハ其現ニ行フ所ノ方法救唆者ノ指示シタル所ト殊ナル時ハ左ノ例ニ照シテ救唆者ヲ處斷ス  
 一 所犯救唆シタル罪ヨリ重キ時ハ止テ其指定シタル罪ニ從テ刑ヲ科ス  
 二 所犯救唆シタル罪ヨリ輕キ時ハ現ニ行フ所ノ罪ニ從テ刑ヲ科ス  
 第二節 從犯  
 第一百九條 重罪輕罪ヲ犯スコトヲ知テ器具ヲ給與シ又ハ誘導指示シ其他豫備ノ所爲ヲ以テ正犯ヲ幫助シ犯罪ヲ容易ナラシメタル者ハ從犯ト爲シ正犯ノ刑ニ一等ヲ減ス但正犯現ニ行フ所ノ罪從犯ノ知ル所ヨリ重キ時ハ止テ其知ル所ノ罪ニ照シ一等ヲ減ス  
 第一百十條 身分ニ因リ刑ヲ加重ス可キ者從犯ト爲ル時ハ其重キニ從テ一等ヲ減ス  
 正犯ノ身分ニ因リ刑ヲ減免ス可キ時ト雖モ從犯ノ刑ハ其輕キニ從テ減免スルコトヲ得ス  
 第九章 未遂犯罪  
 第一百十一條 罪ヲ犯シテ未遂トシテ謀リ又ハ其豫備ヲ爲スト雖モ未タ其事ヲ行ハサル者ハ本條別ニ刑名ヲ記載スルニ非サンハ其刑ヲ科セス  
 第一百十二條 罪ヲ犯シテ未遂トシテ已ニ其事ヲ行フト雖モ犯人意外ノ障礙若クハ舛錯ニ因リ未タ遂クサル時ハ已ニ遂クサル

現行日本法令大全

若ノ刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス  
 第十三條 重罪ヲ犯シテ未タ遂クサル者ハ前條ノ例ニ照シテ處斷ス  
 輕罪ヲ犯シテ未タ遂クサル者ハ本條別ニ記載スルニ非サンハ前條ノ例ニ照シテ處斷スルコトヲ得ス  
 違警罪ヲ犯シテ未タ遂クサル者ハ其罪ヲ論セス  
 第十章 親族例  
 第十四條 此刑法ニ於テ親屬ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ云フ  
 一 祖父母父母夫妻  
 二 子孫及ヒ其配偶者  
 三 兄弟姉妹及ヒ其配偶者  
 四 兄弟姉妹ノ子及ヒ其配偶者  
 五 父母ノ兄弟姉妹及ヒ其配偶者  
 六 父母ノ兄弟姉妹ノ子  
 七 配偶者ノ祖父母父母  
 八 配偶者ノ兄弟姉妹及ヒ其配偶者  
 九 配偶者ノ兄弟姉妹ノ子  
 十 配偶者ノ父母ノ兄弟姉妹  
 第十五條 祖父母ト稱スルハ高曾祖父母外祖父母同シ父母ト稱スルハ繼父母嫡母同シ子孫ト稱スルハ庶子曾玄孫外孫同シ兄弟姉妹ト稱スルハ異父異母ノ兄弟姉妹同シ  
 養子其養家ニ於ル親屬ノ例ハ實子ニ同シ  
 第二編 公益ニ關スル重罪輕罪  
 第一章 皇室ニ對スル罪  
 第十六條 天皇三后皇太子ニ對シ危害ヲ加ヘ又ハ加ヘント

シタル者ハ死刑ニ處ス  
 第十七條 天皇三后皇太子ニ對シ不敬ノ所爲アル者ハ三月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
 皇陵ニ對シ不敬ノ所爲アル者亦同シ  
 第十八條 皇族ニ對シ危害ヲ加ヘタル者ハ死刑ニ處ス其危害ヲ加ヘントシタル者ハ無期徒刑ニ處ス  
 第十九條 皇族ニ對シ不敬ノ所爲アル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第二十條 此章ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス  
 第二章 國事ニ關スル罪  
 第一節 內亂ニ關スル罪  
 第二十一條 政府ヲ顛覆シ又ハ邦土ヲ僭竊シ其他亂暴ヲ紊亂スルコトヲ目的ト爲シ內亂ヲ起シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス  
 一 首魁及ヒ救唆者ハ死刑ニ處ス  
 二 群衆ノ指揮ヲ爲シ其他重要ノ職務ヲ爲シタル者ハ無期徒刑ニ處シ其情輕キ者ハ有期流刑ニ處ス  
 三 兵器金穀ヲ資給シ又ハ諸般ノ職務ヲ爲シタル者ハ重禁錮ニ處シ其情輕キ者ハ輕禁錮ニ處ス  
 四 教唆ニ乘シテ附和隨行シ又ハ指揮ヲ受ケテ雜役ニ供シタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス  
 第二十二條 內亂ヲ起スノ目的ヲ以テ兵器彈藥船舶金穀其他軍備ノ物品ヲ劫掠シタル者ハ已ニ內亂ヲ起シタル者ノ刑ニ同シ

第二百二十三條 政府ヲ變亂スルノ目的ヲ以テ人ヲ謀殺シタル者ハ兵ヲ擧ルニ至ラスト雖モ内亂ト同ク論シ其效峻者及ヒ下手者ヲ死刑ニ處ス

第二百二十四條 前三條ノ罪ハ未遂犯罪ノ時ニ於テ乃チ本刑ヲ科ス

第二百二十五條 兵隊ヲ招募シ又ハ兵器金穀ヲ準備シ其他内亂ノ豫備ヲ爲シタル者ハ第二百二十一條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス

内亂ノ陰謀ヲ爲シ未タ豫備ニ至ラサル者ハ各二等ヲ減ス

第二百二十六條 内亂ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲スト雖モ未タ其事ヲ行ハサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス

第二百二十七條 内亂ノ情ヲ知テ犯人ニ集會所ヲ給與シタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第二百二十八條 内亂ニ乘シテ人ノ身體財産ニ對シ内亂ノ目的ニ關セサル重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ通常ノ刑ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二節 外患ニ關スル罪

第二百二十九條 外國ニ與シテ本國ニ抗敵シ又ハ外國ト交戰中同盟國ニ抗敵シ其他本國ニ背叛シテ敵兵ニ附屬シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百三十條 交戰中敵兵ヲ誘導シテ本國管內ニ入ラシメ若クハ本國及ヒ同盟國ノ都城要塞又ハ兵器彈藥船艦其他軍事ニ關スル土地家屋物件ヲ敵國ニ交付シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百三十一條 本國及ヒ同盟國ノ軍情機密ヲ敵國ニ漏泄シ若クハ兵隊屯集ノ要地又ハ道路ノ險要ヲ敵國ニ通知シタル者

ハ無期流刑ニ處ス

敵國ノ間諜ヲ誘導シテ本國管內ニ入ラシメ若クハ之ヲ藏匿シタル者亦同シ

第三百二十二條 陸海軍ヨリ委任ヲ受テ物品ヲ供給シ及ヒ工作ヲ爲ス者交戰ノ際敵國ニ通謀シ又ハ其賂遺ヲ收受シテ命令ニ違背シ軍備ノ缺乏ヲ致シタル時ハ有期流刑ニ處ス

第三百二十三條 外國ニ對シ私ニ戰端ヲ開キタル者ハ有期流刑ニ處ス其豫備ニ止ル者ハ一等又ハ二等ヲ減ス

第三百二十四條 外國交戰ノ際本國ニ於テ局外中立ヲ布告シタル時其布告ニ違背シタル者ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百二十五條 此章ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第二章 靜謐ヲ害スル罪

第一節 兇徒聚衆ノ罪

第三百二十六條 兇徒多衆ヲ聚シテ暴動ヲ謀リ官吏ノ說諭ヲ受クルト雖モ仍ホ解散セサル者首魁及ヒ效峻者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス附和隨行シタル者ハ二圓以上五圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百二十七條 兇徒多衆ヲ聚シテ官廳ニ喧鬧シ官吏ニ強逼シ又ハ村市ヲ騷擾シ其他暴動ヲ爲シタル者首魁及ヒ效峻者ハ重懲役ニ處ス其聚衆ニ應シ煽動シテ勢ヲ助ケタル者ハ輕懲役ニ處シ其情輕キ者ハ一等ヲ減ス附和隨行シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百二十八條 暴動ノ際人ヲ殺死シ若クハ家屋船舶倉庫等ヲ燒燬シタル時ハ現ニ手ヲ下シ及ヒ火ヲ放ツ者ヲ死刑ニ處ス

首魁及ヒ效峻者情ヲ知テ制セサル者亦同シ

第二節 官吏ノ職務ヲ行フテ妨害スル罪

第三百二十九條 官吏其職務ヲ以テ法律規則ヲ執行シ又ハ行政司法官署ノ命令ヲ執行スルニ當リ暴行脅迫ヲ以テ其官吏ニ抗拒シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

暴行脅迫ヲ以テ其官吏ノ爲ス可カラサル事件ヲ行ハシメタル者亦同シ

第四百十條 前條ノ罪ヲ犯シ因テ官吏ヲ毆傷シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス

第四百十一條 官吏ノ職務ニ對シ其目前ニ於テ形容若クハ言語ヲ以テ侮辱シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其目前ニ非スト雖モ刊行ノ文書圖畫又ハ公然ノ演說ヲ以テ侮辱シタル者亦同シ

第三節 囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

第四百十二條 已決ノ囚徒逃走シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ獄舎獄具ヲ毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲ爲シテ逃走シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第四百十三條 已決ノ囚徒逃走ノ罪ヲ犯スト雖モ再犯ヲ以テ論セス其刑期限内再ヒ逃走シタル者ハ再犯ヲ以テ論ス

第四百十四條 未決ノ囚徒入監中逃走シタル者ハ第四百四十二條ノ例ニ同シ但原犯ノ罪ヲ判決スル時ニ於テ數罪俱發ノ例ニ照シテ處斷ス

第四百十五條 囚徒三人以上通謀シテ逃走シタル時ハ第四百四

十二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第四百十六條 囚徒ヲ逃走セシムル爲メ兇器其他ノ器具ヲ給與シ又ハ逃走ノ方法ヲ指示シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス因テ囚徒ヲ逃走ヲ致シタル時ハ一等ヲ加フ

第四百十七條 囚徒ヲ劫奪シ又ハ暴行脅迫ヲ以テ囚徒ヲ逃走ヲ助ケタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ輕懲役ニ處ス

第四百十八條 囚徒ヲ看守シ又ハ護送スル者囚徒ヲ逃走セシメタル時ハ亦前條ノ例ニ同シ

第四百十九條 前數條ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケタル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第四百十條 看守又ハ護送者其懈怠ニ因リ囚徒ノ逃走ヲ覺ラサル時ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百十一條 犯罪人又ハ逃走ノ囚徒及ヒ監視ニ付セラレタル者ナルコトヲ知テ之ヲ藏匿シ若クハ隱避セシメタル者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ一等ヲ加フ

第四百十二條 他人ノ罪ヲ免カレンシメントシ圖リ其罪證ト爲ル可キ物件ヲ隱蔽シタル者ハ十一日以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百十三條 前二條ノ罪ヲ犯シタル者犯人ノ親屬ニ係ル時

現行日本法令大全

ハ其罪ヲ論セス

第四節 附加刑ノ執行ヲ述ル、罪

第百五十四條 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラシタル者私ニ其權ヲ行ヒタル時ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百五十五條 監視ニ付セラレタル者其規則ニ違背シタル時ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

第百五十六條 前二條ノ罪ハ其刑期限内再ヒ犯シタル時ニ非サレハ再犯ヲ以テ論スルコトヲ得ス

第五節 私ニ軍用ノ銃砲彈藥ヲ製造シ及ヒ所有スル罪

第百五十七條 官命ヲ受ケス又ハ官許ヲ得シテ陸海軍ノ用ニ供スル銃砲彈藥其他破裂質ノ物品ヲ製造シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス其之ヲ輸入シタル者亦同シ

前項ノ物品ヲ私ニ販賣シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百五十八條 前條ノ罪ヲ犯スト雖モ職工又ハ雇人ニシテ止マ正犯ノ使令ニ供シタル者ハ各本刑ニ照シ二等ヲ減ス

第百五十九條 前二條ノ罪ヲ犯サントシテ未ダ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第百六十條 第百五十七條ニ記載シタル物品ヲ私ニ所有シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第百六十一條 第百五十七條ニ記載シタル物品ノ製造ニ供シタル器械ニシテ單ニ其用ニ供ス可キ者ハ何人ノ所有ヲ問ハス之ヲ沒收ス

第六節 往來通信ヲ妨害スル罪

第百六十二條 道路橋梁河溝港埠ヲ損壞シテ往來ヲ妨害シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百六十三條 偽計又ハ威力ヲ以テ郵便ヲ妨害シ若クハ之ヲ阻止シタル者ハ亦前條ニ同シ

第百六十四條 電信ノ器械柱木ヲ損壞シ又ハ條線ヲ切斷シテ電氣ヲ不通ニ致シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ器械柱木條線ヲ損壞シテ電信ノ妨害ヲ爲スト雖モ不通ニ至ラサル時ハ一等ヲ減ス

第百六十五條 瀝車ノ往來ヲ妨害スル爲メ鐵道及ヒ其標識ヲ損壞シ其他危險ナル障礙ヲ爲シタル者ハ重懲役ニ處ス

第百六十六條 船舶ノ往來ヲ妨害スル爲メ燈臺浮標其他航海ノ安寧ヲ保護スル標識ヲ損壞シ又ハ詐偽ノ標識ヲ點示シタル者ハ亦前條ニ同シ

第百六十七條 前數條ニ記載シタル罪其事務ニ關スル官吏及ヒ雇人職工自ラ犯シタル時ハ各本刑ニ照シ一等ヲ加フ

第百六十八條 第百六十二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ殺傷シタル者ハ毆打創傷ノ各本刑ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第百六十九條 第百六十五條第百六十六條ノ罪ヲ犯シ因テ瀝車ヲ顛覆シ又ハ船舶ヲ覆没シタル時ハ無期徒刑ニ處シ人ヲ死ニ致シタル時ハ死刑ニ處ス

第百七十條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未ダ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第七節 人ノ住所ヲ侵スル罪

第百七十一條 晝間故ナク人ノ住居シタル邸宅又ハ人ノ看守

現行日本法令大全

シタル建造物ニ入りタル者ハ十一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ左ニ記載シタル所爲アル時ハ一等ヲ加フ

一 門戶牆壁ヲ踰越損壞シ又ハ鎖鑰ヲ開キテ入りタル時

二 兇器其他犯罪ノ用ニ供ス可キ物品ヲ携帶シテ入りタル時

三 暴行ヲ爲シテ入りタル時

四 二人以上ニテ入りタル時

第百七十二條 夜間故ナク人ノ住居シタル邸宅又ハ人ノ看守シタル建造物ニ入りタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ前條ニ記載シタル加重ス可キ所爲アル時ハ一等ヲ加フ

第百七十三條 故ナク皇居禁苑離宮行在所及ヒ皇陵内ニ入りタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第八節 官ノ封印ヲ破棄スル罪

第百七十四條 官署ノ處分ニ因リ特別ニ家屋倉庫其他ノ物件ニ施シタル封印ヲ破棄シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ看守者自ラ犯シタル時ハ一等ヲ加フ

第百七十五條 官ノ封印ヲ破棄シテ其物件ヲ盜取シ又ハ毀壞シタル者ハ盜罪及ヒ毀壞ノ各本刑ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第百七十六條 看守者其懈怠ニ因リ封印ヲ破棄シ又ハ其物件ヲ盜取毀壞スル犯人アルコトヲ覺ツサル時ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第九節 公務ヲ行フテ拒ム罪

第百七十七條 陸海軍ノ將校タル者出兵ヲ要求スル權アル官

署ヨリ其要求ヲ受ケ故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百七十八條 陸海軍ノ徵兵ニ編入セラル可キ者身體ヲ毀傷シテ疾病ヲ作爲シ其他詐偽ノ所爲ヲ以テ免役ヲ圖リタル時ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ他人ニ囑託シ其氏名ヲ詐稱シテ徵募ニ應ジシメタル者亦同シ其囑託ヲ受ケテ徵募ニ應ジタル者ハ第二百三十一條ノ例ニ照シテ處斷ス

第百七十九條 醫師化學家其他職業ニ因リ官署ヨリ解剖分析又ハ鑑定ヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第百八十條 裁判所ヨリ證人トシテ證據ヲ陳述スルコトヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ亦前條ニ同シ

第百八十一條 傳染病流行ノ際又ハ傳染病ノ疑アル船舶入港スルニ當リ醫師其病患ヲ検査シ又ハ消毒ノ方法ヲ陳述スルコトヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

獸類傳染病流行ノ際獸醫此條ノ罪ヲ犯シタル時ハ一等ヲ減ス

第四章 信用ヲ害スル罪

第一節 貨幣ヲ偽造スル罪

第百八十二條 內國通用ノ金銀貨及ヒ紙幣ヲ偽造シテ行使シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

若シ偽造シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

現行日本法令大全

第百八十三條 內國ニ於テ通用スル外國ノ金銀貨ヲ偽造シテ行使シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

若シ變造シテ行使シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第百八十四條 官許ヲ得テ發行スル銀行ノ紙幣ヲ偽造シ若クハ變造シテ行使シタル者ハ內外國ノ區別ニ從ヒ前二條ノ例ニ照シテ處斷ス

第百八十五條 內國通用ノ銅貨ヲ偽造シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

若シ變造シテ行使シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第百八十六條 前數條ニ記載シタル貨幣ノ偽造變造已ニ成テ未タ行使セサル者ハ各本刑ニ照シ一等ヲ減シ其未タ成ラサル者ハ二等ヲ減ス

若シ偽造ノ器械ヲ豫備シテ未タ著手セサル者ハ各三等ヲ減ス

第百八十七條 貨幣ヲ偽造變造スルノ情ヲ知テ雇テ受ケタル職工ハ前數條ニ記載シタル犯人ノ受ケ可キ刑ニ照シ各一等ヲ減ス

若シ職工ノ補助ヲ爲シテ雜役ニ供シタル者ハ職工ノ刑ニ照シ一等又ハ二等ヲ減ス

第百八十八條 貨幣ヲ偽造變造スルノ情ヲ知テ房屋ヲ給與シタル者ハ偽造變造ノ各本刑ニ照シ二等ヲ減ス

第百八十九條 偽造變造ノ貨幣ヲ內國ニ輸入シタル者ハ偽造變造ノ刑ニ同シ

第百九十條 偽造變造ノ情ヲ知テ其貨幣ヲ取受シ之ヲ行使

シタル者ハ偽造變造シテ行使シタル者ノ刑ニ照シ各二等ヲ減ス

其未タ行使セサル者ハ各三等ヲ減ス

第百九十一條 前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第百九十二條 貨幣ヲ偽造變造シ及ヒ輸入取受シタル者未タ行使セサル前ニ於テ官ニ自首シタル時ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス

若シ職工雜役及ヒ房屋ヲ給與シタル者未タ行使セサル前ニ於テ自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第百九十三條 貨幣ヲ取受スルノ後ニ於テ偽造又ハ變造ナルコトヲ知リ之ヲ行使シタル者ハ其價額二倍ノ罰金ニ處ス但其罰金ハ二圓以下ニ降スコトヲ得ス

第二節 官印ヲ偽造スル罪

第百九十四條 御璽國璽ヲ偽造シ又ハ其偽璽ヲ使用シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第百九十五條 各官署ノ印ヲ偽造シ又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ重懲役ニ處ス

第百九十六條 產物商品等ニ押用スル官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ輕懲役ニ處ス

又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ輕懲役ニ處ス

書籍什物等ニ押用スル官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第百九十七條 御璽國璽官印記號印章ノ影贋ヲ盜用シタル者ハ前數條ニ記載シタル偽造ノ刑ニ照シ各一等ヲ減ス

若シ監守者自ラ犯シタル時ハ偽造ノ刑ニ同シ

第百九十八條 官ヨリ發行スル各種ノ印紙界紙及ヒ郵便切手

現行日本法令大全

ヲ偽造變造シ又ハ其情ヲ知テ之ヲ使用シタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百九十九條 已ニ貼用シタル各種ノ印紙及ヒ郵便切手ヲ再ヒ貼用シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百一條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三節 官ノ文書ヲ偽造スル罪

第二百二條 詔書ヲ偽造シ又ハ増減變換シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

其詔書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第二百三條 官ノ文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

其官ノ文書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第二百四條 公債證書地券其他官吏ノ公證シタル文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

若シ無記名ノ公債證書ニ係ル時ハ一等ヲ加フ

第二百五條 官吏其管掌ニ係ル文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

其文書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第二百六條 官ノ文書ヲ偽造スルニ因テ官印ヲ偽造シ又ハ盜用シタル者ハ偽造官印ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二百七條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ニ因テ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第四節 私印私書ヲ偽造スル罪

第二百八條 他人ノ私印ヲ偽造シテ使用シタル者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ他人ノ印影ヲ使用シタル者ハ一等ヲ減ス

第二百九條 爲替手形其他裏書ヲ以テ賣買ス可キ證書若クハ金額ト交換ス可キ約定手形ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

其手形證書ニ詐偽ノ裏書ヲ爲シテ行使シタル者亦同シ

第二百十條 賣買貸借贈遺交換其他權利義務ニ關スル證書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其餘ノ私書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百十一條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百十二條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第五節 免狀鑑札及ヒ疾病證書ヲ偽造スル罪

第二百十三條 官ノ免狀又ハ鑑札ヲ偽造シテ行使シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但官印ヲ偽造シ又ハ盜用シタル時ハ偽造官印ノ各本條ニ照シテ處斷ス

第二百十四條 屬籍身分氏名ヲ詐稱シ其他詐偽ノ所爲ヲ以テ免狀鑑札ヲ受ケタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處

シ二回以上二十回以下ノ罰金ヲ附加ス官吏情ヲ知テ其免狀鑑札ヲ下付シタル者ハ一等ヲ加フ

第二百十五條 公務ヲ免カル可キ爲メ醫師ノ氏名ヲ用ヒ疾病ノ證書ヲ偽造シテ行使シタル者ハ自己ノ爲メニシ他人ノ爲メニスルヲ分テ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三回以上三十回以下ノ罰金ヲ附加ス

醫師囑託ヲ受ケテ其詐僞ノ證書ヲ造リタル者ハ一等ヲ加フ

第二百十六條 陸海軍ノ徵兵ヲ免カル可キ爲メ疾病ノ證書ヲ偽造シテ行使シタル者及ヒ囑託ヲ受ケテ其詐僞ノ證書ヲ造リタル醫師ハ前條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百十七條 免狀鑑札及ヒ疾病ノ證書ヲ増減變換シテ行使シタル者ハ亦偽造ノ刑ニ同シ

第六節 偽證ノ罪

第二百十八條 刑事ニ關スル證人トシテ裁判所ニ呼出サレタル者被告人ヲ曲庇スル爲メ事實ヲ掩蔽シテ偽證ヲ爲シタル時ハ左ノ例ニ照シテ處斷ス

一 重罪ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四回以上四十回以下ノ罰金ヲ附加ス

二 輕罪ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二回以上二十回以下ノ罰金ヲ附加ス

三 違警罪ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者ハ違警罪ノ本條ニ依テ處斷ス

第二百十九條 偽證ノ爲メ被告人正當ノ刑ヲ免カレタル時ハ偽證者ノ刑前條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百二十條 被告人ヲ陷害スル爲メ偽證ヲ爲シタル者ハ左ノ例ニ照シテ處斷ス

一 重罪ニ陥ラシムル爲メ偽證シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十回以上五十回以下ノ罰金ヲ附加ス

二 輕罪ニ陥ラシムル爲メ偽證シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四回以上四十回以下ノ罰金ヲ附加ス

三 違警罪ニ陥ラシムル爲メ偽證シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二回以上十回以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十一條 偽證ノ爲メ被告人刑ニ處セラレタル後ニ於テ偽證ノ罪發覺シタル時ハ偽證者ヲ其刑ニ反坐ス若シ反坐ノ刑前條ニ記載シタル偽證ノ刑ヨリ輕キ時ハ前條ノ例ニ照シテ處斷ス

其刑期限内ニ於テ偽證ノ罪發覺シタル時ハ現ニ經過シタル日數ニ照シテ反坐ノ刑期ヲ減スルコトヲ得但減シテ前條偽證ノ刑ヨリ降スコトヲ得ス

第二百二十二條 偽證ノ爲メ被告人死刑ニ處セラレタル時ハ反坐ノ刑ニ等ヲ減ス其未タ刑ヲ執行セサル前ニ於テ發覺シタル時ハ二等ヲ減ス

若シ被告人ヲ死ニ陥ルルノ目的ヲ以テ偽證ヲ爲シタル時ハ死刑ニ反坐ス其未タ刑ヲ執行セサル前ニ於テ發覺シタル時ハ一等ヲ減ス

第二百二十三條 民事商事又ハ行政裁判ニ關シテ偽證ヲ爲シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五回以上五十回以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十四條 鑑定又ハ通事ノ爲メ裁判所ニ呼出サレタル者詐僞ノ陳述ヲ爲シタル時ハ前條ニ記載シタル偽證ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百二十五條 賄賂其他ノ方法ヲ以テ人ニ囑託シテ偽證又

ハ詐僞ノ鑑定通事ヲ爲サシメタル者ハ亦偽證ノ例ニ同シ

第二百二十六條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者其事件ノ裁判宣告ニ至ラサル前ニ於テ自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第七節 度量衡ヲ偽造スル罪

第二百二十七條 度量衡ヲ偽造シ又ハ變造シテ販賣シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十回以上五十回以下ノ罰金ヲ附加ス但官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ濫用シタル時ハ偽造官印ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二百二十八條 偽造變造ノ情ヲ知テ其度量衡ヲ販賣シタル者ハ前條ノ刑ニ一等ヲ減ス

第二百二十九條 商賈農工定規ヲ増減シタル度量衡ヲ所有シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二回以上二十回以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ其度量衡ヲ使用シテ利ヲ得タル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第二百三十條 人ノ囑託ヲ受ケテ度量衡ヲ偽造シ又ハ變造シタル者ハ其囑託シタル犯人ノ刑ニ照シ各一等ヲ減ス

第八節 身分ヲ詐稱スル罪

第二百三十一條 官署ニ對シテ文書又ハ言語ヲ以テ其屬籍身分氏名年齢職業ヲ詐稱シタル者ハ二回以上二十回以下ノ罰金ニ處ス

第二百三十二條 官職位階ヲ詐稱シ又ハ官ノ服飾徽章若クハ内外國ノ勳章ヲ僭用シタル者ハ十五日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ二回以上二十回以下ノ罰金ヲ附加ス

第九節 公選ノ投票ヲ偽造スル罪

第二百三十三條 公選ノ投票ヲ偽造シ又ハ其數ヲ増減シタル

者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ二回以上二十回以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十四條 賄賂ヲ以テ投票ヲ爲サシメ又ハ賄賂ヲ受ケテ投票ヲ爲シタル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ三回以上三十回以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十五條 投票ヲ検査シ及ヒ其數ヲ計算スル者其投票ヲ偽造シ又ハ増減シタル時ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ四回以上四十回以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十六條 調查ヲ造リ投票ノ結局ヲ報告スル者其數ヲ増減シ其他詐僞ノ所爲アル時ハ一年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ五回以上五十回以下ノ罰金ヲ附加ス

第五章 健康ヲ害スル罪

第一節 阿片烟ニ關スル罪

第二百三十七條 阿片烟ヲ輸入シ及ヒ製造シ又ハ之ヲ販賣シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

第二百三十八條 阿片烟ヲ吸食スルノ器具ヲ輸入シ及ヒ之ヲ製造シ又ハ之ヲ販賣シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第二百三十九條 稅關官吏情ヲ知テ阿片烟及ヒ其器具ヲ輸入セシメタル者ハ前二條ノ刑ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百四十條 阿片烟ヲ吸食スル爲メ房屋ヲ給與シテ利ヲ圖ル者ハ輕懲役ニ處ス

人ヲ引誘シテ阿片烟ヲ吸食セシメタル者亦同シ

第二百四十一條 阿片烟ヲ吸食シタル者ハ二年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二百四十二條 阿片烟及ヒ吸食ノ器具ヲ所有シ又ハ受寄シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二節 飲料ノ淨水ヲ汚穢スル罪  
 第二百四十三條 人ノ飲料ニ供スル淨水ヲ汚穢シ因テ之ヲ用フルコト能ハサルニ至ラシメタル者ハ十一日以上一月以下ノ重禁錮ニ處シ二回以上五回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第二百四十四條 人ノ健康ヲ害ス可キ物品ヲ用ヒテ水質ヲ變シ又ハ腐敗セシメタル者ハ一月以下ノ重禁錮ニ處シ三回以上三十回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第二百四十五條 前條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス  
 第三節 傳染病豫防規則ニ關スル罪  
 第二百四十六條 傳染病豫防ノ爲メ設ケタル規則ニ違背シテ入港ノ船舶ヨリ上陸シ又ハ物品ヲ陸地ニ運搬シタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ二十回以上二百回以下ノ罰金ニ處ス  
 第二百四十七條 船長自ラ前條ノ罪ヲ犯シ又ハ人ノ犯スコトヲ知テ制セサル者ハ前條ノ刑ニ一等ヲ加フ  
 第二百四十八條 傳染病流行ノ際豫防規則ニ違背シテ流行地ヲヨリ他處ニ出テタル者ハ十五日以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ十回以上百回以下ノ罰金ニ處ス  
 第二百四十九條 獸類ノ傳染病流行ノ際豫防規則ニ違背シテ獸類ヲ他處ニ出シタル者ハ十一日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ五回以上五十回以下ノ罰金ニ處ス  
 第四節 危害品及ヒ健康ヲ害ス可キ物品製造ノ規則ニ關スル罪  
 第二百五十條 官許ヲ得スシテ危害ヲ生ス可キ物品ノ製造所ヲ創設シタル者ハ二十回以上二百回以下ノ罰金ニ處ス

若シ健康ヲ害ス可キ物品ノ製造所ヲ創設シタル者ハ十回以上百回以下ノ罰金ニ處ス  
 第二百五十一條 官許ヲ得テ前條ニ記載シタル製造所ヲ創設スト雖モ危害ヲ豫防シ健康ヲ保護スル規則ニ違背シタル者ハ前條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス  
 第二百五十二條 前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病死傷ニ致シタル時ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス  
 第五節 健康ヲ害ス可キ飲食物及ヒ藥劑ヲ販賣スル罪  
 第二百五十三條 人ノ健康ヲ害ス可キ物品ヲ飲食物ニ混和シテ販賣シタル者ハ三十回以上三十回以下ノ罰金ニ處ス  
 第二百五十四條 規則ニ違背シテ毒藥劇藥ヲ販賣シタル者ハ十回以上百回以下ノ罰金ニ處ス  
 第二百五十五條 前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス  
 第六節 私ニ醫業ヲ爲スル罪  
 第二百五十六條 官許ヲ得スシテ醫業ヲ爲シタル者ハ十回以上百回以下ノ罰金ニ處ス  
 第二百五十七條 前條ノ犯人治療ノ方法ヲ誤リ因テ人ヲ死傷ニ致シタル時ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス  
 第六章 風俗ヲ害スル罪  
 第二百五十八條 公然猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ三十回以上三十回以下ノ罰金ニ處ス  
 第二百五十九條 風俗ヲ害スル冊子圖畫其他猥褻ノ物品ヲ公然陳列シ又ハ販賣シタル者ハ四十回以上四十回以下ノ罰金ニ處ス  
 第二百六十條 賭場ヲ開設シテ利ヲ圖リ又ハ博徒ヲ招結シ

タル者ハ三月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ十回以上百回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第二百六十一條 財物ヲ賭シテ現ニ博奕ヲ爲シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五回以上五十回以下ノ罰金ヲ附加ス其情ヲ知テ房屋ヲ給與シタル者亦同シ但飲食物ヲ賭スル者ハ此限ニ在ラス  
 賭博ノ器具財物其現場ニ在ル者ハ之ヲ沒收ス  
 第二百六十二條 財物ヲ賭集シ富籤ヲ以テ利益ヲ僥倖スルノ業ヲ興行シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五回以上五十回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第二百六十三條 神祠佛堂墓所其他禮拜所ニ對シ公然不敬ノ所爲アル者ハ二十回以上二十回以下ノ罰金ニ處ス  
 若シ誹謗又ハ禮拜ヲ妨害シタル者ハ四十回以上四十回以下ノ罰金ニ處ス  
 第七章 死屍ヲ毀棄シ及ヒ墳墓ヲ發掘スル罪  
 第二百六十四條 埋葬ス可キ死屍ヲ毀棄シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二回以上二十回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第二百六十五條 墳墓ヲ發掘シテ棺槨又ハ死屍ヲ見ハシタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ三回以上三十回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 因テ死屍ヲ毀棄シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五回以上五十回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第二百六十六條 此章ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未ダ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス  
 第八章 商業及ヒ農工ノ業ヲ妨害スル罪

第二百六十七條 偽計又ハ威力ヲ以テ競類其他衆人ノ需用ニ缺ク可カラサル食用物ノ賣買ヲ妨害シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ三回以上三十回以下ノ罰金ヲ附加ス前項ニ記載シタル以外ノ物品ノ賣買ヲ妨害シタル者ハ一等ヲ減ス  
 第二百六十八條 偽計又ハ威力ヲ以テ糶賣又ハ入札ヲ妨害シタル者ハ十五日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二回以上二十回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第二百六十九條 偽計又ハ威力ヲ以テ農工ノ業ヲ妨害シタル者ハ亦前條ニ同シ  
 第二百七十條 農工ノ雇人其雇賃ヲ増サシメ又ハ農工業ノ景況ヲ變ヘシムル爲メ雇主及ヒ他ノ雇人ニ對シ偽計威力ヲ以テ妨害ヲ爲シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ三回以上三十回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第二百七十一條 雇主其雇賃ヲ減シ又ハ農工業ノ景況ヲ變スル爲メ雇人及ヒ他ノ雇主ニ對シ偽計威力ヲ以テ妨害ヲ爲シタル者ハ亦前條ニ同シ  
 第二百七十二條 虛偽ノ風説ヲ流布シテ競類其他衆人需用物品ノ價直ヲ昂低セシメタル者ハ四十回以上百回以下ノ罰金ニ處ス  
 第九章 官吏濫職ノ罪  
 第一節 官吏公益ヲ害スル罪  
 第二百七十三條 官吏其管掌ニ係ル法律規則ヲ公布施行セズ又ハ他ノ官吏ノ公布施行ヲ妨害シタル者ハ二月以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ十回以上五十回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第二百七十四條 兵隊ヲ要求シ及ヒ之ヲ使用スル權アル官吏



地方ノ騷擾其他兵權ヲ以テ鎮撫ス可キ時ニ當リ其處分ヲ爲  
 サル者ハ三月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上百  
 圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十五條 官吏規則ニ違背シテ商業ヲ爲シタル者ハ二  
 十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二節 官吏人民ニ對スル罪

第二百七十六條 官吏擅ニ威權ヲ用ヒ人ヲシテ其權利ナキ事  
 ヲ行ハシメ又ハ爲ス可キ權利ヲ妨害シタル者ハ十一日以上  
 二月以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加  
 ス

第二百七十七條 人ノ身體財產ヲ妨害スルノ犯人アルニ當リ  
 豫審判事檢察官官吏其報告ヲ受クテ速ニ保護ノ處分ヲ爲  
 サル者ハ十五日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上二  
 十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十八條 逮捕官吏法律ニ定メタル程式規則ヲ遵守セ  
 スシテ人ヲ逮捕シ又ハ不正ニ人ヲ監禁シタル者ハ十五日以  
 上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附  
 加ス但監禁日數十日ヲ過クル毎ニ一等ヲ加フ

第二百七十九條 司獄官吏程式規則ヲ遵守セズシテ囚人ヲ監  
 禁シ若クハ囚人ヲ出獄セシム可キノ時ニ至リ之ヲ放免セザ  
 ル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第二百八十條 前二條ニ記載シタル官吏又ハ職送者囚人ニ  
 對シ飲食衣服ヲ屏去シ其他苛刻ノ所爲ヲ施シタル者ハ三月  
 以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ四十圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ  
 附加ス

因テ囚人ヲ死傷ニ致シタル時ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一

等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス

第二百八十一條 水火震災ノ際官吏囚人ノ監禁ヲ解クコトヲ  
 怠リ因テ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等  
 ヲ加フ

第二百八十二條 裁判官檢察官及ヒ警察官吏被告人ニ對シ罪狀  
 ヲ陳述セシムル爲メ暴行ヲ加ヘ又ハ陵虐ノ所爲アル者ハ四  
 月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五十圓以上五十圓以下ノ罰金  
 ヲ附加ス

因テ被告人ヲ死傷ニ致シタル時ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ  
 一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス

第二百八十三條 裁判官檢察官故ナクシテ刑事ノ訴ヲ受理セ  
 ス又ハ遷延シテ審理セサル者ハ十五日以上三月以下ノ輕禁  
 錮ニ處シ五十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其民事ノ訴ニ係ル者亦同シ

第二百八十四條 官吏人ノ囑託ヲ受ク賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ  
 聽許シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四十圓以上  
 四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ不正ノ處分ヲ爲シタル時ハ一等ヲ加フ

第二百八十五條 裁判官民事ノ裁判ニ關シテ賄賂ヲ收受シ又  
 ハ之ヲ聽許シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五  
 十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ不正ノ裁判ヲ爲シタル時ハ一等ヲ加フ

第二百八十六條 裁判官檢察官官吏刑事ノ裁判ニ關シテ賄  
 賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ二月以上二年以下ノ重  
 禁錮ニ處シ五十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ被告人ヲ曲庇シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ

處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其被告人ヲ陪審シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處  
 シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス若シ枉斷シタル所  
 ノ刑此刑ヨリ重キ時ハ第二百二十一條第二百二十二條ノ例  
 ニ照シテ反坐ス

第二百八十七條 裁判官檢察官官吏賄賂ヲ收受聽許セスト  
 雖モ情ニ徇カヒ又ハ怨ヲ挾キミ被告人ヲ曲庇陪審シタル者  
 ハ亦前條ノ例ニ同シ

第二百八十八條 前數條ニ記載シタル賄賂已ニ收受シタル者  
 ハ之ヲ沒收シ費用シタル者ハ其價ヲ追徵ス

第三節 官吏財產ニ對スル罪

第二百八十九條 官吏自ラ監守スル所ノ金銀物件ヲ竊取シタ  
 ル者ハ輕懲役ニ處ス

因テ官ノ文書簿冊ヲ増減變換シ又ハ毀棄シタル時ハ第二百  
 五條ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百九十條 租稅其他諸般ノ入額ヲ徵收スル官吏正數外  
 ノ金銀ヲ徵收シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ  
 五十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百九十一條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處ス  
 ル者ハ六月以上二年以下ノ監禁ニ付ス

第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪

第一章 身體ニ對スル罪

第一節 謀殺故殺ノ罪

第二百九十二條 豫メ謀テ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ノ罪ト爲シ  
 死刑ニ處ス

第二百九十三條 毒物ヲ施用シテ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ヲ以

テ論シ死刑ニ處ス

第二百九十四條 故意ヲ以テ人ヲ殺シタル者ハ故殺ノ罪ト爲  
 シ無期徒刑ニ處ス

第二百九十五條 支解折割其他慘刻ノ所爲ヲ以テ人ヲ故殺シ  
 タル者ハ死刑ニ處ス

第二百九十六條 重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ已ニ犯  
 シテ其罪ヲ免カル爲メ人ヲ故殺シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百九十七條 人ヲ殺スノ意ニ出テ詐稱誘導シテ危害ニ陷  
 レ死ニ致シタル者ハ故殺ヲ以テ論シ其豫メ謀ル者ハ謀殺ヲ  
 以テ論ス

第二百九十八條 謀殺故殺ヲ行ヒ誤テ他人ヲ殺シタル者ハ仍  
 ホ謀殺故殺ヲ以テ論ス

第二節 毆打創傷ノ罪

第二百九十九條 人ヲ毆打創傷シ因テ死ニ致シタル者ハ重懲  
 役ニ處ス

第三百條 人ヲ毆打創傷シ其兩目ヲ瞎シ兩耳ヲ聾シ又ハ兩  
 肢ヲ折リ及ヒ舌ヲ斷チ陰陽ヲ毀敗シ若クハ知覺精神ヲ喪失  
 セシメ篤疾ニ致シタル者ハ輕懲役ニ處ス

其一目ヲ瞎シ一耳ヲ聾シ又ハ一肢ヲ折リ其他身體ヲ殘廢シ  
 疾病ニ致シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百一條 人ヲ毆打創傷シ二十日以上ノ時間疾病ニ罹リ又  
 ハ職業ヲ營ムコト能ハサルニ至ラシメタル者ハ一年以上三  
 年以下ノ重禁錮ニ處ス

其疾病休業ノ時間二十日ニ至ラサル者ハ一月以上一年以下  
 ノ重禁錮ニ處ス

疾病休業ニ至ラスト雖モ身體ニ創傷ヲ成シタル者ハ十一日

以上一月以下ノ重禁錮ニ處ス  
 第三百二條 豫メ謀テ人ヲ毆打創傷シ休業癱瘓疾又ハ死ニ致シタル者ハ前條ニ記載シタル刑ニ照シ各一等ヲ加フ  
 第三百三條 重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ己ニ犯シテ其罪ヲ免カル、爲メ人ヲ毆打創傷シタル者ハ前條ノ例ニ同シ  
 第三百四條 毆打ニ因リ誤テ他人ヲ創傷シタル者ハ仍ホ毆打創傷ノ本刑ヲ科ス  
 第三百五條 二人以上共ニ人ヲ毆打創傷シタル者ハ現ニ手ヲ下シ傷ヲ成スノ輕重ニ從テ各自ニ其刑ヲ科ス若シ共毆シテ傷ヲ成スノ輕重ヲ知ルコト能ハサル時ハ其重傷ノ刑ニ照シ一等ヲ減ス但致傷者ハ減等ノ限ニ在ラス  
 第三百六條 二人以上共ニ人ヲ毆打スルニ當リ自ラ人ヲ傷セスト雖モ幫助シテ傷ヲ成サシメタル者ハ現ニ傷ヲ成シタル者ノ刑ニ一等ヲ減ス  
 第三百七條 健康ヲ害ス可キ物品ヲ施用シテ人ヲ疾苦セシメタル者ハ豫メ謀テ毆打創傷スルノ例ニ照シテ處斷ス  
 第三百八條 人ヲ殺スノ意ニ非スト雖モ詐稱誘導シテ危害ニ陷ルニ因テ疾病死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ヲ以テ論ス  
 第三百九條 自己ノ身體ニ暴行ヲ受クルニ因リ直チニ怒ヲ發シ暴行人ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス但不正ノ所爲ニ因リ自ラ暴行ヲ招キタル者ハ此限ニ在ラス  
 第三百十條 毆打シテ互ニ創傷シ其手ヲ下スノ先後ヲ知ルコト能ハサル者ハ各其罪ヲ宥恕スルコトヲ得  
 第三百十一條 本夫其妻ノ姦通ヲ覺知シ姦所ニ於テ直チニ姦夫

又ハ姦婦ヲ殺傷シタル者ハ其罰ヲ宥恕ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル者ハ此限ニ在ラス  
 第三百十二條 晝間故ナク人ノ住居シタル邸宅ニ入り若クハ門戶牆壁ヲ踰越損壞セントスル者ヲ防止スル爲メ之ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス  
 第三百十三條 前條ニ記載シタル宥恕ス可キ罪ハ各本條ニ照シ二等又ハ三等ヲ減ス  
 第三百十四條 身體生命ヲ正當ニ防衛シ己ムコトヲ得サルニ由テ暴行人ヲ殺傷シタル者ハ自己ノ爲メニシ他人ノ爲メニシタル分テ其罪ヲ論セス但不正ノ所爲ニ因リ自ラ暴行ヲ招キタル者ハ此限ニ在ラス  
 第三百十五條 左ノ諸件ニ於テ己ムコトヲ得サルニ出テ人ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ論セス  
 一 財産ニ對シ放火其他暴行ヲ爲ス者ヲ防止スルニ出タル時  
 二 盜犯ヲ防止シ又ハ盜賊ヲ取還スルニ出タル時  
 三 夜間故ナク人ノ住居シタル邸宅ニ入り若クハ門戶牆壁ヲ踰越損壞スル者ヲ防止スルニ出タル時  
 第三百十六條 身體財産ヲ防衛スルニ出ルト雖モ己ムコトヲ得サルニ非スシテ暴行人ニ加ヘ又ハ危害己ニ去リタル後ニ於テ勢ニ乘シ仍ホ害ヲ暴行人ニ加ヘタル者ハ不論罪ノ限ニ在ラス但情狀ニ因リ第三百十三條ノ例ニ照シ其罪ヲ宥恕スルコトヲ得  
 第三百十七條 疎虞懈怠又ハ規則慣習ヲ遵守セス過失ニ因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百十八條 過失ニ因テ人ヲ創傷シ癱瘓疾ニ致シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス  
 第三百十九條 過失ニ因テ人ヲ創傷シ疾病休業ニ至ラシメタル者ハ二十圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス  
 第三百二十條 自殺ニ關スル罪  
 第三百二十條 人ヲ教唆シテ自殺セシメ又ハ囑託ヲ受ケテ自殺人ノ爲メニ手ヲ下シタル者ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其他自殺ノ補助ヲ爲シタル者ハ一等ヲ減ス  
 第三百二十一條 自己ノ利ヲ圖リ人ヲ教唆シテ自殺セシメタル者ハ重懲役ニ處ス  
 第三百二十二條 擅ニ人ヲ逮捕監禁スル罪  
 第三百二十二條 擅ニ人ヲ逮捕シ又ハ私家ニ監禁シタル者ハ十一日以上二月以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但監禁日數十日ヲ過ケル毎ニ一等ヲ加フ  
 第三百二十三條 擅ニ人ヲ監禁制縛シテ毆打擄奪シ又ハ飲食衣服ヲ除去シ其他苛刻ノ所爲ヲ施シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ三十圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第三百二十四條 前條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス  
 第三百二十五條 擅ニ人ヲ監禁シ水火震災ノ際其監禁ヲ解クコトヲ怠リ因テ死傷ニ致シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ  
 第三百二十六條 人ヲ殺サント脅迫シ又ハ人ノ居住シタル家屋ニ放火セント脅迫シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

毆打創傷其他暴行ヲ加ヘント脅迫シ又ハ財産ニ放火シ及ヒ毀壞劫奪セント脅迫シタル者ハ十一月以上二月以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第三百二十七條 兇器ヲ持シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ  
 第三百二十八條 親屬ニ害ヲ加フ可キ事ヲ以テ脅迫シタル者ハ亦前二條ノ例ニ同シ  
 第三百二十九條 此節ニ記載シタル罪ハ脅迫ヲ受ケタル者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス  
 第三百三十條 懷胎ノ婦女藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス  
 第三百三十一條 藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎セシメタル者ハ亦前條ニ同シ因テ婦女ヲ死ニ致シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス  
 第三百三十二條 醫師醫藥又ハ藥商前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ  
 第三百三十三條 懷胎ノ婦女ヲ威迫シ又ハ誑騙シテ墮胎セシメタル者ハ一年以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス  
 第三百三十四條 懷胎ノ婦女ナルコトヲ知テ毆打其他暴行ヲ加ヘ因テ墮胎ニ至ラシメタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス其墮胎セシムルノ意ニ出タル者ハ輕懲役ニ處ス  
 第三百三十五條 前二條ノ罪ヲ犯シ因テ婦女ヲ癱瘓疾又ハ死ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス  
 第三百三十六條 八歳ニ滿サル幼者ヲ遺棄シタル者ハ一月以

上一年以下ノ重禁錮ニ處ス  
 自ラ生活スルコト能ハサル老若疾病者ヲ遺棄シタル者亦同  
 第三百三十七條 八歳ニ滿サル幼者又ハ老疾者ヲ寮内無人ノ地ニ遺棄シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス  
 第三百三十八條 給料ヲ得テ人ノ寄託ヲ受テ保養ス可キ者前二條ノ罪ヲ犯シタル時ハ各一等ヲ加フ  
 第三百三十九條 幼者老疾者ヲ遺棄シ因テ痲疾ニ致シタル者ハ輕懲役ニ處シ痲疾ニ致シタル者ハ重懲役ニ處シ死ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處ス  
 第三百四十條 自己ノ所有地又ハ看守ス可キ地内ニ遺棄セラル幼者老疾者アルコトヲ知テ之ヲ扶助セズ又ハ官署ニ申告セサル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス  
 若シ疾病ニ罹リ昏倒スル者アルコトヲ知テ扶助セズ又ハ申告セサル者亦同シ  
 第十節 幼者ヲ奪取誘拐スル罪  
 第三百四十一條 十二歳ニ滿サル幼者ヲ奪取シ又ハ誘拐シテ自ラ藏匿シ若シハ他人ニ交付シタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十回以上百回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第三百四十二條 十二歳以上二十歳ニ滿サル幼者ヲ奪取シテ自ラ藏匿シ若シハ他人ニ交付シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五回以上五十回以下ノ罰金ヲ附加ス其誘拐シテ自ラ藏匿シ若シハ他人ニ交付シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二十回以上二百回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第三百四十三條 奪取誘拐シタル幼者ナルコトヲ知テ自己ノ家屬僕婢トナシ又ハ其他ノ名稱ヲ以テ之ヲ收受シタル者ハ

前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス  
 第三百四十四條 前數條ニ記載シタル罪ハ被害者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス但略取誘拐セララル幼者式ニ從テ婚姻ヲ爲シタル時ハ告訴ノ効ナシ  
 第三百四十五條 十二歳ニ滿サル幼者ヲ略取誘拐シテ外國人ニ交付シタル者ハ輕懲役ニ處ス  
 第十一節 猥褻淫重婚ノ罪  
 第三百四十六條 十二歳ニ滿サル男女ニ對シ猥褻ノ所行ヲ爲シ又ハ十二歳以上ノ男女ニ對シ暴行脅迫ヲ以テ猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ一年以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二十回以上二百回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第三百四十七條 十二歳ニ滿サル男女ニ對シ暴行脅迫ヲ以テ猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ一年以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四十回以上四十回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第三百四十八條 十二歳以上ノ婦女ヲ強姦シタル者ハ輕懲役ニ處ス  
 藥酒等ヲ用ヒ人ヲ昏睡セシメ又ハ精神ヲ錯亂セシメテ姦淫シタル者ハ強姦ヲ以テ論ス  
 第三百四十九條 十二歳ニ滿サル幼者ヲ姦淫シタル者ハ輕懲役ニ處ス若シ強姦シタル者ハ重懲役ニ處ス  
 第三百五十條 前數條ニ記載シタル罪ハ被害者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス  
 第三百五十一條 前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シテ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス但強姦ニ因テ痲疾ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第三百五十二條 十六歳ニ滿サル男女ノ淫行ヲ勸誘シテ媒合シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二十回以上二十回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第三百五十三條 有夫ノ婦姦通シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス其姦通スル者亦同シ  
 此條ノ罪ハ本夫ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル者ハ告訴ノ効ナシ  
 第三百五十四條 配偶者アル者重テ婚姻ヲ爲シタル時ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五回以上五十回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第十二節 誣告及ヒ誹毀ノ罪  
 第三百五十五條 不實ノ事ヲ以テ人ヲ誣告シタル者ハ第二百二十條ニ記載シタル偽證ノ例ニ照シテ處斷ス  
 第三百五十六條 誣告ヲ爲スト雖モ被告人ノ推問ヲ始メザル前ニ於テ誣告者自首シタル時ハ本刑ヲ免ス  
 第三百五十七條 誣告ニ因テ被告人刑ニ處セララル時ハ第二百二十一條第二百二十二條ニ記載シタル例ニ照シテ處斷ス  
 第三百五十八條 惡事醜行ヲ摘發シテ人ヲ誹毀シタル者ハ事實有無ヲ問ハズ左ノ例ニ照シテ處斷ス  
 一 公然ノ演說ヲ以テ人ヲ誹毀シタル者ハ十一日以上三月以下ノ禁錮ニ處シ三回以上三十回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 二 書類畫圖ヲ公布シ又ハ雜劇像ヲ作爲シテ人ヲ誹毀シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五回以上五十回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第三百五十九條 死者ヲ誹毀シタル者ハ輕懲役ニ出タルニ非サ

ノハ前條ノ例ニ照シテ處斷スルコトヲ得ス  
 第三百六十條 醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人若クハ神官僧侶其身分職業ニ於テ委託ヲ受ケタル事ニ因リ知得タル陰私ヲ漏告シタル者ハ誹毀ヲ以テ論シ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ三回以上三十回以下ノ罰金ヲ附加ス但裁判所ノ呼出ヲ受ケテ事實ヲ陳述スル者ハ此限ニ在ラス  
 第三百六十一條 此節ニ記載シタル誹毀ノ罪ハ被害者又ハ死者ノ親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス  
 第十三節 祖父母父母ニ對スル罪  
 第三百六十二條 子孫其祖父母父母ヲ謀殺故殺シタル者ハ死刑ニ處ス  
 其自殺ニ關スル罪ハ凡人ノ刑ニ照シ二等ヲ加フ  
 第三百六十三條 子孫其祖父母父母ニ對シ毆打創傷ノ罪其他監禁脅迫遺棄誣告誹毀ノ罪ヲ犯シタル者ハ各本條ニ記載シタル凡人ノ刑ニ照シ二等ヲ加フ但痲疾ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處シ痲疾ニ致シタル者ハ無期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ死刑ニ處ス  
 第三百六十四條 子孫其祖父母父母ニ對シ衣食ヲ供給セズ其他必要ナル奉養ヲ缺キタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二十回以上二十回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 因テ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ  
 第三百六十五條 祖父母父母ニ對シタル殺傷ノ罪ハ特別ノ宥恕及ヒ不問罪ノ例ヲ用フルコトヲ得ス但其犯ス時知ラサル者ハ此限ニ在ラス  
 第二章 財産ニ對スル罪  
 第一節 竊盜ノ罪

第三百六十六條 人ノ所有物ヲ竊取シタル者ハ竊盜ノ罪ト爲シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百六十七條 水火震災其他ノ變ニ乘シテ竊盜ヲ犯シタル者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百六十八條 門戶牆壁ヲ踰越損壞シ若クハ鎖鑰ヲ開キ邸宅倉庫ニ入り竊盜ヲ犯シタル者ハ亦前條ニ同シ

第三百六十九條 二人以上共ニ前三條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

第三百七十條 兇器ヲ携帶シテ人ノ住居シタル邸宅ニ入り竊盜ヲ犯シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第三百七十一條 自己ノ所有物ト雖モ典物トシテ他人ニ交付シ又ハ官署ノ命令ニ因リ他人ノ看守シタル時之ヲ竊取シタル者ハ竊盜ヲ以テ論ス

第三百七十二條 田野ニ於テ穀類菜葉其他ノ產物ヲ竊取シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百七十三條 山林ニ於テ竹木礦物其他ノ產物ヲ竊取シ又ハ川澤池沼湖海ニ於テ人ノ生業シ若クハ營業ニ關スル物產ヲ竊取シタル者ハ亦前條ニ同シ

第三百七十四條 牧場ニ於テ牧畜ノ獸類ヲ竊取シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百七十五條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未ダ遂クサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百七十六條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三百七十七條 祖父母父母夫妻子孫及ヒ其配偶者又ハ同居ノ兄弟姊妹互ニ其財物ヲ竊取シタル者ハ竊盜ヲ以テ論スル

ノ限ニ在ラス

若シ他人共ニ犯シテ財物ヲ分チタル者ハ竊盜ヲ以テ論ス

第二節 強盜ノ罪

第三百七十八條 人ヲ脅迫シ又ハ暴行ヲ加ヘテ財物ヲ強取シタル者ハ強盜ノ罪ト爲シ輕懲役ニ處ス

第三百七十九條 強盜左ニ記載シタル情狀アル者ハ一個毎ニ一等ヲ加フ

一 二人以上共ニ犯シタル時

二 兇器ヲ携帶シテ犯シタル時

第三百八十條 強盜人ヲ傷シタル者ハ無期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ死刑ニ處ス

第三百八十一條 強盜婦女ヲ強姦シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第三百八十二條 竊盜財ヲ得テ其取還ヲ拒ク爲メ臨時暴行脅迫ヲ爲シタル者ハ強盜ヲ以テ論ス

第三百八十三條 藥酒等ヲ用ヒテ人ヲ昏迷セシメ其財物ヲ盜取シタル者ハ強盜ヲ以テ論シ輕懲役ニ處ス

第三百八十四條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ減輕ニ因テ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三節 遺失物埋藏物ニ關スル罪

第三百八十五條 遺失及ヒ漂流ノ物品ヲ拾得テ隱匿シ所有主ニ還付セス又ハ官署ニ申告セサル者ハ十一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二月以上二十回以下ノ罰金ニ處ス

第三百八十六條 他人ノ所有地内ニ於テ埋藏ノ物品ヲ掘得テ隱匿シタル者ハ亦前條ニ同シ

第三百八十七條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者第三百七十七條ニ掲ケタル親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

第四節 家資分散ニ關スル罪

第三百八十八條 家資分散ノ際其財產ヲ藏匿脱漏シ又ハ虛偽ノ負債ヲ增加シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス情ヲ知テ虛偽ノ契約ヲ承諾シ若クハ其媒介ヲ爲シタル者ハ一等ヲ減ス

第三百八十九條 家資分散ノ際簿ノ類ヲ藏匿毀棄シ若クハ分散決定ノ後債主中ノ一人又ハ數人ニ其負債ヲ私償シテ他ノ債主ヲ害シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

第三百九十條 人ヲ欺罔シ又ハ恐喝シテ財物若クハ證書類ヲ騙取シタル者ハ詐欺取財ノ罪ト爲シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四回以上四十回以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ官私ノ文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シタル者ハ偽造ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第三百九十一條 幼者ノ知慮淺薄又ハ人ノ精神錯亂シタルニ乘シテ其財物若クハ證書類ヲ授與セシメタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第三百九十二條 物件ヲ販賣シ又ハ交換スルニ當リ其物質ヲ變シ若クハ分量ヲ偽テ人ニ交付シタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第三百九十三條 他人ノ動產不動產ヲ冒認シテ販賣交換シ又ハ抵當典物ト爲シタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

自己ノ不動產ト雖モ己ニ抵當典物ト爲シタルヲ欺隱シテ他人ニ賣與シ又ハ重子ヲ抵當典物ト爲シタル者亦同シ

第三百九十四條 前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三百九十五條 受寄ノ財物借用物又ハ典物其他委託ヲ受ケタル金額物件ヲ費消シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス若シ騙取拐帶其他詐欺ノ所爲アル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第三百九十六條 自己ノ所有ニ係ルト雖モ官署ヨリ差押ヘタル物件ヲ藏匿脱漏シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス但家資分散ノ際此罪ヲ犯シタル者ハ第三百八十八條ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百九十七條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未ダ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百九十八條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者第三百七十七條ニ掲ケタル親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

第六節 贓物ニ關スル罪

第三百九十九條 強竊盜ノ贓物ナルコトヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若クハ牙保ヲ爲シタル者ハ一月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ三回以上三十回以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百條 前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第四百一條 詐欺取財其他ノ犯罪ニ關シタル物件ナルコトヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若クハ牙保ヲ爲シタル者ハ十日以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二回以上二十回以下ノ罰金ヲ附加ス

第七節 放火失火ノ罪

第四百二條 火ヲ放テ人ノ住居シタル家屋ヲ燒燬シタル者ハ死刑ニ處ス

第四百三條 火ヲ放テ人ノ住居セサル家屋其他ノ建造物ヲ燒

燬シタル者ハ無期徒刑ニ處ス  
 第四百四條 火ヲ放テ廢屋及ヒ柴草肥料等ヲ貯フル屋舎ヲ燒燬シタル者ハ重懲役ニ處ス  
 第四百五條 火ヲ放テ人ヲ乘載シタル船舶汽車ヲ燒燬シタル者ハ死刑ニ處ス  
 其人ヲ乘載セサル船舶汽車ニ係ル時ハ重懲役ニ處ス  
 第四百六條 火ヲ放テ山林ノ竹木田野ノ穀麥又ハ露積シタル柴草竹木其他ノ物件ヲ燒燬シタル者ハ輕懲役ニ處ス  
 第四百七條 火ヲ放テ自己ノ家屋ヲ燒燬シタル者ハ二月以上二年以下ノ重懲役ニ處ス  
 第四百八條 放火ノ罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監禁ニ付ス  
 第四百九條 火ヲ失シテ人ノ家屋財産ヲ燒燬シタル者ハ二回以上二十回以下ノ罰金ニ處ス  
 第四百十條 火藥其他激發ス可キ物品又ハ煤氣非蒸氣罐ヲ破裂セシメテ人ノ家屋財産ヲ毀壞シタル者ハ其故意ニ出ルト過失トテ分テ放火失火ノ例ニ照シテ處斷ス  
 第八節 洪水ノ罪  
 第四百十一條 堤防ヲ決潰シ又ハ水閘ヲ毀壞シテ人ノ住居シタル家屋ヲ漂流シタル者ハ無期徒刑ニ處ス  
 若シ人ノ住居セサル家屋其他ノ建造物ヲ漂流シタル者ハ重懲役ニ處ス  
 第四百十二條 堤防ヲ決潰シ水閘ヲ毀壞シテ田圃礦坑牧場等ヲ荒廢シタル者ハ輕懲役ニ處ス  
 第四百十三條 他人ノ便益ヲ損シ又ハ自己ノ便益ヲ圖ル爲メ堤防ヲ決潰シ水閘ヲ毀壞シ其他水利ヲ妨害シタル者ハ一月以上二年以下ノ重懲役ニ處シ二回以上二十回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第四百十四條 過失ニ因テ水害ヲ起シタル者ハ失火ノ例ニ照シテ處斷ス  
 第九節 船舶ヲ覆没スル罪  
 第四百十五條 衝突其他ノ所爲ヲ以テ人ヲ乘載シタル船舶ヲ覆没シタル者ハ死刑ニ處ス但船中死亡ナキ時ハ無期徒刑ニ處ス  
 第四百十六條 前條ノ所爲ヲ以テ人ヲ乘載セサル船舶ヲ覆没シタル者ハ輕懲役ニ處ス  
 第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪  
 第四百十七條 人ノ家屋其他ノ建造物ヲ毀壞シタル者ハ一月以上五年以下ノ重懲役ニ處シ二回以上五十回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス  
 第四百十八條 人ノ家屋ニ屬スル牆壁及ヒ圍池ノ裝飾又ハ田圃ノ樊園牧場ノ柵欄ヲ毀壞シタル者ハ十一月以上三月以下ノ重懲役ニ處シ又ハ二回以上二十回以下ノ罰金ニ處ス  
 第四百十九條 人ノ稼穡竹木其他需用ノ植物ヲ毀損シタル者ハ十一月以上六月以下ノ重懲役ニ處シ又ハ三回以上三十回以下ノ罰金ニ處ス  
 第四百二十條 土地ノ經界ヲ表シタル物件ヲ毀壞シ又ハ移轉シタル者ハ一月以上六月以下ノ重懲役ニ處シ二回以上二十回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第四百二十一條 人ノ器物ヲ毀棄シタル者ハ十一月以上六月

以下ノ重懲役ニ處シ又ハ三回以上三十回以下ノ罰金ニ處ス  
 第四百二十二條 人ノ牛馬ヲ殺シタル者ハ一月以上六月以下ノ重懲役ニ處シ二回以上二十回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第四百二十三條 前條ニ記載シタル以外ノ家畜ヲ殺シタル者ハ二回以上二十回以下ノ罰金ニ處ス但被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス  
 第四百二十四條 人ノ權利義務ニ關スル證書類ヲ毀棄滅盡シタル者ハ二月以上四年以下ノ重懲役ニ處シ三回以上三十回以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第四編 違警罪  
 第四百二十五條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ三日以上十日以下ノ拘留ニ處シ又ハ一回以上一回九十五錢以下ノ科料ニ處ス  
 一 規則ヲ遵守セスシテ火藥其他破裂ス可キ物品ヲ市外ニ運搬シタル者  
 二 規則ヲ遵守セスシテ火藥其他破裂ス可キ物品又ハ自ら火ヲ發ス可キ物品ヲ貯藏シタル者  
 三 官許ヲ得スシテ烟火ヲ製造シ又ハ販賣シタル者  
 四 人家稠密ノ場所ニ於テ濫リニ烟火其他火器ヲ玩ヒタル者  
 五 蒸氣器械其他烟筒火籠ヲ建造修理シ及ヒ掃除スル規則ニ違背シタル者  
 六 官署ノ督促ヲ受ケテ崩壞セントスル家屋牆壁ノ修理ヲ爲ササル者  
 七 官許ヲ得スシテ死屍ヲ解剖シタル者  
 八 自己ノ所有地内ニ死屍アルニトシテ知テ官署ニ申告セス又ハ他所ニ移シタル者  
 九 人ヲ毆打シテ創傷疾病ニ至ラサル者  
 十 密ニ賣淫ヲ爲シ又ハ其媒合容止ヲ爲シタル者  
 十一 人ノ住居セサル家屋内ニ潜伏シタル者  
 十二 定リタル住居ナク平常營生ノ產業ヲクシテ諸方ニ徘徊スル者  
 十三 官許ノ墓地外ニ於テ私ニ埋葬シタル者  
 十四 違警罪ノ犯人ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者但被告人偽證ノ爲メ刑ヲ免カレタル時ハ第二百十九條ノ例ニ從テ  
 第四百二十六條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ二日以上五日以下ノ拘留ニ處シ又ハ五十錢以上一回五十錢以下ノ科料ニ處ス  
 一 人家ノ近傍又ハ山林田野ニ於テ濫リニ火ヲ焚ク者  
 二 水火其他ノ變ニ際シ官吏ヨリ防禦ス可キノ求メテ受ケ傍觀シテ之ヲ背セサル者  
 三 不熟ノ菓物又ハ腐敗シタル飲食物ヲ販賣シタル者  
 四 健康ヲ保護スル爲メ設ケタル規則又ハ傳染病豫防規則ニ違背シタル者  
 五 人ノ通行ス可キ場所ニアル危險ノ井溝其他凹所ニ蓋又ハ防圍ヲ爲ササル者  
 六 路上ニ於テ犬其他ノ獸類ヲ嘯シ又ハ驚逸セシメタル者  
 七 發狂人ノ看守ヲ怠リ路上ニ徘徊セシメタル者  
 八 狂犬猛獸等ノ繫鎖ヲ怠リ路上ニ放チタル者  
 九 變死人ノ檢視ヲ受ケスシテ埋葬シタル者  
 十 墓碑及ヒ路上ノ神佛ヲ毀損シ又ハ汚穢シタル者  
 十一 神祠佛堂其他公ノ建造物ヲ汚損シタル者  
 十二 公然人ヲ罵詈訕弄シタル者但訴テ待テ其罪ヲ論ス

- 第四百二十七條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日以上三日以下ノ拘留ニ處シ又ハ二十錢以上一圓二十五錢以下ノ科料ニ處ス
- 一 濫リニ車馬ヲ疾驅シテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
  - 二 制止ヲ肯セスシテ人ノ群集シタル場所ニ車馬ヲ率キタル者
  - 三 夜中燈火ナクシテ車馬ヲ疾驅スル者
  - 四 木石等ヲ道路ニ堆積シテ防圍ヲ設クス又ハ標識ノ點燈ヲ怠リタル者
  - 五 瓦礫ヲ道路家屋圍ニ投擲シタル者
  - 六 禽獸ノ死屍ヲ道路ニ棄擲シ又ハ取除カサル者
  - 七 汚穢物ヲ道路家屋圍ニ投擲シタル者
  - 八 警察ノ規則ニ違背シテ工商ノ業ヲ爲シタル者
  - 九 醫師穩婆事故ナクシテ急病人ノ招キニ應セサル者
  - 十 死亡ノ申告ヲ爲サズシテ埋葬シタル者
  - 十一 流言浮説ヲ爲シテ人ヲ誑惑シタル者
  - 十二 妄ニ吉凶禍福ヲ説キ又ハ祈禱符呪等ヲ爲シ人ヲ惑ハシテ利ヲ圖ル者
  - 十三 私有地外へ濫リニ家屋牆壁ヲ設ク又ハ軒楹ヲ出シタル者
  - 十四 官許ヲ得スシテ路傍又ハ河岸ニ床店等ヲ開キタル者
  - 十五 路上ノ植木市街ノ常燈及ヒ厠場等ヲ毀損シタル者
  - 十六 道路橋梁其他ノ場所ニ榜示シタル通行禁止及ヒ指道標ノ類ヲ毀棄汚損シタル者
- 第四百二十八條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日ノ拘留ニ處シ又ハ十錢以上一圓以下ノ科料ニ處ス

- 一 官署ヨリ價額ヲ定メタル物品ヲ定價以上ニ販賣シタル者
  - 二 渡船橋梁其他ノ場所ニ於テ定價以上ノ通行錢ヲ取り又ハ故ナク通行ヲ妨ケタル者
  - 三 渡船橋梁其他ノ通行錢ヲ拂フ可キ場所ニ於テ其定價ヲ出サズシテ通行シタル者
  - 四 路上ニ於テ賭博ニ類スル商業ヲ爲シタル者
  - 五 官許ヲ得スシテ劇場其他觀物場ヲ開キ及ヒ其規則ニ違背シタル者
  - 六 溝渠下水ヲ毀損シ又ハ官署ノ督促ヲ受ケテ溝渠下水ヲ浚ハサル者
  - 七 制止ヲ肯セスシテ路傍ニ食物其他ノ商品ヲ羅列シタル者
  - 八 官許ヲ得スシテ獸類ヲ官有地ニ放チ又ハ牧畜シタル者
  - 九 身體ニ刺文ヲ爲シ及ヒ之ヲ業トスル者
  - 十 他人ノ繫キタル牛馬其他ノ獸類ヲ解放シタル者
  - 十一 他人ノ繫キタル舟筏ヲ解放シタル者
- 第四百二十九條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ五十錢以上一圓以下ノ科料ニ處ス
- 一 橋梁又ハ堤防ノ害ト爲ル可キ場所ニ舟筏ヲ繫キタル者
  - 二 牛馬諸車其他物件ヲ道路ニ横ク又ハ木石薪炭等ヲ堆積シテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
  - 三 車馬ヲ並ハ率テ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
  - 四 水路ニ於テ舟ヲ並ヘ通船ノ妨害ヲ爲シタル者
  - 五 氷雪塵芥等ヲ路上ニ投棄シタル者
  - 六 官署ノ督促ヲ受ケテ道路ノ掃除ヲ爲ササル者

- 七 制止ヲ肯セスシテ路上ニ遊戯ヲ爲シ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
  - 八 牛馬ヲ率キ又ハ繫クコトヲ忽カセニシテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
  - 九 出入ヲ禁止シタル場所ニ濫リニ出入シタル者
  - 十 通行禁止ノ榜示ヲ犯シテ通行シタル者
  - 十一 道路ニ於テ放歌高聲ヲ發シテ制止ヲ肯セサル者
  - 十二 酩酊シテ路上ニ喧嘩シ又ハ醉臥シタル者
  - 十三 路上ノ常燈ヲ消シタル者
  - 十四 人家ノ牆壁ニ貼紙及ヒ藥書シタル者
  - 十五 邸宅ノ番號標札招牌又ハ貸家賣家ノ貼紙其他報告ノ榜標等ヲ毀損シタル者
  - 十六 他人ノ田野圍圍ニ於テ菜菓ヲ採食シ又ハ花卉ヲ採折シタル者
  - 十七 公園ノ規則ヲ犯シタル者
  - 十八 通路ナキ他人ノ田圃ヲ通行シ又ハ牛馬ヲ率入シタル者
- 第四百三十條 前數條ニ記載スルノ外各地方ノ便宜ヨリ定ムル所ノ違背罪ヲ犯シタル者ハ其罰則ニ從テ處斷ス
- 決闘罪 明治二十二年十二月 法律第三十四號
- 朕決闘罪ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
- 第一條 決闘ヲ挑ミタル者又ハ其挑ニ應シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス
  - 第二條 決闘ヲ行ヒタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

- シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 第三條 決闘ニ依テ人ヲ殺傷シタル者ハ刑法ノ各本條ニ照シテ處斷ス
- 第四條 決闘ノ立會ヲ爲シ又ハ立會ヲ爲スコトヲ約シタル者ハ證人介添人等何等ノ名義ヲ以テスルニ拘ラス一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 情ヲ知テ決闘ノ場所ヲ貸與シ又ハ供用セシメタル者ハ罰前條ニ同シ
- 第五條 決闘ノ挑ニ應セサルノ故ヲ以テ人ヲ誹毀シタル者ハ刑法ニ照シ誹毀ノ罪ヲ以テ論ス
- 第六條 前數條ニ記載シタル犯罪刑法ニ照シ其重キモノハ重キニ從テ處斷ス
- 明治十七年第一號布告廢止ノ件 明治二十二年六月 法律第十七號
- 朕明治十七年第一號布告廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
- 明治十七年第一號布告ヲ廢ス
- 竊盜罪 明治二十三年十月 法律第九十九號
- 朕竊盜ノ罪ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス
- 第一條 家屋其他ノ建造物外ニ於テ犯シタル竊盜ニシテ未タ遂クサル者又ハ已ニ遂クタルモ其贓額五圓ニ滿サル者ハ十日以上二月以下ノ重禁錮ニ處ス

第二條 田野、山林、川澤、池沼、湖海ニ於テ其產物ヲ竊取セシトシ又ハ牧場ニ於テ其獸類ヲ竊取セントシテ未ダ遂クサル者又ハ己ニ竊取シタルモ其贓額五圓ニ滿サル者亦前條ニ同シ

第三條 前二條ニ記載シタル贓額ハ犯罪ノ地及ヒ其時ニ於ケル物價ニ據リ裁判所之ヲ定ム但贓物現存セザルトキハ其中等ノ價額ニ據ル可シ

○讒謗律

明治八年六月 布告第百十號

讒謗律別冊之通被定候條此旨布告候事

讒謗律(別冊)

第一條 凡ソ事實ノ有無ヲ論セス人ノ榮譽ヲ害スヘキノ行事ヲ摘發公布スル者之ヲ讒毀トス人ノ行事ヲ舉ルニ非スシテ惡名ヲ以テ人ニ加ヘ公布スル者之ヲ誹謗トス著作文書若クハ畫圖肖像ヲ用ヒ展覧シ若クハ發賣シ若クハ貼示シテ人ヲ讒毀シ若クハ誹謗スル者ハ下ノ條別ニ從テ罪ヲ科ス

第二條 第一條ノ所爲ヲ以テ乘輿ヲ犯スニ涉ル者ハ禁獄三月以上三年以下罰金五十圓以上千圓以下(二罰并科シ或ハ偏ヘニ罰ヲ科ス以下之ニ從ヘ)

第三條 皇族ヲ犯スニ涉ル者ハ禁獄十五日以上二年半以下罰金十五圓以上七百圓以下

第四條 官吏ノ職務ニ關シ讒毀スル者ハ禁獄十日以上二年以下罰金十圓以上五百圓以下誹謗スル者ハ禁獄五日以上一年以下罰金五圓以上三百圓以下

第五條 華士族平民ニ對スルヲ論セス讒毀スル者ハ禁獄七日以上一年半以下罰金五圓以上三百圓以下誹謗スル者ハ罰金

三圓以上百圓以下

第六條 法ニ依リ檢官若クハ法官ニ向テ犯罪ヲ告發シ若クハ證スル者ハ第一條ノ例ニアラス其ノ故造誣告シタル者ハ誣告律ニ依ル

第七條 若シ讒毀ヲ受ルノ事刑法ニ觸ル、者檢官ヨリ其事ヲ糾治スルカ若クハ讒毀スル者ヨリ檢官若クハ法官ニ告發シタル時ハ讒毀ノ罪ヲ治ムルコトヲ中止シ以テ事案ノ決ヲ俟テ其ノ被告人罪ニ坐スル時ハ讒毀ノ罪ヲ論セス

若シ事刑法ニ觸レズシテ單ヘニ人ノ榮譽ヲ害スル者ハ讒毀スルノ後官ニ告發スト雖モ仍ホ讒毀ノ罪ヲ治ム

第八條 凡ソ讒毀誹謗ノ第四條第五條ニ係ル者ハ被害ノ官民自ラ告ルヲ待テ乃チ論ス

○刑法附則

明治十四年十二月 布告第百十七號

刑法附則別冊ノ通相定メ明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

刑法附則(別冊)

第一章 主刑執行

第一條 死刑ハ其執行ヲ爲ス裁判所ノ檢察官書記及ヒ獄司刑場ニ立會獄司ヨリ囚人ニ死刑ヲ執行スヘキコトヲ告示シタル後獄丁ヲシテ之ヲ執行セシム但其時限ハ午前十時前トス

第二條 死刑ヲ行フ時ハ刑場ノ警戒ヲ嚴シ執行ニ關スル者ノ外刑場ニ入ルコトヲ許サズ但立會官吏ノ許可ヲ得タル者ハ此限ニアラス

第三條 死刑ノ執行畢リタル時ハ書記其始末書ヲ作り立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印シ之ヲ裁判所ノ檢事局ニ納ム

可シ

第四條 左ニ記載シタル日ハ死刑ヲ行フコトヲ禁ス

元始祭  
孝明天皇祭  
紀元節  
春季皇靈祭  
仁孝天皇祭  
神武天皇祭  
六月大祓  
秋季皇靈祭  
神宮神嘗祭  
天長節  
後桃園天皇祭  
新嘗祭  
光格天皇祭  
十二月大祓

第五條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懷胎ト申立ル者ハ醫師及ヒ穩婆ヲシテ之ヲ檢査セシメ果シテ懷胎ナル時ハ檢査官ヨリ司法卿ニ上申シテ其執行ヲ停メ産後一百日ヲ經テ更ニ司法卿ノ命令ヲ受ケ執行スヘシ

第六條 死刑ノ遺骸ハ一定ノ場所ニ埋ム若シ親屬故舊請フ者アル時ハ獄司之ヲ許可シ下付スルコトヲ得

第七條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル者執行ニ至ルマテ何時コトモ獄司ノ許可ヲ得テ其親屬故舊ニ接見スルコトヲ得

第八條 死刑ヲ執行シタル時ハ犯人ノ屬籍氏名年齢職業住所及ヒ其罪狀刑名ヲ記載シテ左ノ各所ニ榜示公告ス可シ

刑ヲ宣告シタル裁判所ノ門前

犯罪ノ地  
犯人住居ノ地

第九條 徒流ノ囚ヲ發遣スルハ裁判所ヲ爲シタル地ノ獄司ヨリ内務卿ニ上申シ其命令ヲ待テ發船ノ地ニ護送ス可シ

第十條 徒流ノ囚ハ島地ニ於テ便宜ニ從ヒ獄外ノ役ニ服セシムルコトヲ得

第十一條 流刑ノ囚幽閉中獄内ニ於テ自ラ工業ヲ爲サント請フ者ハ獄司之ヲ許可シ

第十二條 流刑ノ囚幽閉ヲ免ス可キ者アル時ハ獄司ヨリ内務卿ニ上申シ其許可ヲ受ケヘシ

第十三條 徒流ノ囚假出獄ヲ許サレタル者又ハ流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル者家屬ヲ招キ同居スルヲ請フ時ハ之ヲ許スコトヲ得但其路費ハ自ラ之ヲ辨ス可シ

第十四條 流刑ノ囚幽閉ヲ免シ地ヲ限リ居住セシムル者ハ監獄近傍ノ地ヲ限リ獄司ノ監督ヲ受ケシム若シ己ムコトヲ得サル事故アル時ハ獄司ニ請フテ限外ニ出ルコトヲ得

第十五條 流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル者再ヒ罪ヲ犯シタル時ハ本刑期限内ト雖モ島地ニ於テ直チニ其刑ヲ執行ス可シ

第十六條 懲役重禁錮ノ囚ハ便宜ニ從ヒ獄外ノ役ニ服セシムルコトヲ得

第十七條 禁獄輕禁錮ノ囚獄内ニ於テ自ラ工業ヲ爲サント請フ者ハ獄司之ヲ許可シ

第十八條 服役限内更ニ罪ヲ犯シ再ヒ定役ニ服スル者後犯ノ刑期百日以内ハ工錢ヲ給與セス

第十九條 囚人ニ級與スル工錢ノ額ヲ定メ之ヲ交付シ及ヒ領

現行日本法令大全

置スル方法ハ監獄ノ規則ニ從フ

第二十條 罰金科料ノ宣告ヲ受ケ未タ納完セサル前ニ於テ犯人身死スル時ハ之ヲ徵收セス附加ノ罰金ニ於ル亦同シ

第二章 監視

第二十一條 監視ハ主刑ノ終リタル後仍ホ將來ヲ檢束スル爲メ警察官吏ヲシテ犯人ノ行狀ヲ監視セシムル者トス

第二十二條 監視ニ付ス可キ者ハ豫メ其住所ヲ定メシメ主刑ノ終リタル時典獄ヨリ最近ノ警察所ニ護送シ其警察所ヨリ住居ノ地ノ警察所ニ送致シ監視ヲ執行セシム但主刑ノ期間満了除テ得タル者又ハ主刑ヲ止メ監視ニ付スル者ハ其裁判所ノ檢察官ヨリ護送スヘシ(十五年第四十二號布告ヲ以テ全條改正)

第二十三條 犯人ヲ警察所ニ護送スル時ハ其監視ノ起算滿期ヲ記載シタル文書及ヒ刑名宣告書ノ謄本ヲ附ス可シ

第二十四條(同上布告ヲ以テ別除ス)

第二十五條 警察所ヨリ犯人ヲ住居ノ地ノ警察所ニ送致スル時ハ其里程ヲ計リ日數ヲ限定シテ旅券ヲ付與シ犯人到着ノ日直チニ之ヲ其地ノ警察所ニ差出シシム但途中事故アリテ淹滞シタル時ハ第三十一條ノ例ニ從フ可シ

犯人ヲ送致スル時ハ第二十三條ニ記載シタル書類ヲ其地ノ警察所ニ遞送ス可シ

第二十六條 犯人住居ノ地ノ警察所ニ於テハ監視ノ期間間違守ス可キ條件ヲ證明カセ監視ノ票ヲ下付ス可シ

第二十七條 監視ニ付セラレタル者ハ其期間間左ノ條件ヲ遵守ス可シ

一 毎月二度所轄ノ警察所ニ到リ其謹慎ナルコトヲ表示シ監視ノ票ヲ出シ官吏ノ認印ヲ受ク可シ但疾病又ハ已ムコトヲ得サル事故アリテ警察所ニ到ルコト能ハサル時ハ其事由ヲ届出ツ可シ

二 酒宴遊興ノ席ニ會シ又ハ群集ノ場所ニ參會スルコトヲ許サス

三 事故アリテ其住居ヲ轉移セントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ但他ノ府縣ニ轉移スルコトヲ許サス

四 往復一日程ヲ過クル地ニ旅行スルコトヲ許サス

第四十五條 特別監視ノ期間間ハ警察官吏時宜ニ因リ其家宅ニ臨檢スルコトアル可シ

第四十六條 假出獄ヲ許サレタル者刑期滿限ノ日ニ至レハ假出獄證票ヲ警察所ニ還納シ警察所ヨリ證票ヲ出シタル獄司ニ遞送ス可シ

主刑滿限ノ後監視ニ付ス可キ犯人ナル時ハ警察所ニ於テ第二章ノ例ニ從テ處分ス可シ

現行日本法令大全

第三十三條 懲治場ニ留置シタル者限内引取人ヲ得又ハ住居ノ地ニ歸著スル資力ヲ得タル時ハ其地ニ送致シテ殘期ノ監視ヲ執行セシム可シ

第三十四條 刑期限内再ヒ罪ヲ犯シ初犯再犯共ニ監視ニ付スヘキ時又ハ監視ノ期限間再ヒ罪ヲ犯シ更ニ監視ニ付スヘキ時ハ並ニ主刑滿限ノ後前後ノ期限ヲ通算シテ監視ヲ執行ス可シ

第三十五條 罰金ヲ禁錮ニ換ヘタル者監視ニ付ス可キ時ハ其禁錮ノ日數ヲ監視ノ期限ニ算入ス可シ

第三十六條 監視ニ付セラレタル者其規則ヲ遵守シ悛改ノ狀アル時ハ警察官ヨリ其實情ヲ上申シ内務司法兩卿ノ命ヲ受ケテ假ニ監視ヲ免スルコトヲ得

第三十七條 假ニ監視ヲ免セラレタル者住居ヲ轉移スル時ハ第二十七條第三及ヒ第二十九條ノ例ニ從フ可シ

第三章 假出獄及ヒ特別監視

第三十八條 假出獄ヲ許ス可キ者アル時ハ獄司ヨリ其犯人ノ行狀及ヒ刑名入獄ノ年月ヲ記載シ假ニ出獄ヲ許サレノコトヲ内務司法兩卿ニ上申シテ許可ヲ受ク可シ

第三十九條 假出獄ヲ許シタル時ハ獄司ヨリ其證票ヲ犯人ニ下附ス可シ

第四十條 假出獄證票ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一 本人ノ屬籍氏名年齢住所刑名及ヒ處刑ノ年月日

二 殘期何年何月何日假出獄ヲ許ス事

三 假出獄中ハ特別監視ニ付ス可キ事

四 假出獄中更ニ重罪罪ヲ犯シタル時ハ直チニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ヲ刑期ニ算入セサル事

第四十一條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者假出獄中自ラ財產ヲ治メ若クハ職業ヲ營マントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ

第四十二條 假出獄ヲ許ス可キ者ハ豫メ其住所ヲ定メシメ出獄ノ日典獄ヨリ其證票ノ謄本ヲ添ヘ第二十二條ノ例ニ依リ犯人ヲ護送シ特別監視ヲ執行セシム可シ(十五年第四十二號布告ヲ以テ改正)

第四十三條 特別監視ニ付スル者ハ第二十三條第二十四條第二十五條第二十六條第二十九條第三十一條ノ例ヲ適用ス

第四十四條 特別監視ニ付セラレタル者ハ其期間間左ノ條件ヲ遵守ス可シ

一 每週間一度所轄ノ警察所ニ到リ其謹慎ナルコトヲ表示シ監視ノ票ヲ出シ官吏ノ認印ヲ受ク可シ但疾病又ハ已ムコトヲ得サル事故アリテ警察所ニ到ルコト能ハサル時ハ其事由ヲ届出ツ可シ

二 酒宴遊興ノ席ニ會シ又ハ群集ノ場所ニ參會スルコトヲ許サス

三 事故アリテ住居ヲ轉移セントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ但他ノ府縣ニ轉移スルコトヲ許サス

四 往復一日程ヲ過クル地ニ旅行スルコトヲ許サス

第四十五條 特別監視ノ期間間ハ警察官吏時宜ニ因リ其家宅ニ臨檢スルコトアル可シ

第四十六條 假出獄ヲ許サレタル者刑期滿限ノ日ニ至レハ假出獄證票ヲ警察所ニ還納シ警察所ヨリ證票ヲ出シタル獄司ニ遞送ス可シ

主刑滿限ノ後監視ニ付ス可キ犯人ナル時ハ警察所ニ於テ第二章ノ例ニ從テ處分ス可シ



第四十七條 假出獄ヲ許ス可キ者住所ナク及ヒ引取人ナキ時ハ第三十二條ノ例ニ從ヒ懲治場ニ留置ス可シ

第四章 刑事裁判費用

第四十八條 豫審公判ニ付キ呼出シタル證人醫師鑑定人通辯人翻譯人ニ給與ス可キ日當旅費止宿料及ヒ第五十一條第五十二條ニ記載シタル者ヲ以テ刑事ノ裁判費用ト爲ス

第四十九條 日當旅費及ヒ止宿料ハ左ノ制限ニ據リ各地方適宜其額ヲ定ム可シ

日當五十錢以下

旅費一里拾錢以下

止宿料一宿貳拾五錢以下

住居三里以外ノ地ニ在ル者ハ往復旅費ヲ給シ及ヒ呼出ノ地ニ滞在中ハ日當并ニ止宿料ヲ給ス其三里未滿ノ地ニ在ル者ハ旅費止宿料ヲ給セス(十六年第三十九號布告ヲ以テ全條改正)

第五十條 證人ノ日當旅費及ヒ止宿料ハ本人ノ請求アルニ非ラハ之ヲ給與セス

第五十一條 證人日稼ヲ以テ生業トスル者治罪法第九十條ニ從ヒ償金ヲ要求スル時ハ旅費日當ノ外若干ノ償金ヲ給スルコトアル可シ

第五十二條 解剖倉庫等ノ費用及ヒ數多ノ時間ヲ要スル翻譯料ノ類ハ日當ノ外別ニ之ヲ給與ス可シ

第五十三條 裁判費用ノ宣告ヲ受ケ未タ之ヲ納メサル前ニ於テ犯人身死スル時ハ其相續人ヨリ之ヲ徵收ス

第五章 賠償處分

第五十四條 贓物犯人ノ手ニ在ル時ハ直チニ被害者ニ還付スト雖モ若シ帳轉シテ他人ノ手ニ在ル時ハ被害者ノ請求ニ因

テ還給セシムル者トス

第五十五條 贓物帳轉シテ他人ノ手ニ在ル時公商ニ由リ買取シタル物品ハ其公商若クハ被害者ヨリ買取者ニ原價ヲ償ハサルハ直チニ還給セシムルコトヲ得ス

若シ公商ニ由ラスシテ買取シタル物品ハ其還給ヲ拒ムコトヲ得ス但其買取者ハ賣者ニ對シ賠償ヲ求ムルコトヲ得

第五十六條 贓物ヲ受ケ又ハ典物トシテ受取タル者其贓物現在スル時ハ還給ヲ拒ムコトヲ得ス但典物トシテ受取タル者ハ典主ニ對シ賠償ヲ求ムルコトヲ得

第五十七條 贓物交換シテ現在スル時ハ公商ニ由ルト否トテ區別シ第五十五條ノ例ニ從テ處分ス可シ

第五十八條 贓物已ニ費用シタル時又ハ贓別ス可カラサル時又ハ其所在ノ知ラサル時ハ損害ノ賠償ヲ請求スルコトヲ得

第五十九條 人ノ名譽若クハ殺傷ニ關シタル損害其他犯罪ノ爲メ現ニ生シタル損害ハ其賠償ヲ請求スルコトヲ得但失火ハ此限ニ在ラス

第六十條 贓物ノ還給損害ノ賠償ハ其犯罪ヲ審判スル刑事裁判所ニ請求スルコトヲ得若シ其審判已ニ終リタル後ハ民事裁判所ニ非ラハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第六十一條 刑事裁判所ニ於テ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ請求スル者ハ通常ノ文書又ハ言語ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其民事裁判所ニ請求スル者ハ民事訴訟ノ程式ニ從テ可シ

第六十二條 贓物ノ還給損害ノ賠償ハ本犯死スル時ハ其相續人ニ對シ之ヲ要求スルコトヲ得

第六十三條 贓物ノ還給損害ノ賠償ノ宣告ヲ受ケタル者還給賠償セサル時ハ被害者ヨリ更ニ民事裁判所ニ身代限ノ處分

ヲ請求スルコトヲ得

○刑法附則中改正

明治二十三年十月 法律第百號

除刑法附則中改正追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

刑法附則第四十九條ヲ左ノ如ク改メ次ニ左ノ三條ヲ加フ

第四十九條 證人ノ日當ハ出頭一度ニ付金五十錢トス但止宿料ヲ給スル場合ニ於テハ此日當ヲ給セス

第四十九條乙 醫師鑑定人通辯人翻譯人ノ日當ハ出頭一度ニ付金五十錢乃至金五圓ノ範圍内ニ於テ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第四十九條丙 證人醫師鑑定人通辯人翻譯人ノ旅費ハ海陸滿一里毎ニ付キ金拾錢トス通路兩線以上アルトキハ最近ノ通路ヲ以テ旅費ヲ算定ス

第四十九條丁 前條ニ記載シタル者ノ止宿料ハ滿八里以外ノ地ヨリ來リ滞在スル時ハ一日金五十錢トス

○公署公吏公署ノ印、文書及免狀鑑札ニ關スル件

明治二十三年十月 法律第百號

朕公署、公吏並公署ノ印、文書及免狀鑑札ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

刑法中官廳、官署ニ關スル條項ハ公署ニ適用シ官吏ニ關スル條項ハ公吏ニ適用シ官ノ印、文書及免狀、鑑札ニ關スル條項ハ公署ノ印、文書及免狀鑑札ニ適用ス

○各地方便宜ニ從ヒ違警罪目ヲ定メ發行シタルトキ主務省ニ届出方

明治十四年八月 法律第七十七號

刑法第四百三十條ニ依リ各地方ノ便宜ニ從ヒ違警罪目ヲ定メ發行シタルトキハ之ヲ主務ノ省ヘ届出ヘシ此旨相違候事

○憲兵卒ノ職務ニ關スル犯罪處斷例

明治十五年十二月 布告第七十三號

憲兵卒其職務ニ關シ罪ヲ犯シタル時ハ官吏犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

憲兵卒ノ職務ニ對シ罪ヲ犯シタル者ハ官吏ニ對スル犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

○命令ノ條項違犯ニ關スル罰則

明治二十三年九月 法律第八十四號

朕命令ノ條項違犯ニ關スル罰則ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

命令ノ條項ニ違犯スル者ハ各其ノ命令ニ規定スル所ニ從ヒ二百圓以内ノ罰金若ハ一年以下ノ禁錮ニ處ス

○陸軍上等卒ニシテ刑法特ニ官吏ノ爲メ定メタル罪ヲ犯シタル時處斷方

明治十五年八月 司法省達第四十二號

今般太政官ヨリ左ノ通御違有之候條此旨相違候事

○省令廳令府縣令及警察令ニ罰則ヲ附ス

明治二十三年九月勅令第三百八號

朕省令廳令府縣令及警察令ニ關スル罰則ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

- 第一條 各省大臣ハ法律ヲ以テ特ニ規定シタル場合ヲ除クノ外其ノ發スル所ノ各省ニ二十五圓以内ノ罰金若ハ二十五日以下ノ禁錮ノ罰則ヲ附スルコトヲ得
- 第二條 地方長官及警視總監ハ其ノ發スル所ノ命令ニ十圓以内ノ罰金若ハ拘留ノ罰則ヲ附スルコトヲ得

○法律規則中罰例ニ係ルモノ處斷例

明治十四年二月布告第七十二號

明治十五年一月一日ヨリ刑法施行候ニ付法律規則中罰則ニ係ルモノハ左ノ例ニ照シテ處斷スヘシ

- 第一條 凡懲役ハ十一日以上ヲ重禁錮ニ處シ十日以下ヲ拘留ニ處ス
- 第二條 凡禁獄及禁錮ハ十一日以上ヲ輕禁錮ニ處シ十日以下ヲ拘留ニ處ス
- 第三條 凡罰金及科料ハ貳圓以上ヲ罰金ニ處シ貳圓未満ヲ五錢以上壹圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス
- 第四條 法ニ照シ律ニ照シ若クハ違令違式ニ照シ處斷ストアリ及ヒ答可申付トアルハ總テ貳圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第五條 法律規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ再犯加重及ヒ數罪併發ノ例ヲ用ヒス

第六條 法律規則中罰例アリト雖モ刑法ニ正條アルモノハ刑法ニ依テ處斷ス

第七條 前數條ノ罪ヲ犯シ拘留科料ニ處スル者ト雖モ輕罪裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

但始審裁判所所在ノ地ヲ除クノ外ハ治安裁判所ニ於テ之ヲ裁判スルヲ得

○罰金ヲ禁錮ニ換フルノ手續

明治十七年十月司法省違第五十三號

罰金ヲ禁錮ニ換フル儀ニ付神奈川重罪裁判所判事荒木博臣ヨリ別紙甲號ノ通伺出候ニ付乙號ノ通及指令候條爲心得此旨相違候事

別紙 甲號

罰金ヲ禁錮ニ換フル義ニ付伺

重罪裁判所ニテ罰金ノ言渡ヲ受ケタル者期限內ニ納完セサル時ハ刑法第二十七條ニ照シ輕禁錮ニ換フヘキ處重罪裁判所附屬後ハ始審裁判所ニ於テ右禁錮ニ換フル事ヲ檢察官ノ求ニ因リ其始審裁判所ノ所長判事ニテ之ヲ命シ候條致度右ハ差掛リ候事件有之候間至急御指令相成度此段相伺候也

神奈川重罪裁判所

判事荒木博臣印

明治十五年九月十八日 司法卿大木喬任殿

乙號 伺ノ通

明治十五年九月二十六日

○諸罰則ヲ犯シ罰金科料ニ處セラ

ル、者處分法

明治十三年三月布告第十一號

諸罰則ヲ犯シ罰金科料ニ處セラ、者處分法左ノ通相定候條此旨布告候事

- 一罰金科料ハ宣告ノ日ヨリ一月內ニ納完セシム若シ限內納完セサル者ハ一回ヲ一日ニ折算シ禁獄ニ換フ其一回以下ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス
- 但算シテ禁獄二年以上ニ及ホスヲ得ス
- 一禁獄限內罰金科料ヲ納完シ又ハ親屬等代テ納完スル時ハ經過シタル日數ヲ控除シテ禁獄ヲ免ス
- 一罰金科料ノ實決ノ刑ヲ併科シタル時完納セサル者ハ刑期滿限ノ後例ニ照シテ禁獄ス

○諸罰則ヲ見届ケ訴出ル者科料罰金

ノ半高給與方

明治十三年三月司法省違第一號

諸罰則中違犯者ヲ見届ケ訴出ル者ハ其賞トシテ科料又ハ罰金ノ半高ヲ給付スト之ノアルハ其違犯者無力ニシテ科料又ハ罰金ノ全部ヲ完納スル能ハサルトキハ實地徵收セシ金高ノ半額ヲ給付スル備ト心得ヘク此旨相違候事

○監視ニ附セラレタル者他ノ地方旅

行ノ取計方

明治十七年三月内務省違第十九號

監視ニ付セラレタル者他ノ地方ニ旅行スルトキハ必ス監視票ヲ携帶セシメ其滞留日ニ涉ル者ハ滞留地ノ警察署ニ到リ該

候ヲ表シ官吏ノ認印ヲ受ケシム可シ此旨相違候事

但官吏ノ認印ハ監視票ノ裏面旅行中欄內ニ捺印スヘシ

○監視假免假出獄上申方

明治十七年七月内務司法兩省違第三十二號

刑法附則ニ從ヒ監視假免ハ警察官假出獄ハ典獄ヨリ其事實ヲ具シ直ニ上申致來候處自今其所屬長官ヲ經由スル儀ト心得ヘシ此旨相違候事

○偽證又ハ贋造文書沒收方等

明治十二年七月司法省違第十號

凡ソ偽證或ハ公私文書ノ贋造ニ係ルコト發覺シ刑事裁判ヲ經シ上ハ其文書ハ素ヨリ其裁判所ニ没入シ置クヘシト雖モ或ハ其文書ノ證據ナキヲ以テ他ニ詞訟ヲ起スヘキ途方ヲ失ヒ冤枉者ナキヲ保シ難シ故ニ其文書ヲ没入スルニ當リ其文書ノ寫ヲ請求スル者ニハ必ス之ヲ與フヘシ

但裁判所ニ於テ該書類ニ消印ヲ押印スル如キノ慣習ハ廢止トス

各裁判所ニ於テハ前條文書ノ寫ヲ以テ訴出ルモノアラハ尋常ノ證據ト見ルハ勿論ト雖トモ若他ノ裁判ニ在リテハ一應其没入セシ所ノ裁判所ヘ照會シテ其没入セシハ果シテ信ナルヤヲ認メシ上裁判ヲ與フヘシ

○犯罪ノ用ニ供シ及犯罪ニ因テ得タル物件所有主ニ還付方

明治十五年五月司法省違第二十號

犯罪ノ用ニ供シタル物件及ヒ犯罪ニ因テ得タル物件ハ本案ノ裁判ヲ言渡ス迄ニ所有主ニ發見セザル時ハ刑法第四十三條第四十四條ニ從ヒ其本案ノ裁判ト共ニ沒收ノ言渡ヲ爲スヘシト雖モ右ノ物件ハ之ヲ其裁判所所在ノ地及ヒ犯罪ノ地ニ公告シ一年間公告シタル日ニ所有主ヲ發見シタル時ハ檢察官ヨリ直ニ之ヲ還付スヘシ此旨爲心得相違候事

但檢察官ニ於テ保存ス可カラサル物件又ハ保存スルニ付費用ヲ要スヘキ者ト思料スル時ハ公費ノ處分ヲ爲シタル上其代金ヲ保存シ置クヘシ

○犯罪ノ用ニ供シ又ハ犯罪ニ因リ得タル物件其所有主ヘ假ニ下渡方

明治十五年六月 司法省令第二十四號

犯罪ノ用ニ供シ又ハ犯罪ニ因リ得タル物件ハ轉讓シテ他人ノ手ニ在リ及ヒ沒收スヘキモノ若クハ證據ノ爲メ官ニ保存シ置クニ必要トスルモノヲ除クノ外ハ裁判官檢察官司法警察官ニ於テ實際ノ便宜ニ因リ裁判官渡アルマテ其所有主ヘ假ニ之ヲ下渡シ置クコトヲ得ヘシ此旨爲心得相違候事

○死刑者犯由牌揭示式ヲ改正ス

明治十五年二月 司法省令第三號

處刑ノ者犯由揭示ノ儀ニ付明治七年<sup>五</sup>當省第九號ヲ以テ相違置候旨モ有之候處今般新刑法實施ニ付テハ明治十四年<sup>十二</sup>第六十七號公布刑罰則第八條ニ據リ自今左ノ通改正候條此旨相違候事

一死刑ノ執行アリタルトキハ重罪裁判所書記ニ於テ左ノ雜形ニ據リ公告案ヲ製シ三日間該廳門前ニ揭示シ且刑ニ宣告書ノ際本ヲ製シ犯罪ノ地并犯人住居ノ地方(東京ハ府廳)速ニ送達スヘシ  
一警視廳府廳ニ於テハ重罪裁判所書記ヨリ死刑宣告書ノ際本送達アレハ左ノ雜形ニ據リ犯罪ノ地并犯人住居ノ地何レモ三日間通衢ニ榜示公告スヘシ (雜形略之)

○死刑者ノ墓標寫眞等ニ係ル取締方

明治廿四年七月 內務省令第十一號

刑死者ノ墓標寫眞等ニ係ル取締方

第一條 刑死者墓標ニハ氏名法號族籍年齡生死ノ年月日ヲ記入スルニ止メ他ノ事項ヲ記スルコトヲ得ス  
其墓標ハ遺骸埋葬地又ハ祖先塋域ノ外之ヲ建設スルコトヲ得ス  
異様ノ墓標ヲ建設シ及文字ニ彩色ヲ施スコトヲ得ス

第二條 所轄警察署ノ許可ヲ得シテ刑死者ノ爲メ公然祭祀ヲ行フコトヲ得ス但親族ノ香花ヲ供スルノ類ハ此限ニ在ラス  
第三條 刑死者ノ寫眞其他肖像ヲ公然陳列シ又ハ販賣スルコトヲ得ス  
其他總テ刑死者ヲ賞揚哀悼スルコトヲ得ス

第四條 前各條項ニ違背シタル者ハ二回以上二十五圓以下ノ罰金若クハ十一日以上二十五日以下ノ輕禁錮ニ處ス  
第五條 犯罪ニ關シ現ニ捜査、起訴、勾留、服刑中ノ者若クハ索

○刑事訴訟法 明治二十三年十月 法律第九十六號

朕刑事訴訟法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

刑事訴訟法目錄

- 第一編 總則
- 第二章 裁判所ノ管轄
- 第二章 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避、回避
- 第三編 犯罪ノ捜査、起訴及ヒ豫審
- 第一章 捜査
- 第一節 告訴及ヒ告發
- 第二節 現行犯罪
- 第二章 起訴
- 第三章 豫審
- 第一節 令狀
- 第二節 密室監禁
- 第三節 證據
- 第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第五章 公判

- 第五節 檢證、捜索及ヒ物件差押
- 第六節 證人訊問
- 第七節 鑑定
- 第八節 現行犯ノ豫審
- 第九節 保釋
- 第十節 豫審終結
- 第四編 公判
- 第一章 通則
- 第二章 區裁判所公判
- 第三章 地方裁判所公判
- 第五編 上訴
- 第一章 通則
- 第二章 控訴
- 第三章 上告
- 第四章 抗告
- 第六編 再審
- 第七編 大審院ノ特別權限ニ屬スル訴訟手續
- 第八編 裁判執行、復權及ヒ特赦
- 第一章 裁判執行
- 第二章 復權
- 第三章 特赦
- 附則
- 刑事訴訟法
- 第一編 總則
- 第一條 公訴ハ犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用スルコトヲ目的トスル

モノニシテ法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢事之ヲ行フ

第二條 私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償、贓物ノ返還ヲ目的トスルモノニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス

第三條 公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ルモノニ非ス又告訴、私訴ノ拋棄ニ因テ消滅スルモノニ非ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラス

第四條 私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラズ公訴ニ付キ第一審ノ判決アルマテ何時ニテモ其公訴ニ附帶シテ之ヲ爲スコトヲ得

第五條 被告ノ免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償、返還ヲ要ムル妨礙ト爲ルコトナカル可シ

第六條 公訴ヲ爲ス權ハ左ノ事項ニ因テ消滅ス

第一 被告人ノ死去

第二 告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ告訴ノ拋棄

第三 確定判決

第四 犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止

第五 大赦

第六 時效

第七條 私訴ヲ爲ス權ハ左ノ事項ニ因テ消滅ス

第一 拋棄又ハ和解

第二 確定判決

第三 時效

第八條 公訴ノ時效ハ左ノ期間ヲ經過スルニ因テ成就ス

第一 違警罪ハ六月

第二 輕罪ハ三年

第三 重罪ハ十年

第九條 私訴ノ時效ハ被害者無能力ナルトキ又ハ公訴ニ附帶セスシテ其訴ヲ爲シタルトキト雖モ公訴ノ時效ト其期間ヲ同クス

公訴ニ付既ニ刑ノ言渡アリタルトキハ民法ニ定メタル時效ノ例ニ從フ

第十條 公訴、私訴ノ時效ハ犯罪ノ日ヨリ其期間ヲ起算ス但繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起算ス

第十一條 時效ハ起訴、豫審又ハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期間ノ經過ヲ中斷ス其未タ發覺セサル正犯、從犯及ヒ民事擔當人ニ付テモ亦同シ

時效ノ經過ヲ中斷シタルトキハ起訴、豫審又ハ公判ノ手續ヲ止メタル日ヨリ更ニ其期間ヲ起算ス

第十二條 起訴、豫審又ハ公判ノ手續其規定ニ背キタルニ因リ無効ニ屬スルトキハ時效ノ經過ヲ中斷スル效ナカル可シ但裁判所ノ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無効ニ屬スルトキハ此限ニ在ラス

第十三條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人、告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重過失ニ出テタルトキハ是等ノ者ニ對シ損害ノ賠償ヲ要スルコトヲ得

被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人、告發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重過失ニ因リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタルトキ亦同シ

民事原告人上訴ヲ爲シ敗訴シタルトキハ被告人其上訴ニ因リ生シタル損害ノ賠償ヲ要ムルコトヲ得

要價ノ訴ハ本案ノ判決アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第十四條 被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ判事、檢事、裁判所書記、執達吏、司法警察官又ハ巡查、憲兵卒ニ對シ要價ノ訴ヲ爲スコトヲ得但是等ノ官吏被告人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタル場合ハ此限ニ在ラス

第十五條 此法律ニ於テ期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスルモノハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日休暇ニ當ルトキハ期間ニ算入ス可カラズ但時效ノ期間ハ此限ニ在ラス

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

第十六條 此法律ニ定メタル期間ニハ海陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿サルモノト雖モ三里以上ナルトキ亦同シ

島嶼又ハ外國ニ付テハ裁判所ニ於テ特ニ附加期間ヲ定ムルコトヲ得

第十七條 此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期間ヲ經過シタルトキハ特別ノ場合ヲ除ク外其訴訟ヲ爲ス權ヲ失フ可シ

第十八條 訴訟關係人ハ裁判所所在ノ地ニ住セザルトキハ其地ニ假住所ヲ定メ裁判所ニ出ツ可シ否ラザルトキハ書類ノ送達ヲシト雖モ異議ヲ申立ルコトヲ得ス

第十九條 書類ノ送達ハ此法律ニ於テ刑ニ規定アラザルトキハ民事訴訟法ノ規定ヲ準用ス

第二十條 官吏、公吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署、公署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ毎葉ニ契印ス可シ若シ官署、公署ノ印ヲ用ユルコト能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規定ニ背キタルモノハ其書類ノ效ナカル可シ

官吏、公吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ官吏、公吏ノ而前ニ於テ作リタル場合ヲ除ク外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ

第二十一條 官吏其他何人ニ限ラス訴訟ニ關スル書類ノ原本、正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラズ若シ挿入、削除及ヒ欄外ノ記入アルトキハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スルトキハ之ヲ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ

規定ニ背キタルトキハ其變更増減ノ效ナカル可シ

第二十二條 此法律ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用スル頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カザルトキハ其效アリトス

第二十三條 此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルコトヲ得ス

第二十四條 此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ノ規定ニ從フ

第二編 裁判所

第一章 裁判所ノ管轄

第二十五條 犯罪ノ種類ニ關スル裁判所ノ管轄ハ裁判所構成

法ノ規定ニ從フ  
 管轄ヲ異ニスル數箇ノ犯罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シテ訴アリタルトキハ上級ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス  
 第二十六條 同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地又ハ被告人所在ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ヒ公判ノ管轄ナリトス  
 第二十七條 數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス  
 第二十八條 從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス  
 數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アルトキハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス  
 裁判所構成法第五十條第二號ニ記載シタル皇族ノ犯罪ニ付テハ其正犯、從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハズ大審院ニ於テ之ヲ管轄ス  
 第二十九條 外國ニ在テ犯シタル罪本邦ノ法律ニ依リ處斷ス可キモノニシテ内地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタルトキハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタルトキハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス  
 關帝判決ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最後ノ住所ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス  
 第三十條 海船内ノ犯罪ニ付テハ定繫港又ハ犯罪後最初ニ著船シタル地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス  
 第三十一條 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及ヒ其決定ヲ爲ス裁判所ハ裁判所構成法第十條ノ規定ニ從フ

第三十二條 管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スコトヲ得  
 大審院ニ於テ管轄裁判所ヲ指定ス可キ場合ニ於テハ檢事總長ハ司法大臣ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其申請ヲ爲スコトヲ得  
 第三十三條 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲サントスル者ハ申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ其趣意ヲ差出ス可シ  
 裁判所ハ書類ニ依リ其申請ヲ決定ス可シ  
 第三十四條 犯罪ノ性質、被告人ノ身分、日數、地方ノ民心其他重大ナル事情ニ由リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スル恐アルトキハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得  
 第三十五條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ハ司法大臣ノ命ニ因リ大審院檢事總長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ  
 大審院ニ於テハ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クコトヲ其申請ヲ決定スヘシ  
 第三十六條 被告人ノ身分、地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルコト能ハサル恐レアルトキハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得  
 第三十七條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ハ管轄裁判所ノ檢事其他訴訟關係人ヨリ上級裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得  
 民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタルトキハ前項ノ申請ヲ爲スコトヲ得ス  
 第三十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ヲ爲スニハ其趣意書ニ通テ原裁判ニ差出ス可シ裁判所書記ハ速ニ一通ヲ相

手方ニ送達シ相手方ハ其送達アリタルヨリ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得  
 裁判所ニ於テ前項ノ申請ヲ受クタルトキハ其訴訟手續ヲ停止ス可シ  
 第三十九條 前條ノ申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ於テハ書類ニ依リ其申請ヲ決定ス可シ  
 第二章 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避、回避  
 第四十條 判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ除斥セラル可シ  
 第一 判事被害者ナルトキ  
 第二 判事又ハ其配偶者ト被告人、被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ  
 第三 判事其事件ニ付證人、鑑定人ト爲リタルトキ又ハ被告入若クハ被害者ノ法律上代理人ナルトキ  
 第四 判事其事件ノ豫審終結ニ干與シ又ハ不服ヲ申立テラシメタル裁判ノ前審ニ干與シタルトキ  
 第四十一條 判事法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラル、場合及ヒ偏頗ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ情況アル場合ニ於テハ檢事其他訴訟關係人ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得  
 第四十二條 忌避ノ申請及ヒ其裁判ニ付テハ民事訴訟法第三十四條乃至第三十八條ノ規定ニ從フ  
 第四十三條 忌避ノ申請アリタルトキハ公判ニ付テハ其辯論ヲ中止ス可シ豫審ニ付テハ仍ホ其處分ヲ繼續ス可シ但急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審手續ヲ中止スルコトヲ得

第四十四條 判事自ラ第四十條ニ定メタル原由アルコトヲ認メ又ハ回避ス可キモノト思料シタルトキハ忌避申請ノ管轄裁判所ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ  
 其裁判所ニ於テハ回避ノ申立ヲ裁判ス可シ  
 第四十五條 本章ノ規定ハ裁判所書記ニモ之ヲ準用ス但其裁判ハ書記所屬ノ裁判所之ヲ爲ス可シ  
 第三編 犯罪ノ捜査、起訴及ヒ豫審  
 第一章 捜査  
 第四十六條 檢事ハ後ニ記載シタル告訴、告發、現行犯其他ノ原由ニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ其證據及ヒ犯人ヲ捜査ス可シ  
 第四十七條 警視總監及ヒ地方長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査スルニ付キ地方裁判所檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府知事ハ此限ニ在ラス  
 左ニ記載シタル官吏、公吏ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査ス可シ  
 第一 警視警部長、警部、警部補  
 第二 憲兵將校、下士  
 第三 島司  
 第四 郡長  
 第五 林務官  
 第六 市町村長  
 第四十八條 海船内ノ犯罪ニ付テハ船長ニ於テ司法警察ノ職務ヲ行フ可シ  
 第四十九條 何人ニ限ラス犯罪ニ因リ損害ヲ受クタル者ハ犯

現行日本法令大全

罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ檢察又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

司法警察官告訴ヲ受ケタルトキハ違警罪ニ付キ即決ヲ爲ス場合ヲ除ク外速ニ其書類ヲ管轄裁判所ノ檢察ニ送致ス可シ

第五十條 告訴人ハ成ル可ク其證據及ヒ事實參考ト爲ル可キコトヲ申立ツ可シ

第五十一條 告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作り告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第五十二條 官吏、公吏其職務ヲ行フニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢察ニ告發ス可シ

告發ハ官吏、公吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フ可シ

第五十三條 何人ニ限ラス犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ第五十條第五十一條ノ規定ニ從ヒ其所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ檢察又ハ司法警察官ニ告發スルコトヲ得

告發ヲ受ケタル司法警察官ハ第四十九條ノ規定ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

第五十四條 告訴、告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スコトヲ得但無能力者ノ告訴ハ法律上代理人之ヲ爲スモ其效アリトス

第五十五條 告訴、告發ハ其取下ヲ爲シ又ハ其申立ヲ變更スルコトヲ得此場合ト雖モ第十三條ノ規定ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受クルコトアル可シ

第二節 現行犯罪

第五十六條 現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

第五十七條 重罪、輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯罪ニ准ス

第一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラルルトキ

第二 兇器、贓物其他ノ物件ヲ携帶シ又ハ身體、被服ニ顯著ナル犯罪ノ痕跡アリテ犯人ト思料ス可キトキ

第三 家宅内ニ於テ犯罪シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戶主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタルトキ

第五十八條 司法警察官及ヒ巡查、憲兵卒其職務ヲ行フニ當リ重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯罪アルコトヲ知タルトキハ令狀ヲ待タズシテ被告人ヲ逮捕ス可シ

罰金ノ刑ニ該ル可キ輕罪又ハ違警罪ノ現行犯罪アルコトヲ知リタルトキハ被告人ノ氏名、住所ヲ問ヒ輕罪ニ付テハ檢察、違警罪ニ付テハ即決ヲ爲スコキ官吏ニ告發ス可シ其氏名、住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ檢察若クハ官吏ニ引致スルコトヲ得

第五十九條 巡查、憲兵卒被告人ヲ逮捕シタルトキハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ

其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第六十條 何人ニ限ラス重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪

現行日本法令大全

ノ現行犯罪アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルコトヲ得

第六十一條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引致スルコトヲ得サルトキハ自己ノ氏名、職業、住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡查、憲兵卒ニ引渡スコトヲ得

被告人ヲ巡查、憲兵卒ニ引渡シタルトキハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲スコシ

被告人又ハ巡查憲兵卒ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルコトヲ求ムルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サルハ其求ヲ拒ムコトヲ得ス

第二章 起訴

第六十二條 地方裁判所檢察犯罪ノ搜查ヲ終リタルトキハ左ノ手續ヲ爲スコシ

第一 重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求ム可シ

第二 輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕罪難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直チニ其裁判所ニ訴ヲ爲スコシ

第三 裁判所構成法第十六條第二號第三號ニ記載シタル輕罪又ハ違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ區裁判所檢察ニ送致ス可シ

第六十三條 區裁判所檢察犯罪ノ搜查ヲ終リタル上裁判所構成法第十六條第一號第二號ニ記載シタル事件ト思料シタルトキハ其裁判所ニ訴ヲ爲スコシ

第六十四條 檢察ハ被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬セサルモノト思料シタルトキハ之ヲ管轄裁判所ノ檢察ニ送致ス可シ

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサルモノト思料シタルトキハ起訴ノ手續ヲ爲スコカラス

第六十五條 前條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ルトキハ檢察ヨリ其處分ヲ被害者ニ通知ス可シ

第六十六條 檢察豫審ヲ求ムルトキハ證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致シ且臨檢ス可キ場所逮捕ス可キ人名及ヒ證人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シ

第三章 豫審

第六十七條 現行ノ重罪、輕罪ヲ除ク外豫審判事ハ檢察ノ請求アルニ非サルハ豫審ニ取掛ルコトヲ得ス此規定ニ背キタルトキハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ效ナカル可シ

第六十八條 檢察ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟記録ヲ檢閱スルコトヲ得但二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ又必用ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スコトヲ得

第一節 令狀

第六十九條 豫審判事ハ檢察ノ起訴ニ因リ重罪、輕罪ノ事件ヲ受理シタルトキハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

召喚狀ニ因リ出頭シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遅クトモ出頭ノ日ヲ過クルコトヲ得ス

第七十條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ住セサルトキハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事又ハ區裁判所判事ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第七十一條 豫審判事又ハ受託判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告

人其日時ニ出頭セサルトキハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得  
第七十二條 豫審判事又ハ受託判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

第一 被告人定リタル住所アラサルトキ  
第二 被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スルノ恐アルトキ  
第三 被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスル恐アルトキ

第七十三條 勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シタル判事ニ被告人ヲ引致ス可シ

勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間ヲ經過スルトキハ勾引狀ヲ發スルニ非サルハ當然之ヲ釋放ス可シ

第七十四條 豫審判事又ハ受託判事ハ召喚狀又ハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事由アリテ令狀ニ應ズル能ハサルコトヲ証明シタルトキハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得

第七十五條 勾引狀ハ被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キモノト思料スルニ非サルハ之ヲ發スルコトヲ得ス但被告人逃亡シタル場合ニ於テハ其訊問ヲ爲サズシテ之ヲ發スルコトヲ得

第七十六條 總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名、職業、住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除ク外其氏名分明ナラサルトキハ容貌、體格等ヲ明示ス可シ

又令狀ニハ之ヲ發スル年月日時ヲ記載シ判事及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ  
召喚狀ハ執達吏ヲシテ被告人ニ送達セシメ勾引狀、勾引狀ハ

巡査、憲兵卒ヲシテ之ヲ執行セシム  
第七十七條 勾引狀、勾留狀ハ時宜ニ因リ正本數通ヲ作り巡査、憲兵卒數人ニ分付スルコトアル可シ

前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其賸本ヲ下付ス可シ此場合ニ於テハ其正本、賸本ニ執行ノ場所、日時ヲ記載シ被告人ヲシテ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第七十八條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査、憲兵卒ハ被告人其家宅若クハ他人ノ家宅ニ潛匿シタルト思料シタルトキハ其地ノ市町村長又其差支アルトキハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ハラズ搜索調書ヲ作り立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スコトヲ得ス但旅店、割烹店其他夜間ト雖モ衆人ノ出入スル場所ニ付テハ其公開時間内ニ限り何時ニテモ搜索ヲ爲スコトヲ得

第七十九條 豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潛匿シタルコトヲ知り又ハ潛匿シタルト思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スルトキハ巡査、憲兵卒ニ令狀ヲ帶行セシムルコトヲ得

巡査、憲兵卒ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事、檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ示シテ即時ニ執行ヲ求ム可シ

第八十條 豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルコト能ハサルトキハ各檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ捜査及ヒ逮捕ヲ爲スコトヲ請求スルコトヲ得  
請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ搜索及ヒ

逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ此場合ニ於テ檢事ノ發シタル逮捕狀ハ勾留狀ト同一ノ效力有ス

第八十一條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人、軍屬ニ對シ令狀ヲ發シタルトキハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ令狀ヲ示スコシ其長官又ハ隊長ハ已ムコトヲ得サル差支アルニ非サルハ本人ヲシテ連ニ令狀ニ應ゼシム可シ

第八十二條 勾留狀ヲ受ケタル被告人ハ連ニ其令狀ニ記載シタル監獄署ニ引致ス可シ若シ其監獄署ニ引致スルコト能ハサルトキハ假ニ最近ノ監獄署ニ引致スルコトヲ得

何レノ場合ニ於テモ監獄署長ハ令狀ヲ檢閱シテ被告人ヲ受取り其證書ヲ渡スコトヲ得

第八十三條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査、憲兵卒ハ之ヲ執行シタルコト又執行スルコト能ハサルトキハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載ス可シ

第八十四條 巡査、憲兵卒ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ檢事ニ差出スコシ  
第八十五條 勾留狀ヲ受ケタル被告人既ニ監獄署ニ在ルトキハ執達吏ヲシテ之ヲ本人ニ送達セシム可シ

第八十六條 密室監禁ノ場合ヲ除ク外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬、故舊又ハ辯護士ニ接見スルコトヲ得  
書翰、書籍其他ノ書類ハ豫審判事又ハ檢事ノ檢閲ヲ經タル後ニ非サルハ被告人ト外人ト之ヲ授受スルコトヲ許サズ但豫審判事又ハ檢事ハ其書類ヲ留置スコトヲ得

第八十六條 豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キモノニ非スト思料シタルトキハ豫審中何時ニテモ勾留狀ヲ取消スコシ

第二節 密室監禁

第八十七條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタルトキハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スル言渡ヲ爲スコトヲ得

第八十八條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サルハ他人ト接見シ又ハ書類其他ノ物品ヲ授受スルコトヲ許サズ

第八十九條 密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラズ但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルコトヲ得  
言渡ヲ更改スルトキハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ  
豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問ス可シ

第九十條 被告人ノ自白、官吏ノ檢査調書、證據物件、證人及ヒ鑑定人ノ供述其他諸般ノ徵憑ハ判事ノ判斷ニ任ス

第九十一條 豫審判事ハ檢事若クハ被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據徵憑ヲ集取ス可シ

第九十二條 豫審判事臨檢、搜索、物件差押又ハ被告人、證人ノ訊問ヲ爲スニハ裁判所書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルコト能ハサルトキハ立會人二名アルヲ要ス但監獄署ニ就テ被告人ヲ訊問スルトキハ其監獄署ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ  
前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ら調書ヲ作り之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ  
書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其效ナカル可シ

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質  
 第九十三條 豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付急遽ヲ要スルトキハ此限ニ在ラス  
 第九十四條 豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ自白セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用ニ可カラズ  
 第九十五條 裁判所書記ハ訊問及ヒ供述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ  
 豫審判事ハ被告人ニ其供述ノ相違ナキヤ否ヤヲ問ヒ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ  
 第九十六條 被告人其供述ニ付キ變更増減ス可キコトヲ申立タルトキハ更ニ訊問ヲ爲シ其訊問及ヒ供述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カス署名捺印ス可シ  
 第九十七條 被告人ハ供述書ノ謄本ヲ求ムルコトヲ得  
 第九十八條 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルコト、人違ナキコト其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ模様ヲ證スル爲メ必要ナリトスルトキハ被告人ト他ノ被告人、證人又ハ其他ノ者ト對質セシムルコトヲ得  
 第九十九條 書記ハ對質人ノ供述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ  
 第九十五條第九十六條ノ規定ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用ス  
 第一百條 被告人又ハ對質人據ナルトキハ書面ヲ以テ問ヒ嘸ナルトキハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ書者、嘸者文字ヲ知ラサルトキハ通事ヲ命ス可シ

被告人又ハ對質人國語ニ通セサルトキ亦同シ  
 第一百一條 通事ハ正實ニ通譯ス可キ宣誓ヲ爲ス可シ  
 書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ  
 第三十六條第三十七條第四十一條ノ規定ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス  
 第五節 檢證、搜索及ヒ物件差押  
 第一百二條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ犯所又ハ其他ノ場所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス可シ  
 第一百三條 豫審判事ノ犯罪ハ性質、方法、日時、場所及ヒ被告人ノ人違ナキコトヲ證明ス可キ模様ニ付キ調書ヲ作ル可シ又被告人ノ利益ト爲ル可キ模様ヲモ記載ス可シ  
 第一百四條 豫審判事ハ被告人ノ住居又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スル疑アル者ノ住居ニ臨檢シ搜索ヲ爲スコトヲ得  
 被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住居ニ在ラサルトキハ同居ノ親屬若シ其在ラサルトキハ市町村長ノ立會アルヲ要ス  
 第七十八條第三項ノ規定ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス  
 第一百五條 豫審判事ハ被告人又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スル疑アル者ノ身體及ヒ之ニ屬スル物件ニ付キ搜索ヲ爲スコトヲ得  
 第一百六條 豫審判事ハ臨檢、搜索ニ因リ發見シタル物件其事實ヲ證明スルニ足ル可シト思料シタルトキハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ裁判所書記之ヲ擔任ス可シ  
 第一百七條 豫審判事ハ臨檢、搜索、物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサルトキハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クコトヲ得

第八八條 被告人ハ臨檢、搜索、物件差押ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルコトヲ得  
 若シ被告人勾留ヲ受クタルトキハ自立會フコトヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスルトキハ此限ニ在ラス  
 第九九條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲シシム可シ其訊問及ヒ供述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ  
 第一百條 豫審判事ハ臨檢、搜索ノ場所ニ於テ證人ノ供述ヲ聽クコトヲ必要ナリトスルトキハ第九十五條以下ノ規定ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ  
 第一百一條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得シテ其場所ニ出入スルコトヲ禁ズルヲ得  
 若シ其禁ヲ犯ス者アルトキハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルコトヲ得  
 第一百二條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢、搜索、物件差押ノ事ヲ區裁判所判事ニ囑託スルコトヲ得  
 第一百三條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ驛遞、電信、鐵道ノ官署、諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審事件ニ關係アル者ヨリ發シ若シハ此等ノ者ニ對シ發シタル書類、電報又ハ物件ヲ受取開披スルコトヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ  
 第一百四條 證言ヲ拒ムコトヲ得ル者ノ所持スル物件ニシテ其賦祕ス可キ義務アル事情ニ關スルモノハ其承諾アルニ非サルハ之ヲ差押ヘ及ヒ開披スルコトヲ得ス  
 第六節 證人訊問

第一百十五條 證人ノ呼出狀ニ其ノ氏名、住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ  
 又出頭ノ日時、場所及ヒ呼出ニ應セサルトキハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルコトアル可キ旨ヲ記載ス可シ  
 呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ  
 第一百十六條 證人疾病其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタルトキハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ  
 第一百十七條 證人ト爲ル可キ者豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ナルトキハ其所屬ノ長官又ハ隊長ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官又ハ隊長ハ即時ニ出頭セシム可キコトヲ認可シ又ハ職務上已ムコトヲ得サル差支アルトキハ其事由ヲ付シテ出頭ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ  
 第一百十八條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除ク外證人呼出ニ應セサルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス  
 豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得  
 若シ證人再度ノ呼出ニ應セサルトキハ費用賠償ノ外二倍ノ罰金ヲ言渡ス可シ又勾引狀ヲ發スルコトヲ得  
 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス可シ其勾引ニ付テモ亦同シ



第百十九條 豫審判事ハ證人罰金言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ其出頭セザリシコトヲ正當ノ理由ヲ以テ辯解シタルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス可シ

第百二十條 證人呼出狀ニ因リ出頭シタルトキハ其呼出狀ヲ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタルトキハ其人違ナキコトヲ疏明ス可シ

第百二十一條 豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名、年齡、職業、住所及ヒ第百二十三條ニ記載シタル者ナリヤ否ヤヲ問フ可シ

第百二十二條 豫審判事ハ證人ヲシテ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ黙秘セス又何事ヲモ附加セザル旨ヲ宣誓セシム可シ

裁判所書記ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第百二十三條 左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルコトヲ許サス但宣誓ヲ爲サシメシテ事實參考ノ爲メ其供述ヲ聽クコトヲ得

第一 民事原告人

第二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ此等ノ者ノ後見ヲ受クル者

第四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人又ハ同居人

第百二十四條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

第一 十六歳未満ノ幼者

第二 知覺精神ノ不十分ナル者

第三 瘡癩者

第四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

第五 重罪事件又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ附セラレタル者

第六 現ニ供述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴テ受ク其證憑十分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者

第百二十五條 左ニ記載シタル場合ニ於テハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 官吏、公吏又ハ官吏、公吏タリシ者其職務上黙秘ス可キ義務アル事情ニ關スルトキ

第二 醫師、藥商、穩婆、辯護士、辯護人、公證人、神職、僧侶其身分、職業ノ爲メ委託ヲ受ケタルニ因テ知リタル事實ニシテ黙秘ス可キモノニ關スルトキ

證言ヲ拒ム者ハ拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ疏明ス可シ

第百二十六條 證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ供述ヲ肯セザルトキハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル効力ヲ有ス

豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ囑託シテ之ヲ爲ス可シ

第百二十七條 證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムルコトヲ得

第百二十八條 豫審判事ハ證人ノ供述ヲ確實ナラシムル爲メ

必要ナリトスルトキハ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルコトヲ得

若シ證人同行スルコトヲ肯セザルトキハ第百十八條ノ規定ニ從フ

第百二十九條 第百條第百一條ノ規定ハ證人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百三十條 皇族證人ナルトキハ豫審判事所在ニ就キ訊問ヲ爲ス可シ

各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊問ス若シ其所在地外ニ滞在スルトキハ其現在地ニ於テ之ヲ訊問ス可シ

帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所在地ニ滞在中ハ其所在地ニ於テ之ヲ訊問ス可シ

第百三十一條 豫審判事ハ證人ニ其供述ノ相違ヲキヤ否ヤヲ知ラシムル爲メ裁判所書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ

證人ハ其供述ヲ變更増減セシムコトヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルコト及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載ス可シ

調書ニハ豫審判事、書記及ヒ證人共ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第百三十二條 豫審判事ハ證人裁判所所在ノ地ニ住セザルトキハ其住居ノ地ノ區裁判所判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ルトキハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ區裁判所判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

第百三十三條 第百十八條第百十九條及ヒ第百二十六條ニ掲ケタル證人ニ對スル豫審判事ノ權ハ受託判事ニモ屬ス

第百三十四條 證人ハ出頭ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルコトヲ

得

第七節 鑑定

第百三十五條 豫審判事ハ犯罪ノ性質、方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定ヲ必要ナリトスルトキハ學術、職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得ヘキ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

鑑定ノ爲メ必要ナリトスルトキハ死體ノ解剖ヲ命シ又既ニ埋葬シタル死體ヲ解剖シ若クハ檢視スル爲メ墳墓ノ發掘ヲ命スルコトヲ得

第百三十六條 鑑定ニ付テハ第百十五條第百十八條乃至第百二十一條第百二十三條乃至第百二十五條及ヒ第百二十八條ノ規定ヲ準用ス但鑑定人ニ對シテハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得ス

第百三十七條 鑑定人ハ公平且正實ニ鑑定ス可キ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓ハ第百二十二條ノ式ニ從フ

第百三十八條 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セザルトキハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル効力ヲ有ス

第百三十九條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ增加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルコトヲ得

第百四十條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作リ其手續、結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ

若シ結果ヲ得ザルトキハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスルトキハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第四百一十一條 鑑定人ハ旅費、日當及ヒ立替金ノ辨濟ヲ要ムルコトヲ得

第八節 現行犯ノ豫審

第四百一十二條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急遽ヲ要スルトキハ檢事ノ請求ヲ待タズ直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルコトヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ合狀ヲ發シ其他此章ノ規定ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第四百一十三條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタルモノトス其調書ニハ現行犯重罪又ハ輕罪ナルコトヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サル意見アリト雖モ通常ノ規定ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第四百一十四條 地方裁判所檢事及ヒ區裁判所檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急遽ヲ要スルトキハ豫審判事ヲ待ツコトナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得但罰金及ヒ費用賠償ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス

証人及ヒ鑑定人ノ供述ハ宣誓ヲ用ニルコトナク之ヲ聽ク可シ

第四百一十五條 前條ノ場合ニ於テ地方裁判所檢事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致シ區裁判所檢事ハ之ヲ地方裁判所檢事ニ送致ス可シ

第四百一十六條 區裁判所檢事其裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急遽ヲ要スルトキハ第四百一十四條ニ規定シタル處分ヲ爲スコトヲ得

若シ被告人ニ對シ勾留狀ヲ發シタルトキハ三日内ニ起訴ノ手續ヲ爲スコトヲ得

第四百一十七條 第四百一十四條第四百一十六條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フコトヲ得但勾留狀ヲ發スルコトヲ得ス

司法警察官ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致シ且被告人ヲ逮捕シタルトキハ共ニ之ヲ送致ス可シ

第四百一十八條 地方裁判所檢事ハ區裁判所檢事又ハ司法警察官ヨリ事件ノ送致ヲ受ケタルトキハ一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ同時ニ被告人ヲ受取リタルトキハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ勾留狀ヲ發シ又ハ發セシテ前項ノ手續ヲ爲スコトヲ得

第四百一十九條 地方裁判所檢事ハ何レノ場合ニ於テモ輕罪ノ現行犯ニ係リ豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタルトキハ勾留狀ヲ發シタルトキハ拘ハラス直チニ其裁判所ニ訴ヲ爲スコトヲ得

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサルモノト思料シタルトキハ起訴ノ手續ヲ爲スコカラス

第九節 保釋

第四百二十條 豫審判事ハ豫審中勾留狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應ジ出頭ス可キ證書ヲ差出シ且保證ヲ立ラシメ保釋ヲ許スコトヲ得

被告人無能力ナルトキハ法律上代理人ヨリ保釋ヲ求ムルコトヲ得

第四百二十一條 保證ノ金額ハ豫審判事之ヲ定メ保釋ヲ許ス言渡書ニ記載ス可シ

第四百二十二條 保證ヲ爲スニハ被告人又ハ法律上代理人ヨリ金錢若クハ有價證券ヲ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且十分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スコトヲ得

第四百二十三條 保釋人被告人ヲ呼出ストキハ出頭ヨリ二十四時前ニ其報告ヲ爲スコトヲ得

第四百二十四條 保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出頭セザルトキハ保證金ノ全部又ハ一分ヲ沒收ス可シ

第四百二十五條 保證金ヲ沒收スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲スコトヲ得

第四百二十六條 豫審判事保證金ヲ沒收シタルトキハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スコトヲ必要ナリトスルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第四百二十七條 豫審判事保證金ヲ沒收シタル後免訴ノ言渡、違警罪又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ公判ニ附スル言渡ヲ爲シタルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ沒收シタル金額ヲ還付ス可シ

第四百二十八條 豫審判事免訴ノ言渡、違警罪又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ公判ニ附スル言渡ヲ爲シタルトキハ保釋ノ言渡ヲ取消シタルトキハ保證金ヲ還付ス可シ

第四百二十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルトキハ問ハス檢

事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルコトヲ得

責付ヲ爲スニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應ジ被告人ヲ出頭セシム可キ證書ヲ差出サシムヘシ

第四百三十條 責付中被告人ヲ呼出ストキハ出頭ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲スコトヲ得

被告人正當ノ事由ナクシテ出頭セザルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ノ言渡ヲ取消ス可シ

第十節 豫審終結

第四百三十一條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタルトキハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ訴訟記録ヲ送致ス可シ

檢事ハ訴訟記録ニ意見ヲ付シ三日内ニ之ヲ還付ス可シ

第四百三十二條 檢事ハ豫審十分ナラスト思料シタルトキハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルコトヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セザルトキハ檢事ハ訴訟記録ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

第四百三十三條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後數條ニ記載シタル決定ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第四百三十四條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルコトヲ認メタルトキハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ勾留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前ニ發シタル合狀ヲ存シ又ハ新ニ合狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付スヘシ

第四百三十五條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタルトキハ放免ノ言渡ヲ爲スコトヲ得

第一 犯罪ノ證憑十分ナラサルトキ

第二 被告事件罪ト爲ラサルトキ  
 第三 公訴ノ時效ニ罹リタルトキ  
 第四 確定判決ヲ經タルトキ  
 第五 大赦アリタルトキ  
 第六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スルトキ  
 第七 被告事件違警罪ナリト思料シタルトキハ區裁  
 判所ニ移ス言渡ヲ爲シ且被告入勾留ヲ受ケタルトキハ釋放  
 ノ言渡ヲ爲ス可シ  
 第八 被告事件裁判所構成法第十六條第二號ニ記載  
 シタル輕罪ナリト思料シタルトキハ區裁判所ニ移ス言渡ヲ  
 爲シ其他ノ輕罪ナリト思料シタルトキハ其裁判所ノ輕罪公  
 判ニ付スル言渡ヲ爲ス可シ  
 第九 被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ルモノト思  
 料シタルトキハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ  
 第十 禁錮ノ刑ニ該ル可キモノト思料シタルトキハ保釋ヲ許シ又  
 ハ責付ヲ爲スコトヲ得若シ被告人未タ勾留ヲ受ケサルトキ  
 第十一 被告事件重罪ナリト思料シタルトキハ其裁判  
 所ノ重罪公判ニ付スル言渡ヲ爲ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ  
 責付ヲ爲シタルトキハ其言渡ヲ取消シ被告人未タ勾留ヲ受  
 ケサルトキハ令狀ヲ發ス可シ  
 第十二 豫審終結ノ決定ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理  
 由ヲ付ス可シ  
 第十三 管轄違ノ言渡ヲ爲スニハ其理由ヲ明示シ若シ被告人ヲ勾留  
 ス可キトキハ其理由ヲ明示ス可シ  
 第十四 免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルコト、公訴受理

ス可カラサルコト及ヒ其理由又犯罪ノ證據十分ナラサルト  
 キハ其旨ヲ明示ス可シ  
 第十五 區裁判所ニ移ス言渡又ハ公判ニ付スル言渡ヲ爲スニハ犯罪  
 ノ性質、模樣、證據ノ十分ナルコト及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律  
 ノ正條ヲ明示ス可シ  
 第十六 第七十條 前條ノ決定ニハ第七十六條ノ規定ニ從ヒ被告  
 人ノ氏名等ヲ明示ス可シ  
 第十七 第七十一條 豫審終結ノ決定ノ正本ハ速ニ檢事及ヒ被告人  
 ニ送達ス可シ  
 第十八 第七十二條 檢事ハ重罪公判ニ付スル決定又ハ免訴若シハ  
 管轄違ノ決定ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得  
 第十九 被告人ハ重罪公判ニ付スル決定ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得  
 第七十三條 重罪公判ニ付スル場合ニ於テ被告人ニ送達ス  
 可キ決定ニハ其決定ニ對シ抗告ヲ爲スヲ得ヘキコト及ヒ其  
 期間ヲ記載ス可シ其記載ナキトキハ更ニ通常ノ規定ニ從ヒ  
 決定ノ送達アルマア抗告期間ノ經過ヲ停止ス  
 第七十四條 豫審終結ノ決定ハ抗告ノ期間内又抗告アリタ  
 ルトキハ其決定アルマテ執行ヲ停止ス但保釋責付ノ言渡ヲ  
 取消ス決定ハ其執行ヲ停止セス  
 第七十五條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其決定確  
 定シタルトキハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ再ヒ訴  
 ヲ受ケルコトナカル可シ但新ナル證據アルトキハ此限ニ在  
 ラス  
 新ナル證據アルトキハ檢事ヨリ之ヲ其裁判所ニ差出シ裁判  
 所ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヤヲ決定ス可シ  
 第四編 公判

第一章 通則  
 第七十六條 公判ハ判事、檢事、裁判所書記出廷シテ之ヲ爲  
 スモノトス  
 第七十七條 被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルコト  
 ナシ但守卒ヲ置クコトアル可シ  
 第七十八條 裁判所ニ於テハ何時ニテモ禁錮以上ノ刑ニ該  
 ル可キ被告人ニ對シ勾引狀又ハ勾留狀ヲ發スルコトヲ得  
 第七十九條 被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用ユルコトヲ得  
 辯護人ハ裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ之ヲ選任ス可シ但裁判  
 所ノ允許ヲ得タルトキハ辯護士ニ非サル者ト雖モ辯護人ト  
 爲スコトヲ得  
 第八十條 辯護人ハ裁判所ニ於テ訴訟記録ヲ閱讀シ且之  
 ヲ抄寫スルコトヲ得  
 第八十一條 被告人ノ法律上代理人ハ其輔佐人ト爲リ辯論  
 ニ與カルコトヲ得  
 第八十二條 被告人出頭シテ辯論スルコトヲ肯セサルトキ  
 ハ對席トシテ裁判ヲ爲ス可シ  
 被告人審問ヲ妨ク又ハ不當ノ行狀ヲ爲シ裁判長ヨリ退廷又  
 ハ勾留ヲ命ゼラレタルトキ亦同シ若シ辯論二日ニ渉ルトキ  
 ハ更ニ被告人ヲ出頭セシム可シ  
 第八十三條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出頭スルコト  
 能ハサルトキハ痊癒ニ至ルマテ辯論ヲ停止ス但罰金以下ノ  
 刑ニ該ル可キ事件ニ付キ被告人代人ヲ差出シタルトキハ此  
 限ニ在ラス  
 辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタルトキハ其痊癒ノ  
 後新ニ辯論ヲ爲ス可シ其他ノ疾病ニ罹リタルトキハ痊癒ノ

後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辯論  
 ヲ停止シ又ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求アリタルトキハ新  
 ニ辯論ヲ爲ス可シ  
 若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論ヲ終リタルト  
 キハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スコトナク裁判ヲ爲ス可シ  
 第八十四條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判  
 ヲ爲スコカラズ但辯論ニ因リ發見シタル附帶ノ犯罪ニ付テ  
 ハ此限ニアラス  
 若シ附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスルトキハ本案ノ  
 辯論ヲ停止スルコトヲ得  
 第八十五條 左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス  
 第一 同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ  
 犯シタルトキ  
 第二 數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタ  
 ルトキ  
 第三 自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其罪ヲ  
 免カルル爲メ他ノ罪ヲ犯シタルトキ  
 第八十六條 檢事及ヒ被告人ハ第一審第二審ヲ問ハス本案  
 ノ判決アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサ  
 ル申立ヲ爲スコトヲ得  
 裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサ  
 ル言渡ヲ爲スコトヲ得  
 第八十七條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ却下シタルトキハ  
 本案ノ判決ヲ待タズ直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スコトヲ得此  
 場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス  
 第八十八條 調書ヲ作りタル司法警察官ハ檢事其他訴訟關

係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出スコトヲ得

第百八十九條 豫審ニ於テ訊問シタル證人又ハ鑑定ヲ爲シタル鑑定人ハ更ニ之ヲ呼出スコトヲ得

豫審ニ於ケル證人ノ供述書又ハ鑑定人ノ鑑定書ハ更ニ其證人、鑑定人ヲ呼出ササルトキ、證人、鑑定人呼出テ受ク出頭セサルトキ又ハ豫審及ヒ公判ニ於ケル供述、鑑定ヲ比較ス可キトキハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルコトヲ得

第百九十條 第百十五條以下ノ規定ハ公判ノ證人ニ第百三十五條以下ノ規定ハ公判ノ鑑定人ニモ亦之ヲ準用ス

第百九十一條 證人疾病其他正當ノ事故ニ因リ出頭スル能ハサルコトヲ証明シタルトキハ裁判所ハ其部員一名ニ命シ又ハ區裁所所判事ニ囑託シ其所在ニ就テ之ヲ訊問セシムルコトヲ得

第百九十二條 檢事、被告人及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出ス證人ノ氏名目録ハ開廷ヨリ一日前之ヲ各相手方ニ送達ス可シ

第百九十三條 證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラス又供述前辯論ニ立會フ可カラス既ニ供述ヲ爲シタル後ハ公廷ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退去ノ允許ヲ得タルトキハ此限ニ在ラス

第百九十四條 證人及ヒ被告人ノ訊問ハ裁判長之ヲ爲スモノトス

陪席判事及ヒ檢事ハ裁判長ニ告ク證人及ヒ被告人ヲ訊問スルコトヲ得

訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル事項ヲ分明ナラシムル

爲メ證人ヲ訊問ス可キコトヲ裁判長ニ求ムルコトヲ得

第百九十五條 證人又ハ鑑定人ノ供述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタルトキハ裁判所ニ於テ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ發シ豫審判事ニ送致ス可シ

其證人又ハ鑑定人ノ供述ハ裁判所書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ辯論ヲ停止スルコトヲ得

第百九十六條 被告人歿者、嘔者又ハ國語ニ通セサル者ナルトキハ第百條第百一條ノ規定ニ從フ

第百九十七條 裁判所ニ於テハ證人被告人ノ面前ニ於テ十分ナル供述ヲ爲スコトヲ得サレ得サレ得サレ得但裁判長ハ其證人ノ供述中被告人ヲ退廷セシムルコトヲ得但裁判長ハ證人供述ヲ終リタル後被告人ヲ入廷セシメ其供述シタル事項ヲ告知ス可シ

本條ノ規定ハ共同被告人ニモ亦之ヲ適用ス

第百九十八條 裁判長ハ各證憑ノ取調終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヤヲ問ヒ且其利益ト爲ル可キ證憑ヲ差出スヲ得ヘキコトヲ告知ス可シ

又證憑物件ハ被告人ニ示シテ辯解ヲ爲サシム可シ

第百九十九條 辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタルトキハ裁判所ニ於テ檢事ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ裁判ス可シ

第百條 裁判所ニ於テハ公訴ノ判決ト同時ニ私訴ノ判決ヲ爲スコトヲ得

私訴ニ付キ取調未タ十分ナラサルトキハ公訴ノ判決アリタル後其判決ヲ爲スコトヲ得

第百零一條 被告人有罪ト爲リタルトキハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴ニ關スル訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ負擔ス可キ言渡ヲ爲スコトヲ得

免許又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴ニ關スル訴訟費用ハ國庫之ヲ負擔ス

私訴ニ關スル訴訟費用ノ負擔ハ民事訴訟法ノ規定ニ從フ

第百零二條 被告人有罪ト爲リタルトキハ問ハス沒收ニ係ラサル差押物ハ所有者ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スル言渡ヲ爲スコトヲ得

第百零三條 刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且犯罪ノ證憑ヲ明示ス可シ

無罪又ハ免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦其理由ヲ明示ス可シ

第百零四條 判決ノ言渡ハ辯論ヲ終リタル後即日又ハ次ノ開廷日ニ之ヲ爲スコトヲ得

判決ノ言渡ハ判決主文ノ朗讀ニ因リ之ヲ爲ス其判決ノ理由ハ判決ノ言渡ト同時ニ之ヲ朗讀シ又ハ口頭ニテ其要領ヲ告知ス可シ

第百零五條 判決ノ原本ニハ其裁判ヲ爲シタル裁判所、年月日、其事件ニ干與シタル檢事ノ官氏名ヲ記載シ判事、裁判所書記共ニ署名捺印ス可シ

第百零六條 訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ判決ノ正本、謄本又ハ抄本ヲ求ムルコトヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタルトキハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付ス可シ

第百零七條 對席判決ニ因リ刑ノ言渡アリタルトキハ裁判長

ヨリ其言渡ヲ受クタル者ニ前條ノ請求及ヒ其判決ニ對シ上訴ヲ爲スヲ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ告知シ又陪席判決ニ因リ刑ノ言渡アリタルトキハ其判決ニ對シ故障ヲ爲スヲ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ記載ス可シ

若シ其告知又ハ記載ナキトキハ更ニ其通知アルマテ上訴及ヒ故障期間ノ經過ヲ停止ス

第百零八條 裁判所書記ハ公判始末書ヲ作り左ノ事項其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

第一 公ニ辯論ヲ爲シタルコト又ハ公開ヲ禁シタルコト及ヒ其事由

第二 被告人ノ訊問及ヒ其供述

第三 證人、鑑定人ノ供述及ヒ宣誓ヲ爲シタルコト若シ宣誓ヲ爲ササルトキハ其事由

第四 證據物件

第五 辯論中異議ノ申立アリタルコト、其中立ニ付キ檢事其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ裁判

第六 辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ供述セシメタルコト

第百零九條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル事項ノ外裁判ヲ爲シタル裁判所、年月日、裁判長、陪席判事、檢事及ヒ裁判所書記ノ官氏名ヲ記載ス可シ

辯論日ニ涉ルトキハ其旨及ヒ同一ノ判事出席シタルコトヲ記載ス可シ

辯論中補充判事ヲシテ代ラシメタルトキハ其旨ヲ記載ス可シ

第百十條 公判始末書ハ判決言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓シ

現行日本法令大全

裁判長及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ  
 裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意  
 見アルトキハ其紙尾ニ記載ス可シ  
 第二百一十一條 判決及ヒ公判始末書ノ原本ハ訴訟記録ニ添付  
 シ其裁判所ニ保存ス可シ若シ上訴アリタルトキハ之ヲ上訴  
 裁判所ニ送付ス可シ  
 第二章 區裁判所公判  
 第二百一十二條 區裁判所ハ左ノ場合ニ於テ其管轄ニ屬スル違  
 警罪及ヒ輕罪ノ公訴ヲ受理ス  
 第一 檢事ノ起訴アリタルトキ  
 第二 豫審判事又ハ上級裁判所ヨリ事件ヲ移ス裁判アリ  
 タルトキ  
 第二百一十三條 檢事ハ何レノ場合ニ於テモ被告人ニ對シ呼出  
 狀ヲ發ス可キコトヲ裁判所ニ請求ス可シ  
 裁判所ハ裁判所書記ヲシテ被告人ニ對シ呼出狀ヲ發セシム  
 可シ  
 第二百一十四條 呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名、職業、住  
 所、出頭ノ日時、場所及ヒ被告事件ヲ記載シ且被告事件違警  
 罪又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ナルトキハ代人ヲシテ出頭セシ  
 ムルコトヲ得ヘキ旨ヲ記載ス可シ  
 若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未タ其事件ニ付  
 キ取調ヲ受クサリシトキハ辯護準備ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求  
 ムルコトヲ得  
 第二百一十五條 呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クモ二日ノ猶  
 豫アル可シ  
 第二百一十六條 判事ハ豫審ヲ經サル被告事件急速ヲ要スルト  
 キハ公判ニ取掛ル前檢證處分ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テ  
 檢事其他訴訟關係人ノ立會ヲ要セス  
 第二百一十七條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クモ二  
 十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ  
 又呼出ヲ受クシテ出頭シタル者ト雖モ異議ノ申立ナキト  
 キハ裁判所ニ於テ證人トシテ其供述ヲ聽クコトヲ得  
 第二百一十八條 判事ハ先ツ被告人ノ氏名、年齢、身分、職業、住  
 所、出生ノ地ヲ問フ可シ  
 檢事ハ被告事件ヲ陳述ス可シ  
 第二百一十九條 判事ハ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問ス可シ  
 必要ナル調書其他證憑書類ハ書記ヲシテ朗讀セシメ又證人  
 ノ供述ヲ聽キ其他證憑ノ取調ヲ爲ス可シ  
 若シ被告人ノ自白アリタル場合ニ於テ檢事、民事原告人ノ異  
 議ナキトキハ他ノ證憑ヲ取調フルニ及ハス  
 第二百二十條 證憑調濟ノ後檢事ハ事實及ヒ法律適用ニ付キ  
 意見ヲ陳述ス可シ  
 被告人及ヒ其辯護人ハ答辯ヲ爲スコトヲ得  
 檢事、被告人及ヒ辯護人ハ迭ヒニ辯論ヲ爲スコトヲ得但辯論  
 ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人ヲシテ供述セシム可シ  
 第二百二十一條 公訴ニ付キ辯論終リタル後民事原告人ハ被  
 害ノ事實ヲ證明シ且私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ  
 被告人、辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲スコトヲ得  
 第二百二十二條 被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ  
 判決ヲ以テ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ若シ被告人勾留ヲ受ク  
 タルトキハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ  
 本條ノ場合ニ於テ勾留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前勾

現行日本法令大全

留狀ヲ存シ又ハ新ニ勾留狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可  
 シ  
 第二百二十三條 被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬シ且犯罪ノ證  
 憑十分ナルトキハ判決ヲ以テ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可  
 シ  
 第二百二十四條 犯罪ノ證憑十分ナラス又ハ被告事件罪ト爲  
 ラサルトキハ判決ヲ以テ無罪ノ言渡ヲ爲シ又第六十五條  
 第三號以下ノ場合ニ於テハ判決ヲ以テ免訴ノ言渡ヲ爲ス可  
 シ  
 第二百二十五條 前二條ノ場合ニ於テハ私訴ニ付キ其請求價  
 額ノ多寡ニ拘ハラス判決ヲ爲ス可シ  
 第二百二十六條 呼出ヲ受クタル被告人又ハ罰金以下ノ刑ニ  
 該ル可キ事件ニ付キ其代人公判ノ期日ニ出頭セサルトキハ  
 檢事ノ請求スル所ヲ聽キ關席判決ヲ爲ス可シ  
 私訴關係人出頭セサルトキハ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ關席  
 判決ヲ爲ス可シ  
 第二百二十七條 禁錮ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ被告人出頭  
 セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ公判ノ呼出狀ヲ本人ニ送  
 達シタル證アルニ非サレハ關席判決ヲ爲ス可カラス  
 豫審終結ノ言渡書又ハ公判ノ呼出狀ヲ本人ニ送達スルコト  
 能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニ猶豫ノ期間ヲ定メ其期間  
 ニ被告人出頭セサルトキハ關席判決ヲ爲ス可キ告知書ヲ其  
 親屬又ハ其本籍若シハ最後ノ住所ノ地ノ市町村長ニ送達ス  
 可シ若シ其本籍若シハ最後ノ住所ノ地分明ナラサルトキハ  
 同上ノ告知書ヲ少シトモ一月間裁判所ノ揭示板ニ貼付シテ  
 公布ス可シ  
 第二百二十八條 關席判決ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因  
 リ關席者ニ送達ス可シ關席判決ヲ受クタル者ハ其判決ニ對  
 シ故障ヲ申立ルコトヲ得  
 第二百二十九條 故障申立ノ期間ハ三日トス此期間ハ罰金以  
 下ノ刑ヲ言渡シタル判決及ヒ私訴ノ判決ニ付テハ關席判決  
 ノ送達ヲ以テ始マリ禁錮ノ刑ヲ言渡シタル判決ニ付テハ被  
 告人自ラ其送達ヲ受ク又ハ判決執行ニ因リ刑ノ言渡アリタ  
 ルコトヲ知リタル日ヲ以テ始マル  
 第二百三十條 故障ヲ申立ラントスル者ハ關席判決ヲ爲シ  
 タル裁判所ニ其中立書ヲ差出ス可シ  
 第二百三十一條 裁判所ニ於テハ故障ノ申立アリタルコトヲ  
 相手方ニ通知シ且其事件ヲ公判ニ付ス可キ期日ヲ定メ訴訟  
 關係人ヲ呼出ス可シ  
 第二百三十二條 裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ故障ヲ許ス可キ  
 ヤ否又故障ノ期間ニ於テ申立ヲ爲シタルヤ否ヲ調査シ  
 此要件ノ一ヲ缺クトキハ判決ヲ以テ故障ヲ棄却ス可シ  
 第二百三十三條 故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ更ニ  
 通常ノ規定ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ  
 前項ノ場合ニ於テ故障申立人關席シタルトキハ更ニ故障ヲ  
 申立ルコトヲ得ス  
 第二百三十四條 第二百四十七條第二百四十八條ノ規定ハ關  
 席判決ニ對スル故障ニモ亦之ヲ準用ス  
 第三章 地方裁判所公判  
 第二百三十五條 地方裁判所ニ於テハ豫審判事又ハ上級裁判  
 所ヨリ事件ヲ移ス裁判ニ因リ其管轄ニ屬スル輕罪及ヒ重罪  
 ノ公訴ヲ受理ス

現行日本法令大全

又輕罪ニ付テハ檢事ノ起訴ニ因リ其公訴ヲ受理ス  
 第二百三十六條 前章ノ規定ハ此章ニ別段ノ定メナキモノニ  
 限リ地方裁判所ノ輕罪、重罪ノ公判ニ准用ス  
 第二百三十七條 重罪事件ニ付テハ開廷前裁判長又ハ受命判  
 事ハ裁判所書記ノ立會ニ依リ一應被告人ヲ訊問シ辯護人ヲ  
 選任シタルヤ否ヤヲ問フ可シ  
 若シ辯護人ヲ選任セザルトキハ裁判長ノ職權ヲ以テ其裁判  
 所所屬ノ辯護士中ヨリ之ヲ選任ス可シ被告人及ヒ辯護士ニ  
 異議ナキトキハ辯護士一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サ  
 シムルコトヲ得  
 書記ハ本條ノ訊問ニ付キ特ニ調書ヲ作ル可シ  
 第二百三十八條 裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトス  
 ルトキハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ  
 受命判事ヲシテ臨檢ノ處分ヲ爲シ報告ヲ爲シシムルコトヲ  
 得  
 第二百三十九條 裁判所ニ於テハ被告人其罪ヲ自白シタルト  
 キト雖モ仍ホ證據ヲ取調ヘサル可カラズ  
 第二百四十條 裁判所ニ於テハ被告事件區裁判所ノ管轄ニ  
 屬スルモノト認メタルトキト雖モ第一審ノ判決ヲ爲ス可シ  
 私訴ニ付キ其請求ノ價額通常民事上區裁判所ノ管轄ニ屬ス  
 ルトキ亦同シ  
 第二百四十一條 裁判所ニ於テ輕罪トシテ受理シタル事件ヲ  
 重罪ナリトスルトキ又ハ檢事ヨリ更ニ其事件ヲ重罪トシテ  
 追訴スルコトヲ中立タルトキハ豫審判事ニ送付スル決定ヲ  
 爲ス可シ但被告人勾留ヲ受クザルトキハ勾留狀ヲ發ス可シ  
 其被告事件豫審ヲ經タルトキハ公判ヲ止メ更ニ重罪事件ト

シテ裁判ス可キ旨ノ決定ヲ爲シ受命判事ヲシテ其事件ノ取  
 調ヲ爲シ報告ヲ爲シシム可シ  
 受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得  
 第五編 上訴  
 第一章 通則  
 第二百四十二條 檢事其他訴訟關係人ハ法律ニ許シタル上訴  
 ヲ爲スコトヲ得  
 檢事ハ被告人ノ利益ノ爲メニモ亦上訴ヲ爲スコトヲ得  
 第二百四十三條 辯護人ハ被告人ニ代リ上訴ヲ爲スコトヲ得  
 但被告人ノ明言シタル意思ニ反スルコトヲ得ス  
 第二百四十四條 被告人ノ法律上代理人ハ獨立シテ上訴ヲ爲  
 スコトヲ得  
 第二百四十五條 勾留ヲ受ケタル被告人上訴ヲ爲スニハ其中  
 立書ヲ監獄署長ニ差出シ署長ハ之ヲ其裁判所ニ送致ス可シ  
 第二百四十六條 檢事ヲ除ク外上訴ヲ爲シタル者ハ其判決  
 ルマテ何時ニテモ之ヲ取下クルコトヲ得  
 第二百四十七條 訴訟關係人天災其他避ク可カラサル事變ノ  
 爲メ上訴期間ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ疏明シタルト  
 キハ期間ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルコト  
 ヲ得但障礙ノ止ミタル日ヨリ通常ノ期間内ニ其疏明方法ヲ  
 中立書ニ記載シ上訴ヲ爲スコトヲ得  
 第二百四十八條 前條ノ中立アリタルトキハ裁判所書記連ニ  
 其中立書ヲ相手方ニ送達ス可シ相手方ハ三日内ニ答辯書ヲ  
 差出スコトヲ得  
 上訴ヲ裁判ス可キ裁判所ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聽キ先ツ其  
 中立ヲ許ス可キヤ否ヤヲ決定ス可シ

現行日本法令大全

第二百四十九條 上訴完結ノ後其訴訟記録ハ上訴審ニ於テ爲  
 シタル裁判ノ原本ト共ニ第一審裁判所ニ之ヲ送還ス可シ  
 第二章 控訴  
 第二百五十條 控訴ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ第一審ニ  
 於テ爲シタル本案ノ判決及ヒ第八十七條ニ規定シタル本  
 案前ノ判決ニ對シ之ヲ爲スコトヲ得  
 第二百五十一條 控訴ハ判決ノ一分ニ限り之ヲ爲スコトヲ得  
 若シ之ヲ限ラザルトキハ判決ノ全部ニ對シ控訴ヲ爲シタル  
 モノト看做スコトヲ得  
 第二百五十二條 控訴ノ期間ハ判決言渡アリタル日ヨリ五日  
 トス  
 關席判決ヲ受ケタル者ハ故障ノ期間内故障ヲ爲サスシテ直  
 チニ控訴ヲ爲スコトヲ得  
 第二百五十三條 本案ノ判決ニ對スル控訴ノ期間内及ヒ控訴  
 アリタルトキハ判決ノ執行ヲ停止ス  
 第二百五十四條 控訴ヲ爲スニハ其申立書ヲ原裁判所ニ差出  
 ス可シ  
 裁判所ハ控訴ノ申立アリタルコトヲ速ニ相手方ニ通知ス可  
 シ  
 第二百五十五條 原裁判所ニ於テハ期間ヲ經過シタル控訴ノ  
 申立ハ決定ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ此決定ニ對シテハ抗告ヲ  
 爲スコトヲ得  
 第二百五十六條 訴訟記録ハ檢事ヨリ控訴裁判所ノ檢事ニ送  
 致シ其檢事ハ之ヲ裁判所ニ差出スコトヲ得  
 公訴ノ判決ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被告人勾留ヲ受  
 ケタルトキハ檢事ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監獄ニ移スコトヲ得

第二百五十七條 控訴裁判所ニ於テハ訴訟關係人ニ對シ呼出  
 狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ  
 呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ  
 第二百五十八條 控訴ノ裁判ニ付テハ地方裁判所ノ第一審ニ  
 關スル規定ヲ適用ス  
 第一審ニ於テ訊問シタル證人又ハ鑑定ヲ爲シタル鑑定人ハ  
 控訴裁判所ニ於テ其再度ノ訊問鑑定ヲ必要ナリトセザルト  
 キハ之ヲ呼出サ、ルコトヲ得  
 第二百五十九條 控訴ノ相手方ハ其判決アルマテ附帶控訴ヲ  
 爲スコトヲ得  
 控訴裁判所ノ檢事モ亦附帶控訴ヲ爲スコトヲ得  
 第二百六十條 控訴裁判所ニ於テハ控訴ノ期間内ニ於テ申  
 立ヲ爲シタルヤ否ヤヲ調査シ期間ノ經過後ニ係ルモノト認  
 ムルトキハ判決ヲ以テ控訴ヲ棄却スコトヲ得  
 第二百六十一條 控訴裁判所ニ於テハ控訴ノ理由ヲ申  
 トキハ判決ヲ以テ控訴ヲ棄却スコトヲ得  
 控訴ノ理由アリトスル  
 トキハ原判決ヲ取消シ更ニ判決ヲ爲スコトヲ得  
 第二百六十二條 控訴裁判所ニ於テハ原裁判所ノ管轄違ナル  
 エトヲ認メタルトキハ原判決ヲ取消ス可シ此場合ニ於テ勾  
 留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前勾留狀ヲ存シ又ハ新ニ  
 勾留狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付スコトヲ得  
 原裁判所ニ於テ不當ニ管轄違ヲ言渡シタルトキハ其判決ヲ  
 取消シ事件ヲ其裁判所ニ差戻スコトヲ得  
 第二百六十三條 前條第一項ノ場合ニ於テ控訴ヲ受ケタル地  
 方裁判所自ラ其事件ニ付キ第一審トシテ裁判權ヲ有スルトキ  
 ハ更ニ其事件ニ付キ判決ヲ爲スコトヲ得但事件重罪ナルトキハ

第二百四十一條ノ規定ニ從ヒ處分ス可シ

第二百四十四條 控訴院ニ於テ地方裁判所カ輕罪ナリト判決シタル事件ヲ重罪ナリトスルトキ又ハ其事件ヲ重罪ナリトシテ主タル控訴又ハ附帶控訴アリタルトキハ其公判ヲ止メ更ニ重罪事件トシテ裁判ス可キ旨ノ決定ヲ爲シ受命判事ヲシテ其事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲シシム可シ

受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得

本條ノ場合ニ於テ被告人辯護人ヲ選任セザルトキハ第二百三十七條第二項ノ規定ニ從ヒ裁判長ノ職權ヲ以テ辯護人ヲ選任ス可シ

第二百六十五條 被告人、辯護人又ハ法律上代理人ノミ控訴ヲ爲シタルトキハ原判決ヲ變更シテ被告人ノ不利益ト爲スコトヲ許サズ

被告人ノ利益ノ爲メ檢事ヨリ控訴ヲ爲シタルトキ亦同シ

第二百六十六條 控訴申立人出頭セザルトキハ闕席判決ヲ以テ控訴ヲ棄却シ相手方出頭セザルトキハ申立人ノ意見ヲ聽キ闕席判決ヲ爲スコシ

第三章 上告

第二百六十七條 上告ハ地方裁判所又ハ控訴院ノ第二審ニ於テ爲シタル本案ノ判決及ヒ第八十七條ノ規定シタル本案前ノ判決ニ對シ之ヲ爲スコトヲ得

第二百六十八條 上告ハ法律ニ違背シタル裁判ナルコトヲ理由トスルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

法則ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルトキハ法律ニ違背シタルモノトス

第二百六十九條 裁判ハ左ノ場合ニ於テ常ニ法律ニ違背シタルモノトス

ルモノトス

第一 規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セザリシトキ

第二 法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタル判事裁判ニ參與シタルトキ但シ選任申請又ハ上訴ヲ以テ除斥ノ理由ヲ主張シタルモ其効チカリシトキハ之ヲ以テ上告ノ理由ト爲スコトヲ得ス

第三 判事忌避セラレ其忌避ノ申請ヲ理由アリト認メタルニ拘ハラズ裁判ニ參與シタルトキ

第四 裁判所ニ於テ其管轄又ハ管轄違テ不當ニ認メタルトキ

第五 法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セザルトキ

第六 法律ニ定メタル場合ニ於テ檢事ノ意見ヲ聽カサルトキ

第七 裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サズ又ハ職權ヲ以テ判決スルコトヲ得ヘキ場合ヲ除ク外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタルトキ

第八 判決ヲ公行セス又ハ公開ヲ禁スル旨言渡ナクシテ辯論ヲ公ニセザルトキ

第九 裁判ニ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アルトキ

第十 擬律ノ錯誤アルトキ

第二百七十條 免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ爲メ設ケタル規定ニ背キタルコト又ハ土地ノ管轄違アリト雖モ上告ノ理由ト爲スコトヲ得ス

第二百七十一條 上告申立ノ期限ハ判決言渡アリタル日ヨリ三日トス

第二百七十二條 本案ノ判決ニ對スル上告ノ期間内及ヒ上告

ノ申立アリタルトキハ拘留及ヒ放免ノ言渡ヲ除ク外判決ノ執行ヲ停止ス

第二百七十三條 上告ヲ爲スニハ其申立書ヲ原裁判所ニ差出シ且其申立書ヲ爲シタル日ヨリ五日内ニ趣意書ヲ差出スコシ

裁判所ハ上告申立書及ヒ趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時間内ニ之ヲ相手方ニ送達ス可シ

第二百七十四條 相手方ハ上告申立書及ヒ趣意書ヲ受取リタル日ヨリ五日内ニ答辯書ヲ原裁判所ニ差出スコトヲ得

裁判所ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時間内ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ

第二百七十五條 檢事ヨリ差出スコキ上告申立書及ヒ趣意書又ハ答辯書ハ一通ヲ作り一通ヲ上告裁判所ニ差出シ一通ヲ相手方ニ送達ス可シ

私訴ノ判決ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出スコキ上告申立書及ヒ趣意書又ハ答辯書ニ付テモ亦同シ

第二百七十六條 原裁判所ニ於テハ期間ヲ經過シタル上告ハ決定ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百七十七條 訴訟記録ハ檢事ヨリ上告裁判所ノ檢事ニ送致シ其檢事ハ之ヲ裁判所ニ差出スコシ

第二百七十八條 上告ノ相手方ハ其判決アルマテ附帶上告ヲ爲スコトヲ得

上告裁判所ノ檢事モ亦附帶上告ヲ爲スコトヲ得

第二百七十九條 上告申立人及ヒ相手方ハ辯護士ヲ差出スコトヲ得

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢事ヨリ重罪

ノ刑ニ該ル可キモノトシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ辯護士ヲ選任セザルトキハ上告裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所屬ノ辯護士中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第二百八十條 裁判長ハ受命判事ヲ定ム可シ

受命判事ハ訴訟記録ヲ檢閱シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意見ヲ付ス可カラズ

第二百八十一條 上告申立人及ヒ相手方ハ受命判事ノ報告書ヲ差出スマテハ其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書ヲ上告裁判所ニ差出スコトヲ得

受命判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差出シタルトキハ之ヲ其報告書ニ添フ可シ

第二百八十二條 裁判所書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ期日ヲ上告申立人及ヒ相手方ノ辯護士ニ報知ス可シ

第二百八十三條 開廷ノ日ニハ受命判事先ツ其報告書ヲ朗讀ス可シ

檢事及ヒ辯護士ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ

私訴ノ上告ニ付テハ檢事最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第二百八十四條 上告申立人又ハ相手方ヨリ辯護士ヲ差出サザルトキハ其儘ニテ判決ヲ爲スコシ

第二百八十五條 上告裁判所ニ於テハ上告ノ理由ナキトキ又ハ法律上ノ方式及ヒ期間内ニ於テ起サザルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ

第二百八十六條 上告ヲ理由アリトスルトキハ其上告ニ係ル判決ノ部分ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス言渡ヲ爲スコシ但後二條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス

第二百八十七條 擬律ノ錯誤又ハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シタルニ因リ判決ヲ破毀シタルトキハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク上告裁判所ニ於テ直チニ判決ヲ爲スコシ

第二百八十八條 公判ノ手續規定ニ背キタルコトアリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ボサザルトキハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク止テ其手續ヲ破毀ス可シ

第二百八十九條 判決ノ一分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アルトキハ其部分ヲモ破毀ス可シ

擬律ノ錯誤又ハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シタルニ因リ被告人ノ利益ノ爲メニ判決ヲ破毀シタルトキハ其利益ハ上告ヲ爲サザル共同被告人ニモ及ボス可シ

第二百九十條 上告裁判所ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク爲スコシ又ハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ指定ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ其裁判所ノ民事部ニ移スコシ

第二百九十一條 第二百六十五條ノ規定ハ上告ニモ亦之ヲ準用ス

第二百九十二條 第一審裁判所ト第二審裁判所トヲ問ハス法律ニ於テ罰セザル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ期間内ニ上訴スル者ナクシテ其判決確定シタルトキハ其事件ニ付キ上告ヲ受クル權アル裁判所ノ檢察ハ司法大臣ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ其裁判所ニ非常上告ヲ爲スコトヲ得

非常上告ヲ理由アリトスルトキハ原判決ヲ破毀シ直チニ其事件ニ付キ判決ヲ爲スコシ

第四章 抗告

第二百九十三條 抗告ハ法律ニ於テ特ニ許シタル場合ニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

第二百九十四條 抗告ニ付テハ直近ノ上級裁判所其裁判ヲ爲スコシ

抗告裁判所ノ裁判ニ對シテハ抗告申立人ヨリ更ニ抗告ヲ爲スコトヲ得ス

第二百九十五條 抗告ノ期間ハ裁判所ノ送達アリタル日ヨリ三日トス

第二百九十六條 抗告ヲ爲スニハ其申立書ヲ原裁判所ニ於テ抗告ノ理由アリトスルトキハ不服ノ點ヲ更正シ又理由ナシトスルトキハ意見ヲ付シテ三日内ニ抗告申立書ヲ抗告裁判所ニ送致シ且豫審終結ノ決定ニ對スル抗告ニ付テハ訴訟記録ヲモ送致ス可シ

第二百九十七條 抗告裁判所ニ於テハ檢察ノ意見ヲ聽キ書類ニ依リ抗告ノ裁判ヲ爲スコシ

第二百九十八條 豫審終結ノ決定ニ對スル抗告ニ付キ抗告裁判所ニ於テ必要アリトスルトキハ受命判事ヲシテ事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシムルコトヲ得

受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得

第二百九十九條 抗告裁判所ニ於テハ抗告ヲ許スコキヤ否ヤ又抗告ノ期間内ニ於テ申立テ爲シタルヤ否ヤヲ調査シ此要件ノ一ヲ闕クトキハ其抗告ヲ棄却ス可シ

第三百條 抗告裁判所ニ於テ抗告ヲ理由アリトスルトキハ原裁判ヲ取消シ自ラ更ニ裁判ヲ爲シ又抗告ヲ理由ナシトスルトキハ之ヲ棄却ス可シ

第六編 再審

第三百一條 再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪、輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スコトヲ得但判決確定ノ後ニ非ザラハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第一 人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタルモ其殺シラントリト認メラシキ者犯罪後生存シ又ハ犯罪前既ニ死シタル確證アリタルトキ

第二 同一ノ事件ニ付キ其犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタルトキ

第三 犯罪アル以前ニ作リタル公正證書ヲ以テ當時其場所ニ在ラザルコトヲ證明シタルトキ

第四 被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタルトキ

第五 公正證書ヲ以テ訴訟記録ニ偽造又ハ錯誤アルコトヲ證明シタルトキ

第六 判決ノ證據ト爲リタル民事上ノ判決他ノ確定ト爲リタル判決ヲ以テ廢棄若クハ破毀セラレタルトキ

第三百二條 再審ノ訴ヲ爲スコトヲ得ヘキ者左ノ如シ

第一 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察

第二 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢察

第三 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル上告裁判所ノ檢察但司法大臣ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲スコシ

第四 刑ノ言渡ヲ受ケタル者

第五 刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタルトキハ其親屬

第三百三條 再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラズ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得

第三百四條 再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原判決ノ謄本及ヒ證據書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ニ差出スコシ

原裁判所ノ檢察ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ上告裁判所ノ檢察ニ差出スコシ

原裁判所ノ檢察及ヒ控訴裁判所ノ檢察自ラ再審ノ訴ヲ爲サントスルトキハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出スコシ

第三百五條 上告裁判所ニ於テハ檢察ノ請求ニ因リ速ニ受命判事一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシム可シ

第三百六條 上告裁判所ニ於テハ受命判事ノ報告及ヒ檢察ノ意見ヲ聽キ判決ヲ爲スコシ

第三百七條 上訴裁判所ニ於テ再審ノ理由アルコトヲ認メタルトキハ原判決ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲スコシコトヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移スコシ

其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規定ニ從ヒ裁判ヲ爲スコシ

第三百八條 死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ上告裁判所ニテ再審ノ理由アルコトヲ認メタルトキハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク原判決ヲ破毀ス可シ

第三百九條 再審ノ判決ニ因リ無罪ノ言渡アリタルトキ又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタルトキハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其判決ヲ揭示ス可シ

第七編 大審院ノ特別權限ニ屬スル訴訟手續

第三百十條 裁判所構成法第五十條第二號ニ記載シタル大審



院ノ特別權限ニ屬スル犯罪ニ付テハ檢事總長其捜査ヲ爲ス可シ

地方裁判所、區裁判所ノ檢事及ヒ司法警察官モ亦其犯罪ニ付キ捜査ヲ爲シ檢事總長ニ報告ス可シ

第三百一十一條 前條ニ記載シタル犯罪ノ現行犯アル場合ニ於テ急遽ヲ要スルトキハ地方裁判所、區裁判所ノ檢事及ヒ司法警察官ハ第四百四十四條及ヒ第四百四十七條第一項ノ規定ニ從ヒ豫審處分ヲ爲スコトヲ得但豫審判事ニ通知スルコトヲ要セス

第三百一十二條 前條ノ場合ニ於テハ地方裁判所檢事ヨリ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ檢事總長ニ送致ス可シ

第三百一十三條 檢事總長ハ何レノ場合ニ於テモ其事件大審院ノ特別權限ニ屬シ且起訴ス可キモノト認メタルトキハ豫審判事ヲ命ス可キコトヲ大審院長ニ請求ス可シ

第三百一十四條 大審院長ヨリ命ヲ受ケタル豫審判事ハ豫審ヲ爲シタル上ニテ他ニ取調ヲ要スルコトヲナシト思料シタルトキハ訴訟記録ニ意見書ヲ付シ大審院ニ差出ス可シ

第三百一十五條 大審院ニ於テハ檢事總長ノ意見ヲ聽キ先ツ其事件ヲ公判ニ付ス可キヤ否ヤヲ決定ス可シ

其事件地方裁判所又ハ區裁判所ノ權限ニ屬スルモノト決定シタルトキハ管轄裁判所ヲ指定シ其事件ヲ送致ス可シ若シ特別裁判所ノ權限ニ屬スルモノト認メタルトキハ決定ヲ以テ管轄處ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第四百六十五條ニ記載シタル場合ニ於テハ決定ヲ以テ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百一十六條 前數條ニ於テ特ニ規定シタルモノヲ除ク外豫審、公判ノ手續ハ第三編第四編ノ規定ヲ準用ス

第八編 裁判執行、復権及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第三百一十七條 刑ノ執行ハ判決確定ノ後ニ非ザレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第三百一十八條 死刑ノ言渡確定シタルトキハ檢事ヨリ速ニ訴訟記録ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

司法大臣ヨリ死刑ヲ執行ス可キ命令アリタルトキハ三日内ニ其執行ヲ爲ス可シ

第三百一十九條 死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタルトキハ直チニ之ヲ執行ス可シ

體刑ノ言渡ヲ受ケ其執行ヲ近シタル者ニ對シ檢事ノ發シタル逮捕狀ハ勾留狀ト同一ノ效ヲ有ス其願席判決ニ係ル場合ニ於テ發シタル者亦同シ

第三百二十條 刑ノ執行ハ其刑ヲ言渡シタル裁判所ノ檢事又ハ上告裁判所ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢事ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ

罰金、科料、訴訟費用及ヒ沒收物品、追徴金ハ檢事ノ命令ニ依リ之ヲ徵收ス可シ

破損又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢事之ヲ處分ス可シ

第三百二十一條 死刑ノ執行ニ付テハ裁判所書記其始末書ヲ作リ刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

第三百二十二條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタルトキハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ決定ス可シ此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百二十三條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ辨濟ス可キ訴訟費用ニ付キ其判決ノ執行ハ民事訴訟法ノ規定ニ從フ

第二章 復権

第三百二十四條 復権ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期間經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法大臣ニ之ヲ爲ス可シ

復権ノ願書ハ現ニ住スル地ノ地方裁判所檢事ニ之ヲ差出ス可シ

第三百二十五條 復権ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

第一 判決ノ正本

第二 主刑ノ滿期、特赦ト爲リ又ハ時效ノ成就シタルコトヲ證明スル書類

第三 假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セザレタル證書

第四 賠償及ヒ訴訟費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カントル證書

第五 過去、現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第三百二十六條 檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ檢事總長ニ差出ス可シ

第三百二十七條 檢事總長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復権ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

第三百二十八條 司法大臣ハ復権ノ願ニ關スル書類ヲ檢閱シ之ニ意見書ヲ添ヘ速ニ上奏ス可シ

第三百二十九條 勅裁ニ因リ復権ノ願ヲ却下シタルトキハ司法大臣ヨリ其旨ヲ檢事總長ニ通知シ檢事總長ヨリ願書ヲ差出シタル地方裁判所檢事ニ通知ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期間ノ半ヲ

經過スルニ非ザレハ更ニ其願ヲ爲スコトヲ得ス

更ニ復権ノ願ヲ爲スニ付テモ前數條ノ規定ニ從フ

第三百三十條 復権ノ裁可アリタルトキハ司法大臣ヨリ其裁可狀ヲ檢事總長ニ送致シ檢事總長ヨリ願書ヲ差出シタル地方裁判所檢事ニ送致ス可シ

檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ

又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ判決ノ原本ニ記入ス可シ

第三章 特赦

第三百三十一條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事又ハ監獄署長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法大臣ニ申立ルコトヲ得

監獄署長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ストキハ檢事ヲ經由ス可シ但檢事ハ意見書ヲ添フ可シ

特赦ノ申立アリタルトキハ司法大臣ヨリ其書類ニ意見書ヲ添ヘ上奏ス可シ

第三百三十二條 司法大臣ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニシテモ特赦ノ申立ヲ爲スコトヲ得

死刑ヲ除ク外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セス

第三百三十三條 特赦ノ申立却下アリタルトキハ司法大臣ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事ニ其旨ヲ通知ス可シ

第三百三十四條 特赦ノ裁可アリタルトキハ司法大臣ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第三百三十條ノ規定ニ從フ

附則

第一條 此法律施行前ニ受理シタル豫審ノ故障及ヒ其故障ノ

現行日本法令大全

判決ニ對スル上告ハ之ヲ受理シタル地方裁判所又ハ大審院ニ於テ抗告トシテ之ヲ裁判ス可シ

第二條 大審院ニ於テ既ニ受理シタル哀訴、裁判管轄ヲ定ムルノ訴及ヒ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ治罪法ノ手續ニ依リ大審院之ヲ裁判ス可シ

第三條 既ニ發シタル勾留狀收監狀ハ此法律ニ定メタル勾留狀ノ效ヲ有ス

第四條 此法律ノ規定ニ依リ市町村長ノ爲ス可キ職務ハ市町村長ヲ置カサル地ニ在テハ其職務ヲ行フ吏員ニ屬ス

第五條 此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行シ其日ヨリ治罪法ヲ廢ス

○重罪控訴豫納金規則

明治二十三年二月 法律第七號

重罪控訴豫納金規則

第一條 重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者控訴ヲ爲サントスルトキハ裁判費用ノ保證トシテ金貳拾圓ヲ豫納スヘシ

第二條 重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者貧困ニシテ保證金ヲ豫納スル能ハサルトキハ控訴ノ申立ト同時ニ保證金ノ免除ヲ請求スルコトヲ得

第三條 保證金ノ免除ヲ請求シタル者ハ其請求ヲ爲シタル日ヨリ十四日內ニ控訴ノ趣意書ト共ニ裁判費用支辨ノ資力ナキコトヲ證スヘキ住居地市町村長ノ證明書ヲ差出スヘシ但シ其市町村役場三里以外ニ在ルトキハ治罪法第十九條ノ規定ニシタル猶豫ヲ與フ

○輕罪ニ係ル控訴豫納金規則

明治十八年一月 法律第二號

明治十四年四月二十七日 第七十四號ノ布告ヲ廢シ自今輕罪ニ係ル控訴ハ左ノ規則ニ從ヒ之ヲ爲スコトヲ得但治罪法中此規則ニ牴觸スル條件ハ當分ノ內施行セス

第一條 (二十三年六月二十八日法律第七號ヲ以テ削除) 同上

第二條 同上

第三條 被告人公訴ニ關シ控訴ヲ爲サントスルトキハ裁判費用ノ保證トシテ金拾圓ヲ豫納スヘシ (二十三年六月二十八日法律第七號ニ對シテ改ムル) (第四十七號ヲ以テ公訴ノ刑ヲ公訴ニ對シト改ムル)

第四條 被告人ニ於テ證人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルトキ前條保證金ニテ不足ト認ムル場合ニ於テハ別段其費用ヲ豫納セシムヘシ

第五條 (二十三年六月二十八日法律第七號ヲ以テ削除)

現行日本法令大全

○罰金追徴ニ係ル上告豫納金ノ件

明治十九年六月 勅令第四十六號

罰金及追徴ニ係ル上告豫納金ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

罰金及追徴ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲サントスルトキハ其罰金及追徴金ノ十分ノ一ニ當ル金額ヲ上告趣意書ニ添へ原裁判所書記局ニ預ケ置ク可シ否ラサレハ上告ヲ爲スコトヲ得ス若シ上告不當ナルトキハ大審院ニ於テ其全部又ハ幾分ヲ沒入スルノ言渡ヲ爲スヘシ

○樺戶集治監ノ囚人輕罪以下ノ罪ヲ犯シタル者裁判手續

明治十五年三月 布告第十六號

樺戶集治監ノ囚人輕罪以下ノ罪ヲ犯シタル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ函館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

○空知集治監ノ囚人輕罪以下ノ罪ヲ犯シタル者裁判及治罪手續

明治十五年八月 布告第四十一號

空知集治監ノ囚人輕罪以下ノ罪ヲ犯シタル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ函館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

○釧路集治監ノ囚人犯罪ノ者處分方

明治十八年二月 布告第四十二號

釧路集治監ノ囚人輕罪以下ノ罪ヲ犯シタル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ根室重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

○刑事裁判所ニ於テ被告人ヲ責付スルノ手續

明治十四年九月 布告第四十七號

刑事裁判所ニ於テ被告人ヲ責付スルニハ左ノ手續ニ從フヘシ

第一條 被告人ヲ責付スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應ジ出廷セシムヘキノ證書ヲ其裁判所書記局ニ差出サシムヘシ

第二條 責付中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其通知ヲ爲スヘシ

第三條 被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セザルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ヲ取消スヘシ

○保釋責付中ノ被告人取締方心得

明治十六年十一月 司法省達第四八號

保釋責付中ノ被告人取締方心得ノ儀ニ付左ノ通告裁判所ヘ相違條此旨爲心得相違候事

保釋責付ヲ得タル被告人ハ左ノ取締條件ニ服從セシム可キ儀ニ付キ保釋責付ヲ爲スノ際其旨ヲ被告人ニ豫知セシム可シ但シ其旨渡書ノ紙尾ニ記載印刷スルモ妨クナシ

第一條 治罪法第二十一條ニ從ヒ假住所ヲ定メ居置ク可キコトハ言テ待タス其裁判所ノ管轄地外ニ旅行スルコトヲ得ス若シ已ムテ得サル事由アルトキハ其旨ヲ檢事ニ申立テ許可ヲ受ク可シ

第二條 裁判所ノ管轄地内ト雖モ住所外ニ於テ一泊以上滞在スルトキハ滞在ノ場所ヲ其家族又ハ同居人ニ通知シ置ク可シ

若シ同居人アツタルトキハ其住所ノ地ノ戸長ニ居置ク可シ

第三條 代言人辯護人又ハ代人トシテ法廷ニ出頭シ其他議會集會等公然ノ場所ニ參會スルコトヲ得ス

第四條 治罪法第二百一十一條ニ適當スル者及ヒ前數條ノ規則ニ背キタル者ハ治罪法第二百十六條第二項ニ從ヒ保釋ヲ取消ス可シ其實付ヲ受ケタル者モ亦同シ

○帶動者ノ犯罪ニ付勳章ヲ褫奪シタルトキ犯人本籍へ通知方

明治十九年四月  
司法省令第四六號

刑事裁判官渡ヲ犯人本籍へ通知方ノ儀明治十四年當省令第三十三號ヲ以テ相違置タル處自今帶動者ノ犯罪ニ付勳章ヲ褫奪シタル時ハ其旨併ヒテ通知ス可シ

○帶動有位者罪ヲ犯シ公權剝奪又ハ停止ノ言渡アリタルトキ届出方

明治十五年三月  
司法省令第四九號

帶動者罪ヲ犯シ公權ヲ剝奪又ハ停止スルノ言渡アリタルトキ

ハ其罪狀并刑名宣告文ノ寫ヲ以テ當省へ可届出此旨相違候事但剝奪公權ノ者ハ勳記勳章并年金票共收奪ノ上當省へ差出スヘク候事

○恩給扶助料ヲ有スル元軍人竝軍人及寡婦孤兒罪ヲ犯シ公權剝奪停止ノ處分ヲ受ケタル者アルトキ大藏省へ通知方

明治十六年四月  
司法省令第五五號

明治八年第四百八十八號公達海軍退隱令並ニ明治九年第九十九號公達陸軍恩給令ニ據リ恩給ヲ有スル元軍人及其扶助料ヲ有スル寡婦孤兒罪ヲ犯シ公權剝奪若シハ停止ノ處分ヲ受ケタル該恩給ヲ有スル軍人ニシテ治罪法第二百七十三條ニ據リ公權停止ノ處分ヲ受ケタル者アルトキハ其都度直ニ大藏省へ通知可致此旨相違候事

但新法實施已後是迄本文ノ處分ヲ受ケタル者有之候ハ、其旨直ニ大藏省へ通知可致事

○勅奏官華族竝有位帶動者犯罪取扱

二付更ニ心得方ヲ達ス

明治十六年五月  
司法省令第五二號

勅奏官華族竝有位帶動者犯罪取扱方ノ儀ニ付キ別紙ノ通り太政官へ相伺候處朱書ノ通御指令相成候條爲心得此旨相違候事

但御指令文中十五年三月二十二日附御達ハ同年當省令第三十一號達ト可相心得事

勅奏官華族等犯罪取扱方ノ儀伺(別紙)

勅任官禁錮ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シ及ヒ奏任官華族帶動有位ノ者禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ犯罪取扱方ノ儀ニ付テハ明治十五年三月二十二日附ヲ以テ御達有之候處其罰金ニ處スヘキモノト雖或ハ本人ヲ出廷セシムル場合モ有之且又拘留ノ刑ニ處シ及ヒ罰金料ヲ納完セサル節ハ則換刑シテ輕禁錮又ハ拘留ニ處スヘキ儀モ有之候條右本人出廷セシムル場合及ヒ換刑シテ輕禁錮又ハ拘留ノ刑ニ處スヘキ時ハ矢張其時々奏用可致儀ト相心得可然々此段御伺候也

○郵便犯則者ニ對スル未納稅不足稅等徵收方

明治十七年八月  
司法省令第四三號

郵便犯則者ニ對スル未納稅不足稅等徵收方ノ儀ニ付太政官ヨリ左ノ通御達有之候條此旨相違候事

郵便局ヨリ郵便犯則者ヲ告訴スルト併ヒテ未納稅不足稅等ノ徵收ヲ請求スルトキハ其請求ニ應シ之ヲ受理スヘキ儀ト可心得此旨相違候事

○醫師タル者醫業ニ關スル犯罪有之節内務省へ通知方

明治十五年八月  
司法省令第四十二號

本年八月第三十九號公布ニ依リ今般内務卿ヨリ照會ノ趣モ有之候ニ付テハ自今醫師タル者醫業ニ關スル犯罪有之處斷致シ候節ハ其都度該宣告文謄本相添内務省へ通知候條可致此旨相違候事

○醫師醫業ニ關シテ罪ヲ犯シ處斷セ

シトキハ内務省へ通知方再達

明治十六年十二月  
司法省令第五九號

本年第三十五號公布ヲ以テ明治十五年第三十九號公布被廢候ニ付同年當省令第四十二號達ハ自然消滅ノ處今般内務卿ヨリ更ニ照會ノ趣モ有之候條同省へ通牒方從前ノ通り可取計此旨相違候事

○西洋形船舶長運轉機關手免狀ヲ有スル者罪ヲ犯シ輕罪以上ノ刑ニ處シタル節農商務省へ通牒方

明治十六年七月  
司法省令第五二號

明治十四年十二月第七十五號公布西洋形船舶長運轉手機關手免狀規則ニ據リ免狀ヲ有スル者罪ヲ犯シ輕罪以上ノ刑ニ處シタル節ハ刑名並ニ宣告ノ月日ヲ詳記シ其都度直ニ農商務省へ通牒スヘシ此旨相違候事

○陸軍常備下士卒服役中違警罪ヲ犯シ處分セシトキハ本人所管へ通報方

明治十六年八月  
司法省令第六六號

陸軍常備下士卒ノ者違警罪ヲ犯シ其處分ヲ爲シタル節ハ其人各罰科ヲ詳記シ其都度本人所管(附隊長)へ速ニ通報可致此旨相違候事

○海軍軍人軍屬犯罪者送致方

明治二十二年十一月  
司法省令第四三二號

海軍軍人軍屬ノ犯罪者ヲ逮捕シタル時ハ從來橫須賀鎮守府軍

法會議へ送致シ來リタル處明治二十二年七月東京、吳、佐世保ノ各地ニ軍法會議開設後モ仍ホ橫須賀へ向送致シ來リ候モノ有之趣自今海軍軍法會議ノ管轄ニ屬スル犯罪者ヲ逮捕シ或ハ其自首ヲ受ケタル時ハ其最近ノ軍法會議若クハ被告人ノ所屬長ニ送致スヘキ儀ト心得ヘシ

但シ海軍諸官ヨリ逮捕ヲ囑託シタル者ハ其囑託シタル諸官ニ送致スル義ト心得ヘシ

○獸醫及獸類傳染病豫防規則ニ違犯ノ者處分ノ節農商務省へ通牒方

明治二十年十二月 司法省訓令第十號  
十八年八月第二十八號布告及十九年九月第十一號農商務省令ニ依リ今般農商務省ヨリ照會ノ趣モ有之候ニ付テハ自今獸醫免許規則第十四條並獸類傳染病豫防規則第十九條ノ犯罪其他刑法ニ正條アル獸醫ノ犯罪處斷致候節ハ其都度裁判宣告文際本相添へ農商務省へ通知スヘシ

○犯罪又ハ犯則ニ依リ沒收ノ物件地方廳へ引繼處分方

明治十八年十一月太政官第六十三號違犯罪又ハ犯則ニ依リ沒收シタル物件ハ自今都テ地方廳ニ引繼地方廳ニ於テ便宜之ヲ賣却スヘシ此旨相違候事

○犯罪又ハ犯則ニ依リ沒收シタル物件取扱手續

明治十八年十一月太政官第六十三號違犯罪又ハ犯則ニ依リ沒收シタル物件ハ左ノ手續ニ據リ取り扱フヘシ  
第一項 裁判所ヨリ沒收物件引渡ノ通知ヲ得タルトキハ其

物件受取ノ手續ヲ爲シ物件ノ性質ニ從ヒ得失ヲ量リ其應ニ取寄セ又ハ其所在地ノ戸長ニ保管セシムヘシ

第二項 沒收ノ物件ハ裁判所ヨリ受取タル後三箇月以内ニ於テ公賣ニ付スヘシ但公賣ノ場所ハ物件所在ノ地ニ限ラズ總テ適當ノ地ヲ選定スルモノトス

第三項 沒收物件中官廳ノ烙印アルモノハ公賣ニ付スル前其烙印ヲ削除スヘシ

第四項 公賣ノ方法ハ入札拂若クハ競賣ニ據ルヘシ

第五項 沒收ノ物件公賣ニ付スルモ買受人ナキカ若クハ代價相當ノ價格ニ違セサルトキハ公賣ヲ停止シ爾後三箇月以内ニ於テ更ニ公賣ニ付スヘシ

第六項 沒收物件中毀損腐敗ニ係リ若クハ物品輕微ニシテ公賣ニ付スルモ價值ナシト認ムルモノ或ハ運搬費置場敷料ヲ要シ公賣スルモ其得失相償ハサルモノ或ハ第五項期限内ニ於テ公賣ニ付スルモ買受人ナク若クハ代價不相當ニシテ公賣ヲ停止シタルモノハ適宜處分スヘシ

第七項 沒收物件中其物品取扱上特ニ成規アルモノハ各主管廳ノ指揮ニ據リ之ヲ處分スヘシ

○普通治罪法陸海軍治罪法交渉ノ件處分方

明治十八年五月 布告第十二號  
普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法交渉ノ件處分法左ノ通制定ス但從前ノ成規中本則ニ抵觸スルモノハ當分施行セズ(二十年十月六日法律第九十六號ヲ以テ廢止)  
第一條 常人ニシテ陸軍刑法若クハ海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ普通裁判所ニ於テ之ヲ審判ス但刑ノ執行ハ普通ノ規則

二從テ

第二條 軍人常人共ニ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ軍人ハ軍法會議ノ判決ニ付シ常人ハ普通裁判所ノ公判ニ付ス軍術ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ常人ハ審問ノ上證憑書類ト共ニ之ヲ管轄ノ普通裁判所檢事ニ送致シ普通裁判所ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ軍人ハ審問ノ上證憑書類ト共ニ之ヲ被告入ノ所屬長若クハ陸海軍檢察官ニ送致スヘシ

第三條 敵前軍中臨戰合圍ノ地若クハ海軍諸用ニ供スル船舶ニ在テ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ常人ト雖モ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得但戒嚴令第十一條第十二條ニ掲クルモノハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スヘシ

第四條 軍法會議ト普通裁判所トノ管轄邊ニ付テハ軍法會議又ハ普通裁判所ノ言渡ニ對シ普通治罪法ニ定メタル手續ニ從ヒ大審院ニ上告スルコトヲ得但軍法會議ノ言渡ニ對シ上告スルハ被告人ニ限ルヘシ

第五條 多衆ノ軍人常人團體殺傷其他殘虐ニ係ル罪ヲ犯シタルトキハ軍官法司會同審問スルコトヲ得

第六條 軍法會議ト普通裁判所トヲ問ハス既ニ確定シタル裁判ノ効力ハ互ニ之ヲ侵スコトヲ得ス

○違警罪即決例

明治十八年九月 布告第三十一號  
明治十四年九月第四十四號布告及同年十二月第八十號布告ヲ廢止シ違警罪即決例別紙ノ通制定ス

違警罪即決例(別紙)

第一條 警察署長及ヒ分署長又ハ其代理タル官吏ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ即決スヘシ但私訴ハ此限ニ在ラズ

第二條 即決ハ裁判ノ正式ヲ用ヒズ被告人ノ陳述ヲ聽キ證憑ヲ取調ヘ直チニ其言渡ヲ爲スヘシ

又被告人ヲ呼出スコトヲ若クハ呼出シタルト雖モ出廷セサル時ハ直チニ其言渡書ヲ本人又ハ其住所ニ送達スルコトヲ得

第三條 即決ノ言渡ニ對シテハ違警罪裁判所ニ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得但正式ノ裁判ヲ經シテ直チニ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第四條 即決ノ言渡書ニハ被告人ノ氏名年齢身分職業住所犯罪ノ場所年月日時罪名刑名及ヒ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得ヘキ期限並ニ其言渡ヲ爲シタル警察署年月日警察官ノ氏名ヲ記載スヘシ

第五條 正式ノ裁判ヲ請求スル者ハ即決ノ言渡ヲ爲シタル警察署ニ申立書ヲ差出スヘシ但其期限ハ第二條第一項ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヨリ三日内第二項ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス

第六條 警察署ニ於テ前條ノ申立ヲ受ケタル時ハ二十四時内ニ訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致スヘシ

第七條 第五條ニ定メタル期限内ニ正式ノ裁判ヲ請求セサル時ハ即決ノ言渡ヲ以テ確定ノモノトス

第八條 科料拘留ノ言渡ヲ爲シタル時必要ト認ムル場合ニ於テハ後ノ數條ニ定メタル處分ヲ爲スコトヲ得

第九條 科料ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其金額ヲ假納セシムヘシ若シ納メサル者ハ一回ヲ一日ニ折算シテ之ヲ留置ス其一回ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

第十條 拘留ノ言渡ヲ爲シタル時ハ一日ヲ一回ニ折算シ其刑期ニ相當ノ金額ヲ保證トシテ差出サシムヘシ若シ差出サ、ル者ハ第五條ニ定メタル期限内之ヲ留置ス但刑期五日以内ナル時ハ其日數ニ過クルコトヲ得ス

第十一條 保證金ヲ差出シタル者ハ刑ノ言渡確定シタル後直チニ出廷シテ其執行ヲ受クヘシ若シ出廷セサル時ハ保證金ヲ没入シテ本刑ニ換フ

第十二條 留置シタル者正式ノ裁判ヲ請求シ因テ呼出狀ノ送達アリタル時ハ直チニ留置ヲ解クヘシ

第十三條 留置ノ日數ハ一日ヲ一回ニ折シテ科料ノ金額ニ算入シ又ハ拘留ノ刑期ニ算入スヘシ

○司法警察規則附錄(明治十九年九月)

本年一月十四號ヲ以テ相違候司法警察規則附錄別紙之通相定候條此旨相違候事

司法警察規則附錄(別紙)

外國公使及ヒ公使館屬員ノ事

第一條 外國公使ハ我國憲法ニテ保護スヘカクテ通義ナレハ是ヲ擴充スル時ハ其家屬並ニ公使館屬員(書記官、通譯、書記官ノ僕隸等)及ヒ其家屬車馬迄モ同様ナリト思慮ス

第二條 內國人公使館又ハ公使ノ書記官ニ備ハシ公使館ノ名

籍ニ在ル間ハ公使館ノ屬員ト見做シ若シ事故アリテ逮捕セサル時得サルカ或ハ呼出シテ糾問セサル時得サル時ハ外務省ヲ應テ公使館ヘ報知シ其唯諾ヲ待テ後引出スヘシ尤其者ヲ處分スルハ公使ノ關係スルコトニアラス

第三條 內國人各公使館及書記官ニ備ハシ中ハ其公使又ハ代理ヨリ其者ノ名籍ヲ外務省ヘ届出外務省ハ其届書ヲ速ニ司法警察官吏ヘ送達シ置ヘシ警察官吏ハ常ニ其姓名ヲ簿記シ置ヘシ若シ途中ニテ或ル人ヲ引留其名籍ノ在ル處ヲ問糾ス時公使館ニ備ハシ中ト稱スル時其簿記ト校照シ愈相違ナキトキハ一旦公使館迄同道シ照會テ違ケタル後其處分ヲ施スヘシ若シ其姓名簿記中ニ在ラサル者ニテモ其本人決シテ相違ナキ旨ヲ述ル時ハ公使館ヘ同道シ右ノ如ク處置スヘシ

但シ重科ニテ捕縛セサルヲ得サル者ハ第六條ニ照シテ處分スヘシ

外國公使館ノ事

第四條 外國公使館内ハ事故アリテ館主ヨリ請求スル時ノ外決シテ立入ルヘカラス若シ重科ヲ犯シタル罪人ト見留タル者奔逃シテ門内ヘ匿入セシ等毫髪ノ間モ猶豫スヘカクテ時ハ其把門者ニ告ク其館主ノ許可ヲ受ケテ後館内又ハ邸内ヲ探索スヘシ

第五條 右公使館書記官ノ住宅内ニ在ル内外屬員ハ勿論馬車家畜ノ末ニ至ル迄一切手ヲ觸ルヘカラス若シ職務上止ムヲ得ス手ヲ降スヘキ事故アラハ是ヲ外務省ニ打合ヒ而シテ其處分ヲ爲スヘシ

外國公使館屬員罪ヲ犯シ並犯罪ノ内國人公使館ニ住居スル時ノ事

第六條 外國公使館ノ屬員ナル外國人殺傷或ハ剽竊放火強姦等目前ニ願ハシタル罪ヲ公使館外ニ行テ見及フカ或ハ現ニ見スト雖トモ衆人ヨリ報告シ確證アリテ片時モ猶豫ナシカキ時ハ其人ヲ其場ニ引留置即刻公使館ヘ報知ノ上同館ヘ引渡シ又外務省ヘ報知シ是ヲ公使館ニ引渡セシ手續ヲ申スヘシ決シテ手鎖捕縛等ノ事アル可ラス或ハ屬員ノ内國人ハ引留置即刻公使館ヘ報知シ改メテ彼レヨリ引渡テ受クルノ手順ヲ施シ又コレヲ外務省ニ申ヘシ

第七條 犯罪ノ風聞アルカ或ハ他人ノ自狀ヨリ明了ニ其罪ノ知ララル内國人現ニ公使館ニ備ハシタル公使館ニ住居スル時ハ其館外周囲ノ各路ヲ遮斷シ而後外務省ヘ報知シ同館ヘ照會テ乞館主ニ引渡シテ要求シ其人ヲ受取リテ後之ヲ捕縛ス可シ若シ館主之ヲ拒ムトキハ其旨ヲ猶外務省ヘ報知シテ其處分ヲ定ム可シ

○司法警察ニ關スル規則ヲ設ントス

爾後各地方ノ便宜ニ基キ司法警察ニ關スル規則ヲ設クントスルトキハ其地始審裁判所檢察ト協議ノ上告達スヘシ

明治十九年四月  
司法省訓令第一號

○憲兵將校下士ハ司法警察官トシ卒

ハ巡查ト同ク司法警察ノ事務ヲ行ハシム

明治十五年五月  
布告第二十三號

憲兵ヲ設置シタル地方ニ於テハ其將校下士ハ司法警察官トシ

卒ハ巡查ト同ク司法警察ノ事ヲ行ハシム

○巡查ニテ警部代理ノ資格ヲ以テ取扱タル事件ニ付テハ警部同様ノ取扱ヲ爲サシム

明治十四年十月當省第五號布達ニ據リ巡查ニ於テ警部代理ノ資格ヲ以テ取扱事件ニ付テハ裁判上渾テ警部同様ノ取扱ヲ爲スヘシ此旨相違候事

但從前ノ指令内訓本文ニ抵觸スル條件ハ取消候事

○逃亡犯罪人引渡條例

明治二十年八月  
勅令第四十二號

逃亡犯罪人引渡條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 本條例ニ於テ締約國ト稱スルハ既ニ帝國ト犯罪人引渡條約ヲ締結シ若クハ今後締結スル外國ヲ謂フ

引渡犯罪ト稱スルハ外國ト締結シタル犯罪人引渡條約ニ揭クル犯罪ヲ謂フ

逃亡犯罪人ト稱スルハ締約國ノ管轄内ニ於テ犯シタル引渡犯罪ニ付告訴發テ受ケ若クハ有罪ノ宣告ヲ受ケタル帝國臣民外ノ人ニシテ帝國ノ管轄内ニ逃避シタル者又ハ逃避シタル嫌疑若クハ逃避セントスルノ嫌疑アル者ヲ謂フ但左ノ場合ニ於テハ帝國臣民ヲ包含ス

- 一 帝國ト請求國トノ犯罪人引渡條約ニ交互其臣民ノ引渡ヲ爲スヘキ條款アルトキ
- 二 犯罪人引渡條約ニ交互ノ任意ヲ以テ其臣民ノ引渡請求

現行日本法令大全

ニ應スルコトアルヘキ旨ノ條款アリ且請求國ニ於テ同  
様ノ場合ニハ自國ノ臣民ヲ引渡スヘキ旨ヲ申出ラタル  
トキ

第二條 締約國ヨリ逃亡犯罪人ノ引渡請求アリ之カ引渡ノ目  
的ヲ以テ手續ヲ爲ストキハ本條例ニ定ムル所ノ條款ニ據  
ルヘキモノトス

第三條 左ノ場合ニ於テハ逃亡犯罪人ヲ引渡スコトヲ得ス  
一 引渡ノ請求ニ係ル者ノ所犯政事上ノ犯罪ナルトキ  
二 引渡ノ請求ハ實際政事上ノ犯罪ニ付審問シ若クハ處刑  
セントスルノ目的ニ出ラタル旨ヲ本人ニ於テ證明シタ  
ルトキ

第四條 逃亡犯罪人其引渡請求ニ係ル犯罪外ノ事件ニ付帝國  
内ニ於テ告訴發覺ヲ受ケ又ハ處刑中ナルトキハ無罪又ハ刑  
期滿限若クハ其他ノ事由ニ因リ釋放セラレタル後ニアラサ  
レハ之ヲ引渡スコトヲ得ス

第五條 帝國ト外國ト犯罪人引渡條約ヲ締結シタルトキハ逃  
亡犯罪人ノ犯事其締約以前ニ係ルト雖モ該締約國ノ請求ニ  
應シ其引渡ヲ爲スコトアルヘシ

第六條 引渡犯罪ニ付帝國裁判所ニ於テ締約裁判所ト均シク  
裁判權ヲ有スト雖モ若シ司法大臣ノ意見ニ於テ其審判ヲ便  
ナラシメンカ爲メ逃亡犯罪人ノ引渡ヲ可トスルトキハ之ヲ  
引渡スコトアルヘシ

第七條 本條例ニ據リ發シタル總テノ逮捕狀ハ帝國内何レノ  
地ニ於テモ効力アルモノトス

第八條 一逃亡犯罪人ヲ二國以上ノ締約國ヨリ各其國ニ於テ  
犯シタル罪ノ爲メ引渡請求ヲ爲シタルトキハ最初請求ヲ爲

シタル國ニ之ヲ引渡スヘシ但其請求ヲ爲シタル締約國間ニ  
特別ノ約束若クハ協議アル場合ハ此限ニ在ラス

第九條 司法大臣ハ外務大臣ノ請求ニ依リ一名若クハ二名以  
上ノ上席檢察ニ命ジ逃亡犯罪人ヲ假ニ逮捕スル爲メ附錄第  
一號書式ニ依リ假逮捕狀ヲ發シシムルコトヲ得  
外務大臣ハ締約國ヨリ相當ノ順序ヲ經由シ書面又ハ電信ヲ  
以テ逃亡犯罪人ヲ逮捕スル爲メ既ニ逮捕狀ヲ發シタルコト  
ノ通知ト其引渡ハ正式ニ依リ請求スヘキ旨ノ保證トニ接シ  
タル後ニ限リ本條ノ請求ヲ爲スヘシ

第十條 假逮捕狀ニ據リ逃亡犯罪人ヲ逮捕シタル場合ニ於テ  
二月ヲ過キサル相當ノ期限内ニ其引渡ノ請求ナキトキハ之  
ヲ釋放スヘシ但此場合ニ於テ逮捕シタル者ヲ釋放スルモ再  
ヒ之ヲ逮捕シ及引渡スコトヲ妨ケサルモノトス

假逮捕狀ニ據リ逮捕シタル者ノ引渡請求アリタルトキハ更  
ニ附錄第二號書式ノ逮捕狀ヲ發シ假逮捕狀ト交換スヘシ

第十一條 第九條ニ定メタル例外ノ場合ヲ除クノ外ハ引渡請  
求ヲ爲シタル國トノ條約ニ定メタル相當ノ順序ヲ經由シ左  
ノ書類ヲ添ヘ引渡ノ請求アリタル後ニアラサレハ何人ヲモ  
引渡ノ目的ヲ以テ逮捕スルコトヲ得ス

一 告訴發覺ヲ受ケタル者ノ場合ニ於テハ其所犯ニ付訴ア  
リタル國ノ相當官吏ニ於テ發シタル認メ得ヘキ逮捕  
狀ノ公寫及該逮捕狀ヲ發スルノ根據ト爲リタル口供書  
若クハ陳述書ノ公寫

二 有罪ノ宣告ヲ受ケタル者ノ場合ニ於テハ其宣告ヲ爲シ  
タル裁判所ノ封印アル宣告書ノ寫

第十二條 外務大臣引渡請求書ニ接シ犯罪人引渡條約ノ條款

現行日本法令大全

ニ適合シタリト思量スルトキハ該請求書ニ其關係書類ヲ添  
ヘ之ヲ司法大臣ニ送付スヘシ

司法大臣本條ノ請求ニ接シ妥當ノ事由アル請求ト思量スル  
トキハ逃亡犯罪人ノ所在又ハ其到着スヘシト認ムル地ノ上  
席檢察ニ命ジ逮捕狀ヲ發シシムヘシ

第十三條 上席檢察前條ニ揭ケタル司法大臣ノ命令ニ接シタ  
ルトキハ附錄第二號書式ニ依リ逮捕狀ヲ發スヘシ

第十四條 請求ニ係ル逃亡犯罪人ヲ逮捕シ若クハ假逮捕シタ  
ルトキハ其逮捕狀ヲ發シタル上席檢察又ハ之ヲ逮捕シタル  
地ノ上席檢察ニ引渡スヘシ

上席檢察ハ逃亡犯罪人逮捕ノ顛末ヲ直ニ司法大臣ニ具申ス  
ヘシ

司法大臣上席檢察ノ具申ニ接シタルトキ引渡請求書アレハ  
其寫及附屬書類ヲ速ニ該檢察ニ送付スヘシ但被告人ヲ釋放  
スヘキノ命令ヲ發スルトキハ此手續ヲ爲スニ及ハス

第十五條 告訴發覺ヲ受ケタル者ノ場合ニ於テハ上席檢察ハ  
連コ之ヲ審問シ其人逃ナキコト及引渡請求書ニ附屬セル書  
類ノ確實公正ナルコトヲ認定スヘシ但上席檢察該書類ノミ  
ニテハ證據不充分ナリト認ムルトキハ仍モ被告人ノ犯罪ニ  
對スル證據ヲ取ルコトヲ得

有罪ノ宣告ヲ受ケタル者ノ場合ニ於テハ上席檢察ハ速ニ之  
ヲ訊問シ其人逃ナキコト及其引渡ヲ請求シタル締約國ノ相  
當裁判所ニ於テ宣告ヲ爲シタルノ確實ナルコトヲ認定スヘ  
シ

第十六條 上席檢察被告人ノ訊問ヲ終了シタルトキハ訊問書  
ニ其處分方ニ關スル意見書ヲ添ヘ之ヲ司法大臣ニ具申スヘ

シ但上席檢察ハ之ト共ニ引渡請求書寫及附屬書類ヲ返却ス  
ヘシ

司法大臣該檢察ノ具申ニ接シタルトキハ附錄第三號書式ニ  
依リ引渡狀ヲ發スルカ又ハ逮捕シタル者ヲ釋放スヘシ

第十七條 逃亡犯罪人ハ逮捕狀ニ據リ逮捕セラレタル後二月  
以上留置セラレ、コトナカルヘシ

第十八條 司法大臣ハ左ノ場合ニ限リ引渡狀ヲ發スルコトヲ  
得

一 引渡犯罪ニ付告訴發覺ヲ受ケタル者ノ場合ニ於テハ若  
シ其告訴發覺ヲ受ケタル罪ヲ帝國内ニ於テ犯シタルモ  
ノトセハ帝國ノ法律ニ據リ被告人ヲ審判ニ付スルニ充  
分ナル犯罪ノ證據アリト認メタルトキ

二 有罪ノ宣告ヲ受ケタル者ノ場合ニ於テハ相當裁判所ニ  
於テ其宣告ヲ爲シタルコトヲ認メタルトキ

第十九條 關席裁判ニ由リ有罪ノ宣告ヲ受ケタル者ハ其引渡  
ヲ請求シタル締約國トノ間ニ特別ノ約款アルニ非ザレハ本  
條例ニ於テハ之ヲ告訴發覺ヲ受ケタル者ト爲シ有罪ノ宣告  
ヲ受ケタル者ト認メス

第二十條 逮捕シタル者ヲ釋放シ又ハ其引渡ノ爲メ引渡狀ヲ  
發シタルトキハ司法大臣ハ引渡請求書及附屬書類ニ其執行  
シタル手續及其理由ノ略記ヲ添ヘ之ヲ外務大臣ニ返付スヘ  
シ

第二十一條 引渡狀ヲ發シタル後何人ヲモ一月以上留置スル  
コトヲ得ス但此期限内ニ之ヲ帝國外ニ引取ラサルトキハ請  
求國相當官吏ニ於テ正當ノ事由ヲ示スニアラサレハ釋放ス  
ヘシ

第二十二條 逃亡犯罪人ヲ引渡ストキハ其逮捕ノ際差押ヘシ  
ル本人ノ携帶品ハ正當ノ理由アルニアラザレハ其引渡ノ節  
本人ト共ニ悉ク之ヲ交付スヘシ  
第二十三條 司法大臣ハ外務大臣ノ請求ニ依リ一外國ヨリ他  
ノ外國ニ引渡シタル者ノ帝國内海陸ノ通行ヲ認可スルコト  
ヲ得

本條ノ請求ハ引渡ヲ受クヘキ國ノ政府ヨリ引渡狀ノ公寫ヲ  
添ヘ相當ノ順序ヲ經由シタル照會書ヲ外務大臣ニ於テ受領  
シタルトキニ限ル但帝國ト請求國トノ間ニ特別ノ約款ナキ  
トキハ該照會書ノ外仍ホ請求國ノ政府ニ於テ之ト同一ノ場  
合即チ第三國ヨリ帝國ニ逃亡犯罪人ヲ引渡シタル場合ニ該  
請求國內海陸ノ通行ヲ均シク認可スヘキノ保證ヲ爲シタル  
トキニ限ル  
(附錄略ス)

○商船内犯罪取扱規則ヲ制定ス

明治十四年十二月十五日  
布告第六十五號

商船内犯罪取扱規則別紙ノ通制定ス

商船内犯罪取扱規則(別紙)

第一條 何人シテモ商船内ニ於テ重罪輕罪アルコトヲ認知  
シ又ハ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ船長ニ告訴告發  
ヲ爲スコトヲ得

第二條 船長告訴告發ヲ受ケタル時又ハ重罪輕罪ノ現行犯ア  
ルコトヲ知リタル時ハ其事件ニ付假ニ訊問檢證ノ處分ヲ爲  
シ且證憑及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ集取シ調査ヲ作ル

ヘシ但調査ヲ作ルコト能ハサル時ハ第三條ニ記載シタル官  
吏ニ其中立ヲ爲スヘシ  
前項ノ場合ニ於テハ立會人二名以上アルヲ要ス  
第三條 船長ハ證憑及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ取纏メ被  
告人ト共ニ該船舶碇泊又ハ若港ノ地ノ檢事又ハ司法警察官  
ニ引渡スヘシ若シ外國ノ港埠ニ着シタル時ハ其地駐劄ノ領  
事ニ之ヲ引渡スヘシ

第三章 監獄則

○監獄則

明治二十二年七月  
勅令第九十三號

監獄則ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

監獄則

- 第一條 監獄ヲ刑ヲ左ノ六種ト爲ス  
一 集治監 徒刑流刑及舊法懲役終身ニ處セラレタル者ヲ  
拘禁スル所トス  
二 假留監 徒刑流刑ニ處セラレタル者ヲ集治監ニ發遣ス  
ル迄拘禁スル所トス  
三 地方監獄 拘留禁錮禁獄懲役ニ處セラレタル者及婦女  
ニシテ徒刑ニ處セラレタル者ヲ拘禁スル所トス  
四 拘留監 刑事被告人ヲ拘禁スル所トス  
五 留置場 刑事被告人ヲ一時留置スル所トス但警察署内  
ノ留置場ニ於テハ罰金ヲ禁錮ニ換フル者及拘留ニ處ヒ  
ラレタル者ヲ拘禁スルコトヲ得  
六 懲治場 不論罪ニ係ル幼者及病弱者ヲ懲治スル所トス

第二條 監獄ハ内務大臣ノ監督ニ屬ス

第三條 集治監<sup>北海道ニ在リ</sup>及假留監<sup>北海道ニ在リ</sup>ハ内務大臣之ヲ管理シ其  
他ノ監獄ハ警視總監<sup>北海道廳長官府縣知事</sup>北海道廳長官府縣知事<sup>東京府</sup>之ヲ管理  
ス

第四條 内務大臣ハ隨時監獄巡視官ヲシテ各監獄ヲ巡視セシ  
ムヘシ

警視總監北海道廳長官府縣知事<sup>東京府</sup>ハ毎年少クトモ一回  
所轄ノ監獄ヲ巡視スヘシ

裁判官ハ時々其裁判所管轄内ニ在ル拘留監ヲ巡視スヘシ

檢察官ハ時々其裁判所管轄内ニ在ル監獄ヲ巡視スヘシ

第五條 府縣會議員ハ臨時其府縣所轄ノ監獄ヲ巡視スルコト  
ヲ得

第六條 新ニ入監スル者アルトキハ典獄先ツ令狀又ハ宣告書  
ヲ査閲シテ之ヲ領シ其領收證ヲ引致シ來リタル者ニ交付シ  
タル後入監セシムヘシ其文書ナクシテ引致セラルタル者ヲ  
入監セシムルコトヲ得ス

第七條 在監ノ婦女其子ヲ乳養セント請フトキハ其齡滿三歲  
ニ至ル迄之ヲ許ス

第八條 新ニ入監スル者ノ携有スル財貨物件ハ典獄悉ク點檢  
シテ之ヲ領置スヘシ

第九條 水火風震等非常ノ變災ニ際シ監獄内ニ於テ避災ノ  
手段ナシト考定スルトキハ典獄ハ其狀況ニ依リ在監ノ囚人  
懲治人及刑事被告人ヲ他所ニ押送シ其災ヲ避クシムヘシ若  
シ押送スルノ途ナキトキハ一時之ヲ解放スルコトヲ得  
解放ニ遭ヒタル者ハ其時ヨリ二十四時以内ニ監署又ハ警察  
署ニ其旨ヲ申出ツヘシ

第十條 滿期ノ者ヲ釋放スルハ其滿期ノ翌日午前十時ヲ過ク  
ヘカラス

第十一條 囚人ハ各罪質ニ從テ嚴ニ其監房ヲ別異シ其中ニ就  
キ年齡ニ從ヒ左ノ如ク別異ス

一 滿十二歳以上十六歳未滿ノ者

二 滿十六歳以上二十歳未滿ノ者

三 滿二十歳以上ノ者

四 滿十六歳以上二十歳未滿再犯ノ者

五 滿二十歳以上再犯ノ者

第十二條 懲治人ハ左ノ年齡ニ從ヒ其監房ヲ別異ス

一 滿八歳以上十六歳未滿ノ者

二 滿十六歳以上二十歳未滿ノ者

三 滿二十歳以上ノ者

第十三條 刑事被告人ハ各罪質ニ從テ其監房ヲ別異シ其中ニ  
就キ年齡ニ從ヒ左ノ如ク別異ス

一 滿十二歳以上十六歳未滿ノ者

二 滿十六歳以上二十歳未滿ノ者

三 滿二十歳以上ノ者

第十四條 地方監獄拘留監懲治場ノ一區畫内ニ在ルモノハ牆  
壁ヲ以テ之ヲ區畫スヘシ

第十五條 凡ソ監獄ハ男監女監ノ別ヲ嚴隔スヘシ

第十六條 囚人及刑事被告人ヲ裁判所又ハ他監ニ押送スルト  
キハ男ト女トヲ分チ時宜ニ依リ戒具ヲ用フルコトヲ得但懲  
治人ニハ戒具ヲ用ヒス

第十七條 定役ニ服スヘキ囚人ノ作業ハ毎囚ノ體力ニ應ジテ  
之ヲ課シ一日ノ科程ヲ定メテ服役セシムヘシ但科程ノ標準

ハ内務大臣ノ認可ヲ受クヘシ  
 第十八條 左ニ記載シタル日ハ服役ヲ免ス  
 一月一日 元始祭  
 孝明天皇祭 紀元節  
 春季皇靈祭 神武天皇祭  
 秋季皇靈祭 神嘗祭  
 天皇節 新嘗祭  
 十二月三十一日  
 父母ノ喪ニ遭フ者ハ三日免役ス  
 第十九條 無定役囚ニシテ監獄内ニ於テ自ヲ作業ヲ爲サシ  
 ト請フトキハ之ヲ許シ作業ノ種類ハ典獄之ヲ指定ス刑事被  
 告人モ亦之ニ準スルコトヲ得  
 第二十條 懲治人ニハ毎日五時以內農業若クハ工藝ヲ教ヘカ  
 作セシムヘシ  
 第二十一條 役場ハ男女ノ別ヲ嚴隔シ仍ホ定役囚無定役囚懲  
 治人ノ役場ハ各別ニ之ヲ設ク其中ニ就キ丁年以上ノ者ト未  
 丁年者トヲ區別スヘシ  
 第二十二條 定役ニ服スヘキ囚人現役一百日ヲ經レハ始メテ  
 各自ノ工錢ヲ料定シ之ヲ十分シテ重罪囚ニハ其二分輕罪囚  
 ニハ其四分ヲ與ヘ餘分ハ監獄ノ費用ニ供ス  
 無定役囚懲治人及刑事被告人ニシテ作業スル者ノ工錢ハ之  
 ヲ十分シテ其六分ヲ與ヘ其餘分ハ監獄ノ費用ニ供ス定役ニ服  
 スル囚人ニシテ科程外ノ作業ヲ爲ス時ノ工錢モ亦之ニ準ス  
 第二十三條 前條ニ依リ作業者ニ與フヘキ工錢ハ典獄之ヲ領  
 取スヘシ  
 第二十四條 囚人懲治人及刑事被告人逃走シ監獄ニ領置ノ貨

物アルトキハ逃走ノ日ヨリ滿一箇年ヲ經テ之ヲ受クヘキ者  
 ナキトキハ監獄懲罰ノ用ニ充ツ刑死者死亡者ノ領置貨物ニ  
 シテ受クヘキ者ナキトキハ亦同シ  
 第二十五條 囚人及懲治人監獄ニ領置ノ貨物ヲ以テ其父母妻  
 子ノ扶助及正當ノ費用ニ充ント請フトキハ典獄其事情ヲ取  
 亂シテ之ヲ許可スヘシ  
 刑事被告人ニ係ルトキハ當該裁判官ノ允許ヲ經ヘシ  
 第二十六條 囚人及懲治人ノ衣服臥具ハ之ヲ貸與ス但拘留囚  
 ハ自衣ヲ著スルコトヲ得  
 第二十七條 刑事被告人ノ衣服ハ總テ自辨トシ臥具ハ之ヲ貸  
 與ス若シ臥具ヲ自辨セント請フ者アルトキハ之ヲ許ス赤貧  
 ニシテ衣類ヲ自辨スルコト能ハサル者ニハ之ヲ貸與ス  
 第二十八條 囚人及懲治人一人一日ノ食糧  
 一 下白米十分ノ四 七合乃至八合 最モ強キ作業ニ服スル者  
 一 同 五分乃至六分 作業ニ服スル者  
 一 同 四分 作業ニ服セサル者  
 一 同 三合 十歳未満ノ幼者  
 一 菜 金壹錢以下  
 地方ノ便宜ニ依リ粟稗黍等ノ類ヲ以テ麥ニ代用スルコトヲ  
 得又麥粟稗黍等ニ乏シキ地方ニ於テハ内務大臣ノ認可ヲ得  
 テ下白米ノミヲ給スルコトヲ得  
 刑事被告人モ亦前項ニ準ス但自費ヲ以テ食物ヲ購求セント  
 請フトキハ之ヲ許ス  
 第二十九條 定役ニ服スル男囚ノ髮ハ常ニ之ヲ短縮シ髭鬚ハ  
 常ニ剃除セシム  
 定役ニ服スル女囚ノ梳髮ハ膏ヲ用ヒテ裝飾スルコトヲ許サス

第三十條 囚人及懲治人ニハ教誨師ヲシテ悔過懲善ノ道ヲ  
 講セシム  
 第三十一條 囚人十六歳未満ノ者及懲治人ニハ毎日四時以內  
 讀書習字算術ヲ教フヘシ  
 第三十二條 囚人懲治人及刑事被告人現行ノ法律命令書ヲ看  
 シト請フトキハ之ヲ許ス  
 囚人懲治人書籍ヲ看シト請フトキハ修身宗教教育及營業ニ  
 必要ナルモノニ限り之ヲ許ス  
 刑事被告人書籍ヲ看シト請フトキハ總テ之ヲ許ス但領置外  
 ノ書籍ハ當該裁判官ノ承認ヲ經ヘキモノトス  
 新聞紙及時事ノ論說ヲ記スルモノハ前二項ノ例ニアラス  
 第三十三條 囚人其親屬故舊ニ信書ヲ贈ルハ一箇月ニ一次懲  
 治人ハ一箇月ニ二次トシ共ニ一通ニ過クルコトヲ得ス但官  
 司ノ訊問等ニ由テ書信ヲ要スルトキ又ハ親屬故舊ニ回答セ  
 シト請ヒ典獄ニ於テ之ヲ必要ト認メタルトキハ此限ニ在ラ  
 ス  
 第三十四條 囚人及懲治人ノ發スル信書又ハ外人ヨリ送リ來  
 ル信書ハ典獄之ヲ檢閱スヘシ若シ書中不正不實ニ涉リ又ハ  
 其改悛ヲ妨クルモノト認ムルトキハ之ヲ發附付與スルコト  
 ヲ許サス但刑事被告人ニ係ル信書ハ總テ當該裁判官ノ檢閱  
 ヲ經ヘキモノトス  
 第三十五條 囚人懲治人及刑事被告人ニ接見セント請フ者ア  
 ルトキハ典獄ノ立會ヲ以テ之ヲ許スヘシ但典獄ニ於テ形跡  
 ノ疑フヘキコトアリト認ムルトキハ之ヲ許サハルコトヲ得  
 前項ノ場合ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケタル者ハ  
 裁判官渡アル迄辯護人ヲ除クノ外其現在地ノ裁判所長ノ允

許ヲ受クヘク密室監禁者ハ當該裁判官ノ允許ヲ受クヘシ  
 第三十六條 囚人懲治人及刑事被告人疾病ニ罹ルトキハ病狀  
 ノ輕重ヲ料リ其監房若クハ病室ニ於テ醫療セシム懲治場ニ  
 在ル者ハ情狀ニ由リ其親屬ニ交付スルコトヲ得  
 第三十七條 囚人懲治人及刑事被告人死亡シタルトキハ典獄  
 看守長醫師ノ立會ヲ以テ之ヲ檢視シ監獄ニ於テ速ニ其本籍  
 ニ通知スヘシ其遺骸ハ親屬若クハ故舊ノ之ヲ請フ者ニ下付  
 ス但死亡後二十四時以內ニ在テ其下付ヲ請フ者無キトキハ  
 監獄ニ於テ之ヲ假葬シ其姓名ヲ記シタル木勝ヲ立ツヘシ  
 死刑者ハ死相ヲ驗シタル後仍ホ五分時ヲ過サンハ其遺骸ヲ  
 絞架ヨリ解下シ之ヲ埋葬シ若クハ下付スルコトヲ許サス  
 第三十八條 刑事被告人ニ其親屬故舊ヨリ書籍書籍用紙衣服  
 臥具其他必要ノ物品又ハ飲食物ヲ贈ラント請フトキハ之ヲ  
 許ス但書類書籍ハ當該裁判官ノ檢閱ヲ受クヘシ其密室監禁  
 者ニ係ルトキハ他物ニ於テモ亦同シ  
 新聞紙及時事ノ論說ヲ記スルモノハ前項ノ例ニアラス  
 第三十九條 囚人及懲治人ニハ現行ノ法律命令書並ニ書籍用  
 紙印紙郵便切手貨幣及内務大臣ニ於テ許可シタルモノヲ除  
 クノ外差入ヲ許サス但書籍ハ第三十二條ニ記載シタル制限  
 ニ從フ  
 第四十條 囚人獄則ヲ遵守シ作業ニ勉勵シ且改悛ノ行爲ア  
 ル者ト典獄ニ於テ確認スルトキハ之ヲ賞譽スヘシ  
 賞譽セシ者ハ之ヲ表スル爲メ賞表ヲ與ヘ獄衣ニ縫著セシム  
 ヘシ  
 賞表ハ假出獄免幽閉又ハ特赦ヲ具狀スルノ憑據ト爲スコト



ヲ得

第四十一條 賞表ヲ有スル囚人ハ其監房ヲ區別シテ尋常囚人ト別異シ賞表ノ多寡ニ應ジテ優遇ヲ爲スヘシ

第四十二條 囚人獄則ヲ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ處罰ス

一 屏禁 晝夜他ノ監房又ハ役場ト隔絶シタル監房ニ獨居セシメ服役時間坐作ノ役ヲ課ス

二 減食 一日ノ食糧ヲ二合乃至三合ニ減シ鹽湯二品ノ外菜ヲ與ヘス

三 關室 關室ニ入レ一日ノ食糧ヲ二合乃至三合ニ減シ鹽湯二品ノ外菜ヲ與ヘス仍ホ臥具ヲ禁ス

屏禁ハ二月以内減食ハ一週日以内關室ハ五晝夜以内トス

第四十三條 囚人十六歳未満ノ者及懲治人獄則ヲ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ處罰ス

一 獨居 晝夜一室ニ獨居セシム

二 減食 一日ノ食糧ヲ二合乃至三合ニ減ス

關室ハ七晝夜以内減食ハ三日以内トス

第四十四條 減食若クハ關室ノ罰ニ處スヘキ者アルトキハ醫師ヲシテ診視セシメ身體ニ妨ナキ證シテ後之ヲ行フヘシ其處罰中ハ醫師ヲシテ毎日之ヲ視察セシメ醫師ニ於テ身體ニ妨アルヲ證スルトキハ處罰ヲ中止スヘシ

第四十五條 無期徒刑ノ囚人重罪ヲ犯シ若クハ逃走シ又ハ獄舎獄具ヲ毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲ爲シタルトキハ一年以上五年以下其他ノ輕罪ヲ犯シタルトキハ一年以上一年以下兩脚又ハ一腳ニ鉄ヲ施シ仍ホ鐵丸ヲ屬シタル鐵索ヲ其鉄ニ貫キ腰間ニ纏帶セシメ纏帶ノ所ニ下鍵ス其監房ニ在ルモ晝間ハ

仍ホ之ヲ施スモノトス

若シ再ヒ重罪ヲ犯シタルトキハ五年以上十年以下前項ノ例ニ照シテ處罰ス

鐵丸ノ量ハ二百目以上一貫目以下トシ被罰者ノ體力ニ應ジテ之ヲ施ス九ハ索尾ニ屬シ地上ヲ轉ハスモノトス若シ外役ニ服スルトキハ鐵丸ヲ除キ二人聯紳ノ法ニ從フ

第四十六條 施錠中ノ者病ニ罹リ醫師ノ診斷ニ依リ鉄ノ解除ヲ必要トスルトキハ一時之ヲ解除スルコトヲ得但解除中經過セシ日數ハ施錠期限ニ算入セス

第四十七條 賞表ヲ有スル者處罰ヲ受ケタルトキハ其情狀ニ因リ賞表一箇又ハ數箇ヲ褫奪スルコトアルヘシ

第四十八條 獄則ヲ犯シ罰ニ處セラレタル者改悛ノ狀著シキトキハ處罰中ト雖モ之ヲ免スルコトヲ得

第四十九條 免幽閉ヲ受ケタル流刑ノ者監署ノ命令ニ違背シタルトキハ七日以内之ヲ拘置スルコトヲ得

第五十條 囚人懲治人及刑事被告人司獄官吏ノ處置ニ對シ苦情ヲ訴ヘントスルトキハ第四條ニ記載シタル官吏巡視ノ際書又ハ口述ヲ以テ申告スルコトヲ得

第五十一條 此規則ヲ施行スル方法細則ハ內務大臣之ヲ定ム

第五十二條 此規則ハ陸海軍ニ屬スル監獄ニ適用セザルモノトス

○罰金ヲ輕禁錮十日以下ニ換ヘタル時警察署附屬ノ留置場ニ於テ執行方 明治十七年七月 內務省附屬省令第三十四號

罰金ヲ輕禁錮ニ換ヘタル場合ニ於テ其日數十日以下ナル時ハ

拘留ノ例ニ依リ警察署附屬ノ留置場ニ於テ執行スルコトヲ得ル儀ト心得可シ此旨相違候事

○懲治場ニ留置セシ者假出獄規則ヲ定ム 明治十九年十一月 內務省附屬省令第二十四號

刑罰第七十九條第八十條第八十二條ニ依リ懲治場ニ留置セラレタル者ニシテ獄則ヲ遵守シ改悛ノ狀アルトキハ警察總監北海道廳長官府縣知事ハ左ノ規則ニ據リ假ニ出場ヲ許スコトヲ得

假出場規則

第一條 假出場ヲ許スヘキ者アルトキハ典獄ヨリ其長官ニ狀ヲ具シテ認可ヲ受ク可シ

第二條 假出場ヲ許シタルトキハ典獄ヨリ其證票ヲ本人ニ下付ス可シ

第三條 假出場證票ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一 本人ノ屬籍氏名年齢住所懲治期限及ヒ宣告並ニ滿期ノ年月日

一 殘期何年何月何日假出場ヲ許ス何年何月何日起

一 本日出場ヲ許スニ由リ住居ノ地ニ歸着ノ上ハ即チ所轄警察署ニ其旨ヲ届出ツ可シ

一 毎月一回謹慎ヲ表スル爲メ所轄警察署ニ到リ假出場證票ヲ出シ警察官吏ノ認印ヲ受ク可シ但ヒムヲ得ル事故アレハ其事由ヲ届出可シ

一 一日程ヲ過クル地ニ旅行スルトキハ其行先並往復滞在日數等ヲ詳細ニ所轄警察署ニ届出可シ但シ其滞在一月以上

ニ涉ルトキハ一箇月毎ニ其滞在地ノ警察署ニ到リ前項ノ手續ヲナス可シ

一 事故アリテ其住居ヲ轉スルトキハ所轄警察署ニ届出ツ可シ

一 第三項以下ノ事ハ本人自ラ爲ス能ハサル場合ニ於テハ親屬故舊代リテ之ヲ爲スコトヲ得

右ノ各項ニ違背シタルトキハ直チニ出場ヲ停止シ出場中ノ日數ヲ懲治期限内ニ算入スルコトヲ得ス

○監獄支署ニ看守部長ノ職ヲ置クヲ定ム 明治二十五年六月 內務省附屬省令第二號

監獄支署ニ於テハ戒護上ノ監督ヲ補助セシムル爲メ看守部長ノ職ヲ置キ月俸十四以上ノ看守ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得看守部長ハ看守ノ上班トシ看守長ニ亞クノ待遇ヲ受クヘキモノトス

看守部長ハ上衣並外套ノ左腕ニ緋絨長曲尺一寸五分ノ徽章ヲ付スヘシ

○看守長看守ニ帶劍ヲ許ス 明治十四年三月 大政官達第十八號

監獄看守長看守ニ爲取締帶劍可爲致此旨相違候事但劍制ハ適宜ナルヘシ

○看守被服及帶劍給貸並保存期限 明治十四年四月 內務省附屬省令第二十一號

本年第十七號第十八號ヲ以テ看守被服及ヒ帶劍之儀御達相成候ニ付テハ被服ハ適宜保定期限ヲ定メ給與シ帶劍ハ貸與候儀ト可相心得此旨相違候事

○看守長及看守禮式 明治二十四年八月 內務省訓令第十九號 看守長及看守禮式ハ本年常省訓令第十五號警察禮式ニ據ラシムヘシ

○監獄内ノ建物中稟請ヲ要セス處分ノ件 明治二十一年十二月 內務省訓令第二十六號 監獄内ノ建物ニシテ左ニ掲クルモノハ自今稟請ヲ要セス處分シテ後其位置ノ略圖ヲ具シ一箇年ニ取纏メ翌年一月三十一日迄ニ報告スヘシ

- 一 倉庫ノ新築
- 一 物置ノ新築
- 一 人民控所ノ新築
- 一 小使部屋ノ新築
- 一 監舎ニ屬セサル廁ノ新築
- 一 馬廄ノ新築

○監獄ニ係ル建物ハ處分後取纏メ報告ス 明治二十二年六月 內務省訓令第二十七號

監獄新築改築又ハ監房建設ノトキテ除ク外自今監獄ニ係ル建物ハ二十一年十二月常省訓令第二十六號ニ掲ケサルモノト雖モ稟請ヲ要セス處分シテ後其位置ノ略圖ヲ具シ一箇年取纏メ翌年一月三十一日迄ニ報告スヘシ

○監獄則ニ依リ處分ノ貨物精算報告方 明治二十二年八月 內務省訓令第三十五號 監獄則第二十四條ニ依リ處分シタル貨物ハ毎年四月三十日限リ前一週年度ノ收支精算書ヲ調製シ當省ヘ報告スヘシ

○囚人護送手續 明治十五年二月 太政官達第十號

明治六年十一月第三百九十一號並同十年七月第四十九號ヲ以テ囚人護送規則及ヒ遞傳方相違置候處令般更ニ別冊ノ通囚人護送遞傳方改正シ本年七月一日ヨリ施行候條從前達中矛盾ノ廉ハ同日限リ廢止ス此旨相違候事

囚人護送手續(別冊)

- 第一條 甲應ヨリ乙應又ハ集治監ヘ送移スル囚人ハ囚籍及ヒ處刑宣告書所持ノ物品ヲ併セ沿道警察本分署ニ於テ遞傳護送スヘシ
- 但一府縣管内本支監獄ノ間ニ護送スル囚人モ其距離十里以外ニ至ルモノハ本文ニ準スルヲ得
- 第二條 新クニ就捕セシ犯罪人及ヒ諸令狀ニ據リ引致スル刑事被告人又ハ逃走ノ軍人軍屬遞傳護送ヲ要スル者モ前條ノ手續ニ準スヘシ
- 但入監後糾問等ノ爲メ所在ノ法衙ニ往復スルハ本條ノ限ニ在ラス
- 第三條 第一條第二條ノ護送ニ付スル囚人ノ員數及ヒ出發日時ハ其當該官吏ヨリ前以テ沿道警察本分署ヘ遞報スヘシ
- 第四條 護送囚人ノ數ハ一行十名以下トス護送警吏及ヒ細取

ノ人員ハ適宜タルヘシ

但便利海路ニ依ルトキハ適宜囚人ヲ增加スルヲ得

第五條 遞傳護送ハ日出ヨリ日没マテテ限トス

第六條 警察本分署ニ於テハ護送囚人ノ郷貫氏名刑名又ハ犯罪見込書ノ要領及著發日時ヲ記載シ置クヘシ

第七條 護送ノ囚人ハ沿道警察本分署ニ宿セシムヘシ若シ支障アルトキハ該地戶長ニ照會シ宿所ヲ定メ適宜取締ヲナスヘシ

第八條 護送途中囚人病發スルトキハ沿道警察本分署ニ付シ治療スヘシ若シ死去スルトキハ該地戶長ニ埋葬ヲ囑シ引取ル者之ヲ醫師ニ死去證書ヲ作ラシメ戶長及ヒ護送警吏連印シ書類物品ヲ併セ送達スヘシ衛署ニ遞付シ仍ホ發出衛署ニ報知スヘシ

第九條 護送途中囚人逃亡スルトキハ先ツ緝捕方ヲ最寄警察本分署ニ報告シ仍ホ發出衛署及ヒ違スヘキ衛署ヘ報告スヘシ

但第八條及ヒ本文ノ手續ヲナスコト他因護送ヲ遅緩ス可ラス若シ速ニ手續ヲ了シ難キ場合ハ最寄警察本分署ノ助カヲ請フコトヲ得

第十條 遞傳護送スル警察官吏ノ旅費ハ都テ沿道地方ノ警察費ヲ以テ支辨スヘシ

但細取ノ雇給ハ第十一條第十二條ノ區別ニ依リ囚人ニ屬スル費用中ニテ支辨スヘシ

第十一條 第一條ニ掲ケル囚徒ニ屬スル護送中ノ費用ハ明治十四年第十七號布告ニ依リ區分シ集治監ニ送ルトキハ沿道府縣ノ仕掛ニ立テ其他ハ出發府縣ノ監獄費ヨリ支辨フヘシ

第十二條 第二條ニ掲ケタル各犯人ニ屬スル護送中ノ費用ハ沿道地方警察費ヲ以テ支辨スヘシ

第十三條 護送囚人死没シ引取人ナキモ其所持金錢物品(埋葬足ルアル者及陸軍隊附下士卒海軍下士卒ノ埋葬費ハ第十一條第十二條支辨ノ限ニアラス)尤其費額ハ都テ拾圓以内タルヘシ但下士卒ノ分ハ追テ陸軍省海軍省ヨリ各自ニ拂戻スヘシ(十五年第六十八號公) (送ヲ以テ全條改正)

第十四條 遞傳ニ係ル囚人犯罪人ノ賄費額ハ警察本分署ニ於テハ都テ拘留人ノ例ニ依ルヘシ他ニ宿泊セシムルトキハ一宿二賄具點燈手數料ヲ併セテ金貳拾五錢以下一晝食金七錢以下藥價診察料等ハ實費支辨スヘシ

○集治監ニ入ルヘキ囚徒並ニ其費用區分方ヲ定ム 明治十四年三月 布告第十七號

集治監ニ入ルヘキ囚徒並ニ其費用ノ區分當分ノ内左ノ通相定メ本年七月ヨリ施行候條此旨布告候事

第一條 集治監ニ入ルヘキ囚徒ハ刑期終身ノ者及ヒ國事犯罪刑期五年以上ノ者トス其費用(府縣獄ニ拘留中ノ費用并ニハ國庫ヨリ支給スヘシ) (地方稅規則第二條) (十八十九項參看)

第二條 府縣獄ニ入ルヘキ囚徒ニシテ集治監ニ在ル者ノ費用ハ其刑ヲ宣告セシ地方ノ地方稅ヲ以テ支辨スヘシ

○在府縣獄囚徒費取扱方

明治十七年六月 內務省達乙第二十九號 在府縣獄囚徒費取扱方左ノ通改定候條十七年度ヨリ施行スヘシ

此旨相違候事  
但十四年七月内務大藏兩省乙第三十四號同年九月乙第四十  
二號十五年十月乙第五十三號ノ違ハ十六年度限り廢止ス  
一集治監ニ入ルヘキ囚徒ニシテ府縣獄ニ在ル者檢束衣食一切  
從前ノ監獄費已ノ費用トシテ一囚一日ニ付金貳拾錢ヲ交付スヘ  
決因階費等費

但朝夕出入アルモ各一日ヲ以テ計算スヘシ

十四年十月乙第五十三號達ノ内現費表ハ差出ニ不及前々年  
度中宣管濟人員ニヨリ左ノ科目表ニ照準豫算帳調整定期ノ  
通差出スヘシ  
但十七年度分ハ差出スル及スル

(科目表略ス)

○輕罪控訴被告人ニ係ル拘禁中ノ

諸費支辨方

重罪輕罪ノ公訴ノ判決ニ對シ控訴アリタル場合又ハ上告ニ因  
リ他ノ裁判所ニ移スノ言渡アリタル場合ニ於テ被告人拘禁中  
ノ費用並ニ裁判確定後囚人ニ係ル費用ハ總テ最前裁判言渡  
アリタル地方ノ監獄費ヲ以テ支辨シ其費額ハ一入一日金二十  
錢ニス

但裁判確定後囚人ハ汽車又ハ汽船ニ依リ最モ押送ニ便ナ  
ル地方ニ在テハ原地方廳ノ請求ニ依リ送還スルコトヲ得此  
場合ニ於テハ護送官吏ノ旅費及囚人ニ屬スル費用ハ請求地  
方ノ負擔トス

○陸海軍軍法會議ニ於テ處斷ヲ受ケ

タル囚徒ノ費用支辨方

明治十九年一月  
内務省達甲第一號

陸海軍軍法會議ニ於テ輕重懲役及ヒ剝官ヲ附加シタル禁錮ノ  
刑若クハ普通刑法ニ依リ懲役禁錮ノ處斷ヲ受ケ官職ヲ失ヒ軍  
籍ヲ除カレタル囚徒ニ係ル費用ハ來ル二十年度以後軍法會議  
所在地方ノ地方稅ヲ以テ支辨スヘシ

但從前陸海軍軍律ニテ處斷セラレタル囚徒ニ係ル費用ハ明  
治十四年三月第十七號公布ニ依リ區分シ陸海軍刑法ニテ徒  
刑流刑禁獄ノ刑ニ處セラレタル費用ハ國庫費ヨリ支辨スヘ  
キ儀ト心得ヘシ

○已決囚ニ係ル經費區分實地取計方

明治十四年七月  
內務大藏兩省達乙第三十四號

本年第十七號公布ヲ以テ已決囚ニ係ル經費區分等被定候ニ付  
テハ實地取計方左ノ通可心得此旨相違候事

一豫算ヲ以テ受入シタル監獄費中國庫金ト地方稅トハ混一シ  
テ諸費(懲役人ノ諸費)ヲ仕附置每一ケ月囚員ノ延數ニ照シ  
平均ヲ以テ一囚若干ノ費金タルヲ算出シ而シテ刑期終身ノ  
者ト國事犯五年以上ノ者ノ延人員ニ乘シタル金額ヲ以テ國  
庫費ノ支出ニ可取計事

但臨時加給療養費理葬費寫真費移轉費ノ如キ惣囚ニ關ラ  
サル費項ハ其囚員限リノ平均ヲ以テ算出スヘシ  
一府縣獄ニ入ルヘキ囚徒コシテ集治監ニ在ル者ハ經費モ前項  
ノ例ニ依リ地方稅支出方可取計事

○在府縣獄囚徒費小科目流用方

明治十五年十月  
內務省達乙第五十二號

在府縣獄囚徒費小科目(監獄費、已決囚、彼此流用支辨セントスル  
トキハ當省ヘ伺出候儀ト可相心得此旨相違候事  
但本件伺出候節ハ金員仕譯書添付スヘシ

○舊刑法處刑ノ囚徒假留監ヘ押送方

明治十九年六月  
內務省令第十一號

舊刑法ニテ國事犯禁獄懲役五年以上及ヒ常事犯禁獄終身ニ處  
セラレタル囚徒地方監獄ニ拘禁ノ者ハ十七年當省乙第三十號  
ニ準リ直ニ假留監ヘ押送スヘシ

○陸海軍々法會議處刑者地方獄送付

明治二十年三月  
內務省令第十六號

陸海軍軍法會議ノ處刑者費用區分方客歲一月第一號ヲ以テ相  
違候ニ付テハ來ル二十年度以降右處刑アル毎ニ總テ該軍監獄  
ヨリ直チニ地方獄ヘ送付ノ答ニ付軍法會議所在ノ地方獄ニ於  
テハ其都度之ヲ收監シ普通裁判所處斷ノ者ト同權取扱ヒ其地  
方稅支辨ニ屬スヘキ者ハ其刑ヲ執行シ國庫費支辨ニ屬スヘキ  
モノハ直チニ假留監ニ押送スヘシ  
但從前陸軍法衙ヨリ發配ノモノ有之候ハ、本文同權取計フ  
ヘシ

現行日本法令大全終

明治廿五年十二月廿五日印刷  
明治廿五年十二月廿六日出版

正價金三圓

編輯 ● 博文館編輯局

發行者 大橋新太郎

日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 愛敬利世

京橋區西紺屋町二十六七番地 秀英舎

發兌書林 博文館

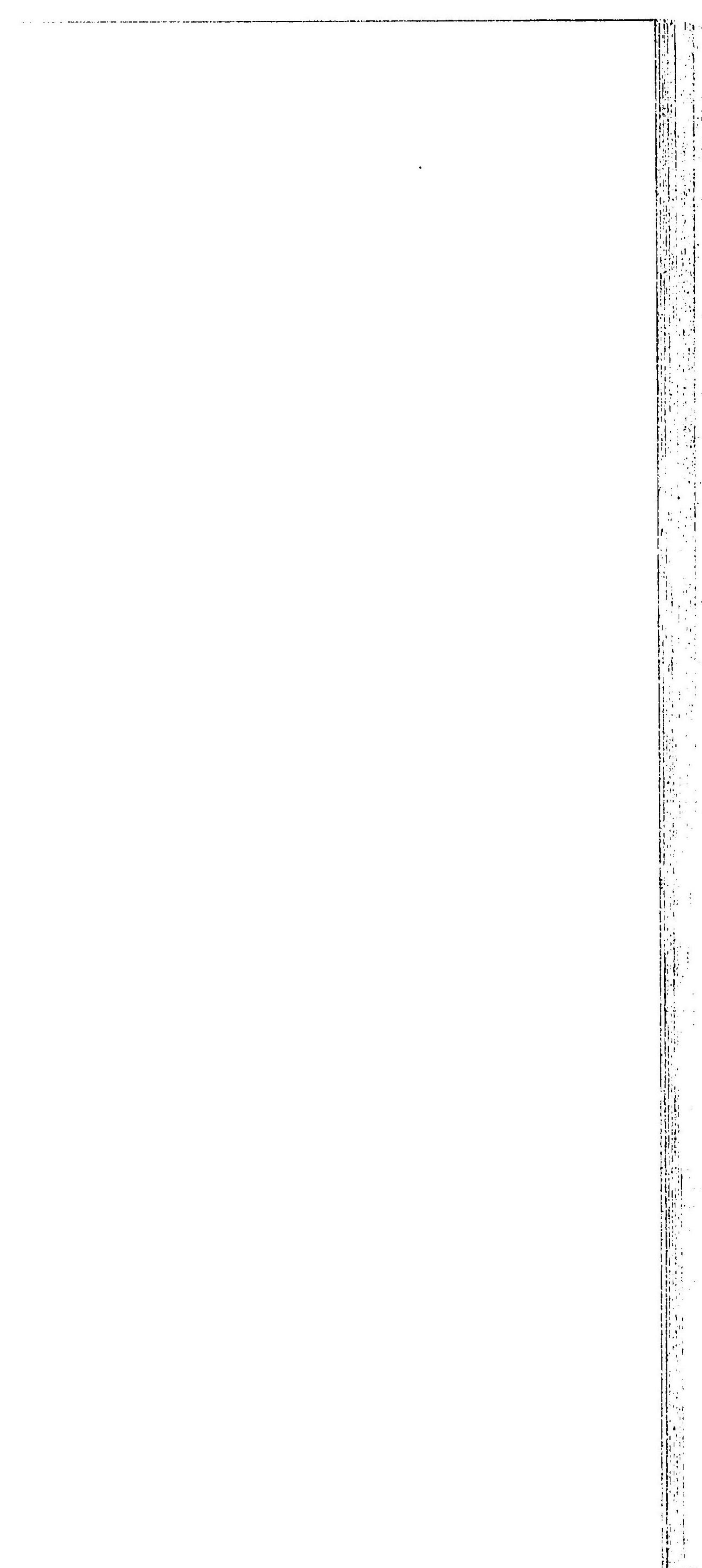
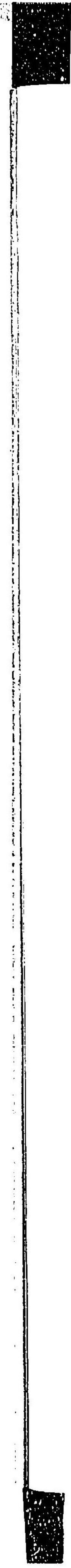
東京市日本橋區本町三丁目

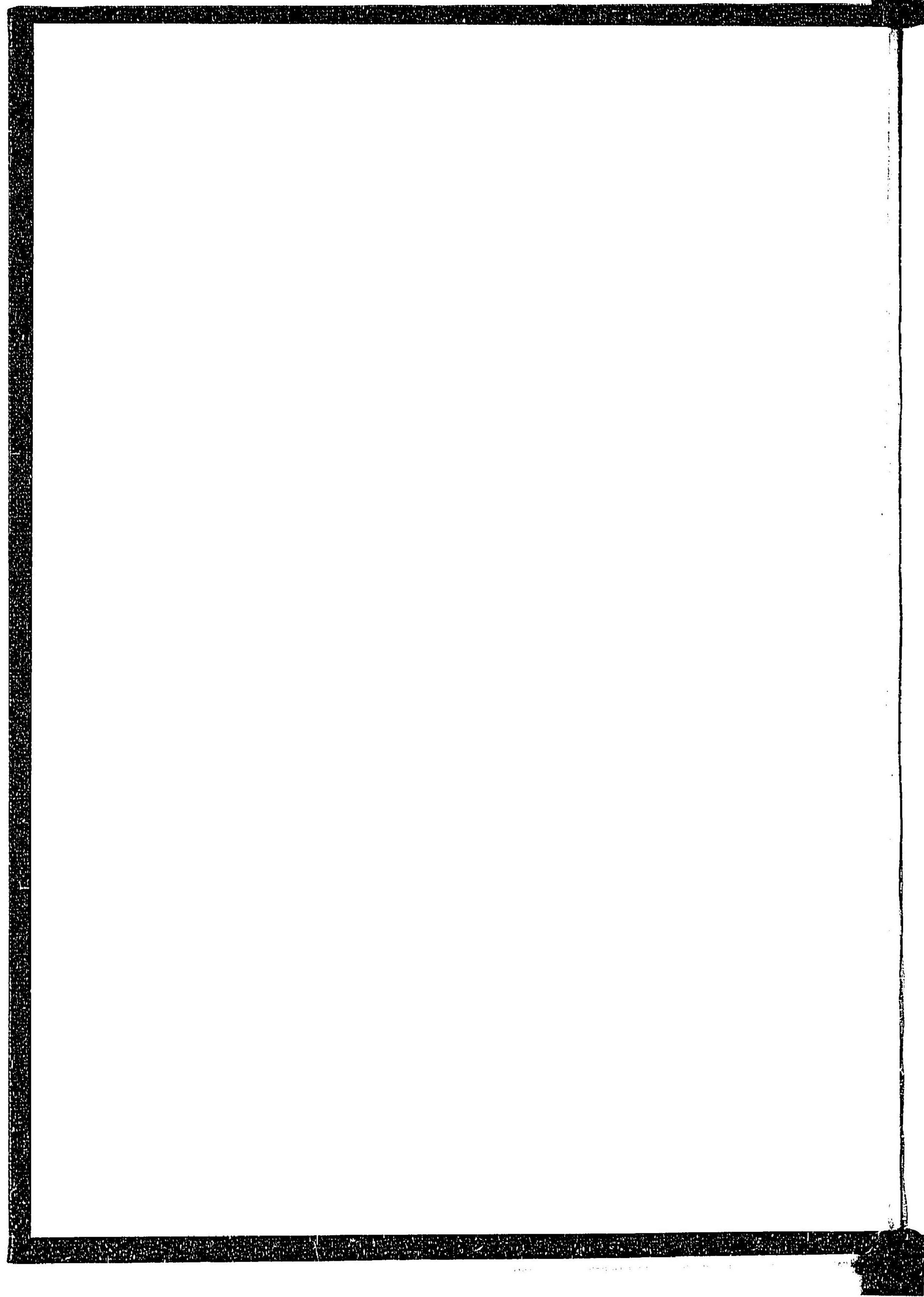
關西特約大賣捌所 盛文館

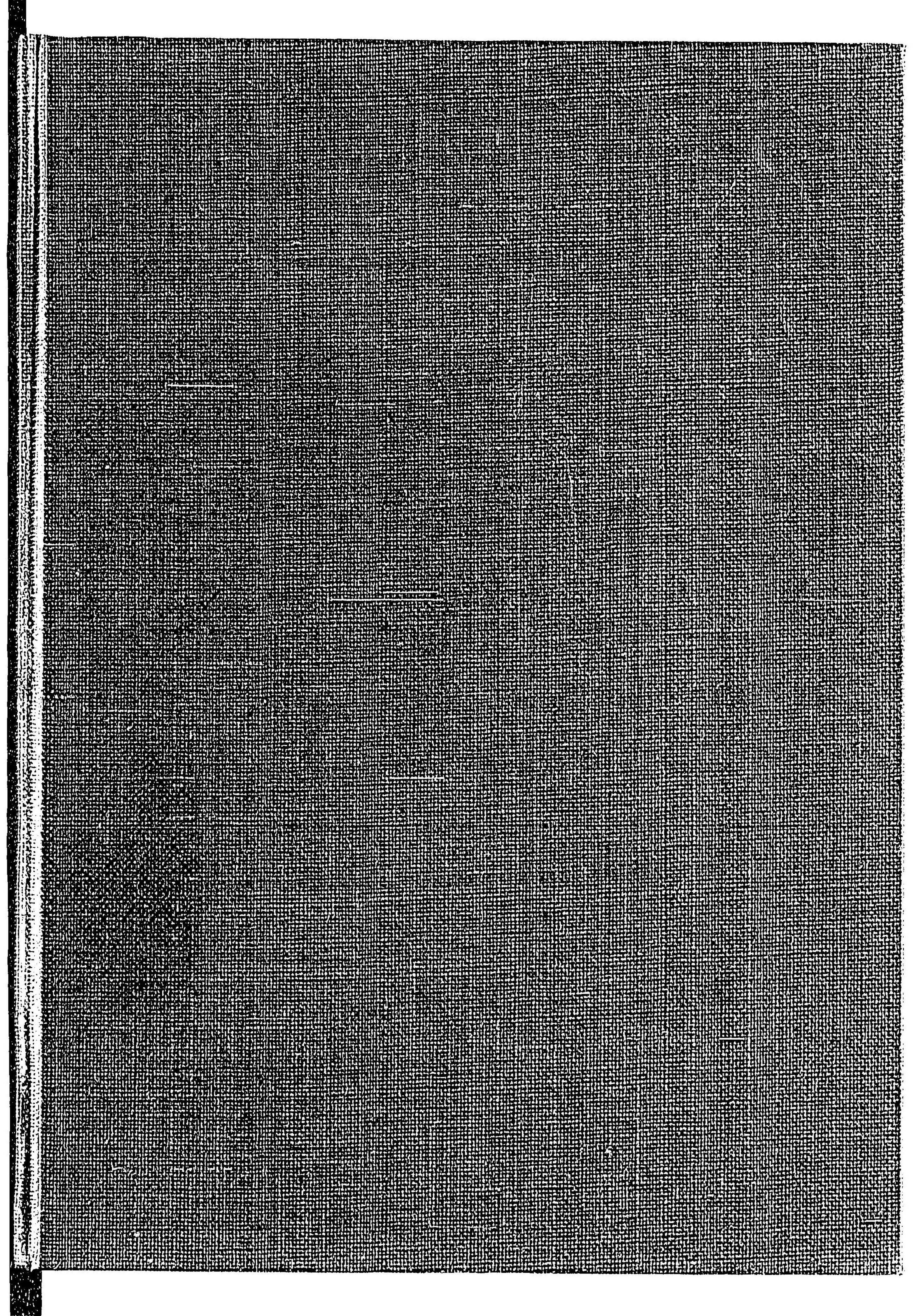
大坂市東區備後町五丁目



4F7G36









030930-001-0

CZ-5-028

現行日本法令大全

博文館

M25, 26

BBC-0264



